
Acht;untitled

鳴谷駿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Acht;untitled

【Nコード】

N6834J

【作者名】

鳴谷駿

【あらすじ】

【閉章投稿開始】読者への感謝として番外編を投稿致します。本編への関りの無い日常を描いた章になります。本編ではあまり登場出来なかった人や、普段とは違うハウন্ズの日常、その他諸々が織り出す日常のお話です。

Achtシリーズの第一作目の物語…

幻想が現実であり、進歩した科学も幻想のような、そんな世界の物語。「こんな鉄屑の世界に未練なんてありませんよ、誰もネ！」壊

れ逝く世界の中、彼らは何を見、どこへ向かうのか・・・（注）P
a s t D a y Sは番外編になります。本編は第一章からになって
おります。分かり難くてすいません。

各章で主人公や物語のテーマが大きく違うので、たぶん色々な方に
楽しんでもらえるかと思えます。最後までお付き合いくだされば、
嬉しい限りです。

評価や感想がありましたらお気軽にどうぞ！！

第零章 Past Days ? (前書き)

こちらは番外編になります。本編は一章からです。

番外編は五章以降の内容になります。わかりずらくてすみません。こんにちば。

年末年始の最後の企画です。

いつもと違う物語ですが楽しんでくれれば嬉しいです。

早く続きを書けと・・・すみません・・・

第零章 Past Days ?

〔零章 Past Days ?〕

自分で言うのも恥ずかしいけど私は小さい頃から優秀だったと思う。能力も自由に使えたし、勉強も運動もできた。そして幼い頃から夢だった士官学校にも主席で合格。

私は今までに他人に憧れや尊敬を持ったことが殆んどなかった、そりゃあ士官学校生初の一年次での軍部入隊、才色兼備の箱美目四季先輩には憧れていたわ。ある日、私の世界は大きく動いた

士官学校で毎年開催される大規模な模擬戦があるの、すべての学年が参加して行なう。

そこで初めてリゼリ・バツシユと言う人間を見た。噂では聞いたことがあった2つ上の先輩ですごく優秀な人ってくらい、何故この時まで彼を知らなかったのには理由がある。

同じ二つ上の先輩でツバイって先輩がいた、彼も優秀で人気があった。私は好みじゃなかったけど、白銀の騎士とか呼ばれていたような・・あまり憶えていないわ。

模擬戦は5つの学年の生徒全員が1〜6人の小隊を組んで生き残りをかけて戦うの、そこでリゼリ先輩は2人で優勝したわ、歴代でもっとも多くの小隊を敗退させて。(ちなみに個人の最高記録は箱美得芽先輩で小隊を作らず一人で参加して、優勝まじかで辞退したって噂。)

私もリゼリ先輩に敗退させられた、私は始めて本当に他人に憧れた。そして、リゼリ先輩は軍部に入隊。新設の特殊部隊ハウন্ズの隊長になった。私は彼に追いつく為に必死だった、自分の能力がら少数での模擬戦優勝は諦めたけど、翌年で優勝して軍部に入隊。とある任務で箱美芽先輩と一緒にあって、私がこの話をしたら推薦状を書いてくれた。

「へーえ、模擬戦か懐かしいねえ、でも記録破られちゃったらしね

「リゼリに」

「いえ、個人では先輩が一番です!!!」

「リゼリの後輩ってことは、あいつにやられたのかい？」

「はい、でもその時のことが理由で今ここに私はいられるんです」

「リゼリが憧れの先輩ってことかい？」

「そっそうですね」

私は初めて口に出すことがとても恥ずかしかった、それを聞いた箱美芽先輩は笑って言った。

「憧れねえ」

数日後、私宛に推薦状が届いた。すぐにハウন্ズに入隊希望を出した。

入隊面接は箱美芽先輩とリゼリ先輩が面接官だった。

「第二小隊で面倒見てあげて、第一うち小隊にはいないわ」

そう言っつて箱美芽先輩は私の肩を叩いて部屋を出た。

「自分で推薦して・・・、だからあの人は・・・」

リゼリ先輩は頭を抱え、私の方を見て言った。

「リゼリ・バツシュ第二小隊隊長だ、ルイ隊員」

「はい!!!リゼリ隊長、よろしくお願いします」

私はこうして第二小隊にした。ハウন্ズに自ら希望して入る者は多くはない。ハウন্ズは特殊部隊と言うよりはお姫様のプライベート・アーミー。軍部で問題を起こした者、お姫様に気に入られた者、そんな人達が集まって出来た組織、それがハウন্ズ・・・。

私は包刃つみぎや 愛あい、第三小隊という掃き溜めに咲いた一輪の花だ。

やる気のない隊長と弱気な後輩の後始末をすべて請け負っている。

まず私ほど優秀な者がなぜ第三小隊かと言うと、第一小隊は箱美芽隊長が能力A以上の人間はいらぬ(死ぬ)と言う腐った考えをお持ちなので駄目だった。第二小隊はあんなお姫様LOVEの下で働きたくない、普段はクールぶっているが姫様の前ではデレデレらし

い（噂で聞いた）。「それにしてもルイはあんな奴のどこがいいの
だか？」

第四以下は首都警備隊だから却下、消去法で第三小隊になった。（
王族の警備隊は隊長が終わっているので論外）

少し私についても話そう割りとは有名な剣術家に産まれ、小さい頃
から学業は普通、運動はすべて出来た。士官学校には補欠で入学、
成績優秀なルイと出会い何とか卒業。（勉強面ではルイにお世話に
なった）

その後帝国軍に入隊、実戦でつぎつぎに成果を上げハウンズに入隊。
（始末書の数でも成果を上げた）「と言うより女だからと馬鹿にし
た奴らが悪い」
好きな物はおしるこ「和菓子全般」、嫌いな物は弱い奴とハウンズ
隊長達となめくじ。

最近気になっていることは、なかなか成長しない体と隊長がいつ名誉
の戦死をするかだ。前者はともかくとして後者に関してはそろそろ
来い、死期。（王女様、世界を変える前にもっと身近な所から変え
てください）「本当にお願いします」

「包刃、第二小隊の子が来ているよ」

愛は第三小隊の作戦室で刀の手入れをしていた。部屋の入り口から
ルイの顔が見えた。ルイは嬉しそうにこちらを見て手を振っている。
私は刀を鞘へ納めルイの下へ行った。

「どうした？」

ルイは目を丸くして私を見た。

「忘れてるの？今日の午後は二人とも空いてるから久々に出かけよ
うって・・・」

忘れていた、そう言えば二週間前くらいに・・・私は作戦室にいる
ヘルトの顔を見た。

「行ってきなよ」

「すまない」

ヘルトは第三小隊の殆ど副隊長の立場だ。ハウন্ズに副隊長という役職はないが、第三小隊の隊長があまりにも使えない為に事務関係はヘルトが、戦闘などは私が仕切っている。

「ゆっくり楽しんできなよ」

「へっくんは優しいねえ」

ヘルトは無視して書類の整理などを続けた。ルイと愛が部屋を出ですぐに桜家が姿を現した。

「隊長は気楽でいいですね。包刃が抜けたので今日は徹夜で決まりです」

桜家はふらふらと歩き部屋の奥の自分の席へ腰掛けた。

「人手が足りないようだし、増員した方がいいかな？」

ヘルトは大きな音をたてて書類を机に置いた。桜家は驚いたよう椅子から落ちそうになり、両手で机を押さえていた。

「隊長が一人分働けば十分です」

桜家は気まずいそうに部屋の大きな窓からアステリオスを眺めた。

私は愛を連れて最近出来た第五区のショッピングモールに来ていた。今日はちょうど休日の午後で多くの客で賑わっていた。

「思っていたより広いなあ、久しぶりの休みだから嬉しいな」

愛は私といってもあまり喋らない、基本的に私の聞き役になっている。最初の頃は少し不安に思えたが、今ではそのことも特に気にならない。

「私達ってまだ十代なのになあ」

私はちょうど前から来たカップルに目が行ってしまった。愛は隣でさつき買った抹茶ソフトを食べていた。

「優秀なのも考えものだな」

「そうね、本当なら私も……」

「まだ隊長のことが好きなのか？」

ルイは少し苦い顔をした。

「うん、むしろ前より好きになつたかも」

愛は首を横に傾げルイの話を聞いた。

「第二うち小隊の隊員って何か子供ほくてね。ユウも先輩なのにあんなだし、ジユラルも変人、あとフォーさんとテムジさんはジャスさん一筋だし。凄く隊長が大人でかつこよく見えるんだよね」

愛は殆どルイの話を聞き流していた。愛の目線の先には一件に喫茶店があつた……。

くつづ

く

第零章 Past Days ? (後書き)

最後まで読んでくださりありがとうございます。
年内に続きを投稿出来るのか・・・

次話も御気に召しました読んでくれると嬉限りです。よろしく願
いします。

第零章 P a s t D a y s ? (前書き)

こんにちは。

これが今年最後の投稿になると思います。

本編とは異なる物語ですがよろしければお楽しみください。

第零章 Past Days ?

〔第零章 Past Days ?〕

私が士官学校に入学した最初の年が終ろうとしている。学校内は士官学校最大のイベントである模擬戦の話で持ちきりだ。私にはあまり興味がないことだった。私の能力は完璧な補助系、能力の質も決して優秀とは言えない。私は今、自分のクラスの席から一人の子を見つめている。ロイテル・アーガマ、彼はどこか不思議な雰囲気な子だった。くすんだ金髪に綺麗な青い目、私には彼がとても神秘的だった。いつから彼にこんな感情を抱くようになったのだろう、でもいつも彼を見ていてしまう。

「どこか寂しそう・・・」

「美華、どうしたの？」

突然の声に私は驚いた。私の机の横には二人の女の子がいた。

「寂しそうって、何かあったの？才色兼備のお嬢様にも悩み事があるとは・・・」

「私達みたいな庶民とは違うから大変なのよ」

二人は私の友達の子、由記とカヤ、どちらもいい子で今はこんなことを言っているけど普段は私を何一つ特別扱いしない、それが私が一番嬉しいこと。

「二人ともまたそんなこと言って！！あと私の名前は美華^{みはな}」

三人の少女は楽しそうに笑いあった。

「今日の午後暇？遊びに行かない？」

「いいね、私は空いてるよ」

「美華は？」

「ごめん、私ちょっと予定があるの」

「なに？もしかして彼氏できたの？」

美華は顔を少し赤くして答えた。

「違う、違う、バイトの面接・・・」

「ええー！ー！！！」

突然、教室が静かになり教室のドアが吹き飛び少年が転がり込んで来た。

「喧嘩だつて」「隣のクラスのクロスだつて」「あのクロス財閥の」

美華達の教室に転がり込んだ少年を追うように二人の少年が教室に現れた。一人は短髪に堂々とした風貌だった。もう一人は召使のようで静かに立っているだけだった。

「俺を模擬戦のチームに入りたい？自分のチームの立場を考えると地面に倒れ込んだ少年が起き上がり能力使おうとした。

「腕がああー！」

地面に倒れていた少年の腕が捻じ曲がる。

「せつかく手を抜いてやったのにな」

私は三人の姿をただ眺めていた。クロス財閥、アステリオスの中でもトップクラスの財閥。そして彼はトウウイス・クロス、クロス財閥の次男ですでにBクラスの能力者。彼の能力は物体を捻ること。

その時、私の横にいた由記が教室から出ようとするクロス君達に声をかけた。

「教室、直していきなさいよ！！」

クロスはゆっくりと振り返り由記を睨んだ。

「俺に言っているのか？」

由記はこのクラスの学級委員だった。もともと正義感の強い由記は黙っていられなかったのだろう。

「そうよ、そんなことも分からないの？」

クロスは鼻で笑い教室を出ようとした。由記はクロスに近づき肩を掴み振り向かせた。

「調子に乗るなよ」

クロスは由記の手を掴み上へと上げた。クロスは由記の手を強く握り、由記の顔は痛みで歪んだ。

「やめてください！！！」

私は無意識に立ち上がり言葉を発していた。クロスは美華を睨みつける。クロスは美華の顔を見つめ、由記の手を放し美華へ近づいて行く。

「君は神花財閥の神花 美華みかさん」

クロスは美華に近づいた。美華は怯えながらクロスを見つめていた。その時、クロスの前を一人の少年が横切った。彼の行動は明にクロスを侮辱するような行動だった。クロスはすぐにその少年に声をかけた。

「お前、何様のつもりだ？」

少年は無視して教室の出口を目指す。クロスは少年に近づき思い切り肩を掴み振返らせる。少年は無表情でクロスを見つめる。

「いい度胸してるな」

少年は何も答えない。すると別の少年が二人に近づいた。

「クロスさん、すいません。こいつ変わった奴なんです。悪気はないので許してください、ロイテルも謝っておけて・・・」

仲介に入った少年の言葉を遮るように、クロスは仲介に入った少年を突き飛ばす。

「お前には聞いてない」

クロスがロイテルを睨みつける。

「何か言えよ」

ロイテルは顔を上げクロスを睨みつけた。クロスの腕がロイテルに伸びる・・・

教室の中は静まり返った、集まっていた野次馬達は目を丸くしていた。

「よわ」

教室の床にはクロスがのびていた。ロイテルは一言だけ言って教室を出て行った。

「ロイテルくんが強いつて本当だったんだ」

隣にいた力ヤが呟いた。私はすぐに状況に気付き教室を出た。廊下を歩くロイテルくんをすぐに見つけ近づいた。

「さつきはありがとうございました」

ロイテルは少し驚いた様子で美華を見た。

「二回目ですね。助けてくれたの・・・」

私ははつきりと思い出した。この人は前にも私を助けてくれた。入学してすぐに先輩達に絡まれている所を同じように助けてくれた。

「気にしなくていいよ」

ロイテルはそれだけ言って廊下を進み始める。美華はロイテルの背中に深くお辞儀をした。

「二回目？」

ロイテルは何も覚えていなかった。今の彼にとってこの世界は興味のないものだった・・・

私は今、第五区の小さな喫茶店の中にいる。面接はただの顔合わせ程度ですぐに採用と言われた。店長は気さくそうな人で、和風な店に私の雰囲気がよく似合うと喜んでくれた。私はバイトしなくてもお金に困らない、でも親のお金でただ楽しく生活することが嫌だった。だから両親を説得してバイトを始めることにした。この店は新しく出来るショッピングモールに移転するらしく、その為に新しいバイトを募集していた。私は店長に言われたまま書類に目を通していった。すると店の扉が開いた。

「遅くなつてすいません、学校で呼び出されて」

入り口にいた人物を見て私はここが現実か疑った。

「ロイテルくん、そこにいる子が新しいバイトの子。可愛い子ですよ？」

彼は私を静かに見つめていた。私も彼を見つめ続けた・・・。

「ロイテルくん、よろしくお願いします」

この時の私はどれほど幸せそな顔をしていたのだろう、そしてこれからの生活にどれだけ夢と希望を膨らましていたのだろう・・・

~
U
U
U
~

第零章 P a s t D a y S ? (後書き)

この作品を描き始めてから10ヶ月ほどたちました。自分の書きたいことをただ書く作品が少しでも皆様を楽しませることが出来れば大変嬉しい限りです。

まだまだ未熟な作品ですがこれからもよろしくお願い致します。

鳴谷 駿

第零章 Past Days ? (前書き)

今回もよろしく願います。

明けましておめでとございます。新年最初の投稿が番外編と言つ
のも・・・

とにかく今年もよろしく願います。

第零章 Past Days ?

〔第零章 Past Days ?〕

愛の視線の先には和風の喫茶店があつた。その店は和菓子などをメインとした店のようで店の装飾も和風であつた。入り口から見える店の中の様子も、木材などが使われた落ち着いた雰囲気であつた。「愛、あの店が気になるの?」

ルイは愛の顔を覗き込んだ。愛はすぐに店の方から視線をそらした。「すごい人気だね、けっこう並んでるみたい」

愛は再び店へと視線を向けると店の入り口から長い行列が見えた。

「並ぶっか?」

ルイは笑顔で愛に言った。愛は少し考えてからルイの顔を見て言った。

「一人で並んでいるから、回ってきていいよ。私、見たいものなし」

「本当に?ありがとう。じゃ私はちょっと行ってくるね」

ルイは顔の前で軽く手を合わせて謝り、人ごみの中へと消えて行つた。愛は店へと軽くスキップするように向かった。この様なやり取りは二人の間で良く行われるものだった。愛はルイと一緒に買い物に出かけても、いつも一人で待つてることが多かつた。それでも二人が一緒に出かけるのは、お互いを気に入っているからであつた。

「美華ちゃん、よろしく」

店のキッチンから綺麗に装飾された和菓子が姿を現す。それを着物を着た美華がテーブルへ運ぶ。美華の着物の姿はとても似合っており、長く綺麗な黒髪が頭の左右にお団子を作つていた。多くの男性客の視線は美華に集まつていた。また和菓子などの評判も良く店内からは満足の声が上がつていた。

「いやー大繁盛、大繁盛!!!」

店長はキッチンから顔を出し店内を眺める。

「美華ちゃん可愛いし、働き者だし、本当にいい子だね」

店長は黙々と和菓子をつくるロイテルへ視線を向けた。

「仕事は出来るけど愛想が足りないのが勿体ない」

キッチンの奥から別の店員の声が響いた。

「店長、材料がそのままじゃ足りないです」

「分かったわ」

店長はホールとキッチンを見回した。

「ロイテルくん、ちよつと行って来てくれない」

ロイテルは和菓子の装飾をちよつど終え、軽く頷きキッチンを出て行った。

「お嬢様!!」

リシアは警護をわざと振り切るように人ごみの中を進む。

「私は買い物に来たの……」

リシアの目線の先には行列の出来た喫茶店があった……。

ルイは高級ブランドの宝石店の中にいた。

「今日は奮発してやる!!」

ルイはきらきらと目を輝かせ店内のショーケースを見て回る。

「高い……、こんなに高いとは……」

ルイが隣のショーケースへと目を向けた時、隣の女性へ目が行った。

その女性は美しいスタイルに綺麗な黒髪をしていた。

「あれ？箱美芽隊長……」

ルイの横にいたのは四季だった。四季は興味がなさそうに宝石を眺めていた。四季もルイの一声でルイに気がついた。

「君は第二小隊の……」

「ルイ・シユータスです。第二小隊への配属の時はありがとございました」

ルイは深々と頭を下げた。

「気にしなくていいよ、むしろ君が配属されてから無駄な事件で呼び出されなくて、助かってるくらいだよ」

「そう言っていただけだと嬉しい限りです。今日は買い物ですか？」
四季は少し考えた後に答えた。

「付き合いだよ」

四季の視線の先にはクロアがいた。クロアは店員を捕まえ宝石の説明などを熱心に話させている。

「あれがクロア先輩……」

「知っているのか？」

「もちろんですよ、あのクロス財閥の長女でAクラスの能力者。たった二人の第一小隊の一人ですから！！」

四季はルイの話を聞いてクスクスと笑っていた。すると店の中が静かになった。

「これと、これと……、あとあれも……、これでいくらになるの？」

クロアの買い方に多くの客の視線が集まっていた。

「やっぱり私みたいな庶民とは違うなあ……」

「一応言っておくがああ金は自分で稼いだ金だよ」

四季の言葉にルイは驚き、自信の財布を覗き、口座の残高を思い出した。

「第一小隊ってそんなに第二小隊うちと違うんだ」

四季はまたクスクスと笑った。

「ハウズは各隊に配当された予算から給料が出ているからね。第一小隊うちみたい少数だと給料も一人当たりが多くなるからね」

ルイは自分の小隊の人数を数え納得した。買い物を終えたクロアが二人のもとへ近づいて来た。

「四季、誰と話しているの？あなたに友達がいたの初めて知ったわ」
四季はクロアの言葉を受け流した。

「それじゃ、私達は行くよ。これからも頑張ってくれよ」

四季はルイの肩を軽く叩きクロアを連れて店の外へと向かって行く。

「あつつまらないことに巻き込まれないよう、早く帰った方がいいよ」

四季は一言呟きクロアと共に人ごみの中へ姿を消して行く。

「つまらないこと？」

ルイは頭をかしげ、二人の背中を見送った……。

ロイテルは顔が隠れるくらいまで荷物を積み重ね、人ごみの中を歩いていた。彼の能力は電気、彼は能力を器用に操作し自身から微弱な電気を放ち周囲との距離を感じ取り進んでいた。

「すいません、落としましたよ」

ロイテルは声をかけられた。どうやら何かを落としたようだった。

とっさに何か落としそうな物を考えたところ、ポケットに入れたカードキーが浮かんだ。ロイテルは意識を集中し、声のもとを探る。

「ありがとうございます。ポケットから落ちてしまったようで」

「え・・・何を落としたか分かっているのですか？顔まで荷物で埋もれて見えないはずなのに」

「カードキーですよね？」

「そうです！！」

「すいません、指の間に入れてもらえますか？」

ロイテルは指にカードが当たる感覚を感じる。

「ありがとうございます。どうもすいませんでした」

「いいえ、かまいませんわ。こちら面白い能力者と出会えて楽しかったです。それでは失礼致します」

リシアはそう言ってロイテルから離れた。

「お嬢様、あちらの店に行かれるのでは？」

「いいえ、もう気は済んだわ」

リシアは満足そうにショッピングモールの出口へ向かった。

愛はようやくやく席に案内されメニューを嬉しそうに眺めていた。

「すいません」

「はぁーい」

愛のテーブルへ美華がオーダーを取りに向かった。愛は四つほどのメニューを注文し、美華が運んできた緑茶を飲む。店内の雰囲気は落ち着いており、緑茶の味も悪くなく愛は和菓子への期待で胸一杯だった。

「美華ちゃん、そわそわしているけど、どうかした？」

美華は顔を赤くしてかなり緊張している様子だった。

「さっき私が注文を取った方、私の憧れの人です」

「憧れの人？」

店長には愛は目をきらきらと輝かせる小柄な少女にしか見えなかった。

「有名人か何か？」

「ハウズズの第……」

「美華ちゃん、その憧れの人の連れの人来たわよ」

美華は愛の方へ視線を戻した……

「あれは第二小隊のルイ・シュータスさん……」

ショッピングモールは大きな楕円型をした建物だった。内部は中心が楕円に割り抜かれており、一階の楕円の中心部には簡単な催しが出来るとなスペースが設けられていた。そして今からそのスペースで何かの催しが行われようとしていた。準備されたステージへ一人の男が上がり、多くの客の前へと立つ。その男の姿は道化師のようだった……

〜つづく〜

第零章 P a s t D a y s ? (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

番外編はあと二話ほどで終る予定です。

それなりに準備はしていた企画なのでなるべく早く投稿出来るように致します。

第零章 P a s t D a y S ? (前書き)

今回もよろしくお願い致します。

久しぶりに書く物語のタイプで大変楽しく書かせてもらっております。

皆さんも楽しんでいただけると嬉しい限りです。

第零章 Past Days ?

〔第零章 Past Days ?〕

ルイは愛の向かいへと座った。和風をイメージしたテーブル席に二人は座り、店の入り口からは一番奥の席であった。席についたルイはメニューを開きすぐに店員を呼んだ。

「えーっと、この和菓子のセットでお願い」

「わっ、わかりました。こちらがお茶になります」

美華は手の振るえを堪えながら何とかテーブルへ緑茶を置き、注文をとった。

「なんか新しい店だから店員の子も慣れてないみたいね。でも初々しくて可愛い」

ルイは美華の姿を見つめていた。美華と入れ替わるように別の店員が愛の注文した和菓子を持ってきた。愛の前へ並べられた和菓子は美しく、食べるのが勿体無いと言言葉が良く似合うようなものだった。

「愛、さつき箱美芽隊長に会ったんだよ。こんな所で会うなんてびっくりだよ」

愛は和菓子から視線をそらし、ルイの方を見て苦い顔をした。

「ごめん、箱美芽隊長のこと嫌いなんだよね。私はいいい人だと思うだけだよ」

愛はすでにルイの話の聞いていなかった。愛の視線は和菓子に釘付けで、どちらから食べるべきかに悩まされていた。

「愛、さつきから何しているの？早く食べなよ」

愛はルイの一言でどちらを食べるか決心したようだった。

「失礼します。こちらが本日の和菓子の・・・」

愛の目の前に新たな和菓子が現れる。愛は再び動きを止める。ルイはその姿を楽しそうに眺めていた。すると店内に大きな音が響いた。その音がこの店だけに響いたものではなく、この建物全体に響いた

ことに二人はすぐに気付いた。

「今の音は・・・」

愛の表情が鋭く変化した。

「何だろうね？確かイベントが一階で行われるって宣伝してたみたいだけど」

このショッピングモールは四階建てになっており、愛達がいるのは三階に位置していた。暫くの間店内は静まり以前の雰囲気へと戻って行く。ルイは周囲を見渡すが他の客達は何もなかったように会話を始めていく。

「イベントの演出だったのか？」

愛の鋭かった表情はもとに戻り和菓子へと視線が注がれる。

「嘘だろ・・・」

ロイテルは持っていた荷物を下ろし三階から一階のイベントスペースを見下ろす。そこには武器を持った集団が客達を包囲している。

ロイテルは辺りを見渡すが誰も一階で起きていることに気がついていない様子だった。

「俺しか気付いていないのか？」

ロイテルは注意深く二階を見渡した。するとロイテルと同様に一人の黒い髪の女性が一階を見下ろしていた。その女性は二階から三階を見上げ、ロイテルと目が合った。すると女性はロイテルを見て笑ったようだった。その女性はすぐに姿を消した。

「なかなか感のいい子ね」

ロイテルが振返るとそこには両手一杯に荷物を持った眼鏡の女性がいた。

「あなたも見えているんですか？」

「みんなにも見えてはいるの、ただ気付く事ができないだけ」

「気付く事ができない？」

「説明すると難しいのよね。まああなたは気付く事ができたからいいでしょ。それより何故、君は気付く事ができたの？」

ロイテルは静かに目を閉じて開いた。

「感じたんです、不思議な歪みみたいなものを・・・」

「ふん」

眼鏡の女はロイテルに近づき頭に触れた。

「これで君は大丈夫よ」

そう言うと女はロイテルに背を向けて離れて行く。

「待ってください」

ロイテルが追いかけてよとした時、ロイテルの耳に女性の声が響いた。

「心配するなあいつ等はたいした能力者じゃない、すぐに事態は片付くよ。ただ君がどうこう出来る相手でもないから、君は見ているといい。さっきの眼鏡の女が君に障壁を張っているから、君は誰にも気付かれないはずだよ」

ロイテルは声が止むと同時に辺りを見渡すがそれらしい人物は見当たらない。

「見ていろって・・・」

その頃、ルイは楽しそうに愛に一方的に話かけ、愛は幸せそうに和菓子を口へと運んでいた・・・。

一階ではステージに立った男がマイクを握り楽しそうに話していた。

「凄いだろう、一階ではこんなに騒がしいのに上の階の奴らは気付いていない。外の奴等も同様さ、だから誰も助けは来ない。俺達が誰か分かるか？この服装を見れば分かるんじゃないか？」

ステージから道化師のかっこした男が客を見回す。

「そう、俺達が幻想の道化師だよ！！」

男は満足げに笑い続けた・・・

ロイテルは今起きていることを伝える為に店へと駆け込んだ。店の行列はなくなっておりピークは過ぎたようだった。

「本当に誰も気付かない」

ロイテルがいくら話しかけても誰一人としてロイテルの存在に気付きはしない。たとえ触れたとしても誰一人としてロイテルに気付きはしなかった。

「ロイテルくん遅いわね。どうしたのかしら？美華ちゃん、悪いんだけどどちよつと探してみてくれる」

店長の頼みで美華は能力を使いロイテルを探した。美華の能力は空間認知、ステラスの様に立体的に物体や空間を捉えることは出来ないが、広範囲における対象の搜索などに長けたものだった。

「えっ……、ここに……」

店長は美華の言葉にぽかんとした表情をしていた。

「ごめんね、美華ちゃん。疲れているのね、少し休んで来ていいわよ」

美華は驚きながらも、自分の出した答えを疑ってはいなかった。

「わ、わかりました。ありがとうございます」

美華はそう言うともう一度能力を使いロイテルの位置を探した。

「目の前にいるの？」

突然、美華の腕が引っ張られる。美華はその手に引かれるまま歩き出す。美華は店の出口へと足を進める。

「ロイテルくんなの？」

美華は微かに腕を握られたように感じた……

〜つづく〜

第零章 Past Days ? (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

この番外編も残すところあと1話の予定です。いつもと違い各人物の色をなるべくだすようにしています。登場人物が私の好みで決まったのは内緒ですwww

このショッピングモールの話は本当は三章の後に投稿する予定でした。その時と登場人物がやや変わっております。第一章投稿当時から読んでいる方は？は以前にSSとして投稿したものの流用だと気付いていると思います。その時はルイとリゼリのデートという設定でしたねwww

美華は本編ですでに出ていることに気付いているかな??

次話もよろしくお願いいたします。

第零章 P a s t d a y s ? (前書き)

こんにちは。

これで特別企画はひとまず終了です。P a s t D a y s 自体は不定期ですが更新していききたいとは思っています。ではよろしければ最後までお楽しみください。

第零章 P a s t d a y S ?

〔第零章 P a s t d a y S ?〕

美華は手が引かれる方へと足を進めた。店を出て楕円型をしているシヨツピングモールの中央に向かって進み、中央の吹き抜けの付近で手を引かれる感覚がなくなったのに気付いた。

「ロイテルくん？」

美華は周囲を見渡す。確かに感じていた感覚は消え去り、急に一人になったように思えた。すると手に何かを握らされたことに気付く。手の中には小さなメモがあった。

『一度吹き抜けから一階を見てくれ その後一階を能力で見てください ただそれだけが書かれたメモだった。美華はペンを取り出しメモへ何かを書いた。』

『ロイテルくんだね？』

メモを自分の目へ手で持ち突き出した。すると美華が書いた文字が丸く囲まれた。

「わかった！！やってみる！！」

美華は吹き抜けから一階を見下ろす。そこにはいつも通りにイベントスペースに。美華はすぐに能力を使った。

「えっ・・・」

能力で感じた一階には、明らかに見た数より多くの人を感じられる。美華はもう一度吹き抜けから一階を見た。そこに広がるのは武装した集団に囲まれた客達の姿だった。

「これってどういうこと？」

美華は周囲を見渡した。ロイテルからの返事は返って来ない。

「ロイテルくん？」

その時、美華は一発の銃声を耳にした。美華は驚きで固まる。しかし、周囲の人には変化はない。

「私にしか聞こえていない」

美華の表情が変わり、美華は店へと走り出した・・・

道化師の姿をした男の笑い声を遮るように女性の声が響いた。

「耳障りな笑い声だな」

ステージの上の男が周囲を見回すと、声の主は堂々とステージの前に集められた客達の中に立っていた。客達を包囲していた十人程度の武装した男達が一斉に銃口を女へと向けた。^{四季}

「いつからそこにいた？」

ステージの男が声を張り上げた。四季は手で頭を抱え、大きなため息を吐いた。

「そんなことにも気付けない三下の為に私の貴重な時間を・・・」
ステージの男の声がやや大きくなった。

「お前は自分の立場を分かっているのか？」

男は拳銃を取り出し四季へと向ける。そして引き金を引いた。弾丸は四季の真横を通り過ぎる、周囲の客達から悲鳴や鳴き声上がる。「おい、拳銃は人を殺すものだよ。威嚇に使うものじゃない、撃つならしつかり狙いな」

ステージの男の顔が真っ赤になり怒鳴り声が響いた。

「あの女を殺せ！！！」

男達は一斉に引き金を引いた。弾丸は真っ直ぐに四季へと向かう・・・

イベントスペースの一番奥の柱の影から、一人の男がステージで行われるやり取りを眺めていた。

「面白い能力ね？」

男は反射的に振返る。護衛として連れていた二人は地面に倒れ込んでいる。

「お前は何者だ！！！」

そこには両手一杯に荷物を持った眼鏡の女性クロアがいた。

「私は通りすがりのお客様よ」

男はとつさに拳銃を抜きクロアへ発砲した。しかし、弾丸はクロアに届くことなく見えない壁に阻まれた。

「くそ、能力者か」

「えっ……、油断したぁ……!!」

クロアの前から男の姿が消えていた。

「もう、普通に見つけられたから自分には能力使えないと思ってた」

男が姿を消してからすぐにクロアの背後から銃声が響いた。弾丸はさつきと同様に見えない壁に阻まれた。

「困ったなあ、私の能力じゃ見つけられないよ」

その時、クロアの横を人影が横切る。そして、その影はクロアから数メートル離れた所で大きく拳を振り、その拳から一瞬青い光が見えた。すると先ほど男が現れ、白目をむいて倒れた。

「ありがとう、助かったわ」

クロアは振返ったロイテルに礼を告げた。ロイテルは何も言わずにステージの方へ目を向けた。

「お食事中すいません!!私と一緒に来てください!!」

美華はルイ達がいるテーブルの前で大きく頭を下げていた。

「どっ、どっということ?」

ルイは突然のことに驚き美華の顔を見つめていた。愛はちょうど最後の和菓子を完食したところで、横目に美華に目をやった。

「説明はします。時間がないんです、私と一緒に来てください」

すると愛はテーブルに置かれたお茶を飲みほし立ち上がった。

「行くよ、ルイ」

ルイは立ち上がった愛を戸惑いながら見上げていた。ルイは美華の顔を見て立ち上がった。

「可愛い子は嘘つかないからね、行こう!!」

二人は美華に連れられ店を後にした。

四方から四季に向けられた弾丸は見えない壁に阻まれた。武装した男達は驚きながらも能力者であることはある程度予測していたようで、すぐに落ち着きを取り戻していた。

「クロアの奴、障壁を張ってくれたのか。別に必要なかったのに」
ステージ上の男は拳銃を捨てライターを取り出した。

「いくら障壁があつても熱は遮断でき……」

男がライターの火を点火させようとした時、男は宙を舞っていた。

「それは困るな、一応民間人もいる訳だからな」

男は地面へ激しく叩きつけられ大きくむせていた。四季はライターを持つ男の腕を踏みつけ、ステージの上から大声で言った。

「今の私の動きを目で追えた奴はいるの？」

イベントスペースを囲む男達は周りの仲間達と顔を見合わせていた。

「せっかく幻想アンティック・イマジネーションの道化師絡みの情報が入ったて言うから来てみれば、ゴミみたいな連中しかないよ。ましな能力者もいやしない」

四季は更に力を入れ男の腕を踏む。

「あたしが誰かわかる人いる？」

四季の声に一階全体が静まり帰る。

「はい！！！」

イベントスペースの一番奥から元気な声が響いた。声の主はクロアだった。四季は声の主がクロアだと分かると、上のフロアを見上げた。吹き抜けから多くの者がイベントスペースを見ていた。三階にはルイや愛の顔もあった。

「何だよ、これじゃ見世物じゃないか」

周囲を囲む男達の顔には焦りが見える。男の一人が動こうとした時、四季の声が響いた。

「人質とかやめてよ、今そんなことされたら全員殺す」

シヨッピングモール全体が氷ついた。

「私はハウズ第一小隊隊長箱美芽 四季、死にたくなければ全員武器をおきな」

四季が名を言った瞬間、再びシヨッピングモール全体が氷つく。男

達は全員顔を真っ青にして武器を下ろしていく。四季に腕を踏まれている男は仕切りに「死にたくない」と言い続けていた。

「はい、お仕舞い」

ロイテルはクロアの隣で静かにステージに立つ四季を見つめていた。「どう、四季の動きは見えた？」

ロイテルは顔を横へと振った。

「あれがこの国で一番強い女よ。あなた士官学校の生徒でしょ、四季はあなたの先輩よ」

「あの人が俺の先輩・・・」

「性格とかは少し歪んでるけどね」

クロアは再びロイテルの頭に触れた。

「それじゃ、私はこれで」

クロアはそつと姿を消して行く。クロアが姿を消すと同時に美華が現れた。美華は顔を真っ赤して息を荒くしながらロイテルに近づきロイテルの手を握り締めた。

「心配したんだから・・・もう・・・」

美華はロイテルの手を握ったまま泣き始める。

「ごめん・・・」

「・・・」

美華はそのまま泣き続けた。その時、ロイテルの視線はステージの上の四季へ向けられていた・・・

この後すぐにステージにルイが駆けつけ、ルイが呼んだ軍部と第二小隊により犯人達は捕まえられた。

あの時、私が見たロイテルくんの目は輝いていた。いつも寂しい雰囲気ではなく、あんなに生き活きとした彼の顔を見たのはあの時が最初で最後だった。

そして二週間後に行われた聖痕祭せいこんさいの日、私はロイテルくんや友達と一緒に聖痕祭をまわるはずだった。でも彼は集合場所に現れなかつ

た・・・

そして私は急募のかかった第四小隊へ入隊した。

「彼を探す為に・・・」

第四章 E7-0140523-?)

「いや、まだ死にたくない。私にはまだ・・・」

美華へアーニユが近づくと、その時に無数の氷柱が襲い掛かる。美香の目の前に第一小隊の腕章を付けた二人が現れる。青い目をした少年が美華に優しく話かけ、ハンカチを渡した。

「もう大丈夫だよ、ここは僕達に任せて」

美華は自分が泣いていることに始めて気がついた。美華は目の前にいる青年の背中を見つめた。その青年の背中はとても大きく感じ、見ていて安心するものだった。

「あつ、ありが・・・」

美華がお礼を告げようとした時、隣にヴァイオレットが現れ美華は転移した。

そして彼もまた消えてしまった・・・

美華はエグルガルムに向かう飛行船の中、ロイテルから渡されたメモ、フロルに渡されたハンカチに綺麗に包み、軍服へとしまった・・・

Past Days

終

第零章 P a s t d a y s ? (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

今回の主人公は美華になつてしましましたね。もう少しルイや愛も活躍させようかと思つたのですが、この話は戦闘がメインではないのでやめました。終り方もあっさりとしてしまいました。個人的には最近本編では四季の強さが・・だったので彼女に締めてもらいました。ちなみにロイテルは四季の強さに憧れただけですよ。後日にルイと美華とクロアの紹介を追加するかもしれません。

今回は突然の企画でしたが、皆さんに少しでも楽しんでいただけていたら嬉しいかぎりです。

改めて今年もよろしくお願いします。

鳴谷 駿

第一章 プロローグ（前書き）

くだらないものですが、気楽に創造して読んでください。

第一章 プロローグ

〔第一章 開演 PM7:58〕

「こんな鉄屑の世界に未練なんてありませんよ、誰もネ！」黒いコートを着た男は、ビルの屋上で夜空に呟いた、そしてビルから飛び降りる。その後すぐに、首都アステルの夜空には大きな花火が上がった、まるでこれから起こる出来事を世界が祝福するように・・・

〔第一章 プロローグ AM11:13〕

「せいこんさい聖痕祭で大規模なテロが起こるって噂どう思う？」と茶髪の男が運転席に座る黒髪の男に話しかける、黒髪の男は前を見たまま「本当であつたとしても・・・」その時、爆発音が響く。二人は車を降り、「なんて運のいい奴だ、わざわざ出向く暇が省けた」黒髪の男の両手に銃が現れる、「さあ、さつさと終わらせましょうか」人の流れに逆らい二人は爆発の中心へと歩き出す、二人の姿はどこか楽しげに・・・

広場か公園であつたと思われる場所は一面炎に包み込まれている、「民間人の皆さんは早く逃げて、逃げて」と茶髪の男上機嫌に言い放つ。黒髪の男は爆発の中心へ弾丸を撃ち込み続ける、決して尽きることのない弾丸を無表情に。爆発の中心には1人の少女が炎に包まれ立っている、その炎は生き物のように弾丸を喰らい少女を守る。「いきなり発砲ってどんなマナーなの!!!」炎が黒髪の男に向かう、そして突然男の前に壁が現れ炎を遮る。少女は次の瞬間、突然後ろか陽気な男の声を聞き意識を失う。

幻想が現実であり、進歩した科学も幻想のような、そんな世界の物語。

「あれが第二小隊の二人かあ、黒髪のお兄ちゃんリコーラーは召喚士で茶髪のお兄さんは空間転移ルムスつてところかな、彼らの相手はごめんだネ。」と黒いコートの男は呟き姿を消した。「で・も、あの二人も今日のパーティーには参加してもらいましょう!!!」

「こちらは帝国ハウズ第二小隊隊長リゼリ、至急第三局と輸送車の手配を頼む・・・。」と黒髪の男は電話を片手に、黒いコートの男をしつかりと捕らえていた。「あと、すまないが今私の見た男のを識別にかけておいてくれ頼んだ。」と通信を終えた。

「リゼー!ー仕事終えたことだし昼食にしようぜ、今日はジャンキーで」

「ああ、おまえに任せるよ」

視界データインストール リゼリ・バツシュ

AM 11:23:32 パークレーエン広場

検証開始.....

該当者ナシ.....該当者ナシ.....該当者ナシ.....該当者ナシ.....

該当者ナシ・・・・・・・・該当者ナシ・・・・・・・・
該当者ナシ・・・・・・・・・・・・・・・・

該当者ナシ・・・・・・・・該当者ナシ・・・・・・・・
者アリ・・・・・・・・

該当者 仮名 グラビティ・ウオーカー

能力 グラビティ・ウオーカー 重力操作者

危険度 SSS

能力クラス 測定不可

所ゾ・ク・・・

第一シユ 警報ハツ・・・・・・・・

該当者ナシ・・・・・・・・

危険要素ナシト判断ネ！！

〜つづく〜

第一章 プロローグ（後書き）

最後まで読んでいただいた方は本当にありがとうございます。

全くのゼロから自分の思いついたものを書いたものです、まだ登場人物の名前も決まらず・・・未完成で申し訳ありません。足りない部分は想像で補っていただけと嬉しいです。何かありましたらぜひ評価？などお願いします。

第一章 帝国軍ハウンス第二小隊（前書き）

ルビがうまく表示できていなくてすみません。

第一章 帝国軍ハウンス第二小隊

〔第一章 Bullet Rain〕

PM3:16 首都アステル 第4区

「状況の説明を頼む・・・」と軍服に着替えたリゼリ（以後リゼ）は鋭い視線を鉄の塊に向けた。

「MTC社の兵器開発施設で開発中の兵器が暴走、現状は隔壁により止めしております。周辺地域への被害と施設内の危険物質流出の危険から爆撃は不可能で・・・」

「兵器の情報はMTCから提供されているのか？」

「こちらになります・・・」

新型四足歩行型小型無人戦車 Charriot

全長 3.8m 全高 2.1m 重量 8t

標準装備

「了解した、ここから先はハウンス第二小隊が引き受ける。全員に連絡するこれから目標の破壊に移る、ユウとジュラルは私と共に破壊に向かう、ルイは電磁砲《レールガン》を準備して待機。」

「了解。」「了解じゃん」「了。」

「リゼ、今日は賑やかだね・・・」茶髪のユウと呼ばれる男？は、リゼに比べてどこか幼く見え嬉しそう話かける。

「隊長二人で十分 一人いらぬ。」とジュラルと呼ばれる細身で色白の男は淡々と告げた。

「さつさと終わらせる、機能の停止のみが希望されているが徹底的にやらせてもらう。」

「リゼ、不機げーん。」

「お前 黙れ。」

施設の中は楕円型の通路が薄暗く続いていて、左右にある兵器などに目をくれることなく三人は暗闇に飲み込まれる……

薄暗い通路の奥から聞こえる爆発音、少しずつ大きくなる鉄の反響音。

突然、三人が爆発に包まれる。

「ハッハー、いきなり砲撃してきやがった！！ 殺《や》る気満々じゃねえかああ！！」とジユラルは髪をなびかせ言い放つ。

「召喚《リコール》、対物ライフル」

通路の奥で広がる爆音と衝撃が、途切れることなく続く。

「仕留めたか、ユウ見てこい」「了解しました」

「転移《ルーム》」 突然現れる歪んだ穴に、ユウは消える。

一瞬の静寂の後に響く、鉄のこすれる音。

「ぜんぜんダメー！！」響く声を聞き消すように、続く爆音。

次々に呼び出される、弾丸が通路の闇に飲まれ消えていく。

近づいてくる鉄の蜘蛛は2〜3m手前で壁にぶつかる、見えない壁に。

「こつちに来てみるよ蜘蛛やろう、オレの心の壁は分厚いんだぜ！！！！」

彼は拒絶する者《リジェクター》 壁を造り世界を拒絶する。

「そのままにしとけ、オレを奴の足元に飛ばせユウ」「らじゃ！！」

リゼに触れるユウ 「転移《ルーム》」 足元に現れる二人

「召喚《リコール》マグナム50AE」 弾丸は正確に関節を貫く

「召喚《リコール》マシンガンPDW」 響き渡る銃声 「
潰れるぞ、真上に飛ばせ」

雨のように 降り注ぐ弾丸 銃声の輪舞曲《ロンド》は鳴り響く

「これで終わりだ、召喚《リコール》バズーカ」 砲弾は天井を貫
き 光が差した

「ルイ、終わらせろ」 轟く青い閃光は 標的を貫き 静寂をもた
らす

第4区 廃ビル内

「ああ壊れちゃった、でも時間と情報は稼げたからいいかなあ姉
さん。」

「そうね、思ってたほどじゃなくて残念だね。」

「あの茶髪のカキ、姉さんと同じ能力のくせに全然ダメ。」

「ほんとにね……」

〈第1章 始動〉

PM3:49 第1区 ハイウェイ

「こちら輸送車警備隊、襲撃を受けたすぐに応援を……」
灼熱と冷涼 赤い目をした少女と青い目をした青年 炎を操る

者《ファイヤー・スターター》と氷を操る者《アイス・メイカー》

「まったく油断しすぎだよ、パーティーに遅れたら大変だよ。」

「わかるかったな!! そろそろ逃げようと思っていたら……」

「わかったよ、それじゃ僕らも準備しよう。」

ネットワーク内 巨大掲示板 数日前

01.untitled: 聖痕祭《せいこんさい》に私と一緒に

に世界を壊しましょう!!!

11 . untitled : どうやって？

12 . untitled : お姫様をさらってしまいましたよ!!

24 . untitled : 氷と炎は参加。

25 . untitled : マリオネットさんが

「うーん、上物は5〜7人くらいってところかな？」黒いコート
の男は嬉しそうに画面を見つめ微笑んだ。

96 . untitled : PM 8 : 00 開演でお願いします

!!

「リゼリ隊長、王族警備隊から連絡です。」

電話を受け取ったリゼは、一瞬嬉しそうに首都の中央にそびえる
大きな城に目を向けた……

~ ~ U U ~ ~

第一章 帝国軍ハウンス第二小隊（後書き）

読んでくださった方は本当にありがとうございます。本当は一回目の投稿でこのくらいまで描きたかったのですが、色々悩むことがありこのような形になりました。まだ1話の最初にすら追いついていませんが、次回では物語を進めるように頑張ろうと思っております。よろしければ次回もよろしくお願いします。

第一章 開演

〔第1章 お姫様〕

PM6:32 首都中央王宮内

「なぜ貴様の様な者を姫様が好いているのか、理解に苦しむ」

「お前らが頼りないからだろ」

「相変わらずの言いようだな・・・」

絨毯のひかれた通路を歩く対照的な二人の姿 黒髪と白髪 弾と剣

「姫様、リゼリ第二小隊隊長をお連れしました。」

「ご苦労様です、どうぞ中へお入りください」

扉の奥にいたのは、お伽話のお姫様のような少女だった・・・

「リゼ、全く顔を見せないから死んだかと思ったわよ」

「色々忙しくてな」

「まったく信じられないは・・・ツバイ、まだ居たの？もう下がっていいわ」

「しかし、お姫様がこのような者と二人きりなど・・・」

「下がりなさい」

「失礼しました。」

リゼを睨み付け白髪のツバイと呼ばれる男は部屋を出た。

「リゼ、なぜ王族警備隊に入らない？」

「オレが入る必要がない、あいつ等の実力は確かだ」

「それでも・・・」

二人の会話は歪で 決して交わることのない視線 それでもどこか楽しそうな そんな不思議な関係

「で、わざわざ顔を見るために呼び出した訳ではあるまい？」

「リゼ、実は……………」

〈第1章 美女と野獣〉

PM7:16 第5区 聖痕祭式典会場付近

せいこんさい

「お姉さん、着きましたよ」

運転手は嬉しそうに後部座席に座る赤い髪の女に言った。

「ありがとう、もう行っていいわ」

運転手は女を降ろし車をだした、代金も貰わずに言われるがまま

その赤は美しく 美しき魔女 その声は悪魔の囁き……………」

同刻 第4区 酒場

「ああ満たされねえこのていどじゃ」

一面に広がる赤 辺りに広がる肉片 赤く染まった第4小隊の腕章

「さああ、オレも行かなくちゃ宴に」

己が渴きを満たすため 野獣は進む 鮮血に染まる霸王の道を……………」

第5区 式典会場

「第2小隊各員に連絡する、第4小隊が壊滅した気を締めて警備にあたれ」

「壊滅って？隊長」

「詳しいことはまだわからん、警備に集中しろ」リゼは通信機を遠ざけた。

夜空を見上げリゼは心を落ち着かした、そして誓った……………」

「隊長も夜空を見たりするんですね。」

そこには金髪の小柄な女性が缶コーヒを持って立っていた。

「隊長のぶんです、どうぞ」

「ルイか、ありがとう」

「ルイかはないですよ、隊長！コーヒー取り上げますよ」

「悪かったよ、今日も背中中は頼む」

「もちろんです、第二小隊の誰も傷つけやさせません！！」

「ありがとうございます」

「隊長どうか・・・、イヤ何でもありません。それでは持ち場に
戻ります」

爽やかな笑顔を見せて彼女は戻っていった・・・

「部下に気を使わせる様ではな、私こそ気を引き締めねばな」

～第1章 開演～

PM7:58 第五区 高層ビル屋上

「こんな鉄屑の世界に未練なんてありませんよ、誰もネ！」黒い
コートを着た男は、ビルの屋上で夜 空に呟いた、そしてビルから
飛び降りる。その後すぐに、首都アステルの夜空には大きな花火が
上がった、まるでこれから起こる出来事を世界が祝福するように
・・・

首都アステルは円状の都市である、第1から9までの区画が並び
中心に大きな城がある。

聖痕祭は年に一度王族が城を出て人々に姿を表す。

コート男は突然空から舞い降りた、そしてすべてを押しつぶした。

「皆さん、早く逃げないと死んじゃうよっ」

「貴様はすでに包囲されている、少しでも動けば発砲する」

男はそのまま前へ進む、何のためらいもなく

「撃て」

弾丸はすべて男に届くことなく地に落ちる、そして男は言った
ラウンド・ゼロ
「無重力」

人も車もすべてが空に上がり、地に落ちた・・・

「さあ、すべてを終わらせよう！！！！」

次々上がる爆煙 響き渡る爆音 始まりを告げた物語

くっくくく

第一章 開演（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。ようやく最初に追いつくことができました！次回からは戦闘がメインになってしまうと思うのですがよろしく願いします。もしかしたら、少し第1小队などの話が間に入るかもしれません。

申し訳ありません、まあ何かありましたらメッセージしてくれると嬉しいです。

次回もよろしく願いします。

第一章 THE GAME (前書き)

遅くなってすいません。

今回は戦闘のみですがよければどうぞ！！！
これで、一章の登場人物はそろったかな？？

第一章 THE GAME

第一章 戯れの女王

帝国軍ハウন্ズ部隊は、5つの部隊から成り立っており番号の順番が力の強さを表している。

一番隊隊長 箱美目 四季 戯れの女王

始めましょう 楽しみなさいこの戦いを 私の手の上で……

第五区 メインストリート

「はい皆さん、道を空けないと潰れちゃうヨ」

地にひれ伏す兵士、空を舞う兵器は地に沈む、何者も彼の前に立つこともできず重力操作者は楽しそうに足を進める。

「おつようやく御出ましかい、アタリかなハズレかな？」

黒髪で長髪の女は真っ直ぐに足を進める、道の真ん中を堂々と目的に向かって。

「名前くらい知りたかつたけどネ、潰れちゃいな!!」

女を中心に地面が円を描き沈む、女は声が聞こえる程度の距離で足を止めた。

「潰れないねえ」

「部下に障壁を張らせている、浮きも潰れもしないよ残念だったね」

「へへえ、力を強めてもダメだね、優秀な部下なこつた」

「それ程でもないさ、ところで能力も効かないことだし大人しく捕まってくれる？」

女の周りの地面が砕け散る。

「答えはNOと」

男は万遍の笑みで言った「もちろんさ!!」

「じゃあ始める前に確認するけど、重力操作者だよねあんた？」

「そも呼ばれてるかなっ」

「久しぶりの大物だ、私を楽しませてくれよ」

「期待に応えられるよう頑張りますヨ！」

長い髪をなびかせ楽しそうに言い放つ 「The Game」

「自己紹介が遅れたね、帝国軍ハウズ第一小隊長箱美目 四季」

「大当たりを引いたみたいだね、戯れの女王の御出ましいだい！」

「第一章 THE GAME ?」

「さあ今回はどのGameかな？」

大きめなビリヤードの球が現れ、女の周りをくるくると浮かぶ。

「10球つてことはナインボールか、ちょっと待ってなすぐにルールが表示されるから」

二人の前に現れた掲示板に重力操作者は目を向けた。

「Nine-ball Rule」

「ようこそ我が主が支配するGameに、どうぞお楽しみくださいませ。」

- 1、対戦者が9番ボールに触れると主の勝利となります。
- 2、10分間対戦者が逃げ切れれば対戦者の勝利となります。
- 3、対戦中は主とボールに対していかなる能力も通用しません。
- 4、両者とも故意的に一定の距離以上離れると失格となります。
- 5、両者とも途中棄権する場合には対価を支払っていただきます。
- 6、両者は外界からのいかなる影響も受けません。

お二方にとって楽しいお時間になることを願っております。

「ルールは理解したか？」

「もちろんさ、ただ服装まで変化するとは驚きだネ」

四季の姿はハスラーに変化していた、少し大きめのキューを持つて満足げであった。

「サービスだよサービス、この能力は私の意志でゲームを選べないから楽しくてな、それでは始めていいか」

「オーケーさ！！楽しもうじゃないか！」

空に浮かび上がるタイマー、四季の周りを浮かぶボールが一箇所に集まる。

「さあ始めるよ、弾けとびな！」

動きだすタイマー 無差別に飛び散るボール 楽しそうに二人は微笑み舞を舞う

7番ボールが重力操作者グラビティ・ウオーカーに向かう、それをすばやくかわし四季に向かう。

「かわして正解だよ」四季はすでに手球に追いつき、手球を突く。

手玉は正確に1番を捉え、次々とボールはぶつかりあい3番・5番が重力操作者グラビティ・ウオーカーを迎撃する。

「うまいもんでしょ、どんどん行くよ」

3番・5番を重力操作者グラビティ・ウオーカーがかわそうとする時、四季は呟いた。

「3番・5番バースト」

5番の球が爆発した、重力操作者グラビティ・ウオーカーの瞬時に後に下がり直撃を避ける。

「ラッキー、5番はバースト！」

「やっぱりただのボールじゃなかったネ、でも3番が爆発していたら危なかったヨ」

「9つすべてのボールに特性がある、でも私もどのボールにどの特性かはわからないだね。あとさっきの動きずいぶん早かったね、

自分にかかる重力を操作したってところかな？」

「お察しの通りです」

爆発した5番は中央に現れる、四季は正確に手球を突き球達は重力操作者を追い詰める。

「2番・6番・8番ストップ」8番はその場に停止する。

重力操作者は車や看板などを投げつけ四季の邪魔をする、それらをかまし四季は突き続ける。

「これでどうだ」四季の放った手球は次々に連鎖を起こし重力操作者に向かう。

「5番バースト、3番・7番アクセル、8番ストップ、1番・2番・3番ホーミング」

7番は急激に速度増す、2番・3番は重力操作者を追いかける、爆煙に紛れ3番が重力操作者に当たる。

「何だよこりゃ、右目が見えないや」

「言うのを忘れてたよ、ボールに当たることに色々不自由にならから気をつけな」

すでに四季は手球を突き、ボールは重力操作者に向かう。

「2番ホーミング、1番・4番・6番アクセル and ステルス、7番・9番ストップ、」

2番は重力操作者を追いかける、1番は急激速度を増す、6番は姿を消す。

「そろそろ折り返し、これでどう」四季は手球を突いた。

「1番・7番アクセル、2番ホーミング、5番バースト、6番ステルス、8番ストップ」

次々と迫るボール、そして爆煙の中から現れる四季のキューの一撃。

8番と7番が重力操作者を捕らえた。

~U~U~

第一章 THE GAME（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

今回は戦闘のみ！！で書かせていただきました、次回で二人の戦いは終わる予定なので、次は第二小隊のみんなに頑張っていたきます。

次の投稿は早ければ明日にでも、よろしければまたお読みください。

第一章 重力操作者（前書き）

今回も戦闘メインです。登場人物がまた増えそうです、すいません。
（注）ひとつ前を読まないと全く内容が分からないかもです。

第一章 重力操作者

第一章 THE GAME ?

PM8:16 第五区 メインストリート

「いい判断だよ、もし7番と8番をかわしてたらゲーム・オーバーだったよ」

「右目に、右耳に、左手も使えなくなっちゃった」

グラビティ・ウォーカー
重力操作者は残り時間を示すタイマー「4:43」を見つめ状況を整理した。

1番ボール アクセル
2番ボール ホーミング

3番ボール ホーミング
4番ボール 特性不明
5番ボール バースト
6番ボール ステルス
7番ボール アクセル
8番ボール ストップ
9番ボール 特性不明

つと分かったが、正直かなりやばいネ。

「一度当たったボールは消えるから心配しなくてもいいよ」

四季は優雅にキューのティップにチョークを付けながら言った。

「それは安心したよ、正直なところもっと早く色々教えて欲しかったネ」

「すまないね、つい忘れてしまった」

「楽しいからいいよ、まだ足が使えるだけ十分さ」

「両足が使えなくなることはたぶんないよ、これはゲームだから必ず最後まで多少の有利・不利はあるけど一方的になったりしないさ」

「十分一方的な気がしますけどネ」

「たまたま私が得意なゲームになってしまっただけさ、自身の運のなさを悔やみな」

「日ごろの行いが悪いのカナ？」

「当然の報いだよ、それじゃあそろそろ始めるよ」

「このまま時間まで話してようと思ったのにネ」

四季は手球を突く、グラビティ・ウオーカー重力操作者はボールの位置と番号を確認しながらかわす。

四季は確実にグラビティ・ウオーカー重力操作者の右を狙う、そして追い詰めていく。

「いくよ、1番アクセル、2番ホーミング」

1番・2番がグラビティ・ウオーカー重力操作者に向かう。

「6番ステルス」

グラビティ・ウオーカー重力操作者は6番の軌道から離れ、4番に近づいた。

「4番・5番バースト」

5番が爆発し、爆煙にグラビティ・ウオーカー重力操作者は包まれた。

次の瞬間、四季はハンマーで叩かれた様な衝撃を受ける。

「このやろう、今までの移動速度は・・・」

四季は何とかグラビティ・ウオーカー重力操作者から距離を取った。

「一発のために、はあ左足を持ってかれたあ」

「一発でアバラ数本だぞ、十分だろう」

「でも右手が使えてよかった、でなきゃやられ損だったよっ」

四季は口元の血をふき取って構える。

「なぜ腕を狙わなかった？うまくいけばお前の勝ちが決まったよ」

「それじゃツマラナイじゃないか？」

「そうだな、野暮なことを聞いたな」

残るボールは2番、4番、5番、6番、9番の5球、残り時間は2:32。

「じゃあ本気でいくよ、0番・4番ディビジョン」
手球と4番が分裂する。

「ディビジョンは残り時間が3分切らないと使えない、そして手

球はすべての特性を使える」

「難易度高いね本当にネ!!!」

グラビティ・ウオーカー
重力操作者は片足とは思えぬ速度で四季に迫る、四季は次々と手球を突く。

「0番 から までバースト」

響く爆音 二人は楽しそうに舞う 無邪気に 陽気に……

「さあ1分切ったよ、これが最後の力さ2番・9番シフト」

2番と9番が入れ替わる。

「もう、どのボールにも当たれないよ!!!、フルバースト!!!」

爆煙に包まれる二人。

響くキューの落ちた音、爆煙の中二人は向かい合っていた、そして四季の左腕はおかしな方向に曲がっていた。

「ぎりぎりだなお互いに」

「いやいや、両足とも動かないネ」

「あと36秒か、このままでお前の勝ちだよ」

「イヤイヤ、右からボール来てるよネ!!! 見えないけど感じるんだ、でもかわす方向もわからないから負けだよ」

「気づいていたか、ああ6番だよ」

グラビティ・ウオーカー
重力操作者は笑った。

「途中棄権する、対価はなんだ」

〈第一章 表と裏〉

タイマーが消え、ボールも消え、大きな掲示板が現れる。

残り時間 31秒

勝率予測 主様 32% 対戦者 68%

「まだ何かお前は隠していたのか？」

「なくんにもないさっ、予測だもん当てにならないヨ」

よって対価は右腕か左目または能力規制ですが、いかがなさいますか？

グラビティ：ウォーカー
重力操作者は迷わず答えた。

「左腕で頼むよ」

グラビティ：ウォーカー
重力操作者の左腕は消えてゆく・・・

「すげー、きれいに傷口もふさがっている、お前のゲーム中に受けた傷は治らないんだな」

「そういう設定にしている、どうする私を殺すか？」

グラビティ：ウォーカー
重力操作者は空を見上げ、コートからコインを出した。

「ゲームで決めよう、コインを投げて表なら殺す、裏なら殺さない」

コインが宙を舞い地面に落ちる。

「さすが戯れの女王様、幸運なこった」

グラビティ：ウォーカー
重力操作者は背を向け、歩きだした。

「どこへ行く」

「もう十分満足したから帰るのさっ、それともまだやるの？命は大切にしなよ」

「お前の目的は姫様をさらうことじゃないのか？」

グラビティ：ウォーカー
重力操作者は振り返り微笑みながら言った。

「世界が壊れるって言うから見に來ただけさ、退屈だから手伝わやろう思ったけどもう十分さ」

「お前が首謀者じゃないのか？」

「違う違う、基本的に群れない主義なのでネ」

四季は頭を抱え、空を見上げた。

「君のこと気に入ったから暫らくここに居るかもネ」

四季が前を見ると重力操作者グラビティ・ウオーカーは消えていた。

「次のゲームは私が勝つさ」

四季は落ちているコインを拾った、コインは不自然に潰れていた。

「ふざけた男だよ、まったく・・・」

四季はコインをポケットへしまつて、微笑んだ・・・

つづく

登場人物紹介 第一回

名前

グラビティ・ウオーカー
重力操作者

性別

男

能力

重力操作

年齢

23〜26くらいで

身長

175以上180未満

体格

普通より少し細いくらい

髪型

皆さんのご想像にお任せします

服装

黒い長めのコート 黒いブーツ 黒が好き

CVイメージ

まだ未定です

雑談

能力は後から決まりました。しゃべり方と性格は前から決まっております、中立でとにかく強く長く頑張ってくれそうな人として出来上がった方です。でも、もう片腕に・・・

今後としては、たぶん四季のストーカーとして活躍してくれるでしょう（笑）

名前

箱美目 四季

性別

女

能力

THE GAME

年齢

24〜26くらいです!!

身長

165以上170未満

体格

割とスタイルがイイです。

髪型

黒髪のロング 登場時はストレート ハスラー時

は結わいて片側へ流したり コスチュームによって変化します。

服装

女性用軍服は西洋のかわいい感じを未来ちっく

にした感じ!

CVイメージ

ゆ○なさん

本○

貴子さんとかあ

雑談

この方の能力が決まらず投稿ができませんでした。まず強い、面白、かっこいいをテーマに考え思いついたのがこの能力です。性格や能力より前から名前が決まっています。今後はまだ決まっています。重グラビティ・ウオーカー力操作者と戦います、たぶん。

一章での出番は暫らく出番がないかもですが、人気があったらまた……

次回は第二小隊を紹介できるといいなあ。

第一章 重力操作者（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。グラビティ・ウォーカー重力操作者はこの物語で一番最初に登場した人物なので、彼に一番手をやってもらいました。次こそは第一小隊の出番です！！次もすぐに投稿できると思うので気が向きましたらよろしくお願いします。

第一章 Prepare March(前書き)

今回もよろしくお願いします。

さあ第二小隊に頑張ってもらいましょう!!

第一章 Prepare march

第一章 Prepare march

式典の会場は巨大な楕円型の広場である。

中央付近にはステージが建設されており、そこで様々なイベントが行われる予定である。

式典会場の警備は帝国軍とハウন্ズ小隊で行われている。

会場周辺を帝国軍と第三小隊、ステージ周辺を帝国軍と第一・第二小隊が配置されている。

PM7:58 第五区 式典会場 ステージ周辺

ジユラルはボーッと会場の警備をこなしていた……

オレ 赤い髪をしたドレス姿の女に話しかけられた

「すいません、お聞きしたことがあるのですが？」

オレ 感じ良く応えた

「どうしました」

女 少し不満そうにオレを見て 言った

「あなたの力は何か教えて？」

口が 勝手に動く

「拒絶する者」
リジェクター

女 嬉しそうに言った

「私を守りなさい、さあ一緒に来なさい」

体 勝手に動く……隊長……ピンチ……

同刻 式典会場付近のビル屋上

「ルイ、さつきは隊長と何話してたのお？」

「警備のことだけど」

ルイはユウの質問をさらりと流した。

「早く自分の持ち場に戻らない隊長に怒られるよ」

「大丈夫だよ、オレはすぐ戻れるからさ」

ルイは会場の方を見て呟いた、

「ジユラルって女性に興味あるんだ、以外だなあ」

「ルイ、どうしたの？」

ビルから会場の大半を見渡すことが出来る、肉眼で会場の人の動きを見ることなど出来る訳がない、しかし彼女にはしっかりと見えている……

「ジユラルが綺麗な人と喋りながら歩いてた、あいつに限ってさぼりではないと思うけどね」

「ホントに！！オレが確認してくる……」

響く爆音 聖痕祭せいこんさいの始まりを告げる花火が上がった

「今年も始まったー！！お仕事の時間だあ」

ユウは嬉しそうに言って姿を消した。

「私もがんばるぞ！！」と言って、ルイは式典会場に目を向けた。

同刻 式典会場 ステージ付近

「顔が怖いぞ、リゼリくん」

「箱美はこびめ目隊長」

「そんな顔じゃせつかくの祭りが台無しよ。」

お姫様に呼ば

れたらしいね？」

リゼは一瞬停止した。

「若い二人はいいねえ」

リゼは箱美目 四季という人間を好きでない、彼女は自分とは違う。

彼女の實力も本心も十分に知っている、彼女はその力を他の為に使わない。

彼女は自身の心を満たす為にしか使わない、そして常に自分が一番楽しめる場所を探している……

「そんなんじゃないありませんよ、それより第4小隊のことどう思います?」

四季は興味なさげに言った、

「ぐちゃぐちゃだったらしいよ、熊にでも襲われたらしょ」

「熊ですか……」

響く爆音 聖痕祭せいこんさいの始まりを告げる花火が上がった

「始まったね、重力グラビティ操作者ウオーカーって知ってるかい?」

「有名ですからね」

「ここに来てるらしい、お前の視界データに記録があつたのを部下が見つけたよ」

「あの時の黒いコートの男か、警報の発令は?」

リゼは四季の顔が笑っている様に思えた……

「さつき発覚したばかりで、このこと知ってるのは私と部下1人とお前だけさ」

「なぜ本部に連絡を?」

「邪魔しないでくれよな、リゼりくん」

四季はそれう言つて立ち去つた。

「だからあの人は嫌いなんだよ」

その後すぐに、会場に悲鳴が響いた……

くっくく

第一章 Prepare March (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

今回は山場も何もありません!! すいません。

次回からはまた戦闘です、今回はちよつと休憩です。

次回もよろしくお願いします。24時間以内に投稿します!! たぶん

第一章 March on the sidelines (前書き)

今回もよろしくおねがいします!!

第一章 March on the sidelines

第一章 March on the sidelines ?

PM 8:00 第五区 式典会場ステージ

開演を告げる花火と共に現れる王女達、様々な能力が使われる美しい演出。

その美しい光景に観客もリゼ達も心を奪われた。

その時会場に響く悲鳴と爆音、そして会場付近で上がる爆煙……

ユウはすぐに悲鳴のもとへ転移した、観客達の中に転がる血まみれの兵士。

「いった何が？」

「空から急に降ってきて……」

その時、ユウは後ろから恐怖を感じた。

「お前は強いのか？」

ユウに激痛が走る、左腕が砕けた、数メートル吹き飛ばされ相手を確認した。

そこには野獣ビーストがいた、人の形をした獣がいる。見た目は少し大柄な男だ、しかし何かが決定的に違うのだ人間と、彼の纏う雰囲気オーラはまるで獣。

「とつさに身を引いたか、一撃で終わっては面白くない」

ユウは体を引いたのではない、本能的に体が動いただけだった。体が危険を告げている、今すぐにどこかへ転移することを……

「不意打ちとは卑怯だね、でもオレに触れられるのはさっきのが最初で最後さつ、子犬ちゃん」

「面白い、貴様の能力は空間転移リムスたる逃げるなよ」

「逃げるって誰からさ？子犬ちゃん」

王女はもつとも冷静だった。

「皆さん落ち着いてください、すぐに安全な所へ避難できます。」

「お姫様、ステージから降りてください。すぐ空間転移者達リムスが安全なところへ・・・」

「私より観客達を早く転移させなさい！」

「しかし、お姫様にもし何かあつては・・・」

王女はツバイに笑顔で言った。

「私にはあなた達がいるわ」

ツバイはマントを翻し命令する。

「空間転移者達はすぐに観客を安全な所へ、騎兵隊ナイツはすぐに事態の收拾を行なえ、我ら王族警護隊クラウン・ナイツの力を見せてやれ」

「ユウ、かわせ」

リゼは迷うことなく対物ライフルを放つ、野獣はそれを手でなぎ払いリゼに向かう。

「獣風情が調子にのるなよ、召喚マシンガンリコールPDW」

野獣は腕で弾丸を弾き、真っ直ぐリゼに迫る。

「化物が、召喚鉄壁リコール」

リゼの前に鉄の壁が現れる、しかし野獣はそれを軽く壊しリゼに近づく。

「忘れてもらっちゃ困るな、子犬ちゃん」

ユウが現れリゼと共に姿を消す、その間にリゼは野獣に手榴弾を投げつける。

爆発が野獣を包む。

爆発は確かに野獣を傷つけた、しかしすでに野獣の傷は癒え始めている。

「今のは効いたな、服がボロボロだ」

その時、野獣の手足を次々に弾丸が貫く。

「ルイ、死なない程度にもう少し撃ち込んでやれ」

「了解」

弾丸が次々と撃ち込まれ動きを封じる。

「卑怯だぞ貴様ら……」

「卑怯？ 獣風情が頭を使え、相手をしてもらっただけ嬉しく思え」

野獣がリゼに手を伸ばす、その手を弾丸が打ち抜く。

「仲間を傷つけられて、うちのスナイパーはご立腹だ、リコール召喚バズ

ーカ」

リゼが砲門を向けていった。

「暫らく寝ている」

「空に龍がいる」「あれも演出？」「赤と青の龍だ」

観客達から聞こえる声で王女とツバイは空を見上げた。

そこには確かに二頭の龍がいる、そしてそれらは演出でないことを二人は知っている。

「ツバイ？ あんな演出ありました？」

「私は存じておりません。」

そして、空に無数の明かりが灯る。

赤い目をした少女と青い目をした青年は龍にまたがり、会場を見下す。

「さあ私達の力を見せてあげるわ！！」

「僕達でパーティーを盛り上げてあげよう」

「観客の転移はまだなのか？」

ツバイは部下に強く尋ねた。

「申し訳ございません隊長、人数が多いもので今しばらく」

王女はマイクを取って叫んだ。

「リゼー!!! 上を見てえー!!!」

野獣を眠らせたリゼに声が届く。

「こんなに堂々と」

リゼは少し赤くなりながら空を見た、そしてすぐにジュラルの名を呼んだ。

「ジュラル、すぐに空に障壁を張れ」

通信機から返事は返ってこない、返ってきたのは女の声だった。

「ごめんね隊長さん、今ジュラルくんは私が借りてるのよ・・・」
声の後ろから聞こえる音で、近くにいることが分かった。

リゼは話ながら辺りを見渡す、そして赤い髪の女とジュラルを見つけ女に向けて発砲した。

しかし、弾丸は障壁に阻まれた。

「いきなり撃つなんてもう」

「貴様、支配者ドミネーターだな」

「大当たりよ、でもあたしはここで面白い見世物があるから見に来ただけよ」

「ならジュラルをすぐに開放しろ」

「イヤよ、これでも私は有名なのよ。捕まらないように保険よ」

リゼは少し考え言った。

「そいつに価値はない、だが貴様がそいつに障壁を張らせたら今回は見逃す」

その時、無数の炎が地面に近づき始めた。

「わかったわ、ジュラル」

無数の炎が見えない壁に阻まれ、空に炎の海が出来た・・・

「ルイ、もし一瞬でも障壁が取れたらあの赤髪のアバズレの頭を打ちぬけ」

「了解」

「あとジュラルも死なない程度に打て」

「りよ、本気ですか？」

「本気だ」

「……………」

〜つづく〜

第一章 March on the sidelines (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます!!!
ぎりぎり24時間以内はできませんでしたすみません。
次回は今週中にでも投稿できたらいいかなあ。

第一章 Round dance of the heavens (前書き)

今回もよろしくお願ひします。以前の内容に少し追記と修正がありました、大変申し訳ございません。

第一章 Round dance of the heavens

第一章 エスナ・アステリオス

PM6:46 首都中央王宮内

「リゼ、実は……」

王女は一瞬リゼから目をそらし、真つ直ぐにリゼの顔を見て言った。

「私は今の世界を壊す力が欲しいの」

リゼは王女の顔を見て真剣であることを分かった。

「エスナ、何をするつもりだ？」

エスナと呼ばれた王女はリゼに機械の画面を見せた。

「この通りよ」

リゼは画面を見て頭を抱えた。

「私の能力は有名よ、だから私自身を餌にしたの」

「さらわせてどうする？」

「餌は食べられたら終わりよ、だからリゼ達がいるのでしょ？」

リゼはエスナに背を向けて、扉に向かって歩き出した。

「了解、ただし危険だと判断した者はこちらで処理させてもらっ

PM8:18 式典会場周辺

「隊長、きりがありません……」

第三小隊の腕章をつけた青年が弱音を吐いている。

「そう言わないの、ステージの方はもっと大変そうだよ。うちは操られた民間人やらの足止めで十分だよ」

「隊長がそんなだからいつも他の隊に……」

隊長と呼ばれる男は青年の頭を撫でて、ステージの方に目を向けた。

「うちはうち、外は外だよ」

隊長と呼ばれる男は通信機を手にした。

「あいちゃん、ちよつとステージの方見てきてよ通信機から返事はない。」

「あれー返事がないぞー……………」

同刻 ステージ付近

「ユウ、俺を空まで連れていけるか？」

「任せなさい!!」

「全く人使いが荒い隊長さんだな」

突然、ツバイと数人の部下が現れた。

「何しに来た？」

リゼはツバイを睨みつけた。

「姫様の命令で、助けにきてやったのだ」

「好きにしる」

リゼはわざとツバイを視界から外してユウを見た。

「私の部下が転移させるので、君は傷の手当をしたまえ」

ツバイはユウに視線を向けてうなづく。

「ツバイ、お前の力は借りん」

ユウは嬉しそうに二人を見て笑った。

「隊長、申し訳ございません。思った以上に重症なようで……………」

「わかった……………」

リゼはツバイの満足げな表情を見て、一瞬トリガーに指を置いた。

「それでは行きましょうか」

「空間^{ルーム}転移」 二人の姿は消えた。

第一章 Round dance of the heave

ns)

二人は二匹の龍の上空に現れた。

「リコール
召喚」

二人は同時に言った、リゼは二丁のハンドガンをツバイは二本の剣を持って龍のもとへ落ちる・・

青い目の少年は気配に気づき上を見た。

「上からだ!!!」

「黒髪の男は私がやる!!!」

リゼに向けて無数の炎の矢が迫る、それを落下しながら発砲の衝撃と身のこなしでかわす。

「あの時はよくもー!!!」

炎の蛇がゼリに迫る・・・

ツバイは氷の矢を切り裂き、青い龍に向かう。

「リコール
召喚」

ツバイの周りに無数の槍が現れ、青い龍のもとへ降り注ぐ。

「僕をなめるなよ」

氷の壁が空に広がり槍を防ぐ。

「子供の遊びにしてはやりすぎだ、リコール 召喚 機怪剣 アフロディー

テ

ツバイのもとに白銀の女神の彫られた剣が現れる、それを右手で握り左手の掌を切り裂き両手で握った。

次の瞬間、氷の壁と共に龍も切り裂かれた。

ツバイは氷の壁蹴って、傾いた龍に近づき飛び乗った。

「お前ー!!!」

ツバイに氷の蛇が迫る、それを両断して少年に近づく。

「お仕置きだ」

少年の視界は黒く染まった……

リゼと炎の蛇はぶつかり爆発が起こる。

「私が本気をだせば楽勝よ!!」

少女は嬉しそうに笑って、青い目の少年の方に視線を向けようとした。

「二度目はないぞ、小娘」

少女は振り返る、そこには鉄の板の上に男が乗ってこちらに銃口を向けている。

「うそ……」

少女の視界もまた黒く染まった……

二人は地面に向けて落ちていた。

「ツバイ、帰りのことは考えていなかったのか？」

「今考えている」

リゼはツバイに銃口を向けた。

「どうせ死ぬなら俺の手で死ね」

「私も同じことを考えていたよ」

その時、二人の間にユウが現れた。

「お迎えに参りました、あれっお二方とも子連れですか？なんだかんだ優しいね」

〜つづく〜

〜 登場人物紹介 第二回 〜

名前

リゼリ・バツシュ

性別 男性
能力 リコーラー 召喚士
年齢 19〜22くらいで
身長 173〜175
体格 割と細い感じ
髪型 色は黒 長さはミディアムよりちょい長い
服装 男性用軍服も西洋のかっこいい感じを未来ちっ
くにした感じ！

CVイメージ

時々めがねキャラにもなります。
アジア？1の声優さんとか

雑談

一応、第一章の主人公です。キャラクターのイメージはクールでツンデレ君です。

今のところは暗い過去があるなどの設定はありません。あとモテます。

名前 ツバイ・ハーツ
性別 男性
能力 リコーラー 召喚士
年齢 19〜22くらいで
身長 175以上180未満
体格 普通です、姿勢がとても良い！！
髪型 白ぼい銀でセミロングです。
服装 西洋の騎士、マントとつけてます。
CVイメージ 未定です

雑談

品のあるキャラクターです。イメージは中身のどこか足りない王

子様。

やはりリゼに対抗する召喚士を考え、銃と剣と言つ事で……
キャラがべたですいません。ちなみに召喚士としてはツバイの方
が上です。

彼が本気を出すと四季に勝てます。機関としては王族警備隊はハ
ウンズよりも上です。

たぶん二章に出番は……人気が出たらでるかも……

第一章 Round dance of the heavens (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。第一章も終盤です、あと1、2話で終わると思います。今週中に第一章完結を目標に頑張ります!!!よろしければ次回もよろしくお願いします。

第一章 終演（前書き）

今回もよろしくお願いします。

第一章 終演

第一章 終演

PM8:28 第五区 式典会場周辺

「隊長、どうしましたよ」

第三小隊の腕章をつけた青年が弱音を吐いている。

「困ったねえ、通しちゃっていいよ」

自身に刃物や銃口を向けた民間人や兵士達が式典会場の中心へ足を進める。

同刻 式典会場ステージ

「現状として事態は收拾へ向かっております。第五区は第一小隊が中心に鎮圧、その他の区画は第五小隊と軍部部が事態の收拾に当たっており……」

リゼ達は現状報告を受けていた。

「ひどい有様ね」

突然、ステージの客席から女の声が響いた、そしてすべての視線と銃口が女に集まる。

「何者だ？」 ツバイが質問した。

ツバイは剣を握り締め、リゼも銃口を向けた、ルイの銃口も女の頭を捕らえる。

「ただの観客よ、世界が壊れる所を見に來ただけよ」

長い紫の髪をした女はに堂々とした雰囲気客席に座り、すべてを見透かすような目をしていた。

「あまり舐めるなよ」 リゼはトリガーに力を入れようとする。

「たくさんの血が流れるわよ」

その時、自身に刃物や銃口を向けた民間人や兵士達がステージ周辺を囲む。

「危ないから、私に銃口向けなくてくれる」

「卑怯ものが!!」

ツバイは剣を放す、兵士達も銃を放す。

「あなたも早く銃を置きなさい、あとスナイパーにも命じて」

女はリゼに命じた、しかしリゼは銃口を向け続ける。

「リゼ、従いなさい」

王女はリゼに命じた、リゼは銃を地面に投げた。

「お姫様の言うことは聞くのね」

王女はステージの上から女を見て言った。

「狙いは私でしょ、好きにしなさい」

女はため息をついて、辺りを見渡して言った。

「さつきも言ったでしょ、私達はただの観客。でも変ね、正直な

話ここには首謀者になりそうな奴はいないわ、重力操作者グラビティ・ウォーカーもリタイ

ヤしたし」

女は王女を冷たい目で見て言った。

「私達は騙されたのかしら？」

「いいえ、これから世界を壊すのだから」

王女の言葉は沈黙をもたらした。

「リゼ、もういいわ」

「気は済んだんだな」

「何かしたらみんな死ぬわよ」

女は落ち着いてリゼを睨みつける。

「捕まえる」

黒い大きな手が現れ女を襲う、女は転移してかわす。

「あなたが悪いのよ」

女は指を鳴らした、しかし状況に変化はない。

「なんで？」

女は民間人や兵士達を見る、彼らの体に黒いモノが巻きついてい
る。

「油断しすぎなんだよ」

リゼは銃を拾い女に向かう、そして彼の左目は黒く染まっていた。

「デュアル・クラスター
二重能力者、でも・・・」

リゼは銃口を女に向ける。

「転移できない」

女は自分の体にも黒いモノが巻きついていないことに気づいた。

終演を告げる銃声が響きわたる・・・

第五区 式典会場周辺ビル屋上

「何故だ！！僕の人形達は動かない？姉さんどうしよう」

「少年、悪戯がすぎるなあ」

そこには、第三小隊の腕章をつけた男と数人の部下がいた。

「さあ捕まえちゃって」

男は式典会場を見つめた。

「うちのお姫様は何を考えてるやら、あいちゃん帰ってきて報告
よろしく」

PM 8:41 第五区 高層ビル屋上

「終わっちゃったネ、まあ楽しかったからいいか」
グラビティ・ウォーカー

黒いコートアンティック・イマジネーションの男は楽しそうに笑っている。

「さあ幻想の道化師の皆さんはいかがでした？」

男はピエロの人形に話しかけた、人形はかすかに笑っている青い炎に
包まれた。

第一章 完結

}

第一章 終演（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

自身初めての作品でこんな貧相な文書と物語に付き合ってください。た方には本当に感謝でいっぱいです。これで第一章は完結です、第二章は三月から始めたいと思っています。

その前にuntitledの短編を3〜4本ほど投稿する予定なのでよろしければどうぞ。

本当に読んでくださりありがとうございます。

第二章 プロローグ ? (前書き)

今回もよろしくお願ひします。

第二章の始まりです、一章ほどコマめに更新できないと思いますが
お付き合いしてくださいれば嬉しい限りです。

第二章 プロローグ ？

第二章 少年の世界

小さい頃から世界すべてに興味がなかった、小さい頃に両親を失ったのが原因なのか？それとも素からこんな人間だったのか？自分でもわからない、その事も正直どうでもいい。

今の生活に不自由もないし、このまま軍人になるのにも不満もない。きつとこのまま俺の世界は淡々と日常を廻り続けると思っていた・

・

聖痕祭当日 PM7：46 首都アステル 第五区 メストリート

少年は一人時計を確認して、賑わう町に目をくれずに式典会場へ足を進めていた。

「集合時間に間に合わないな、近道を使うか」

少年はビルの間に入って行った、すこし進んだ所で少女が男に追われているのを見かけた。

ほんの気まぐれだった、少年は少女方へ足を進めた。

同刻 第五区 高層ビル

高層ビルの最上階から少女は景色を眺めつぶやいた。

「私は直接見たいの、こんな遠くのビルから見てなにが楽しいの？」

「しかし、お嬢様・・・」

少女の足は部屋の出口へ向かう。

「会場にいくわよ、早くしなさい」

ビルから出た少女は出口に止まっている車から逃げだし、ビルの陰へ逃げ込んだ。

「あんな警護ばかりでは祭りが台無しよ、せつかくエスナの演技が見れるのだから」

遠くから足音と声が迫る、少女は急いで足音から逃げる・・・

少女には気品があった、確かに高そうな服に綺麗な金髪に綺麗な顔つきがよりいっそう引き立てていたのかもしれない、初めて人間を見て見惚れたかもしれない。

それが彼女への最初の印象だった。

「やめて、放してよ」

「お嬢様、お願いですから……」

少女は腕を掴まれ、男達と言いつ争っているのが見えた。

「おじさん達さあ、こんな日に何やってるのさ？」

男達と少女の視線が少年に集まる。

「お願い、助けて」

少女の言葉に自然に体が動いた……

その子はどこか不思議な雰囲気な子だった、くすんだ金髪に綺麗な青い目、私には彼がとても神秘的だった。

これが私の彼への第一印象。

私の足では護衛は振り切れなかった、でも捕まった時一人の少年が現れた。

私は駄目もとで叫んだ。

「お願い、助けて」

少年の動きは的確で美しかった、自分よりも大きな男を投げ飛ばす、少年が男に触れると男は白目をむいて倒れた。

男に触れた時、少年から一瞬青い光が見えた。

「あなた能力者ね？」

私の質問に一瞬少年は驚いたようだった、そして私の手をひいてその場から離れた。

しばらく走った後、大通りに出て人ごみに紛れた。

「さつきはありがとう、助かったわ」

少年は辺りを見渡して、そのまま前を向いて言った。

「振り切ったみたいだ、今日は軍がそこら中にいるから保護を頼も

う

「軍は駄目よ」

少年は一瞬私を見て、また前を見て言った。

「そうか、俺に何か出来ることはある？」

自分でも何でそんなことを言ったのか分からなかった、ただ単純に彼女を見て力になりたいと思ったのかもしれない。

「式典の会場まで私を連れて行ってくれる？」

「わかった」

そのとき、空に大きな花火が上がった。

彼女も周りの人々も花火に見惚れていた、でも俺は花火を見上げる彼女の姿に見惚れていた。

「リシアよ、あなたの名前は？」

少女は花火を見たまま、尋ねた。

「ロイテル」

少女は微笑みながら言った。

「ロイテル、よろしくね」

そして、響く爆音と共に日常は歪み、新たな世界が廻りだす……

くつづく

第二章 プロローグ ? (後書き)

最後まで読んでくださりありがとうございます。

3日までにプロローグが完成しなかったので二つに分けることに

・
すぐに次を投稿できるように今も頑張っております!!

朝までに投稿できるようがんばります!!!!!!

第二章 プロローグ ? (前書き)

今回もよろしくお願いします。

「一つにまとめる」とか言わないでください(笑)

第二章 プロローグ ？

第二章 少女の世界

数週間後 首都アステル 第四区 MTC社地下実験場

少女は観測室から実験場を見下ろしながら言った。

「ロイテル、準備はいい？ 私は実戦主義だから実弾しか使わないわ」

ロイテルは三機の無人戦車に囲まれていた。

「ああ」

「それでは始めるわよ」

ロイテルは一瞬微笑み左耳のイヤリングが輝き、蒼き閃光と化す。

「彼の能力はまさに無限のエネルギー、高速移動も防御障壁もMTCのすべての力を彼なら使える、そして天性の身体能力が限界の壁を打ち壊す」

蒼き一閃がすべてを切り裂く、無駄がなく優雅に破壊を行う。

「素晴らしいわ、私は最高の気分よロイテル」

青い目の少年は鉄屑に囲まれ少女を見つめる、少女は少年に問う？

「私と共に歩んでくれる？」

少年は何も言わずに頷いた。

「たくさんの命を奪うかもよ？死ぬかもしれないのよ？・・・」

少女の声の実験場に響く、少年は閃光と化す。

突然、観測室のガラスが割れ、少女の前に跪いた少年が現れる。

少年は顔を上げ、少女の顔を見つめ言った。

「俺に何か出来ることはある？」

少女はゆっくりと目を閉じた、そして少年に命じた。

小さい頃から世界が怖かった、両親は私のことがきつと嫌いだ
ったと思う、愛情以外すべてを私に与えてくれたのだから。

だから他人が怖かった、みんな私を嫌いなんだと思ってた。だから

ら他人に自分の弱い所は決して見せなかった、物心ついてから私は他人に涙を見せたことがない。

大企業の一人娘としての他人の優しさはいらない、お金もモノも
いらぬい……

「私はね、ただね……あれ？……何が欲しかったのだろう」

きつとこのまま私の空っぽな世界は廻り続けると思っていた……

「私を抱きしめて」

少年は躊躇うことなく少女を抱きしめた、少女は震える声で呟いた。

「私は最低よ、たくさん嘘をつくかもしれない、あなたを利用して捨てるかもしれない……」

「俺には何も解らない、でも君は俺の世界を変えてくれた、真っ白な世界を鮮やかに」

「ありがとう」

少女は初めて他人に涙を見せた。

俺は世界に興味がなかった、だから俺の世界は真っ白だ何も無い。ただど彼女が違う、何もない世界に鮮やかな花が咲いた。

私の世界が怖かった、だから私の世界は空っぽ何も受け入れない。ただど彼は違った、空っぽの世界は受け入れた。

俺の世界は回る　　しっかりとした色をもって　　君と共に
私の世界は回る　　しっかりとした重をもつて　　彼と共に

じく〜

〜つ

登場人物紹介 第三回

名前 ロイテル・アーガマ

性別 男

能力 電気操作者

年齢 16～17くらいで

身長 158以上163未満

体格 普通より少し細いくらい

髪型 かつこいい感じ FFの主人公位でもOK

服装 まだ未定

CVイメージ 内○昂輝てきな

雑談

あらすじより三人の主人公をメインの物語で考えておりました。最後まで「何を守ればいいかわからない者」「枠が決まらず・・・、ちなみに彼はまだ「何を守ればいいかわからない者」です。決してロシアを守る為だけではないはずです!!!彼はモチーフになったキャラが二人います。まあCVイメージの方がたまたま両方のキャラをやっつけていて驚きました。正直な話、三人の中で一番好きになりました(笑)たぶん一番キャラクターを練ったからかな?二章の主人公です、たぶん。

名前 リシア

性別 女

能力 なし

年齢 16～17くらいです!!

身長 140以上150未満
体格 年齢相応、少し雰囲気は大人びてる
髪型 金髪でショートからセミロング 品がある
服装 そこまで派手でないものが好き 気品があるのを
自然と選ぶ
C Vイメージ 特になしかな？

雑談

このキャラはガンダムUCを見て誕生！！この年代の子を登場させたくなった。

最初は金髪じゃなかったし、全然違うイメージでした。でも、動いているオー○リーを見てこんな子だ！！と言う感じで見た目は決定。性格は案外、当初の予定でしっくりきたのでOK

正直、一番ヒロインじゃね？四季は歳が？ルイはあくまでサブ？

エスナとキャラが被る？いやエスナはテレ屋、ツンデレ。

リシアはツンデレではありません！！たぶん……

第二章 プロローグ ? (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

プロローグ?と?の話は後ほど紹介できればと思っております、第二章はこの二人がメインになると思います。

活動報告で書いたように、二人は戦います。

次の投稿は少しかかるかもしれませんが、すいません。

次回はリゼリ達が出てくるかな??

第二章 囚愁（前書き）

今回もよろしくお願いします。

第二章 囚愁

第二章 囚愁

俺は今始めて他国の地を踏んでいる、ここはセルギア王国。

セルギア王国はアステリオス帝国の隣国で、周辺を砂漠に囲まれた国、領土はアステリの半分程度と授業で習ったような気がする。

何故、俺がここにいるかと言うと……

「ロイテル、ちょっとセルギアまで行ってきてくれる？」

「ああ」

リシアは豪華な椅子に座り、机に書類を投げつけた。

「セルギアは今、内乱状態にあるのは知っているか？」

「ニュースでやってるからな」

「我が社は反政府側へ兵器を提供している、現状としては均衡状態だが政府側へハウズを派遣するらしい。そうなれば均衡状態は崩れる、そこで反政府側から兵器の提供の依頼があった。それを届けるついでに、実戦データを取ってきてくれるか？」

「ロイテルさん、こちらへどうぞ」

俺はセルギアに入るや目隠しされどこかへ連れてこられた、そして今暗い部屋にいる。

「こんな小僧をよこしてMTCは何を考えている、まあ兵器はたつぷりよこしたからいいだろう」

そこには数人の男と一人の女がいた、女は鋭い金色の目をしていた堂々とした風貌で俺を見下す。

「俺はただデータを取りに来ただけだ」

「好きにしる、これから政府の施設を叩き行く。邪魔はするなよ」

戦いは一方的だった、政府軍の兵は弱かった？いや、反政府軍が強かったのかもしれない。

金色の目の女は兵を率いて突き進む、すべてを打ち倒し進んでいく。

「どうだい坊主、金色の女神様は美しいだろ？」

たぶん俺の監視役と思われる男は満足気に話かけてきた。

「ただの能力者だろ？」

男は驚いたような顔で俺を見ていた、そうだアステリオスの首都で育った俺は能力者がどこにでも居るように感じていたが、実際はなかなか出会えないものだったのだ。

そうしていると歓声が辺りに響きわたる、金色の目の女は中心に立って空へ剣を上げる。

セルギア王国 王宮内

「ハウنزの皆様、遠路はるばるお越し頂きありがとうございます」

セルギアの国王は頭を下げた、王の疲弊している姿や家臣の様子で国の状態は察することが出来た。

「同盟国としてお力を貸すのは当然です、我がアステリオスは決して援助を惜しまないと王女は申しました。」

少女と一人の女と三人の男が無言で席についている、誰も口を開こうとせず、視線も合わさらない、一人の少女とがため息と共に口を開く。

「隊長達に集まってもらったのは、セルギアへ行ってもらいたいからだ」

エスナ王女はハウنزの隊長達を呼び出した。

「第一つち小隊は行かないよ、今は色々やる必要があるからね
そう言つて四季は部屋を出た。」

「とりあえず、早期解決をセルギアの国王は望んでいる。セルギアはエネルギー資源の塊だ、ここで恩を売っておきたいしな」

「第二小隊が行く」

第三小隊の隊長は拍手をしているようだった、それを見たエスナはため息をついて第五小隊の隊長を見て言った。

「第五小隊はどうだ？」

細目の髪を結わいた男は辺りを見渡して言った。

「私達第五小隊は首都の警備が仕事です。それにこの様な化物と共に戦うのはごめんですよ」

リゼリは細目の男を睨みつけた、すると気だるそうに男が割って入った。

「第三小隊から数人派遣しますし、ちょうど再編した第四小隊の演習も兼ねて派遣してはいかがでしょう、姫様」

王女は勝手に出て行く女、いがみ合う二人、気だるそうな男を見てどこで間違えたのか考えた。

「分かった……、疲れたので皆下がっていいぞ……」

「リゼリ君、ちょっといいかい」

部屋を出た所で第三小隊の桜家隊長おつかに呼び止められた。

「何のようですか？」

桜家隊長は何を考えているか分からない人だ、実力はあるらしいのだが？いつも部下に任せきりで、戦っている姿を見たこともない。知っている事と言えば箱美芽隊長の同僚で、二人の仲が悪いことくらいか。

「いやね、セルギアの件だけだね。私はちょっと行けなさそうだから引率はお願ひするよ」

やっぱりそうか、この人はもともと自分は行かないつもりであるな提案を……。

「そうですか……」

「うちの部下を頼んだよ、あといろいろ気をつけてね」

桜家隊長は不思議な笑みを見せて、肩を叩いて立ち去った。

セルギア王国 反政府軍拠点

夜はいつも眠れない、最近前は前よりは眠れるがそれでも常人ほどではないらしい。

いつも眠れない時は夜空を見上げていた、だから今日も夜空を見ようと部屋を抜け出した。

すると砂漠にたくさんの十字架と一人の女が見えた。

「何をしているんだ？」

「話しているのさ」

女は金色の目をしていて、しかし昼間の雰囲気とは違った。

「MTCの小僧か」

「誰と話しているんだ？」

金色の目をした女は悲しい目で砂漠に立つ十字架を見つめた。

「戦いで命を失った仲間達さ、今日のことを話していたのさ」

「死者は何も言わない」

女は十字架を優しく触つて言った。

「そうかもな、君は能力者たる何の為の力か考えたことはあるかい？」

「ないな」

「羨ましいな、私はこの国を変えようと剣を手にした。しかし何も変わらぬ、命だけが奪われるだけでな。私は何の為に戦っているのだろうか？」

「じゃあ戦わなければいい」

「もうやめられないさ、私の剣は命を吸いすぎた。ここに眠る者達もそれを許さぬ」

「そんなものなのか？」

女は急に笑い出した、俺は頭がおかしくなったのかと思った。

「面白い子だね、何だか私が馬鹿みたいに思えてきたよ。私はジャンヌだ、名前は？」

「ロイテル」

「ロイテル、私達は明日も政府の施設を叩く」

女は砂漠の土を手にとった、すると土は黄色の剣へと姿を変えた。
「錬金術さ、私はどんなものでも金に変えられる。一戦どうだい？」

「いいよ」

ロイテルはつばのない刀を手にした。

「気をつけてくれ、こいつはたぶん金でも切れる」

刀は蒼く光始める、少年は蒼い閃光と化す。

蒼い閃光は一瞬で距離を詰める、その一閃をジャンヌはかわす。

「高速移動とは驚いたよ、でも直線的すぎるよ」

ジャンヌは地面に手をつける、無数の金の鎖がロイテルを襲う。

「こいつは超振動ブレードいかなるものも切り裂く」

金の鎖を切り裂き、ジャンヌに向かう。ロイテルの視界を金の盾が遮る、それを切り裂く。空に舞った砂が無数の金の槍に変わり降り注ぐ……

セルギア王国 王宮内

大きな会議室のような所にハウンス部隊が集まっていた。

「明日反政府軍は収容所を襲撃すると情報が入った。我々としては早急に反乱軍を鎮圧したいと考えている」

眼鏡をかけたリゼリは書類を片手に説明を続ける。

「ここで反政府軍の詳細を説明する、指導者はジャンヌ・セルギア。セルギア王国の第三王女だ、反政府軍は王女と元政府軍を中心とした組織だ。王女はAクラス以上の能力者、それ以外にもBクラス以上の能力者が4人いる。国王は王女の拘束を望んでいる、それ以外の者の生死は問わないそうだ……」

派遣されたのはハウンス第二小隊と第三小隊から2名と第四小隊の合計10名の能力者と多くの兵士が派遣されていた。

「明日の作戦は第四小隊長から説明される」

長い紫の髪をなびかせ女は立ち上がった、多くの兵が彼女を見つ

めた。

「ある意味始めましてね、第四小队隊長ヴァイオレット・サーズよ。これからは仲間として一緒に戦いましょうね」

っつ

づん

第二章 囚愁（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
なかなか続きを投稿出来ずすみません、当初の予定を大変遅れてお
ります。

目標を下方修正します、三月中に二章完結（汗）

よろしければ次回もよろしく願いします！！！！
今週末にでも投稿できるといいなあ……

第二章 天纏（前書き）

今回もよろしくお願いします。

良いBGMに恵まれるとはかどります！！！

第二章 天纏

第二章 天纏

（せいこんさい）

聖痕祭数日後 首都アステル中央王宮内 大ホール

ホールの中央には大きな楕円状のテーブルがあり、実に多くの色が席についていた。

「皆さん、元氣そうでなによりです。」とエスナ王女が言った。楕円状テーブルの端にエスナが座り、片側にはハウンズの各隊長とツバイが、反対側には犯罪者達が顔を並べていた。

「今回お集まり頂いたのはお願いがあるからです。この世界は多くの問題を抱えています、しかし誰もそのことに目を向けず何もしない、だから誰かがこの世界を変えていかねばなりません……」

紫の長い髪をした女が王女を睨みつけて言った。

「これが人にものを願う状況かい？」

「その通りだよ！！姉さん」

「そのバカ、早く手錠を外せ！！！」

紫の髪の少年と赤い目の少女が続いた。

「すいません……」少年と少女は黙り込んだ。

紫の髪の女の喉元には刀が、少年と少女には銃口が向けられた。

「二人ともやめなさい、私はこの人達と話したいの」

リゼは錠を下ろし、着物に軍服を羽織った女は刀をしまった。

「第三小隊の隊長は何でいつも会議に顔をださないのかしら」

ハウンズ側の顔ぶれは王女側からツバイ、四季、リゼ、着物の女、

空席、細目の男。

反対側は青い目の少年、赤い目の少女、紫髪の女、紫髪の少年、全身を鎖で繋がれた男、口元を塞がれた赤髪の女と並んでいた。

場が静まった所で王女が話しを再開した。

「私は力が欲しいのだからあなた達の力を貸してもらいたい、もし力になってくれるのなら十分な見返りを約束するわ」

「強い奴と戦えるのか？」 全身を鎖で繋がれた男は王女に聞いた。

「もちろんよ、戦争をするのだから」

全身を鎖で繋がれた男は黙り込んだ。

「私は地位も欲しい、例えばハウন্ズの隊長とか」と紫の髪の女は言った。

「いいわ、あなたが本当に力を貸してくれるなら」

ツバイは驚き王女を見つめた。

「その二人はどうする？」 四季は青い目の少年と赤い目の少女に尋ねた。

二人は顔を見合わせ、小声で話して少年は言った。

「二人一緒なら・・・」

「この二人は第一小隊に入隊させてよろしいでしょうか？お姫様」突然の四季の行動の誰もが驚いた、王女は四季に押され頷いた。

「それでは二人は頂きます、後のことはお任せします」

四季は二人を連れ去るように部屋を出た、それに続き細目の男も立ち上がって言った。

「第五小隊には君達のような化け物はいらさないよ、私も失礼させてもらおう」

そして、細目の男も部屋を出た。

「何故こうも身勝手なのだ」 ツバイは大きくため息をついた。

「まあいいわ、皆さん力を貸してくれるようだしね」 王女は満足げに笑っていた。

口元を塞がれた赤髪の女は何か言っているようだったが誰も彼女を見なかった・・・

セルギア王国 収容所付近

「作戦は昨日伝えた通りだ、私達が正面から襲撃して守備隊をひきつける。そのうちに別働隊が仲間の解放を行う。ハウンスとか言う奴らが出てくる可能性が高い、十分に気をつけてくれ」

金色の目の女ジャンヌは通信を終え、ドーム型の収容所へ向かう。

「昨日の夜、うちの女神とやりやったらしな、小僧」

監視役の男は望遠鏡を覗きなが話しかけてきた。

「ああ」

ロイテルは昨日のことを思い出した……

「ロイテル、君は確かに強い。でも動きが単調すぎだ」

ロイテルは地に伏せ、喉元には剣先が突きつけられていた。

「何て言うか、攻撃が正直すぎだ」

ジャンヌは剣を砂に戻してロイテルの頭を撫でていった。

「明日も待っているよこの場所で」

負けたことはそんなに気にならなかった、でも俺は今もあいつを倒す方法を考えている。リシアと同じくあいつのことが気になるのか？誰かに勝ちたいと思ったのは初めてかな……

「うちの女神が久しぶりに嬉しそうだったよ、俺達じゃあ相手にならないからさ。小僧、良かったら相手してやってくれよな。あの人は他人に弱みを見せない、全部自分で解決しようとする人さ」

「ああ」

収容所最深部

「ここにいるのね」

紫の髪の女ヴァイオレットは厚い扉の前に部下と共に立っていた、鈍い音と共に扉が開く、部屋の奥には両手を鎖で繋がれ壁に貼り付けられた男がいた。

「あなたがビズル？」

男は長く伸びた髪の間隙から眩しそうにヴァイオレットを見た。

「久しぶりの来客がこんな美人とは、俺の人生も捨てたもんじゃないね」

「私と一緒に来ないかしら？悪いようにはしないわよ」

男は大きなあくびをして言った。

「そうだな、そろそろ退屈してきたことだしな」

その頃、収容所の外は戦火に包まれていた。

第二小隊と第三小隊を中心とした部隊が反政府軍と交戦していた。ルイは収容所から狙撃していた。

「隊長、反政府軍の動きがおかしいです。これじゃまるで時間をかせいでいるみたいですよ」

リゼリには通信に気を配る余裕がなかった、二人の大男の能力者に苦戦していた、二人は砂を金属に変えて襲い掛かる。

「でかい図体で動きまわるな」

ジュラルは障壁で収容所を守っていた、ユウも砂を金属に変える大男と戦っていた。

「あなた、やるわね」

ジャン又は着物を着た女と戦っていた、着物を着た女は自分の背丈と同じ位の大刀を軽々と振るう。

着物の女は第三小隊最強包刃つっみや 愛あい、彼女は重さを支配する、自身の重さ、刀の重さ、彼女の触れるすべて重さを支配する。

二人の戦い方は対象的だ、ジャン又は様々な武器を造り使う、愛はひらひらと攻撃をかわしたただ大刀を振るう、ジャン又は地の利や戦法を持って武器を使う、愛は反射のみで動く作戦？戦法？そんなもの彼女にはない、だが強い。

愛の攻撃は確実にジャン又を追い詰めて行く。

「私の国ではね、命のやりとりをする時は名を名乗るのよ。ジャ

ン又よ、悪いけどあなたの力は危険よ」

ジャン又は大量の砂を空へ巻き上げる、それらが無数の剣となり辺りに降り注ぐ、黄金の風がジャン又を包み込む。

愛はそれらを簡単にかわしジャン又を見て言った。

「包刃 愛、参る」

聖痕祭数日後会議後 王宮内ハウズ第一小隊の住処

王宮の上層階に位置するこの部屋は広く、ガラス張りで白に統一された部屋はどこか冷たく感じられた、そこには眼鏡の女が一人コンピュータと向き合っていた。

「クロア、戻ったよ。新入りだ、よろしく頼むよ」

クロアと呼ばれた眼鏡の女はチラツと三人の姿を確認して言った。

「いやです」

「そう言うなよ、この年齢で能力に関してはAクラスだぞ」

「私は戦い嫌いですから」

四季は特に気にせず、話を続けた。

「まあ一応自己紹介をしよう。私は箱美芽 四季第一小隊隊長だ、あつちの眼鏡はクロア・クロスでAクラスの拒絶する者で事務だ。

以上二名が第一小隊だ」

赤い目の少女は思わず突っ込んでしまった。

「二人って何よ!!!」

「少数精鋭だ、お前らも自己紹介しな」

少女は嫌そうに口を開いた。

「私はルー・レイサス、炎を操る者よ」

青い目の少年も続いて口を開いた。

「僕はフロル・レイサス、氷を操る者です」

四季は軽く拍手をして言った。

「二人ともまだ子供だ、クロア面倒をみてやれよ」

四季はそう言って部屋を出ようとした。

「私、今日で辞めますので」

「えっ……」

四季も流石に足を止めた。

「本気なのか？」

「確かにこの仕事は給料もいいし、楽ですが、子守はごめんです」

「こいつらはいいい子だよ！！たぶん……」

「私が聖痕祭の報告書を読まないと思いますか？」

「もう更生したよ」

クロアは部屋から出よう、三人に近づいた。そしてルーを見た。

「ルーでしたっけ、この子だけならいいわ」

四季は驚き、ルーはフロルの顔を見た。

「本当か？」

クロアはルーをじっと見つめ微笑んだ。

「よろしくね、ルーちゃん。隊長、今日は帰りますこの子のこと

もあるので」

「わかった……」

そう言っ、クロアはルーを連れて部屋を出た。

「僕は？どうなるんですか？」

四季は天井をじっと見つめて言った。

「一人で生きて……、私の家に来い」

「よろしくお願いします」

フロルは深々とお辞儀をした、四季は何だか笑ってしまった。

「家事はできるか？私は何も出来ないものでな」

「多少はできると思います」

収容所最深部

ビズルは鎖から解き放たれた。

「腕は鈍ってないかしら？」

ビズルは両手を胸の前に持ってきた、両手の間に小さな黒い玉が

現れ、それを壁に飛ばした。

壁に大きな穴があく、綺麗に丸く壁が消滅する。

「この通りでございます」

ヴァイオレットは満足そうに微笑んで言った。

「最初にこの建物を消してしまっただけか？」

「問題ないがみんな死ぬよ？」

「私はヴァイオレット・サーツよ、世界最強の空間操作者よ^{ルムス}」

「ジャンヌ様、収容所内部に到着し……」

黄金の風の中からは黄金の鎧をまとった騎士が現れる、そして手には大きな黄金の槍^{ランス}が握られていた。

二人が距離を詰めた時、轟音と共に収容所が崩れ始める。

リゼリ達も反政府軍もその光景に動きを止めた。

収容所だった所は丸く窪んだ大きな穴が出来ていた……すべては消え去り深淵へ繋がる穴が現れた。

つく

つ

第二章 天纏（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次の投稿もすぐ出来そうな勢いです、がんばるぞー！！！！

活力の原因は澤野弘之様です、サントラとかに興味がある方はググってみてくださいね。

第二章 戯機（前書き）

今回もよろしくお願いします!!

第二章 戲儀

〔第二章 戲儀〕

收容所の崩壊と共にすべてが止まった。

ジャンヌはすぐさま武器を黄金の鎖に変え愛を足止めし崩壊する收容所に向かう。

「あの女、^{アハスレ}收容所には……」

リゼリ（以後リゼ）も收容所の崩壊に動きを止めた、その隙を二人の大男は見逃がさなかった。

砂が無数の鎖に変化しリゼに襲い掛かる、何本かが手足に巻きつき自由を奪う。

大男の一人が砂を大剣に変え斬りかかる、銃声と共に大男はリゼから距離をとる。

「危なかったね、俺らの心配でもしてた？」

突然ユウが現れる、リゼに巻きついた鎖が正確に打ち抜かれる、リゼは弾丸の飛んで来た方を見て遠くの建物の屋上に人影を確認した。

「今度はこっちの番だよ」

ジャンヌは收容所の正面だった場所にいた、そこにはヴァイオレットとビズルと数人の部下がいた。

「わざわざ来てくれるとは手間が省けるわ、お姫様」

ジャンヌはヴァイオレットには目もくれずビズルを睨めつけた。

「ビズル」

「久しぶりだね、姉さん。姉さんの顔だけはずっと忘れなかったよ」

ビズルは確かにジャンヌを姉さんと呼んだとても嬉しそうに……彼の名はビズル・セルギア。本来は第一王子として王宮にいるべ

き人間、そしてセルギア王国最悪の犯罪者。

ジャン又は剣を構える。

「生きていればいいわ」

ヴァイオレットは指を鳴らし部下に命じる、部下の少年が手をジャン又に向ける。

「潰れる」

少年が手を握ると共に空間が歪む、本能的にジャン又は手の向く方から逃れる。

別の部下達がマシンガンなどを召喚^{リコール}しジャン又に襲い掛かる。

「さあしつかり逃げないと死んじゃうかもよ」

ジャン又は逃げながら問う。

「何故収容所を壊した？死ぬ必要のない者もいた」

「何故？笑わせないでよ、あなたは何様のつもり？自分が正義と
か思ってるの？だから世間知らずのお姫様は困るのよ！！！」

ジャン又は自分の近くにいた部下に触れる、部下は突然姿を消す。

「く……」

ジャン又はわき腹を押さえ膝をつく、姿を消した部下はジャン又の後に立っていた。

「動けないように両手両足も潰していいわ、さっさと確保して残りの奴らも片付けるわよ」

ジャン又に銃口が集まる……。

「悪いがこつちも仕事だ」

リゼの銃口が大男の頭に突きつけられていた、もう一人の大男も片足を打ち抜かれ地に膝をつけていた。

「色々聞きたいこともあるが一人で十分だ」

引き金を引く寸前に蒼い閃光がリゼを襲う、リゼは蒼い閃光にぶつかり吹き飛ばされる。

「えっ？」

閃光はユウに近づくと、ユウが転移するより早く閃光はユウにぶつかりユウに電撃が走る。

ジャンヌに銃口が集まると同時に煙幕が辺りを包み込む。

「姫様、すぐにお逃げください」

煙幕の中に二人の大男と顔を布で覆ったロイテルがいた。

「ここは私達がどうにかいたします、この少年の力なら逃げるこ
とが出来ましょう」

「しかし、私が……」

「姫様がここで死なれたら今までの部下達の犠牲はどうなります
？」

大男達がジャンヌを見つめる、ジャンヌは唇を噛み締める。

「死なないでくれ……」

「姫様の命令とあれば」

二人の部下は笑顔を見せて煙幕の中へ姿を消した、ロイテルはジ
ヤンヌに肩を貸し戦場から離れる。

煙幕が薄くなると中からは二人の大男と地に伏せた数人の部下が
現れた。

「あーもう、逃げられたわ。だから生け捕りはいやなのよ、二人
ともさっさと殺して」

ヴァイオレットはビズル連れてその場か姿を消した。

この戦闘で反政府軍は戦力の3分の1を失うことになった。

愛は建物の上からロイテル達の姿を見ていた。

「愛先輩、追わなくていいんですか？」

隣には弱気な雰囲気をした少年がいた。

「先輩がっかりしていません？」

愛は何も言わずにロイテル達に背を向けた。

「あいつらがどこに向かったか調べとけ、分かったら私だけに伝える」

「了解しました」

戦場から離れる中、ジャンヌは泣いていた。

その涙は戦場に転がる仲間の死に向けられていたのか、それとも他の何かに向けられていたのかは俺には分からなかった。

せいこんさい
聖痕祭数日後 第五区ハイウェイ 四季愛車内

箱美芽隊長の家にお世話になり始めて数日がたった。正直な話、僕がこの人の世話をしているようだった。一応、この人は全治数ヶ月の怪我をしていたようで休暇中だったらしい、家の中でも特に僕を監視する様子もなく買物も僕一人に任せていた。本当にハウンドズ第一小隊の隊長か何度も疑ったしまった。今日は突然、「そろそろ始めるか」とか言われて今に至る。

「箱美芽隊長、以前能力のクラスについて話してましたが・・・」

僕は助手席に座っていて会話もないのは寂しいような気がして話かけた。

「ああ能力のクラスね」

四季は前を見たまま話始めた。

「能力者にはまず二種類いるのは知ってるね？」

「先天的な者と後天的な者ですね」

「そうさ、この時点である程度クラスが絞られる。後天的な者でA以上の者はほとんどいない、と言うか私は出会ったことはないね。そして多くの者の能力者はBクラスで能力の限界を迎える」

「BクラスとAクラスの違いってなんですか？」

四季は少し考えて口を開き始めた。

「まあ数値的な指標がないからはっきりとは言えないがお前の能力を例にすると、氷を自由に動かせてD、媒体から氷を作れるC、媒体なしで氷を作れるB、自身が作った氷が意思を持つA以上って所だな」

フロルは以前自分がAクラスと言われたのを思い出した。

「僕の氷が意思を？」

「実はお前のはまだBだ、小娘はAだ。私の考えでは小娘は未熟すぎる能力の為に無意識に炎に意思を持たせて、自身の体を守ったりしている。お前はある程度落ち着いているから、それが作用しないのだろう。だから、出来るようになってもらう」

「僕は強くなれますか？」

箱美芽隊長はこの日初めて僕の顔を見た、その顔はすこし嬉しそうだった。

少しすると巨大な建物中に入った、僕はここで何故この人がハウズ最強と言われているかを存分に味わった。

〜つづく〜

第二章 戯機（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
次回の投稿は明日にでも出来るといいと思っています。

第二章 朽丘（前書き）

今回もよろしくお願いします。

第二章 朽丘

第二章 朽丘

ジャンヌの傷は思った以上に深刻だったらしい、拠点に着いて意識を失いしばらく意識が戻らなかった。反政府軍は多くの犠牲を払い、ジャンヌの負傷により士気は低下しているように思えた。俺は幹部の男達に兵器の追加や兵士を提供出来ないかなど色々尋ねられたが、どうすることも出来なかった。

俺はジャンヌの意識が戻らない間も毎晩砂漠に立つ十字架のもとへ行った。

収容所の襲撃から二日後のことだ、俺がいつも通り砂漠に立つ十字架のもとへ行くと先客がいた。先客は着物を着た女だった、美しい桜色の着物に不釣り合いな大きな大刀を持っていた。砂漠の盛り上がり過ぎてできた丘の様な所で、十字架と月を眺めていた。近づいてみると女は小柄で華奢だった、色白な肌に丹精な顔は月明かりに照らされて幻想的だった。

「もう少しで満月だね」

女は突然話かけてきた、一応心配を消して近づいたつもりだったので少し驚いた。

「はい」

女は晩酌をしているようだった、特に何も語らず月を眺める。俺は何だかこの人の雰囲気が好きだったのかもしれない、少し離れた所で一緒に月を眺めていた。

「どうだい？」

「遠慮しておきます」

女は一度月を見て言った。

「これは酒じゃないよ、茶さ。良い物が手に入ってね、甘い物は茶が一番さ」

確かに女の近くには黒い塊があった、さっきからそれを口に運ん

でいた。女は手招きをして俺を呼んで、黒い塊を切って差し出した。俺は黒い塊を口に入れた、少し硬くとても甘かった。進められるままお茶も頂いてしまった。

「いい味だろ？ようかん」

「はい」

その後、二人の間に会話はなかった。女はただ満足げに月を眺めて去っていった。

翌日も女は現れた、今度は葉っぱの巻かれたモノを食べていた。女は毎晩同じ場所から月を見上げていた（毎晩甘い物とお茶を持って）、俺も特に会話をする訳でもないのに毎晩一緒に月を眺めた。お互いに興味がないのか名前も分からなかった。一つだけ知っていることは、女は旅人だと言っていた。小さい頃から世界を見て回るのが夢だったと言っていた。俺は運び屋の仕事をしていると嘘をついた、ジャンヌが目を覚ました次の日のことだった。

「ようやくお目覚めかい」

女は月を見上げながら突然言った、後ろを振り向くとジャンヌが立っていた。

「ロイテル、暫く席を外してくれないかい」

俺はジャンヌに言われるがままその場を離れた、遠くから見た丘の上に立つ二人の姿は対照的でとても美しかった、まるで何かの絵を見ているように幻想的だった。

「何故ここにいる？」

ジャンヌは愛を睨みつけた。

「月を見に来ただけさ」

愛はさらりと受け流した、と言うより彼女に殺気や警戒心はまるでなかった。

「そうか、いい眺めだろ」

愛はそのまま月を眺めていた、ジャンヌは近くにあった十字架を触り言った。

「こいつらにはせめて、この眺めだけでも見せてやりたくて・・・」

ジャン又は十字架の前に崩れた。

「私は何をしているのだろうな？こんな事をして自分だけ救われようとしている、ただこのままじゃいけないと思いい剣をとった。でも増えるのは死ばかりだ、私は間違っているのか？」

ジャン又はただ十字架に語りかけた。

「私には分からない、何も分からない」

ジャン又はそのまま十字架に頭をつけて黙り込んだ。

「死者は何も言わないさ」

ジャン又は顔を愛に向けた、愛は近くの十字架の前に持っていた白い塊を置いた。

「でも見てはいるさ。今のお前を」

愛はそのまま姿を消した。

俺は十字架の前で泣き謝るジャン又は声をかけられなかった、何を言えばいいか分からなかった。むしろ今の俺はかけるべき言葉を持っていないから。

「ロシア、もう少しセルギアにいるよ」

「わかったわ、大丈夫だと思うけどあなたの任務はデータの収集よ」

「分かっているよ」

翌日ジャン又は最初に会った時に戻っていた。その日から毎晩、ジャン又と戦った。その姿を着物の女は眺めていた、毎晩必ず大刀を持ってきているのにも見ているだけであった。二人はあの日以降話さなかった、時々丘の上で二人が月を見ていることがあったが会話はなかった。ちなみに俺は一度もジャン又に勝つことが出来なかった。

箱美芽隊長あひはの車に乗って大きな建物中に入った、そして今いる部屋？はとも大きく窓一つないドーム状の部屋だ、そこに僕と箱美芽隊長が向かい会っている。

「最初は軽めにする」

「何をするんですか？」

「カツコ良く言々と特訓だ、THE GAME演習モード」

突然、箱美芽隊長の前に画面が現れ操作を始めた。

「今回の設定はこんな感じですよ」と

次の瞬間、竹刀を持った剣道着の箱美芽隊長が10人現れ真ん中の一人が話し始めた。

「ルールは簡単だ、どれでもいいから私を一人殺せ。一応、10人だから力は普通の10分の1だ。特別にお前が受ける痛みを感じをいつもの半部にしてある、あまり調子に乗ると死ぬかもしれんが気をつける」

そして僕は思い知った箱美芽 四季という人の力を、10分の1でも明らかに僕より強かった。ほとんどめった打ちだった、いったいどの位の時間で意識を失ったかは分からない。ただ起きると医務室で全身が痛かった。

「明日はもう少し頑張ってくれよ」

そう言っつて箱美芽隊長は医務室を出た。

そして、僕の地獄のような特訓が始まった……

くっくくく

第二章 朽丘（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

投稿早くてすいません、朽丘に収めようと思っていた内容が多くなりすぎた為二つに分けます。すいません。次回は活動報告の方では蘭嵐でしたが1話間に入ると思います。頑張って今日中にも投稿します。

次回もよろしくお願いします。

第二章 誠歌（前書き）

今回もよろしくお願いします。

第二章 誠歌

第二章 誠歌

ジャンヌが目覚めてから反政府軍の士気は戻り始めていた、どこからか新たな仲間も増えているようだった。確実に大きな戦いが迫っているのは分かった。そんな中多くの反乱軍兵に力を貸して欲しいと頼まれた、でもジャンヌだけは何も言わなかった。毎晩俺はジャンヌと十字架の立つ砂漠で戦った、少し強くなったと言われたが実感はない。

そして、動き出す終わりに向けて……

ジャンヌが目覚ましてから2週間ほどたったある日、国王が演説を行った。王宮の前で多くの国民を前に盛大に行われた。

「わが国は大きな問題をいくつも抱えている、その一つは反政府軍との紛争だ。噂ではその首謀者が行方不明となっている第三王女ジャンヌ・セルギアであると言われている。これは事実である、今このセルギア王国を苦しめているのは我が血族だ。だからこそ私自身の手でこの問題を解決せねばならん」

国王は剣を力強く上げ言った。

「ジャンヌよ、私は王宮でお前を待とう。決して逃げぬ、そなたと向き合い決着をつけようではないか」

大きな歓声が沸きあがり、そして国王の隣に男が現れる。

「国民よ、行方不明となっていた我が息子ビズルだ」
ビズルは胸に手を当て話始めた。

「まずは皆に謝りたい、国の危機に目を向けることなくこの国の離れていた自分を許して欲しい。そして我が姉がこの国を苦しめていることも、どうか許していただきたい。私がこの国を離れていなければこんなことにはならなかったらう。だからこそ、私は父と力

を合わせこの問題を解決しよう!!!」

ビズルは涙を流し訴える。

「姉さん、あなたのやっていることは間違っている。決して謝って許されることではない、でも私は姉さんを許そう。そして・二人で命を懸けてこの国を立て直そう、あなたが奪った以上の命を救い、この国を・・・」

ビズルは下を向いて黙り込んだ、そして涙にぬれた顔で言った。

「父と共にあなたを待とう・・・」

そして、より大きな歓声に包まれ演説は終わりを告げた。

「王子様、なかなかの熱演で笑いを堪えるのが大変だったわ」

ヴァイオレットはビズルに近づき後ろから抱きついた。

「本来は涙を堪えるところだよ」

ヴァイオレットは耳元で囁いた。

「どうするの?」

ビズルは蛇のように微笑んで言った。

「わかっているくせに」

「あなたのそう言う顔が好きだわ・・・」

すでに国王に力はない、この国にビズルより強い者はもういない。

アステリオス帝国 首都アステル

地獄の特訓が始まり数週間がたった、今では箱美芽隊長の3分の1まで来た。しかし壁にぶつかった、まったく歯が立たない。ある日のこと、医務室で倒れている僕に箱美芽隊長が言った。

「自分にあつた形を探せ、あの小娘は蛇かもしれない、お前自身はお前だ。生き物かもしれないし、違うかもしれない、お前自身の形を想像しろ。その形が見つかったら私を呼べ」

そう言って医務室を出て行った。

「僕の形か……」

ある日、訓練施設の外を歩いていると芝生で寝ている男がいた。一応、ここにいるから軍の関係者だと思うが……。

「すいません、ここは軍の施設なので……」

男は眠そうに僕を見て言った。

「サボってないよ、休憩中なだけ……」

「ええ……」

「あれ？君はうちの隊の子じゃないね、その腕章は四季の所の」

男は自分の枕にしていたジャケットを羽織った、そこには第三小隊の腕章があった。

「すいません、いつも人がいないもので」

男はへらへらとして立ち上がり言った。

「別にいいさ、第三小隊の子に見つかったわけでもないしね」

「はあ」

「君が四季のお気に入りの子ね、いい子そうじゃないか」

僕はお気に入りと言言葉に引っかった。

「お気に入り？」

「そうさ、あいつが誰かの世話をするなんて始めてさ。正直俺もまだびっくりさ。あいつは敵を作るが仲間も友達も作らない、だから少し安心したね」

「安心？」

男は笑いながら立ち去りながら言った。

「四季の力になってやりな、あいつが認めてくれたんだからね」

僕は後ろ姿に深くお辞儀をして言った。

「ありがとうございます、あのお名前は？僕はフロル・レイサスです」

男は手を上げて振りながら言った。

「桜家さ」

セルギア王国 十字架の立つ砂漠

俺がいつものように十字架の立つ砂漠に行くと二人はすでにいた。最初に二人の姿を見た時と同じで月明かりに照らされた二人の姿は幻想的だった。

「準備は整った、明後日王宮に攻め込み決着をつける」

愛はいつも通り和菓子を食べながら話を聞いていた。

「演説の通り父がいるとは思えないけど、王宮にいくわ。もう私は迷わない」

愛は月を見ながら口を開いた。

「そうか、一応聞くが私の国の王女が力を望んでいる。だからお前も・・・」

「私は戦うわ」

愛は一度ジャンヌの顔を見て、月を眺め始めた。

「あの子はどうする？」

「ロイテルのことね、彼には国帰ってもらうわ。こんな所で失うべき命ではないわ」

愛は立ち上がり言った。

「私は王の間の扉の前にいる、警備に召喚士リコーラーの黒髪の男がいる性格は悪いが実力はある、敵であろうと命は奪わない甘ちゃんだ」

そして姿を消した。

「ありがとう」

その日、ジャンヌに国に帰るように言われた。

「ロイテル、データはもう十分取れたはずよ。国に帰りなさい」

「まだ不十分だ」

「今度の戦いは今までとは違う、もう子供の出て来るような戦いではないの」

俺はこの時、初めて自分自身の弱さを悔やんだ。もし一度でも彼女に勝てたなら、俺は俺の望む言葉を彼女の口からもらえたかもし

れない。

「俺が弱いからか？」

「そうよ」

俺はジャンヌに挑んだ、そしてまた砂漠に横たわり月を見上げている。

くっくくく

第二章 誠歌（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
次回より戦闘が多くなるかと思えます。
なるべく早く投稿できるようにがんばります。

第二章 蘭嵐 ? (前書き)

今回もよろしくお願いします。
今回から戦いばかりです。

第二章 蘭嵐 ？

〔第二章 蘭嵐 ？〕

俺は国に帰らなかつた、今晚もう一度だけジャンヌと戦うために。そして、今晚もジャンヌは十字架の立つ砂漠に現れた・・・

セルギア王国 王宮内

「何のようです、今日は夜遊びに出かけないのですか？」

愛はリゼリ（以後リゼ）の部屋を訪れた。

愛はリゼの部屋の壁に寄りかかり、窓から月を眺めていた。

「用件がないなら自分の部屋に戻ってもらえます」

「こないだの戦いでやられたらしいですね？」

リゼは愛を睨みつけた。

「そのことを王女に連絡したら、そいつを是非ハウズズに入れたいと言っておられた。身柄の確保を頼みます」

「あなたが捕まえれば？」

「残念ながら私は王室の警備なので」

リゼは今にでも愛を撃ち殺しそうだった。

「この事は第四小隊隊長には内密に、ヴァイオレットあなたもそうだと思いますが私も信用できなくて」

そう言つて愛は部屋を出た。

「どこの隊も碌な奴がない」

リゼはため息をつき、窓から月を見た。

「この国からは月が綺麗に見えるな」

セルギア王国 十字架の立つ砂漠

今日も俺は結局、砂漠に横たわり月を見上げていた。

「ジャンヌ、明日一緒に戦わせてくれ」

ジャンヌはロイテルのことを見つめた。

「いいわよ」

「ええ……」

「私はもとからあなた自身から戦いと言われたら、断るつもりはなかったわ」

ロイテルは自分が考えていた言葉が返ってこなかったことに動揺していた。

「私はあなたを認めている、だからあなたの決めたことを貫きなさい」

「……」

ジャンヌの言葉はすべて予想と異なり、ロイテルにはまだすぐに反応するほどの心はなかった。

「あとあなたは絶対に私に勝てないわ、だって分かるのだから私にはね」

「何が？」

「感じるのよ、あなたが動くとなんか？私が金属を扱うからかもしれないけど、あなたは力を使おうとすると微量の電気を発するのかしら？だから、動きの初動がわかるの」

ロイテルは啞然としていた。

「でなきゃ、あんなに早い動きかわせないわ」

俺はこの時、始めてジャンヌの本当の笑顔を見た。それは美しくとても綺麗なものだった、そしてこの笑顔が彼女の本来の姿のように感じた。

作戦は夜明けと共に始まる。本体とは別の部隊が複数の施設を同時に襲い、その隙に少数で王宮に乗り込む。俺たちはジャンヌが王室に行くための道を作るまで彼女を守る。ジャンヌは一人だけで国王と話すことを望んだ、仲間の多くは危険だと止めたが俺はジャンヌが決めたことを信じた。王宮は巨大な外壁に囲まれている、入り

口は正面と左右の三つる。俺たちは正面から乗り込む、正面の巨大な扉の先には大きな中庭が続きその先に王宮がある。王宮の襲撃は6人で行う、俺とジャンヌと錬金術士四人と空間転移ルームスの構成だ。俺は顔を隠すこと、黒髪リコーラーの召喚士を足止めすることをジャンヌに頼まれた。

「私に力を貸してくれるか？」

多くの仲間達から歓声が上がった。

「ありがとう、そしてもう一度この場で会おう!!!」

ジャンヌは剣を胸の前に構え、空高く突き上げる。

セルギア王国 王宮内

「来たみたいですよ、愛先輩」

愛は王室の前の柱に寄りかかり、通信に耳を向けていた。

「作戦通り頼む、第二小隊を中庭に」

愛は通信機を切って、日の出の光を見た。

扉の警備は手薄だった、扉をジャンヌ達が変形させ中へ入り込む。そして中庭を真っ直ぐ王宮へ向かう、突然三人の男が現れる。

「ジュラル、障壁をはれ。ここから先には行かせるな」

黒髪リゼリの男が細身ジュラルの男に命じる。

ジャンヌがすぐさま黒髪の男に斬りかかる、他の錬金術士が残りの二人に襲い掛かる。

そして、俺は転移され後ろから細身の男を叩く……

「相手には拒絶リジエクターする者がいる、特徴は細身の男。そいつを最優先で叩いて欲しい」

ジユラルは崩れ落ちる、リゼはジャンヌを睨みつける。
銃声が響き錬金術士の一人が崩れ落ちる、ジャンヌは素早くリゼから距離を取り弾丸をかわす。
ジャンヌは地面に両手をつけ金の壁を作る。リゼに二人の錬金術士が襲い掛かる、ロイテルは茶髪ユウの男へ斬りかかる。

そして、金色の柱がジャンヌを乗せて空を翔かけ王宮へ向かう。

「拒絶リジエクターする者さえ叩ければ中庭の大量の物質を使って王宮に行く道を作る、大規模な練成になるから私は暫く動けない。だからその間だけ時間を稼いで欲しいの」

王宮へ金色の柱が伸びる。

「ルイ、王女を撃て」

「駄目、さっきの攻撃で位置がばれたせいで壁を張っている」

リゼは金の柱を睨みつける。

「ユウ、俺を柱の前に飛ばせ」

ユウは転移しリゼに触れ姿を消し、ジャンヌの前に現れる。

「舐めるなよ」

リゼは両手の銃をジャンヌに向ける。

ジャンヌはユウに金の槍を投げつける、ユウは転移してかわす。

「あなた一人じゃ、空では動けない」

リゼがトリガーを引く瞬間、蒼い閃光が空中のリゼに迫る。リゼはすぐに閃光ロイテルへ弾を撃ち込む、ロイテルはそれを弾きリゼと共に地面へ落ちる。そして、柱は王宮へ突き刺さった。

第二章 蒼き閃光と黒き幻想

王宮内 中庭中央

「またお前か」

リゼは不満そうに片手の銃をロイテルに向ける。ロイテルは閃光と化し一瞬で距離をつめる、リゼはそれを容易く蹴りで迎撃した。リゼの蹴りがロイテルの脇にめり込み、痛みで動きが止まる。続けてロイテルの頭に銃口を向ける、ギリギリでロイテルはかわし、リゼの腕を掴み地面に叩きつけ距離をとる。

「能力に頼った馬鹿ではないようだな」

リゼは起き上がり服を叩く、ロイテルは自身の右腕から流れる血を眺める。

「よくかわせたな、投げられる代わりに終わらせてやろうと思ったのに」

ロイテルはブレードを握り締める。

「リコール
召喚、ガトリング」

リゼの前にガトリングが現れ掃射を始める。ロイテルは閃光と化し弾をかわし距離を詰めガトリングを切り裂き、リゼに斬りかかる。

「動きが直線的なんだよ」

リゼの両手にハンドガンが現れ、銃口がロイテルを捕らえる。ロイテルはブレードを地面に突き刺し、電流を流し込む。地面が吹き飛び視界を遮る。ギリギリで弾丸をかわし、ロイテルのブレードがリゼの右腕を掠める。リゼは距離を取ろうとするがロイテルが食らいつく。ロイテルのブレードが完全にリゼを捕らえる。

その瞬間二人を爆発が包む。

爆煙の中からロイテルが転がり出る、右腕が酷く損傷していた。

爆煙が晴れると黒い大きな手にリゼは包まれていた、それがゆつくりと体から離れる。リゼの左目が黒く染まり始めていく。

「捕まえる」

黒い大きな手がリゼから伸びロイテルを襲う、ロイテルは本能的にそれをかわした。腕はもう一本現れロイテルを襲う。

黒き幻想はすべてを飲み込む、逃れることのできぬ禁じられた力・
・
・

その腕はブレードで切り裂いてもすぐにもとに戻り、ロイテルを追い詰める。

「簡単には捕まらんか」

リゼの顔は左目から黒い根のようなモノに侵食されていた、黒い影がリゼの左腕を包み込み鎧と化す。リゼはロイテルに向けて左手を振るう。

黒い五本の斬撃が地面を切り裂きロイテルに向かう、ロイテルはかわし切れずぶつかり王宮の外壁に吹き飛ばされ煙に包まれた。

リゼは外壁に近づいた、その時神速の閃光がリゼを襲う。

「危なかったな」

ロイテルのブレードがリゼの右肩を貫く、黒い影がギリギリで軌道をそらしていた。黒い影がロイテルに巻きつき自由を奪い、地面にねじ伏せる。

「これで終わりだ」

リゼの顔の左側は殆ど黒い根のようなモノに侵食されていた・・・

くつづく

第二章 蘭嵐？（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

第二章も残す所あと三話分です、イッキに書き上げたいと思っています。
ります。

明日中にでも蘭嵐？を投稿できると思います。

次回もよろしく願います。

あっ今回はロイテル達が主役なのでユウヤルイはもう出て……

第二章 蘭風 ? (前書き)

今回もよろしくお願いします。

第二章 蘭嵐 ？

第二章 蘭嵐 ？

アステリオス帝国 首都アステル 軍部演習施設

「私を呼んだのだから、がっかりさせるなよ」

四季はフロルを楽しそうに見ていた。

「今日は全力の隊長と戦わせてください、本当の実力の差を知りたいです」

フロルの目は四季を捉えて放さなかった。

「いいよ、THE GAME」

フロルは一度目を閉じ言った。

「行くよ、お前たち」

フロルの周りを白焰が舞う、白焰は氷結の炎。

「犠牲の天秤か」

二人の後ろに巨大な天秤が現れる……

「箱美芽隊長が私を訪れるとは珍しいですね」

四季は王女エスナのもとにいた。

「提案がありまして、参りました」

「聞きましょう」

「公開演習を行わせて頂きたい、我が隊に新たに二人が配属しました。しかしながら内部では彼らを疑い、認めない者も多くおります。そこで彼らに公開演習を行わせるのはいかがでしょうか？」

エスナは四季のことを良く知っている、彼女はただ第一じふん小隊の力を見せつけただけだと分かっていた。

「許可しましょう」

「ありがとうございます、あと演習では王族警備隊の力を借りたのですがよろしいですか？」

「わかりました、ツバイに伝えておきます」

数日後 首都アステル 軍部演習施設

普段はひと気の少ない演習場が人で溢れていた。軍部の人間、ハウンスの各隊員、王女、ロシア達までも多くの者が集まっていた。

「第一小隊がついに王族警備隊とやりあうらしいぜ」「箱美芽隊長はいつも王族警備隊より下にハウンスの名前があるのが気に入らないって言ってたらしよ」「ツバイ隊長と箱美芽隊長って目も合わせないらしい」「箱美芽はここで王族警備隊を潰すらしい」

多くの噂がながれ、それらがこの演習を大きく盛り上げていた。噂の多くはクローアによるものだったが。

四季は演習場の中央に現れた。

「今回は公開演習にお集まり頂きありがとうございます。このような機会を与えてくださったエスナ王女に感謝をいたします」

観客達は特等席のエスナを見て拍手を送った。

「今回は我が第一小隊と王族警備隊で行います。お互いに三名の代表者を選出して頂き、二本先取と言うことでやらせて頂きます」

四季は深々とお辞儀をして開催を告げた。

「第一戦目の参加者は前へ」

第一小隊からはフロルが王族警備隊からは巨大な斧を持った短髪で大柄の男が出てきた。

「こんな小僧が相手か、たしかお前はせいこんさい聖痕祭でうちの隊長にやられた小僧だな」

フロルは何も言わずに男を見ていた。

「それでは第一線、始め!!!」

掛け声と共に男は素早く距離をつめる、体格と似合わないその速度はまさに奇襲だった。フロルは驚きせず迎撃した、地面が氷柱が生え男を貫く。

「甘いな」

貫かれた男の体は歪み消える、男は突然後ろから現れフロルを巨

大な斧が襲う。

「氷塊と化せ」

観客は静まり帰った、四季は満足げにツバイを見つめる。フロルの周りに白焰が舞い、後ろには人の形をした氷塊ができていた。

「勝負あり、一回戦勝者フロル・レイサス」

フロルはツバイを見つめていた。

「フロル、死人が出ては困る。戻してやりな」

氷塊は砕け男が崩れ落ちた、観客席から歓声が響き渡る。

「それでは第二戦を始めよう、うちは人が少ないから連戦だ」

次は細身の眼鏡の男が現れた。

「第二戦、始め！！」

細身の男は姿を消した。

次の瞬間、フロルは吹き飛ばされた。倒れたフロルの前に男が現れる。

「恥をかかされた、さっきのお礼です」

そう言って姿を消した。

「終わつたな」

四季は満足げにツバイを見て笑いを堪えている。

「ツバイくんの部下は駄目だね、一発で決めとけば良かったのにね」

観客席で桜家おつかは呟いていた。

王族警備隊は声援の声に包まれていた、逆に第一小隊は四季が静かに座っていた。

フロルは退屈そうに地面手を置いた。

そして演習場の大半が氷に包まれた、フロルの少し離れた所に二つの穴が空いていた。

「そこか」

フロルは氷で弓を作り、狙いを定める。

「そこまでだ」

ツバイは立ち上がり、試合の終わりを告げた。

「勝負あり、二回戦勝者フロル・レイサス」

客席は歓声に包まれた。

「箱美芽隊長、これで満足できましたか？」

ツバイは嫌味たっぷり四季に言った。

「いや、全然」

四季はマイクを持って言った。

「私達第一小隊が二本先取で演習を終わりたいと思います」

観客席からは大きなブーイングが響いた。

「そうですね、皆さんの気持ちは痛いほど分かります。王族警備隊が演習ごときと考えた為、中身の無いものになってしまい申し訳ございません」

四季はツバイを見つめもう一息入れる。

「私は王女を守るべき警備隊が、このような質では王女の心が配でたまりません。噂では聖痕祭では王女は警備隊ではなく、第二小隊を頼っていたとか……。このような有様ではそれも事実なのか」と

四季はツバイを晒し上げる、ツバイは口を開かない。

その時、ツバイを氷柱が襲う。ツバイはそれをかわし、フロルを見た。

「こないだの借り、返させてくださいよ」

観客は歓声で包まれた。

「いいぞ、小僧やつちまえ!!!」ツバイ、その生意気な小僧に上下関係を教えてやれ」「フロル、いいぞ!!!」「ツバイ死ぬ!」

「王族警備隊にハウنزの力を見せてやれ」

ツバイは四季を見つめた。

「あなたと言う人は……」

四季は楽しそうに二人を見つめる。

「第三戦、始め！！」

第二章 氷炎咆斬

ツバイは両手に剣を召喚し、フロルに向かう。

「いくよ、お前たち」

フロルの周りを白焰が舞う、無数の氷柱がツバイを襲う。それらをかまし切り裂き距離をつめる、フロルは無数の氷の矢を放ち迎え撃つ。ツバイは片手の剣を投げつける、氷の壁が剣を止める。ツバイは腕を上げ振り下ろす。

無数の槍がフロルの頭上から降り注ぐ、それを氷の剣で弾きかわしツバイに向かう。二人の剣が交わり、フロルの剣が砕け散る、破片がツバイに襲い掛かる。お互いに一瞬で距離を取る、フロルは地面に手をつき氷塊がツバイを捕らえる。

「召喚、機怪剣アグニ^{リコル}」

氷塊が切り裂かれる、そして灼熱の双剣が現れる。

ツバイの両手には真っ赤な剣が握られていた。

「ここからが勝負だよ」

愛は二人を楽しそうに見つめる。

「ツバイくんにあれを使わせたとすることは、けっこうやばかったみたいだね」

桜家も二人を見つめる。

「本気を出させてもらおうよ」

ツバイは格段に早く距離をつめる、フロルに向かいなが剣を振るう。炎柱がフロルに襲い掛かる、それは氷の壁を溶かしフロルに迫る。フロルは氷柱を作り空に逃げる、それをツバイが追う。

「つぶれる」

フロルの前に白焰が集まり、巨大な氷塊がツバイに向かう。ツバイは氷塊に張り付き剣を突き刺し駆け上がる、剣からは炎が上がり

氷塊を両断する。

「お置きだ」

ツバイの剣がフロルに迫る、氷の壁を作り蹴り飛ばしかわす。そしてツバイが切り裂いた氷塊が形を変え、ツバイを襲う。

「だいぶ成長したな」

二人は再び地上で向かい合う。フロルは氷でナイフを作り自身の手を切り裂く。

流れ出た血液が地面に落ちる。

「僕も本気でいきます」

地面の血液を含み2メートルほどの赤い目をした狼が現れる。狼は氷でできているとは思えないほど動物的だった、そして尻尾には白焰が燃えていた。

「白焰ハナルガルトムの氷狼」

氷狼は咆哮をあげる………

セルギア王国 王宮内

「待たせたね」

二人は真っ直ぐに見つめあった。

愛は大刀を抜いた、ジャンヌは大きな黄金ランスの槍を構える。

「ジャンヌ・セルギア、あなたの命を頂くわ」

「包刃つみや、愛あい、参る」

〜つづく〜

第二章 蘭嵐 ? (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

第二章にツバイの出番がありましたね。さあ次回はジャンヌVS愛です!!

この二人を書くための第二章です(笑)なるべく早く投稿できるように頑張りますのでしばしお待ちください。
活動報告のほうで状況は報告いたします。

第二章 蘭嵐 ? (前書き)

今回もよろしく願います。
再編集いたしました、遅くなってすいません。

第二章 蘭嵐 ？

第二章 蘭嵐 ？

二人は一気に距離をつめる。ジャンヌの黄金の槍を愛が紙一重でかわす、愛の一振りがくる前に槍は斧に変化し愛を襲う、それを大刀で弾き上へ逃れる。斧は二本の剣に変わりジャンヌが愛を追う、愛は大刀でジャンヌの攻撃を受け天井へ張り付く、そしてジャンヌに向けて振り落ちる。それを地上でジャンヌが大剣で弾き返す。お互いに間合いの外へ弾き飛ぶ。

今度は愛が一気に距離をつめる、ジャンヌは無数の金の棘と鎖で迎撃する。愛は鮮やかに攻撃をかわす、ジャンヌは攻撃混じり愛に近づいた。黄金の槍を愛の大刀が受け止める、愛は弾かれ態勢を崩し後方へ吹き飛ぶ。その隙をジャンヌは逃がさない、金の鎖が絡み合い鳥籠を作り、愛を閉じ込める。

「この槍は高速で回転している、一度だけの奇襲。私は行かせてもらおうよ」

ジャンヌは愛の横を通り過ぎ王室を目指す。

その時後ろから風が吹き抜ける。

「私を閉じ込めたいなら貼り付けにでもするんだな」

金の鳥籠は崩れ落ちる、ジャンヌは愛を見つめた。

二人の姿は朝日に照らされ輝いていた、愛の純白の着物とジャンヌの鎧が光輝いている。ジャンヌは両手に金色の剣を持って愛に向かう、愛の一閃をかがんでかわす。片手の剣が数本のナイフ変わりに愛に向かう、一本が愛の髪を掠める。ジャンヌの一振りが完全に愛を捕らえる、愛は着物に隠した短剣でそれを止める。愛は大刀を逆手に持ち替え振り上げる、愛の着物が真っ赤に染まり愛は柱へと叩きつけられる。片手を犠牲にジャンヌは愛に吹き飛ばし、自身の腕を金の鎖に変え愛を柱へ貼り付ける。

「何のつもりだよ！！」

愛はジャンヌに怒鳴りつける。

「貼り付けにしたんだよ」

ジャンヌは腕のない肩に布を巻きつけながら答える。

「だからさっ！何で・・・」

愛は自身の体を必死に揺する、しかし鎖は少しも動かない。

「切れないよ、私には・・・」

「卑怯だ！！」

ジャンヌは愛から目を逸らす。

「初めてだったんだ、私には自分を見せられる友が。だから切れなかった、切ってはいけないと思った」

愛はただジャンヌを見つめる、ジャンヌは愛に背を向け扉に向かう。

「だから切らせたのか？お前だけだと思っていたのかよ・・・」
愛は必死に問い掛ける。

「自分だけだと思うな！！何様のつもりだよ・・・答えるよ？なんか言えよ？聞こえているんだろ？」

ジャンヌは決して振り向かない、一定速度で扉へ進み続ける。

「卑怯だよ・・・ジャンヌ・・・何か言ってくれよ・・・ジャンヌ・・・」

愛は顔を下に向け嘆く、ジャンヌは扉へ手を伸ばす。

愛はもう一度ジャンヌを見る。

ジャンヌは扉から手を離し、一度だけ振り返る。

涙を流しながら、彼女は微笑んだ・・・

はつきりとは見えないが愛はジャンヌの口が動いていたのが分かった。

「・・・ごめんなさい・・・」

「・・・ありがとう・・・」

愛はただ唇を噛み締めて、ジャンヌを見送った。

アステリオス帝国 首都アステル 軍部演習施設

フロルは氷狼を撫でた、氷狼は嬉しそうに尻尾を振ってツバイを

睨む。

ハナルガルトム
「白焰の氷狼行くよ」

氷狼が息を吹くと辺りは白い霧に覆われた。

ツバイに無数の氷柱が全方位から迫る、それをツバイは的確にさばく。

霧の中から声が聞こえる。

「この霧の中がすべて僕の攻撃範囲、一撃であなたを氷塊にすることもできる」

ツバイの持つ双剣が燃え上がる。

ツバイに氷狼が襲いかかる、それを簡単に両断する。氷狼は両断され倒れこむ、ツバイの前にフロルが現れる。

「確かにその剣はすごいよ、でも所詮は剣」

ツバイは双剣と両手が氷っていることに気付く。

「もう遅いよ」

氷狼は二匹別れツバイの周りを歩く。

ハナルガルトム
「白焰の氷狼」

氷狼は四匹に別れ、ツバイに噛み付く、そしてツバイは氷塊と化す。

「氷牢に眠れ・・・」

辺りを包む白い霧が晴れ二人の姿と共に歓声が沸きあがる。

「よくやった」

四季は満足そうに氷塊と化したツバイを見る。

「勝負あり、三回戦勝者フロル・レイサス」

歓声と共にフロルは四季を見つめていた、四季の顔が俄かに曇る。

フロルはツバイを見た、氷塊は少しずつ溶け出していた。

「バルガルム白焰の氷狼」

氷狼が現れフロルは膝をついた、フロルの顔は白く血の気が引いていた。

「もうやめときな」 四季の声が響く。

氷塊から開放されたツバイも立っているのがやっとだった。

二人は決してやめようとしない。

その時小さな拍手が聞こえた、エスナ王女が拍手をしていた。やがて拍手は会場を包み込んだ、エスナは立ち上がり口を開いた。

「素晴らしい戦いでした、わが国にこの様な戦士がいることを誇りに思います。お二人とも剣を引きなさい、あなた方の本当に戦うべき時にその力を振るいなさい。」

ツバイはエスナを見上げ剣を置き跪く、フロルはじつとエスナを見つめ氷狼を消した。

四季は不満げに演習の終わりを告げた。

くつづく

第二章 蘭嵐 ? (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

第二章 蘭風 ? (前書き)

今回もよろしくお願いします。

第二章 蘭嵐 ？

第二章 蘭嵐 ？

扉の向こうにはビズルが一人、王の座る椅子に堂々と一人座っていた。

「片腕どうしたんだい、姉さん？」

ジャンヌはその言葉は無視して、金の剣をビズルに向ける。

「父上はどうした？」

ビズルはふざけた調子で飲み物を口に運び答えた。

「死んだよ」

「殺したのか？」

「そうかもね」

「お前は何がしたい？」

「別に、ただ楽しみたいだけかな？一度きりの人生をさ」

ジャンヌの持つ剣が細く伸びビズルの心臓を貫く。

「もう終わりにしよう」

次の瞬間、ジャンヌは目の前に広がる光景に言葉を失う。

ジャンヌの剣に貫かれているのは国王、そして国王の横にはビズルが立っている。

「姉さんも酷いことするね」

ジャンヌは言葉を失い、剣を落とす。

「本当ね、国王は必死にあなたに語りかけていたのに」

ヴァイオレットがジャンヌの横を歩きビズルの横に行く。

「どういうことだ？」

ジャンヌは拳を握り締める。

「夢でも見ていたんじゃない？お姫様」

ジャンヌの周りにヴァイオレットの部下が現れる。ジャンヌは武器を練成しようと鎧に触れる、その時銃声が響く。

ジャン又はわき腹と片足を打ち抜かれ崩れ落ちる。

「おいおい、殺すなよ。とどめは俺が刺すのだから」

ヴァイオレットはビズルに銃を渡す、ビズルは銃口をジャン又に向ける。

「最後に言いたいことは？」

ジャン又はビズルを睨みつける。

「この国をどうする？」

ビズルは大笑いをする。

「国の心配？あんたこれか死ぬんだよ？分かる？」

ジャン又はそのままビズルを睨む。

「この国、どうでもいいよ。俺はいらぬよ、姉さんはどうしたいの？」

「国民の為に国はあるものだ、だから・・・」

ビズルは面倒臭そうに話を遮った。

「わかった、わかった。民主性にするなり、なんなりさせるさ」

ジャン又は驚いた顔でビズルを見た。

「何？俺がこの国で何かするとでも思った。する訳ないじゃん！

！こんな国」

ビズルはジャン又の言葉をあざ笑う。

「姉さんがやりたかったことはね、もっと簡単に出来たんだよ。

分かる？力さえあれば簡単に出来たことだよ」

ジャン又は唇を噛み締める。

「世間知らずのお姫様のわがまま、ただそれだけのこと」

ヴァイオレットがジャン又を見下し言い放つ。

ビズルはトリガーに指を掛ける。

その時、王室の扉が切り裂かれ吹き飛ぶ。

血に染まったぼろぼろの着物を着た愛がそこにはいた。

「何のようかしら」

ヴァイオレットが不機嫌そうに愛に尋ねる、愛は真っ直ぐにジャ

ンヌを見る。

愛は大刀を力一杯振り払う、剣圧が一瞬周りの人間の動きを止める。その瞬間、ジャンヌは自分の周りにUの字の壁を作り愛と向き合う。

最後の力を振り絞り立ち上がり剣を握り締める。

愛はジャンヌに向かう。

「最後まで迷惑かけたね」

「.....」

「もう少しお話すればよかった」

「.....」

「三人で見た満月綺麗だったね」

「.....」

「私なにか残せたかな？」

「.....」

「いつも私が話してばかりだね」

「.....」

ジャンヌを覆ったU字の壁が崩れ、金の粉になり舞い上がり、日をあびてきらきらと輝き二人に降り注ぐ。

「友達だよな？私たち」

「.....」

愛はただ頷いた。

ジャンヌの腕が愛の顔に触れる、その手を愛が握った。

「愛の手、優しい」

「ジャンヌのもの」

「やっと普通にお話できたね」

ジャンヌは幸せそうに微笑んだ。

「.....ありがとう.....」

ジャンヌを貫いた大刀がゆっくりと抜け、愛はジャンヌを抱きしめた。

「茶番は終わった？なんてことしてくれたの」

ヴァイオレットは愛を攻める。

「なんか冷めちゃった、ヴァイオレットもういいよ」

「本当、くだらない」

愛はヴァイオレットを睨みつけて、大刀を握り締め切りかかろうとする。

ヴァイオレットは嬉しそうに笑った。

「先輩」

愛の前に少年が立ちはだかる。

「リビイ、どけ」

少年は目一杯に涙を溜めて震えた声で言う。

「嫌です」

「どけ」

「嫌です」

愛は少年の泣き崩れた顔を見て大刀を置き崩れた。

王宮内 中庭中央

「これで終わりだ」

リゼの顔の左側は殆ど黒い根のようなものに侵食されていた。

「まだ死ねない」

ロイテルは地面に伏せながらリゼを睨みつける、リゼは黒い手を振り下ろす。

「俺は約束した・・・」

意識を失ったロイテルから黒い影が引く、その時二人の男が現れ

る。

男は二人とも深手を負っていた、一人は鎖を練成してリゼを襲う。リゼは難なく黒い手で鎖を迎撃し男を捕らえる。その瞬間、男は爆発する。

爆煙が辺りを包む。

「悪あがきを」

そして、ロイテルの姿が消えていることに気付く、リゼの前には男が立っていた。

「あいつはどうした？」

「わかりませんな」

リゼは頭を抱えて男に銃口を向けた。

俺が目を覚ますとベッドの上だった。どこかの部屋に俺は寝かされていた、記憶は途切れ途切れで思い出せない。ただ負けたということだけ重く押し掛かる。ベッドのよこのテレビが五月蠅く鳴り響いていた。

テレビはジャンヌの死を告げている。

俺はただ天井を見上げていた、何も分からず、何も信じず、ただ・・・

〜つづく〜

第二章 蘭嵐 ? (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。
後で洸光も編集いたします。

第二章 洸光（前書き）

第二章完結です。

今回もよろしくおねがいします。

第二章 洸光

第二章 洸光

今夜も俺は十字架の立つ砂漠にいた。体の痛みよりも何か違うものが、辛く苦しく痛かった。そこには先客がいた、いつもジャンヌと着物ヌメの女がいた丘に二つの影があった。俺は急いで丘に向う。そこにはいつも通り着物の女が月を眺めていた、そして一本の黄金の剣が女の横に立っていた。女は何も言わずに月を見続けた。俺はとっさに尋ねた。

「その剣は？」

愛は月を見上げたまま言う。

「私 came 来たときにはあつたよ」

「そうですね」

その後二人は会話なく月を眺めていた、二人はお互いの怪我のことにも触れずただ誰かを待っているようだった。

「あなたに渡すように頼まれたものがあります」

ロイテルは愛に話しかけた。

「奇遇だな、私もだよ」

ロイテルは愛に小さな封筒を渡した。

「ジャンヌさんからです。昨日あなたが来なかったので、運び屋ならいつか会えるだろうと渡されました。あなたは他の国にもう行つたと聞いていましたから」

「そうか、今日の紛争で怪我をしまして。もう一日滞在することになってな」

今度は愛がロイテルに小さな封筒を渡した。

「私も同じだ、あの女からだよ」

二人は封筒を眺め決して開けなかった、暫くしてロイテルは立ち上がり別れを告げる。

「次の仕事があるので今夜この国を出ます」

愛は月を見続ける。

「またいつか」

ロイテルは月の光を浴びながら丘を下り、別れを告げる。

「ありがとうだったさ」

ロイテルは振り向き愛を見た、彼女はただいつものように月を見上げている。

ロイテルは自分の視界が歪んでいるように思えた……

ロイテルが去った後も愛は月を見上げていた。

「いつの間に私の着物に入れたのやら、また彼に嘘をついてしまった」

愛は封筒を開ける、中には紙と月をモチーフにした金のイヤリングが入っていた。

手紙は一行だった。

あなたと、ともに……

私の最初で最後の

大切な友へ

愛はイヤリングを月明かりに照らし見つめた、どうにも視界がぼやけてよく見えない。

「ついに泣き顔、見られてしまったな……」

「おあいこだよ」

愛は剣に語りかけた、夜風が吹き抜け声が聞こえたような気がした。愛はイヤリングをつけ、優しく語りかけた。

「私を見ていてくれ、そして私が迷った時は助けてくれよ」

イヤリングは月の光を浴び、優しく光を放つ……

ロイテルは車の中で封筒を開けた。中には手紙と月をモチーフに

した金のチャームのついたネックレスが入っていた。

あなたの信じる道を貫きなさい

私もともに歩むから

その先の光を目指して……

で最後の大切なあなたへ

私の最初

ロイテルはネックレスをつけ握り締め、月を眺め続けた……

第二章 完

登場人物紹介 第4回

名前 ジャンヌ・セルギア

性別 女

能力 錬金術

年齢 20前後

身長 170くらい

体格 普通

髪型 ロングで前髪の片側を耳にかけてる

服装 鎧、騎士系、砂漠な感じ

CVイメージ まだ未定です

雑談

登場したときから死ぬことが決まっていた。名前もそのためです。彼女を書くにあたって、自身の誇り、内面の弱さ、矛盾をテ

ーマに書いていました。愛とのからみや、ビズルとの過去なども書きたかったのですが・・・時間の都合で省略しました。私自身好きなキャラで殺すことを何度も考えました。

私自身の考えで犠牲のない革命はないと言うことで退場してもらいました。

名前

包刃 つみや 愛 あい

性別

女

能力

質量操作

年齢

18～19

身長

155未満

体格

華奢です、わりと小柄

髪型

黒髪のセミロング 手入れしてないがつつや。

服装

着物、様々な模様と色をもっております。(着物

はこだわる)

ＣＶイメージ

あるけど言うと・・・まんま・・・

雑談

第一章で登場させられなかったお気に入りキャラ。着物で刀を使うキャラを書きたかった!!ものすごく気に入っているので三章も出番多め。彼女のテーマは無口、内と外の温度差です。実際は色々考えてるし、知っているけど口には出さない子って感じ。今後の物語で紹介できるのでこのくらいかな・・・

第二章 泷光（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

一章から読んでくれている方、二章から読んでくれている方、本当にありがとうございます。未熟な文章にお付き合いいただいてくれる方に感謝でいっぱいです。私自身最初の作品で二章は一章と雰囲気や表現が変わり、書くたび自身の力のなさを痛感しておりました。そんな中でも「読んでくれる方がいる。」これだけが原動力でした。次章はなるべく定期的に投稿できるよう頑張りますのでよろしければお付き合いください。

三章は4月からです。しばしお待ちください。

次章のテーマ 絶対の力 戦争 集団戦 科学と幻想 です。

本当に読んでいただきありがとうございます。

第三章 プロローグ(前書き)

今回もよろしくお願ひします。

なかなか投稿できなくてすいません、予告と大きく変わっていないのに……

第三章 プロローグ

第三章 プロローグ

某国 美しき庭園

そこはまるで夢の国の一部のように美しく、優雅な時の流れが続く場所。

青く澄み渡る空に無数の花が咲き誇る庭園、そこで茶話会は開かれていた。

「珍しいのがあるわね、^{ナイン}9」

カップを片手に女は木に寄りかかる男に話かけた。

「まったくだよ、^{フォー}4。久しぶりに顔を出したと思えば片手が義手になっているしね」

男爵のような姿をした男は女に言った、それを聞いた女は男を睨んだ。

「^{シックス}6、あなたも何年ぶりかしら？今は団長と呼ぶべき」

三人の他に数人の者が庭園にいた。

「世界は動きだす、そう私達の手で。^{ナンバーズ}名も無き者は名と共に意味を持つので、今度は私達の番よ」

デルガナス 国境付近

「おい、嘘だろ……」

兵士はすぐに通信機を手を取った。

「敵襲だ、エグルガルの奴らがついに攻めてきやがった」

「レーダーでは何も確認できない」

兵士は通信機に怒鳴りかけた。

「空を見る……、なんて数だよ……」

空に輝く無数の光、地平線を埋め尽くす鋼鉄……

「無駄な戦闘は望まない、今すぐ降伏しろ」

国境にそびえる城壁の前に真っ白な服を着た一人の小柄な男がいた、男の後方には無数の冷たい光が怪しく輝く。男の周りを銀色の玉が浮いている、そして銃声が響き渡った。

「そうか」

弾丸は男に届くことなく迎撃された、男は目を閉じた。

銀の玉が無数に弾け飛び飛散する。

男が目を開いた時、息をする者は此処にはもういない……

「進行を開始しろ」

無数の光が大地を覆う、すべてを蹂躪する圧倒的な力で……

大商業国アルファルド 中枢

「エグルガラムがデルガナスへ進行を開始、すでに半分以上を制圧しております。」

通信兵が大きな椅子にくつろぐ男に伝える。

「動いたか、面倒だね」

男は通信兵に紙を渡した。

「ベル又王国とガルダスの所へ、見せればすぐにわかるよ」

男は情報誌を眺めつぶやいた。

「さあ世界が動き出すよ。アステリオスの姫はどう動くかね？」

世界最大の同盟が結ばれた。巨大な資産を持つアルファルド、軍事国家ベル又王国、世界最強の召喚士リコラーを持つガルダス、世界を動かす力が胎動する。

アルファルド、ベル又王国、ガルダス、デルガナスはそれぞれ隣

接した国である、デルガナスへの進行は明らかな宣戦布告を表す。エグルガラム、国土はアステリオス程度であり科学、機械工が最も進歩した国。世界最大の軍事力を持ちながら隣接国と均衡を保ち続けてきた。エグルガラムの軍事規模はアステリオスより小さい、だが一人の男が一国に値する。

ステラス・クルネス、Sクラスの空間認知者……

デルガナス 首都最終防衛線

最終防衛線は静かだった、すでに周辺を包囲され退路を断たれたデルガナス軍はただ開戦を静かに待っていた。

お互いの軍の間に二人の男が向かい合う。

「降伏しろ」

「我が国の誇りにかけて、貴様を討とう」

男は小柄な男に剣を向ける。

「リコール召喚、鬼神兵」

男の両脇に大きな鎧を纏った鬼神が現れる。鎧を纏った大きな鬼は巨大な剣を構え、雄叫びを上げる。その声は大地をも大きく揺らす。

「そなたをステラス・クルネスと存じる、我が力思い知るがいい」
ステラスは手をコートにしまったまま、男を見る。

「やれ」

銀色の玉が弾ける、細かく分かれた銀の玉は男達を包囲する。鬼神の斬撃がステラスに向かう、銀の玉が薄く広がりシールドを張りステラスを守る。

無数の銀の玉は光を放ち鬼神を切り刻み、空へと向かう。

男は剣を握りしめステラスに向かう。

光が降り注ぎ男の後ろは炎に包まれる。男は防衛線だった場所を見て剣を落とした。

「進行を開始しろ」

ステラスは男に背を向け立ち去る。男は急に剣を握りステラスに襲いかかる。

「そんな……」

剣はステラスに触れることなく切り刻まれる。銀の玉が放つ光が男の心臓を貫く。

「力なきことを悔やめ」

彼はすべてを空間的に捉える、全方位から降り注ぐ光がすべてを焼き払う……

この大きな機械は無数の歯車が噛み合い、少しずつ動き変化を繰り返す。

たとえ小さな歯車が壊れても、機械は動き続ける……
ならば歯車は何の意味を持ち回り続ける？

「何故生きている？」

多くの仲間を失い、世界は？

神は何を望む？

あなたは壊れかけている……

「あなたの為に世界を壊そう」

ステラスは真っ白な部屋に横たわる儂き花を見つめる。

部屋の外に数人が待っていた。全員ともステラスを見つめる。

「ご命令を」

「いいのか？」

ステラスは皆を見回す、曇りのない目がステラスを見つめる。

「デルガナスを落とす」

「了解しました。我が命、あなたと共に」

ーグ(完)
ゝ

ゝ
プロ
ロ

第三章 プロローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ようやく三章の始まりです、今回は投稿のペースが遅くなりそうです。

理由は活動報告でお書きするかな……

次回は早くとも来週になってしまうと思います、本当にすいません。よろしければお付き合ってください。

第三章 S・S・S ? (前書き)

今回もよろしくお願ひします。

なかなか投稿できなくてすいません。次回からは少しでも定期的に投稿できるようにいたします。
では三章の始まりです。

第三章 S・S・S ?

第三章 S・S・S ?

ベル又王国 国境付近 ベーテル大平原

どこまでも広がる平原にエグルガルの大群が進行を開始していた。ベル又軍とエグルガルの戦闘は均衡状態が続いていた。ベル又軍の対空砲により制空権を奪われたエグルガルは地上戦による進行を開始した。

無数の戦車や機械の鎧を纏った兵士が砲撃と共に迫る、ベル又の砲撃はエグルガルに届かない、巨大なシールドが砲弾を拒絶する。
・
・
・

ベル又軍の前線に一人の女がいた、銀と黒の混じった髪と堂々とした風貌の女はエグルガルの大群をつまらなそうに見ていた。

「さあ、いくよ。召喚^{リコール}」

女のそばに大きな獣が現れる、女はそれに乗り大群に向かう。漆黒の獣は軽快に砲撃をかわし距離をつめて行く。

「召喚^{リコール} 魔弓 レラージエ」

女の手には漆黒の弓が現れる。矢のない弓を構え、漆黒の矢が現れそれを放つ。漆黒の矢はシールドを歪ませ貫く、そして無数に分裂し破壊をもたらず。

「次はこつちの番だよ……」

アステリオス帝国 首都アステル 軍部演習施設

「いつから二人は仲良くなったんだい？」

四季は愛とツバイを見て笑っていた。

「ツバイ、何のつもりだい？こないだの仕返しか？」

ツバイは何も言わなかった。

「何でもいいさ、さあ始めようじゃないか？」

フロルはそつと四季の前に出た。

「箱美芽隊長、手は抜きませんよ」

「好きにきな、責任は私が取るよ」

フロルは氷の刃で手を切り裂いた。

「いくよ、白焰の氷狼」

白く冷たい氷狼が現れた。

「ツバイ」

愛はツバイに巻物を投げた、ツバイは無言で巻物を受け取り開く。

「どれでもいい」

ツバイは巻物見て呟いた。

「召喚 妖刀 紡狐」

ツバイの手に刀が現れ、それを愛に投げ渡す。愛は刀を抜き眺める。

「いい子だ……」

愛はいつきに距離をつめた……

アステリオス 第三小隊作戦室

「隊長、包刃がまた問題を起こしました」

桜家は椅子に座り気だるそうに書類に目を通していた。

「いいじゃないの、へっくんも問題くらい起こすでしょ」

「いいえ」

桜家は短髪の部下を見た。

「そうだね……。でもあいちゃんも、何かアクセサリー付けたりして年頃になったみたいだしね？大目に見てあげよ」

「大目にですか、箱美芽隊長に喧嘩を売ることが」

桜家は目を大きく開き部下を見る。

「ほんと？」

「噂になっています……」

数時間前 王宮内某所

「珍しいね」

四季はフロルを連れて歩いていった。

「箱美芽隊長、お久しぶりです」

愛は通路に寄りかかりながら話す。

「話すのは第一小隊うちの入隊面接以来だね、いや私は不採用と
って立ち去ったから初めてか」

四季は嫌味をつげた。

「そうですね。能力のクラスでしか力を凶れないそうですから」

「ああ無能力者はいららないよ」

「そう言えば、私達がセルギアに行っている間を狙い、見せ物を
したとお聞きしましたよ？」

「狙って？」

四季は愛を睨みつける。

「はい、第二小隊などの優秀な者がいないのを狙って」

四季の顔色を伺いフロルが割って入る。

「あなたは何を言いたいのですか？」

愛はフロルを見て言う。

「私も噂の新人の力を拝見したくて」

「いいですよ」

フロルは四季の顔を見た。

「一時間後に演習場に来い、二度と第一小隊の前に立てないよう
にしてやるよ」

立ち去ったあと、四季と愛の顔は笑っていた……

第二小隊作戦室

「隊長、無理しないでください」

ルイは片手を吊って、眼帯を付けたリゼリを助ける。

「すまない」

「リゼがここまでやられたの久しぶりに見たよ」

ユウは嬉しそうにリゼを見つめる。普段のリゼならばすぐに銃口を向けるが、今の彼にはそんな力は残っていないかった。

「リゼ、本当にあいつ等帰ってくるの？」

リゼは顔を曇らせ頷いた。

「三ヶ月ぶりですね、隊長」

リゼは不安そうに窓の外を見つめる……

「辞任してくれる」

作戦室のドアが静かに開き三人組が立っていた。ポニーテイルの釣り目の女に、スキンヘットの長身の男、細身の丸い眼鏡をした男の三人がいた。

「ひさしぶり」

ユウが嬉しそうに近づくとスキンヘットの男が投げ飛ばした。

「餓鬼は寝てな」

ユウは廊下の壁に叩きつけられ、意識を失ったようだった。

「ちよっ……」

ルイが三人とリゼの間に入る。

「ジャス、待ってよ！！久しぶりに第二小隊がそろったんだよ！

！また仲良く……」

「仲良く?? 私達は一度でもそのクズと仲良くした？」

「それは……」

「ジュラル、障壁を部屋に張りな」

ジュラルは何も言わずに立ち上がった。

「ジュラルも！！隊長！！」

ルイはリゼを見つめた。

「駄犬どもが」

リゼは眼帯を外し、銃を構えた。

「もう……イヤ……」

大商業国アルファルド 大樹海ウーブス

深い緑で包まれた樹海を無数の機械の群れが動いていた。エグルガルの大部隊はアルファルドの首都に向けて進行していた。樹海はとても静かでもどこまでも緑しかなかった。

そして、突然の轟音と共に地面が割れた……

エグルガルの部隊は次々に地面に飲み込まれる。

「来たか」

「ステラス様、周囲に次々に反応が」

「いつたいどれだけの空間転移者^{アルムス}を雇ったのか。各隊陣形を整え応戦しろ、私が前線に出る」

戦況はすぐに変化した、奇襲により崩れた陣形はすぐに元に戻り、物量と力で圧倒する。統制された部隊は素早く事態に反応し応戦する。

戦場の最前線では一人の男が圧倒的な力を振るう。

突然、ステラスを爆発が包む。

「傷一つでもつけばいいかな」

濃い赤い髪をしたサングラスをした男が現れる。煙の中には薄赤いシールドに包まれたステラスがいた。

「いけ」

無数の銀の玉が男を囲み光を放つ、男はギリギリでかわす。光の一本が男を捕らえる、そして光は男を貫く。とつさに男は何かを投げ煙幕を張る。

突然、煙幕の中から男が現れステラスに向かう。男の手はシールドを簡単に破り？すり抜け？ステラスを捕らえる。しかし、男に無数の光が降り注ぐ。

「まさか貴様が出てくるとは」

二人は距離を取っていた、サングラスの男は木の陰に隠れ腕から

血を流していた。

「まあねえ、一応トップだしさ」

「隠れても丸見えだ」

男の隠れていた木が切り刻まれる。

「ストップ、ストップ、君と命のやり取りをする気はないよ」

男は無傷で、崩れる木の影から現れた。

「それに僕だけじゃ、君には勝てないしね」

ステラスは男を見つめたまま、通信を聞いていた。

「貴様らの部隊の大半が壊滅しつつある、降伏すれば無駄な血を流すつもりはない」

「降伏かあ……、そうだね」

男はふらふらと歩きながら尋ねる。

「何故今さら戦争を起こしたのか教えてくれたら考えるかな？」

ステラスは何も答えなかった。

「言えないか……」

男は微かに微笑んだ。

「そろそろかな……」

その時、ステラスに一つの通信が入った。

「ベル又に向かった部隊が壊滅、ガルダスの部隊も大きな被害が

……

ステラスは男を睨んだ。

「どういうことだ？」

「どういうこと？聞いた通りさ。少し見くびりすぎだよ」

男はそつとサングラスをずらしステラスを見つめた。

巨大な爆発が二人を包み込んだ。

つく

つ

第三章 S・S・S ? (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

投稿のペースが遅くてすいませんでした。一章と二章を書き終えて自身でもう一度読み直して、自身未熟さを痛感し三章は少しでも面白く、皆さんを楽しませることが出来る様に考えていました。結局、納得できるものには程遠い文章になってしまい申し訳ないです。

この物語に付き合っ頂ける方、すいません。

次回はなるべく早く投稿いたします。

次回もよろしければどうぞ。

第三章 S・S・S ? (前書き)

こんにちは。

またしても投稿が遅くなつてすみません。

今回もよろしく願います。

第三章 S・S・S ?

第三章 S・S・S ?

ベル又王国 国境付近 ベーテル大平原

戦況はベル又が圧倒していた、召喚される魔物達とベル又の兵がエグルガルムを圧倒する。そして、空から三つの矛が降り注ぐ。

「ガルダスの奴がなんているの？」

「自分で考えな」

「すーげな、あれが最強の召喚士の力か」

飛び交う弾幕を楽しそうに話しながらかわす。

「あいつを落とせば、最低でもガルダスは落ちね」

「やつちまおうぜ」

空を走る三つの矛、三人の男はボードの様なものに乗って空を翔る。三人は真っ直ぐに召喚士の女へ向かう。彼らがトライデント、エグルガルムが誇る天空の矛。

「一撃で仕留める」

トライデント
三人の一人が二本のブレードを構える。

「OK!!」

もう一人の手が微かに振動を始め、三人目は不思議な形の銃を構えた。三人は地面ぎりぎりを翔る、すれ違うベル又の兵を切り裂き、砕き、狙い撃つ。そして、召喚士のもとへ向かう。

「来たか、召喚 リコール 魔装 オリアス」

銀と黒の混じった髪の毛の召喚士の両手に漆黒の鞭が現れる。そして、漆黒の獣に乗り、三人を正面から向かい討つ。

「向こうさんもやる気だぜ」

三人は召喚士の前で弾け飛ぶ、中央に銃を持った男が残り、両側から二人が挟み込む。召喚士はそれを鞭で迎撃しつつ、二本のブレードをギリギリでかわす。振動する腕が召喚士を捕らえる、迫る腕を漆黒の鞭が阻み、蹴りを叩き込み地面に叩きつけた。召喚士は一

人で三人を圧倒していた。三人は囲むように召喚士から距離をとる。辺りで戦う兵士達は次元の違う戦いに手を出す事が出来なかった。

「駄目だったじゃん」

「何が一撃だよ」

「デユエなんて、一発もろに喰らってるしさ」

三人は依然として楽しそうに話していた。

「もういいかい？こっちはお前らと違って暇じゃない」

召喚士は会話を遮った。

「強気だね」

「自分が最強とでも思ってるクチだね」

「自身満々」

召喚士は鞭を振るおうとして、吐血して膝をつく。

「俺が無料で一発喰らうと思う？」

「俺達舐めすぎ」

「まあ、一対一ならあんたの方が強いけど、これは戦争。勝つたらOKなの」

召喚士は自身の傷の具合を確かめる。外傷がない事から内臓がやられていることが分かった。全く動けない訳ではないが、次の三人からの攻撃を完全にかわす事が出来ないのは明らかだった。痛みに堪えて立ち上がる。

「さすがだね、簡単には倒れないか」

「目が死でないしね」

「拍手、拍手と」

三人は同時に召喚士へと向かう。

「召喚 リコール アルル・ケールタス」

突然、地面から水が噴出し三人の行く手を遮る。

「私の力をお貸ししましょうか？」

「よろしく頼む……」

ガルダス ガルダス湖周辺

「限界だ、撤退する」

エグルガルの部隊が次々に撤退を始めていた。

巨大な湖の前に一人の男が楽しそうに立っていた。

「もう撤退かい？ステラス辺りが出てこなきゃ、エグルガルもこの程度か」

その時、男は空に目を向けた。

「落ちちゃいなヨ！！」

数機の爆撃機が地面へと吸い込まれた。

「全く退屈だよ、こっちは楽しめるってことだから手を貸したのにネ」

重力操作者グラビティ・ウォーカーは不満げに笑う・・・

ベル又王国 国境付近 ベーテル大平原

平原には巨大な水の球が多く浮かんでいた。そして、巨大な水でできた貝トライデントが三人を追い詰める。

「何だよこの力の規模は？」

「Sどころじゃないよ」

エグルガルの大群の殆どは壊滅状態だった。三人を無数の水の触手が追い回す。

「バラバラにしても駄目だ！！！」

「あの女を叩け」

貝の水の貝殻に守られ、真っ白い肌に青い髪をした女は水でできた椅子に優雅に座っている。

「エグルガルの三下達が、私わたくしに齒向かうだの身の程をわきまえなさい」

三人は青い髪の女に向かう、水の触手をかわし、貝近づく。水の貝殻が三人を阻む。

「弾け飛べ」

三人の両手が貝殻に触れると弾け飛ぶ。ブレードを持った男が青い髪の女に斬りかかる。

「お一人ではなくてよ」

召喚士が水の中から現れる。

「さつきのお返しだ、召喚リコール フォルネウス」

青く光る槍が男を捕らえ、水しぶきと共に炸裂する……

大商業国アルファルド 大樹海ウーブス

巨大な爆心地から離れた所に男はいた。

「キース様」

数人の部下達がサングラスをかけた男に駆け寄った。

「大丈夫さ、かすり傷だよ」

「やはり私達もお供すれば……」

キースは真剣な顔で言った。

「関係ないよ、彼は強すぎる」

部下に手当てを受けながら報告を受ける。

「キース様の読み通り、ステラスはアルファルドへ。トライデントはベルヌへ進行しましたがアルル様とティール様により撃退。その他の戦力がガルダスに向かいましたが黒服の男が撃退したということです」

「そうか、奴はちゃんと動いたみたいだね。アルルちゃんとティール嬢も共闘出来たみたいだし、第一段階は成功かな」

キースは大商業国アルファルドの王である。アルファルドは軍を持たない、自国の警備はすべて用兵が行う。それでも一つの国が成り立つのはこの男の力である。

「さあ、次はどうくるかな？」

アステリオス帝国 首都アステル 王宮内

「今回の作戦への参加は有志とします。」

王女エスナの声が響いた、ハウンスの各隊長は静かに席を立った。

「リゼリを含む第二小隊の参加は難しいようです……」

ツバイがため息混じりにエスナに言った。

「さつき連絡が入ったわ、私のミスよ。少しでも早くジャス達の手を使いたかったから……」

報告内容は以下だ。リゼリは半身の能力侵食で絶対安静、スキンヘットの男と丸い眼鏡の男も重症、ジュラルとユウも重症。

「ジャスはどうなの？」

「軽症のようです」

「ジャスに私の所に来るように伝えておいて」

ツバイは不安げに返事をした。

アステリオス帝国 首都アステル ハウンス専用医務室

フロルは心地よい音色で目を覚ました。真っ白な天井と体中の痛みが自身の状況を痛感させた。

「箱美芽隊長？」

ベッドの横には鼻歌混じりに果物の皮を剥く隊長の姿があった、普段との違いに最初は隊長だと思えなかった。とても隊長が女らしくて綺麗で少し緊張している自分に驚いた。

「起きたね」

「すいません」

隊長は何か分からない様子で僕を見ていた。

「何故あやまる？」

「隊長に恥を……」

突然、部屋に笑い声が響いた。

「隊長？」

四季はそつとフロルの頭に手を置いた。

「お前は何を望む？」

隊長の突然の質問に反射的に声が出た。自身の望むことが素直に

言葉になった。

「負けない力、誰にも負けない力です」

四季はそつと頭から手を離してベッドに背を向けた。

「フロル、私についてこい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は聞いた、隊長は初めて僕を名前で呼んだ。医務室にすでに隊長の姿はなかった。僕は力いっぱいいの声を出した。

「すぐに追いつきます」

四季は医務室の外でフロルの声を聞いていた。とても嬉しそうに、いつもの自身の欲を満たすものへの嬉しさではない喜びを感じて。医務室の外には人影があった。

「何のようだい？」

四季は愛に尋ねる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ちようど私もお前に用があった、でも今はそう言う気分じゃない」

愛は黙って四季を見つめた。四季は冷たい声で言った。

「次はないよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

愛は四季の纏う殺気に何も言えなかった、この一瞬で愛は完全な力関係を理解した。

「あいちゃん、四季には勝てないよ」

突然、後から桜家隊長の声が聞こえた。

「あいちゃんもセルギアの一件で強くなったみたいだけどね、それでも勝てないよ。四季の奴はただ能力が強いだけじゃない、だから第一小隊の隊長なんだよ。あく怖い怖い」

桜家はそれだけ言って立ち去った。

ベル又王国 国境付近 ベーテル大平原

鉄屑の広がる中、二人は優雅におしゃべりしていた。

「まさか、あなたと共闘するとはね」

真っ白い肌に青い髪をした女は水でできた椅子に座り、銀と黒の混じった髪の女と楽しげに話していた。

「そうね」

「ワイン飲むの？」

青い髪の女は急に訪ねた？

「少しなら」

「召喚して頂ける？」

銀と黒の混じった髪の女の手に突然、ワインのボトルが現れる。

「流石ね、ありがとう」

水で出来たワイングラスで二人はワインを飲む。

「ありがとう」

銀と黒の混じった髪の女は少し恥ずかしそう言った。

「いいのよ、ここは私の国だし。私もあいつの作戦に私も乗っただけ、むしろこの時期に自国を出て、ベル又に来たあなたに私が礼を言つべきよ」

「そうか」

銀と黒の混じった髪の女は少し頬を赤くしてワインを覗き込んでいた。

「最強の召喚士 ティール・バールス、思った以上に可愛いじゃない」

ティールは驚いたような顔で青い髪の女を見た。

「自己紹介がまだだったわね。知っていると思うけどアルル・ケールタスよ。世界最強の水の操作者よ」
アクア・モテライ

旧デルガナス 某所 エグルガラム仮設基地

ステラスは深刻な顔で事態を分析していた。彼にとっての最大の

誤算はキースを逃がしたことで、ベルヌの敗戦でもない、グラビティール重力操作者の存在だけだった。その時、部屋のドアが開いた。

「ステラスさまや、ネーリンです」

声の先には厚い眼鏡をした女がいた。

「トライデントの馬鹿どもが帰還しました、ウノは重症かと」

「報告わざわざありがとうございます」

ステラスはすぐに話を終えようとした。

「C・Dが稼働実験を終え、実践配備可能との連絡が」

ステラスは天井を見上げ、祈るようだった。

「分かった、稼働可能なものはすべてこちらに回すように連絡を頼む」

ネーリンは静かに部屋を出た。

「神はどれほど死を望むのだろうか……」

つづく

}

第三章 S・S・S ? (後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

投稿が遅くてすいません、私自身が他の作品に浮気をしてしい・・・

・
定期的な連載はこちらの作品メインで続けるので頑張りたいと思っておりますが、次話が全くの白紙なので・・・、今月中にでも二回ほど投稿できればいいと考えております。

読者の方、本当に未熟な文章ですがお付き合いくださり、ありがとうございます。

第三章 C・C・C ? (前書き)

こんにちは。

投稿完了致しました、暫くは戦いばかりですがよろしくお願いします。

また登場人物が増えてしまった。

第三章 C・C・C ?

第三章 C・C・C ?

旧デルガナス 某所 エグルガラム仮設基地

彼女は私達に希望を与えた。かつてエグルガラムは多くの問題を抱えていた、環境、資源、疫病などの多くを抱えたこの国を一人の女性が救った。彼女の多くの発見と発明は国を潤し、民を救い、私達に力を与えた。しかし、彼女は自分を救えなかった。今も彼女は動くことも出来ずに、横たわり薄れ行く意識の狭間を放浪する。彼女の姿は美しく儂い花だった。私は彼女の為に多く命を奪っている……

「なんて顔してやがる」

ステラスは浅い眠りから目を覚ました。

「リオルか、何故ここに？」

ステラスは金色の長髪をした長身の男に目を向けた。

「てめえが、そんなだからだよ」

リオルは生命力に満ちている、エグルガラムでも私にこんなクチをきけるのは、リオルだけだろう。

「戦況のことか？」

リオルはステラスの前にある机を叩き潰した。

「それもだが！！何で一人で戦った？」

リオルの態度にステラスは冷静に返事をした。

「私が前線に……」

「てめえ、まさか自分一人で戦った方がいいとかぬかすのか？」

リオルの言った内容はまさにこれからステラスが言おとしていることだった。

「ふざけるな！！俺達は何の為にいる。俺達はなんて言った？てめえと共に戦うって言っただろ、トライデントもコンスターズもみんななんて言った？」

ステラスは黙っていた。

「C・Dの投入は延期しろ、次は俺達もでる」
ステラスは依然黙ったままだった。

「聞こえましたか！！ステラさんよお！！！」
「分かった」

リオルはステラスに背を向けて部屋を向け、部屋を出ながら言った。
「じょうちゃんを助けたいと思ってるのは、てめえだけじゃねよ。
あと一人で何でも背負い込むな、周りを少しは見てやれ」

リオルが部屋を出ると、部屋の入り口から二人の少女の心配そうな顔が見えた。

「ミラとベガか、情けない所を見せてしまったな」

二人は勢いよく姿を現して二人で言った。

「私達もリオルと一緒にです」

二人は真つ直ぐにステラスを見つめた。

「すつ、すいません、ステラス様！！とつ、とんだご無礼を」

二人は自分達の言ったことを思い返し、反射的に謝った。二人の姿を見たステラスは優しく笑った。

「私は駄目だな」

二人は驚きながらステラスを見ていた。

「ミラ、ベガ、私に力を貸してくれるか？」

二人は嬉しそうに大声で返事をした。

「喜んで！！」

リオルは通路から三人のやり取りを見ていた。

「まったく、ステラスのやろうは、これだから困るよ」

リオルは真剣な顔になり通信機に問いかけた。

「ネーリン、奴の居場所を教えてくれ。この件はステラスには言うな」

ベル又王国 国境付近 ベーテル大平原

ベーテル大平原ではエグルガルの進行が開始されていた。戦況は同盟軍側が圧倒していた。前線のアルルとティールが圧倒的な力を振るっていた。その戦況を遠くからキースは見ていた。

「いやあ、あの二人が意気投合したのは良かった、これでベル又は大丈夫だね。ガルダスも黒いのが引き受けてくれたし、あとはアルフアルドうちだけかあ。たぶん今回は三国同時に来ないと思うけど」とその時、前線に光が降り注ぎ爆発が起こった。

「来たよ、どつちかなつと？」

前線は一瞬で火の海に包まれた、空から降り注ぐ光が正確に連合軍を貫き、焼き払った。

真っ白な服を着たステラス達の前に、厚い水の貝殻と漆黒の盾が火の海に現れる。

「これが世界最強の力か」

「噂ほどではなくてよ」

アルルとティールがステラス達の前に姿を現す。ステラスは二人に問いかける。

「降伏しろ、無駄な犠牲はお互いに望んでいまい」

「馬鹿にしてるの？私をアルル・ケールタスと知っての発言？」

ステラスは挑発に乗ることなく冷静に答えた。

「そのつもりだが」

アルルを巨大な貝が包み、無数の水の球が現れる。

「これが回答よ」

ステラスはティールを見た。

「召喚リコール 魔装 ザガン 魔弾 ハルフアス」

ティールの体を漆黒の鎧が包み込み、漆黒の羽が現れる。手には漆黒の散弾銃が現れ、それをステラス達に向ける。

「分かった、ミラ、ベガ。援護を頼む」

二人は無表情にアルルとティールを睨む、そしてミラは両手に手袋

をはめる。それと同時に無数の薄いバリアが現れ、ステラス達の周りを回り始める。ベガは自分の体より大きな銃を構える。ステラスの銀の玉が無数に弾ける。

「二人とも行くよ」

ガルダス ガルダス湖周辺

グラビティ・ウオーカー
重力操作者は退屈そうに湖の辺でエグルガラムを圧倒していた。

「攻撃がやんだネ、もうお終いかあ。エグルガラムもこんなもんか」

グラビティ・ウオーカー
「てめえが重力操作者か？」

グラビティ・ウオーカー
重力操作者は突然響いた声に驚いた。

「よく気付かれずよくこんな近くまでこれたね？」

リオルは不機嫌そうに近くにあった木を引き抜き、グラビティ・ウオーカー重力操作者に投げつけた。その木は重力操作者に届くことなく押しつぶされた。

「そもそも呼ばれてるかなっ」

「悪いけど、死んでくれよ!!!」

「やれるものならどうぞっ」と

次の瞬間、リオルは重力操作者を掴み地面に叩きつける、地面に亀裂が入り重力操作者の意識が一瞬飛ぶ、リオルはすぐに跳ね上がった

グラビティ・ウオーカー
重力操作者を掴み思いつき拳を叩き込んだ。拳を振るうと同時

に肘の辺りから空気が噴射され拳が加速される。グラビティ・ウオーカー重力操作者は大き

く吹き飛び何本かの木をへし折り、地面に倒れ込んだ。

「ちっ、まともに決まったのは一発目だけだよ」

グラビティ・ウオーカー
重力操作者は腰を摩りながら立ち上がった。

「常人なら死んでるよ」

「殺すって言っただろ」

旧デルガナス 上空

遙か上空を巨大な飛行艇が飛んでいた。その飛行艇にはHound

Sのエンブレムがあった。

「とっ、言う感じが今回の作戦になりますか……」

桜家は周囲を見渡した、そこには様々な顔ぶれがそろっていた。

「では各自、作戦の準備をお願いします」

作戦室は会話一つなく殺気に満ちたものであった……

ガルダス ガルダス湖周辺

グラビティ・ウオーカー

グラビティ・ウオーカー

リオルは言葉が重力操作者に届くと同時に重力操作者に拳が向かっていた。重力操作者はかわし切れずに拳が胸を捉える、そして吹き飛ぶ。

「面倒な能力だな」

グラビティ・ウオーカー

リオルは拳を握り締め、重力操作者を睨みつける。

グラビティ・ウオーカー

重力操作者は綺麗に着地して微笑んでいた。

「速さは一流だね、ステラス以外にまともなのがいて嬉しいよ」

「ずいぶん余裕だな」

グラビティ・ウオーカー

リオルは重力操作者に向かう。

「潰れちゃいな!!」

グラビティ・ウオーカー

リオルの周辺が歪む、リオルは自身が潰れる間もなく重力操作者に近寄った。

「遅いんだよ」

グラビティ・ウオーカー

グラビティ・ウオーカー

リオルは重力操作者を殴る、そして吹き飛ぶ重力操作者を捕まえ、拳を叩き込んだ。

「軽かるうが捕まえちまえば関係ないだろ!!!」

グラビティ・ウオーカー

重力操作者から碎けるような音が響く、さらに頭から地面に投げつけ、両手を重力操作者に向ける。

「終わりだ」

衝撃波と共にリオルの前方が吹き飛び、地面が抉れすべてが粉々に消し飛んだ。リオルの両肩から熱気が吹き出た。

「くたばったか」

「今のは危なかったヨ」

リオルは辺りを見渡した、しかし重力操作者の姿はない。奴がもしこの状態で能力を使われるとリオルに勝ち目は無い。

「逃げるのかよ、卑怯者」

リオルは賭けに出た。最悪、声の聞こえた方に行けば重力場から逃げ切れるかもしれない。

「大丈夫だよ、今は君を潰さないから」

「何故だ？」

リオルは重力操作者の言葉を信じず、居場所を探る。だが声は様々な方向から響く。

「今はいったん引いてくれるかい？君とはまた後日戦うよ、僕はただ楽しむ為に連合側にいるだけ、ねっ信じてよ」

リオルはそれでも引き下がろうとしなかった。

「もうう、はつきり言わせてもらおうよ、ステラスが危ないヨ」

リオルは少し驚いたがすぐに冷静に対応した。

「そんな手にのるか」

「だからさっ、ガルダスとベルヌの二人なら間違えなくステラスの勝ちだよ。でも、今回はまだいる」

「キースか、でもこっちはステラスだけじゃない」

「違うよ、子犬ちゃん達さっ」

そして、辺りは静かになった。

「子犬ちゃん？」

リオルはすぐに通信機を手にした……

ベルヌ王国 国境付近 ベーテル大平原

平原には無数の光が輝いていた。ステラス達への攻撃はミラのバリアがことごとく遮断した。ステラス達は一箇所に固まり、それぞれが自身の能力を最大限に発揮し、二人を追い詰める。ティールの放つ魔弾は炸裂し黒い影を纏い標的に向かう、それを正確にステラ

スが打ち落とす。

「駄目だ、攻撃が届かない」

「お互いに相性が悪すぎる」

アルルとテイルルは確実に追い込まれていた。ステラス達の攻撃が光学兵器である為、アルルの力で攻撃を弱体化できているが、それにも限界があった。

「あの小娘の充填が終わったらやばいわね」

「そうだな、私も次は耐え切れん」

問題はベガの高出力光学兵器だった。すでに二発が放たれていた、一発目はアルルが、二発目はテイルルの漆黒の盾が攻撃を防いだ。

「一発目と二発目の間隔から次までは一分弱だ」

「わかってるわよ」

「私はもうあれ程の攻撃を防げる盾は召喚出来ない」

アルルはステラス達を睨みつけ、攻撃をかわしながら言う。

「奇遇ね、私もあれほどの攻撃を止める量の水量はもう無理よ」

ステラスは銀の玉で二人を追い込む。

「降伏したまえ、君達ほどの者ならば次で終わることは分かっているだろ」

「ステラス様、次弾発射まであと70秒です」

「あと70秒だ、どうする？」

アルルは辺りに浮かぶ水の球を集め大きな貝を作る。

「わかった」

無数の光が二人に降り注ぐ、それをアルルが自身の水と共にかき消す。

「一召喚 魔弓 レラージュ」

テイルルは無数の光をギリギリでかわし、漆黒の矢を放つ。矢は分裂しステラス達を襲う。無数の矢をミラのバリアが阻む、矢はバリアを歪ませ、ステラス達へ降り注ぐ。

「オートガード突破、レベル2作動」

ステラス達を半透明のバリアが包み込む、漆黒の矢は数を減らしな

がらもそれを貫く。ステラスは依然、冷静に立っているだけだった。
「レベル3作動」

ステラス達の周囲に多くの光の玉が現れ、それらが漆黒の矢とぶつかり消えていく。

「これで終わりか」

「いや、まだよ」

ステラスの周囲から水が噴出し、水の障壁が三人を包囲した。ステラスは上を見上げる、上から水の鯨が口を開けて迫る。ステラスは銀の玉を集め、鯨を迎撃する。大量の水が蒸発し、視界が遮られる。鯨は体積を少なくしつつもステレス達を飲み込んだ。水しぶきの中からティールが青く光る槍を持って現れる、その槍がほんの二、三メートル距離からステラス達に放たれる。槍は辺りの水を飲み込み大きくなり水しぶきと共に爆発した。

ティールは水の膜に覆われ、アルルの横に戻った。

「これで限界よ」

ティールを覆う膜が消える。

「私も空っぽですわ」
わたくし

二人は消え行く水蒸気と水泡の中を見つめる。その中には大きな銀の玉があった。

「どうやらここまでね」

「悪くない戦いでしたわ」

銀の玉は少しずつ解れ、ステラス達が姿を現す。

「ベガ、撃て」

ベガの持つ大きな銃が変形し、光が放たれた……

〜つづく〜

第三章 C・C・C ? (後書き)

最後までありがとうございました。

連休中の不調を吹き飛ばす勢いで書いております!!!

C・C・C ?もすぐに投稿できるかと思えますのでよろしく願
いします。

第三章 C・C・C ? (前書き)

こんにちは。

第三章も中盤戦に突入です、こっからが本番になります。

エグルガラム、連合、ハウنزの三つの勢力はどう動いていくのか。

あつ主人公が全く出て来ていない……

今回もよろしく願います。

第三章 C・C・C ?

第三章 C・C・C ?

ベル又王国 国境付近 ベーテル大平原

光がアルルとテイルに向かう、二人はただ光を見ていた。

「リコール 召喚 魔弓 レラージュ」

テイルは矢を放つ、矢は微かに光を飲み込む。矢が消えると同時に水の魚達が光に飛び込み始めた。

「同じことを考えていたようですこと」

二人は力を振り絞る、しかし光は二人に迫る……

その時、光が歪み90°向きを変え二人から反れる。

「どうということ？」

次の瞬間、無数の氷の氷柱が降り注ぎ、気温がいつきに下がる。ステラスは上を見上げた。

「アステリオスカ」

銀の玉が空から迫る者達を迎撃する。無数の氷柱をミラのバリアが阻む。三人の女が空からステラス達に向かう。

「妖刀 慾よくぼく 獏」

愛は黒く光る刀を構えた。

「THE GAME Stand Play — 一度だけの勝鐘《one chance bell》」

四季の手に真つ白な剣が現れる。

三人は攻撃をかわし、ステラス達に迫る。三人の前にミラのバリアが現れる。ジャスはバリアを掴む。

「邪魔よ」

バリアは簡単にどかされた。

「嘘、レベル2作動」

愛の刀がバリアを飲み込むように切り裂いた。ミラの顔に焦りが浮

かぶ。

「防御システム 作動」

ステラス達までに無数のバリアが作られる。

「邪魔」

ジャスは自身の前の空間を掴み、歪め、こじ開ける。バリアは空間と共に歪み道を開けた。

「それじゃあ、的よ」

ベガが光を放つ。さっきのモノより遥かに小規模だが十分な大きさの光が三人に向かう。愛は大きく刀を振るった、刀が光を飲みこみ切り裂いた。そして、刀は砕け散った。

「フロル！！！！」

ステラス達に氷狼達が襲いかかる、それを簡単にステラスは迎撃する。

氷狼を誘導に愛がステラスの間合いに飛び込んだ。すぐにミラとベガが援護に向かうが、ジャスに空間ごと引き離された。

愛の一閃がステラスを捕らえる、ステラスは銀の玉を集め剣に変え受け止める。それと同時に愛に光が降り注ぐ、愛は肩に一発喰らいながらも逃げ切る。

その時、四季の一閃がステラスを切り裂いた……………

「駄目だ」

ステラスの右腕が空を舞う。四季はステラスから離れようとするが体が動かない。

「対価か」

光が四季に向かう、ジャスが空間ごと四季を引き離す。光の数発が四季を貫く。

「箱美芽隊長！！！！」

フロルが四季に近寄り傷口を氷で止血する。

「こいつ！！！！」

氷で出来た巨人の拳がステラスに向かう、ステラスはその拳に目をくれることなく光で切り刻み、自身の失った右腕を拾い上げた。

「駄目だ、引くぞ」

ジャスは大声で撤退を指示した。しかし愛もフロルも動かない、愛は腰の刀を抜きステラスに迫る。

「馬鹿、フロル！愛を援護しろ」

フロルは一瞬、援護を躊躇した。その隙をステラスは見逃さない、愛を無視しジャスを銀の玉が包囲し光が降り注ぐ。ジャスは空間を歪め光を逸らす。愛はミラのバリアに阻まれる。

「このままじゃ全滅する」

フロルは四季を抱えたまま、防御することしか出来ない。ジャスは最悪の状況に打開策を考える。愛は光をかわすが確実に消耗している、ガルダスとベルヌの二人は力の使い過ぎで立っているのがやっとの状態。ステラスの怪我はすでに部下の一人が手当てを始めている。ジャスの力は掴むこと。彼女はどんなものも掴み、動かせる、だが掴むと言うことは手の数しか掴めない。そして、一本の手で掴む量には限界がある。

ステラスはジャスに休まず攻撃を続ける。

「アステリオスの犬か、悪いがお前達は消えてもらおう」

フロルに多くの銀の玉が迫る、そしていつきに光が降り注いだ。

「良く四季を守ったね、でも四季が見ていたら怒られちゃうよ」

大きな盾達が光を遮る、桜家が部下と共に現れた。

「へっくん、守りは頼むよ。ユウ君、四季達を連れて母艦へ、残りの者は負傷者のもとへ」

桜家はステラスを見た。

「君がステラスか、腕一本失っても全く動じてないね。僕達は撤退するつもりだけど、引かせてもらえるかな？」

「貴様らには消えてもらおうと言ったが」

桜家は面倒そうに両腕を上げて話を続ける。

「腕のことは謝るよ、君も十分だろハウンスの頭を落としたんだから」

「聞こえなかったのか？」

ステラスの銀の玉が桜家に向かう。

「困ったな、こっちは引く気なのにさ。あいちゃん、もうやめなさい。君じゃ勝てないよ」

桜家の言葉に愛の動きが止まった、愛は悔しそうにステラスを睨み引いた。ステラスは愛に目もくれなかった。

「どうしたら引かせてくれるかい？」

ステラスはジャスを指差した。

「あの女的能力は危険だ」

「彼女を差し出せと？」

ステラスはジャスへの攻撃を止めた。ジャスは桜家を睨む。

「イヤよ」

「だそうです」

ステラスはベガとミラを見た。ミラは大分消耗しているようで辛そうにしていた。

「ベガ、撃てるか？」

「はい、充填は完了しています」

「ガルダスとベルヌの二人を狙え」

ベガの銃口が二人を捕らえる。二人は立っているのが限界だった。

「邪魔をするな、もし邪魔をするようなら貴様らも消す」

ステラスは桜家に警告した。

その時、ジャスが動いた。消耗しているミラをステラスから空間ごと引き離す。

ステラスはすぐに攻撃しようとしたが遅かった。

「はい、ここまで」

キースがミラの頭に銃口を向けていた。

「ステラス、君がアルルちゃん達に撃つたら僕も撃つよ」

「ステラス様、私にかまわずに」

ステラスはベガに銃を下ろすように命じた。

「ありがとう、ここはみんな引きましよう。現状としたって、消耗した部下と片腕を失った状況で僕達とハウন্ズを相手するのは、得

策ではないと思うよ」

ステラスは銀の玉を引かせた、キースはミラから銃を離し簡単に放した。

「ずいぶんと簡単に解放するな」

キースはへらへらとしたまま言った。

「僕は商売人さつ、取引は信用が命だからね」

ミラはステラスのもとに戻ると倒れ込んだ、ステラスはミラを抱えた。

「よく頑張ったね、立っているのもやっとだったのに」

ステラスは簡単にキース達に背を向けた。

「次が最後だ、まずはベルヌから落とす」

ステラス達はそのまま姿を消した。

「いやーあ、ステラス君はなんだかんだ、優しくて良かったよ」

キースが桜家達に目を向けると同時に愛が斬りかかった。キースはそれをギリギリでかわす、愛は続けて斬りかかる。

「キース君、残念ながら僕達の受けた任務はステラス君を消すことだけではない。むしろ、本当の狙いは君だよ」

くっくくく

第三章 C・C・C ? (後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。
次回の投稿も早くできるかと思えますので。
次回もよろしくお願いします。

第三章 C・C・C ? (前書き)

今回もよろしくお願いします。

もう誰が主人公か分からないですね・・・

第三章 C・C・C ?

第三章 C・C・C ?

旧デルガナス 上空 飛行艇

作戦室の中の空気は殺気満ちていた、今回の作戦の指揮を担当した桜家は作戦の説明を行っていた。

「今回のターゲットはキース・アルファルド。現状としてはベルヌ王国で連合軍とエグルガラムと戦闘中、目標が現れしだい戦闘に介入する。目標はキースのみ、少数での電撃作戦を考え・・・」

「ステラスはどうする？」

四季が割って入る、四季の機嫌が悪いのは誰もが気付いていた。

「ターゲットはキー・・・」

「それは知っている。しかし、世界最強と言われるステラスが目の前にいるのに、それを無視して戦えと？」

「話聞いていましたか？」

桜家は四季が自分のことを嫌っているのを知っていた、それに加えこないだの一件。桜家はこの作戦に参加したくなかった、でも第二小隊のリゼリ隊長不在の状態での作戦を指揮するのが・・・と考えると参加を決めることになった。

「ハウন্ズは独立した組織だ、状況に応じた対応が必要とされる。状況によってはステラスを叩くことも十分に必要だと思う」

四季は思ってもいないことをサラサラと言った。だが周りの反応は好評だった。

「私は箱美芽隊長の意見に賛成だ」

ジャスの思わぬ反応に桜家は啞然とした。場は勢いに乗せられ四季の意見は採用された。

「では各自、作戦の準備をお願いします」

作戦が終わると誰も会話一つすることなく、殺気を放ちながら去って行く・・・

ベル又王国 国境付近 ベーテル大平原

アルルとティールは桜家の部下達に包囲されていた。

「それに、キース君の敵は僕達だけじゃないよ。加勢してくれるならどうぞ」

桜家がそう言うのと黄色い一閃がキースに向かう。そして、キースが吹き飛んだ。

「おっさん、こいつを殺したら次はおっさんだからな」

リオルはそう言うのと愛と共にキースを追撃する。リオルの一撃でキースのサングラスが吹き飛び、赤と青の目がさらされた。

「疲れるから使いたくないけどしょうがないかあ」

キースの赤い左目が鋭く表情を変える。迫るリオルの攻撃をかわし、リオルの顔を掴み地面に叩きつける。続く愛の斬撃を手のひらで叩き落とし、踏み倒し頭に銃口を突き付けた。

「ハイ、お仕舞い」

立ち上がるうとするリオルを踏みつける。

「ハウنزの隊長さん、アルルちゃん達を解放してくれるよね」

桜家は特に驚くこともなくキースと話続けた。

「だから、うちのお姫様はあんたを消したかったのか、こりゃ危ない、危ない」

桜家は部下にアルル達の解放を命じた。

「噂には聞いたことあったけど、それが魔眼ってやつ??」

キースは落ちていたサングラスをかける。

「博識な方で、そうも呼ばれてるね。でも本来は僕の物じゃないから、すごく疲れちゃう。だから使いたくないんだよ」

アルル達はキースのもとへ戻る。二人かなり消耗している様子で、キースのもとに着くなり膝をついてた。

「ありがとう、一応二人を助けてくれた、お礼は言っておくよ。つり目のお嬢さんも、さっきはありがとう」

キースの態度にイラついたジャスが能力を使うのを桜家が止めさせた。

「ジャスちゃん、もういいよ」

キース達のもとに数人の部下が現れた。

「お迎えありがとう。それじゃ、帰ろうか」

アルルとティールはキースの部下と共に転移し姿を消した。

「そっぴや隊長さん、君は最後まで能力を使わなかったね。出し惜しみは卑怯だよお」

キースは愛に向けた銃のトリガーに指をかけた。愛はキースを睨み付ける。

「キース君、僕は能力を使うのはかまわないけど、使ったら無傷では帰さないよ」

キースはニヤリと笑いトリガーを引いた、一発の銃声が響いた。キースはニヤけたまま桜家を見ていた。そして、キースは自身の腕に傷みを感じる。

「えっ……」

リオルがキースの銃を持つ腕を握り潰した、骨の砕ける音が響く。

「これは？」

愛がいた場所にはリオルが、リオルがいた場所には愛がいた。

「キース君、覚悟は出来てるよね」

リオルは楽しそうに、キースに拳を叩き込んだ。駆け寄る部下を愛が食い止める。リオルは潰した腕を放すことなく、キースに全力で拳を叩き込んでいく。

「てめえはここで死ぬ」

リオルの片手がキースの腕に押し付けられた。衝撃と共にキースが吹き飛ぶ、リオルの肩から煙が吹き上がる。

「クソが！！」

キースに向かうリオルを桜家が止めた。

「やめておきな、君じゃ相性が悪すぎる。あいちゃんももういいよ」
リオルはその言葉に苛立ちを感じながらも冷静に動きを止めた。

「痛いなあ、欲張るとろくなことがないね。大損だよ」
キースはそれだけ言って部下と共に姿を消した。

リオルはただ立ってキースのいた所を眺めていた。

「その君、さっきはありがとう。よく反応してくれたね」

桜家はリオルに話かけた。リオルは不満そうに答えた。

「ああ、お前はあいつの能力がわかったのか？」

桜家は部下に撤退を命じて話始めた。

「そうだね、あいちゃんわかったかい？」

愛は刀をしまい、その場に座り込んだ。

「目は動体視力かなんかの強化、たぶん体その物も強化されてるかも。あと奴自身のはたぶん選択者キャンサーか何か」

桜家は軽く拍手を送った。

「僕も同じ意見さ。たぶん彼は自身への外界からの事象を選択出来る、だから彼が反応、認識出来る攻撃は受け付けない」

「だから、俺の攻撃は当たったってことか？」

「そう、一発目は奇襲で二発目は油断から。彼の能力はあの目と相性が良すぎる、悪く言えば目がなければ、それほど脅威ではないってことだけだね」

リオルは地面を殴って叩き割った、キースを仕留めるチャンスを二度も逃がした自分自身に怒りを感じていた。

「正直な話、僕の力は奇襲向けだね。さっきの一撃で彼を仕留めるつもりだった」

愛とリオルは驚いたように桜家を見た。

「仕留めるつもりだった？」

「そう、君と一緒に彼を殺すつもりだった。でも、僕が気付いた時には彼を君から離れていた」

愛とキースはより不思議そうな顔をした。

「両目は別物だよ。彼は自衛に関しては間違えなく世界一だよ、たぶんステラスくんでも勝てない」

「お前達はどうするつもりだ？」

「僕達の第一目標はキースを消すこと、ステラス君は正直な話、脅威じゃない。うちのお姫様はもしステラス君が、以前と変わっていたら、殺すように言われただけ。彼はやっぱり話通りの善人さ。まあステラスを襲ったのはハウンズの頭の要望でね……」

リオルは桜家の話に少し笑っていた。

「僕達ハウンズはキースを狙う、君達とやり合う気はないよ」

リオルは立ち上がって、自身の手を見つめた。その手は機械で出来ていて、冷たく硬く傷だらけだった。

「お前達がステラスの腕を叩き切ったのは知っている」

リオルは拳を握りしめ桜家達を怒りに満ちた目で睨む。

「重力操作者が同盟に付いているのは知っているな。噂ではハウンズが重力操作者を撃退し、片腕をもらったと聞いている。それは事実なのか？」

桜家は頷いて見せた。

「そうか、提案がある。ハウンズの力を貸して貰いたい。奴の能力はステラスには危険だ、俺達では奴を止められない」

リオルは真つ直ぐな目で桜家を見つめた。

「全く、ステラス君の強さは能力じゃないね。いいよ、その子を貸すよ」

桜家は愛を見た。

「彼女の能力に重力は関係ない、そして彼女は自信に触れる物の質量も操作出来る」

リオルは座っている愛に近づいた。

「俺を投げてみる」

愛は刀でリオルの服を巻き付け持ち上げた。リオルはやや驚いていた。

「お礼はいいよ、こっちはキースさえ消せばOKだから」

「すまない」

「あつ、連携とか練習したいなら、その子連れてっていいよ」

愛は突然のことに驚き握っていた刀を落としそうになった。

「お姫様にはスパイとか適当なこと行っとくからさ」

愛はあたふたしつつリオルを見た、リオルは愛と目を会わせるとすぐに視線を反らした。

「じゃ、とりあえずは休戦とすること」

桜家は楽しそうに愛を残して姿を消した。

くっくく

第三章 C・C・C ? (後書き)

最後まであいがとつございました。

今回の投稿は少し期間があいてしまつと思ひますが、次回もよろしくお願ひします。

第三章 4 b y s 2 ? (前書き)

こんばんは。

間に合わなくてすみません。

今回もよろしく願います。

第三章 4 b y s 2 ?

第三章 4 b y s 2 ?

愛は今、旧デルガナ領土内のエグルガルム仮設基地にいる。

基地は仮設とは思えないほど大きくまるで移動要塞のようだった。私は怪我の治療を受け部屋に案内された。攻撃を受けた相手に治療されるのは何とも不思議な気持ちだった。様々な機械が医療室や多くの施設に満ちていた、流石は世界一と言う所か。私には監視役も特についていなく、刀も私の手元にある。流石にここまで自由だと少し不安なくらいにも思える。私はすることもないのでシャワーでも浴びてくつろいでいた、普段は着物しか着ないのだが代えがないので、仕方なく用意されていたものを着ることになった。白で統一された軍服は何だが、私達ハウنزのモノと対照的で違和感があった。(私はあまり着たことはないが)ベッドに横になりながら戦いのことを思い出していた、ステラスとの戦いは相手にもされず、キースには手も足も出なかった。この現実が自身の実力を思いしらされた。

その時、部屋の扉が開き二人の少女が入って来た。

施設内 作戦室

「とつ言うことだ、ステラス」

リオルはステラスに話の有りのままを告げた。ステラスも最初は頭を抱えていたが、リオルの考えが自分の為だと分かると何も言えなかった。

「この件はリオルに一任する。私はしばらく本国に戻るその間は頼んだ」

二人の会話はとても自然で二人が長い友人であることが滲みでいるような様子だった。

「任せとけよ」

愛は二人の少女に連れられて様々な施設を案内された。二人は前回の戦いでステラスと共にいた少女達のようにだった。どうやら私のことを嫌いらしく、愛想ない説明を繰り返していた。食堂を案内されていた時だ、一人の男に声をかけられた。

「やあ、君がリオルの連れてきたお侍さんか。噂より若いなあ」

私はこの男が嫌いなタイプのだと何故か一瞬で分かった。

「バース、何の用だよ」

「変態は寄って来るな」

どうやらこの二人は私と同じでこの男が嫌いならしいな。

「ミラちゃんもベガちゃんも失礼だなあ、誤解されちゃうじゃないか。僕はバースさつ、君名前は何て言うの？」

私は答えるのが物凄く嫌だったがしかたなく名乗った。

「包刃^{つづみや}」

「包刃ちゃんか、よろしくね」

この男は思った通りの奴だった、これが敵地でなければ斬り倒していただろう。バースはそう言うのと、愛の手を取り口付けをしようとした。愛は反射的に刀を抜こうとしたが、刀を抜くことは出来なかった。

「駄目だよつ、僕じゃなかったら真つ二つさ」

バースは愛の後側から刀を抑え耳元で囁いた。周囲の目が自分達に向けられている恥ずかしさより、こんなにも簡単に背後を取られたことに頭が一杯だった。

「それじゃ、またね」

バースはそう言うのと去って行った。私はこの後も色々な場所を案内されたが、殆ど頭に残らなかった。（ほんと最近はへこむばかりだよ）

その日の夜、私の部屋にステラスが現れた。私を案内した二人の部下はどこか嬉しそうにステラスの横にいた。吊ってはいいたが切り落

とされたステラスの腕は、しっかりと元の位置にあった。

「包刃 愛でいいのかな？アステリオスから荷物が来ていた。一応、危険物がなか中身をスキャンさせてもらったよ、すまないね」

荷物は私の旅行バッグだった。今回の任務の為に準備したものを届けてくれたらしい。

「話はリオルから聞いている、こちらとしても悪い話ではない。君の力を貸して貰おうと思っっている。君のことはリオルに一任することになっている、私はしばらくは本国に戻るの何かあったら彼に聞いてくれ」

私はリオルが誰か分からなかったが、たぶん金髪のあいつだと思った。「話は以上だが、何か聞きたいことがあったらどうぞ」

ステラスの雰囲気はどこか柔らかく、こないだの戦闘とは別人のようだった。

「この施設を好きに使ってもらってかまわないよ、演習相手もたくさんいるだろうから好きにしていよ」

ステラスは軽い笑顔を見せる。私は正直な話かなり驚いていた、私が知っている能力者の多くは人間性に乏しい者ばかりだった。しかし、世界最強と言われる能力者は人格者だった。私は今まで能力が高いほど精神は歪むのだと思っていた、何故ステラスが部下に慕われているか容易に理解出来る気がした。

「この国で二番に強いのは誰か教えてくれ」

愛の質問にステラスは特に渋る様子もなく答えた。

「その質問は私が一番と言う前提かな？」

「違うのか」

「この国に私が勝ったことのない者がまだ二人いるよ、引き分けも一人いる」

「バースと言う男か？」

ステラスは少し笑って答えた。

「彼もその一人だよ、まさかもう会っていたなんてね。彼も毒のある男だからね」

愛はそのことをすでに十分に理解していた。

「バースには勝ったことはない。あとリオルは今のところは引き分けだよ。バースは演習の相手をしてくれると思えないけど、リオルはしてくれるよ」

ステラスは感じ良く色々な説明を私にしてくれた。私は彼の口から出た名前をしっかりと記憶した。ステラスはそれ以外にも他国に伝えてよいと思えないことを、私に伝えて部屋を後にした。私もこんな上司を持つ事が出来ればと真剣に考えてしまった。

この日よる私は部屋を抜け出し、デルガナスを散歩していた。すると大きな競技場コロシアムがあった。闘技場は古く人気はまれでなかった、私は闘技場から月を眺めた。

「もう少しで満月だな」

私はイヤリングをそっと月明かりに照らした。

「私は何をしているのだろうか……」

エグルガラム 中樞

ステラスは真っ白な部屋で扉の開くのを待っていた。

「お客様をお連れ致しました、ステラス様」

「ご苦勞、どうぞ入ってください」

扉の向こうには二人の少女がいた。

「お久しぶりです、ステラスさん」

「始めまして、ステラス・クルネス」

二人はとても美しく、そして鋭い目をしていた。

「こちらこそ、お久しぶりですエスナ姫。そしてリシアさんも……」

旧デルガナ領土 エグルガラム仮設基地 演習場

白くガラス張りの観戦室もある、綺麗な演習場は熱気に包まれて

いた。

「やつちまえ!!!」 「エグルガルの力見せてやれ!!!」 「あの子可愛くないか?」 「でもリオルの女らしいぜ・・・」 「マジかよ」 「でも、昨日バースの奴もちよつかい出していたらしいぜ」 「すげーぞ!!!」

最初は演習風景を眺めていた愛に、一人の兵が絡んだのが始まりだった。愛は現在七人を倒している。そのうちの三人はトライデントだった。最初は一人で挑んで負けた、次に二人で挑んだが結果は変わらなかった。愛は八人目を簡単に気絶させ、次の獲物を探していた。

「あなたがリオルの連れてきた子?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

愛の前に長い髪で長身の女が現れた。

「無視、まあいいわ。バースの奴、こんな子供にリオルが興味あるわけないわ」

愛は女を睨みつけた、女は引くことなく顔を近づけた。

「子供はさっさとお国に帰りなさい」

女ほそれだけ言うつと愛に背を向けた。

「そんなこと言う為に来たの、モテない女丸出しだよ」

女は振り返り腰にあった武器を抜いた、それは銃と剣が合体したような武器だった。

「あら、口の悪い子供のしつけは大人の責任よね」

愛も刀を構え、負けじと言い返す。

「ありがとう、おばさん。よろしくお願いします」

愛と女はいつきに距離をつめた。

「バースさん、大変なことになっていますよ」

バースは物陰から二人を眺めていた。

「大丈夫、大丈夫、今はステラス居ないんですよ。シールの奴も殺しはしないでしょ、それに何かあっても責任はリオルだしさっ」

「バースさん……」

「さあ観戦、観戦。包刃ちゃんの実力はと!!」

数分前 基地内通路

「やあ、シールちゃん。ご機嫌斜めだね」

バースは長髪で長身の女に話かけた。

「お前みたい男に声をかけられて、機嫌のいい女なんていなよ」

「ひどいな、僕はこんなにも君を……」

シールがバースを壁に叩きつけ、首元に刃物を突きつけた。

「ごめん、ごめん。ちよつとふざけすぎたよ。ゆるしてよっね」

シールは刃物をどかした。

「でも機嫌が悪いのは僕だけのせいではないよね？」

「黙れ、次は殺すぞ」

「怖いなあ、アステリオスからの女の子のこと気になってるんでしょ？」

シールの表情が変わり、バースの話に耳を向ける。

「そうだよねーえ、リオが女の子を連れて来るなんて初めてだものね。リオの好みが……」

「どんな奴だ……」

シールは恥ずかしそうに小声でバースにきいた。

「えっ何、どんな子か？可愛い子だったよ。僕が会った時はうちの軍服だったけど、着物が良く似合う子らしいよ。小柄だし、男は着物で……」

砕けるような音が響いた、シールの蹴りが壁を砕いた。

「どこにいる？」

「シールちゃん？どうしたの？」

バースはシールの口元に耳を近づけた。

「許さない、リオルを、私がいっただれだけ……」

バースは笑みをこぼしながら言った。

「さっき演習場で着物の女がうちの兵士を打ちのめしているって、

誰かが言ってたよなあ」

シールは進行歩行を変え演習場のある方へ向かって行った。

「シールちゃん、本当に可愛いなあ」

〜つづく〜

第三章 4 b y s 2 ? (後書き)

最後までありがとうございます。

今回はエゲルガラムのお話でした、彼らのことを中々紹介する機会がなくようやく書くこと出来ました。次回もこのような形になると思いますのでよろしく願います。活動報告の予定・・・、無茶言っ たなあ・・・ (笑)

第三章 4 b y s 2 ? (前書き)

こんにちは。

どうにか投稿出来ました。もう少し彼らのことを書きたかったと思
いながらも、今回はここまでかな??

第三章 4 b y s 2 ?

第三章 4 b y s 2 ?

旧デルガナ領土 エグルガルム仮設基地 演習場

演習場は多くの観客によつて熱気に包まれていた。二人はお互いの力を探りながら戦っていた、シールの蹴りが愛の体に直撃した。

「ひらひらとうざったい子ね」

愛はシールの蹴りに押されただけだった、シールのどの攻撃も愛にとつて決定打にならない。

「その能力最悪よ」

シールは剣銃を放ち、距離を詰め寄る。愛は一閃を放つ。シールが後に引くと軍服の胸の部分が裂ける。

「ちっ」

「能力はもう使わないよ、おばさん」

「小娘が舐めるなよ」

シールがさっきの倍以上の速度で距離をつめる、愛は反射的に迎撃する。互いの一閃が弾きあつ、愛は崩れた体勢を立て直し、刀を振るおつとする。しかし弾かれたはずのシールの剣銃が愛に迫る、それを愛がかわす。それだ剣銃は剣筋を曲げ愛にまた迫る、剣銃の攻撃にシールの打撃が混ざる。シールの拳が愛を捕らえ、愛は壁に叩きつけられた。

「小娘が」

シールの剣銃が蒸気を吹き出す。愛は刀を支えに立ち上がる。

「これが本気？」

「いいえ、小娘ごとき出すわけないわよ」

愛は刀を持って構える。

「本気で来ないと後悔するよ」

「誰が後悔するのかしら」

愛とシールは再び距離をつめる。その時、熱気に包まれた観客が静

まる。

二人の間をバースが遮り、壁へ叩きつけられた。バースは壁にめり込み、崩れ落ち煙の中を見つめる。

「手加減ないなあ、死ぬよ。普通はさあ」

「二人ともやめろ、シールもこんなグズの話の聞くな」

リオルが煙の中から現れる。

「リオル、ごめんなさい。でもね、私は……」

シールは恥ずかしそうにリオルに話かけるが、リオルは愛に近づいた。

「うちの奴らはどうだったか？」

愛は赤くなっているシールを見て言った。

「悪くない」

「本当に、包刃ちゃんが満足して……」

突然、愛の横に現れたバースにリオルの拳が食い込み歪んで消える、リオルは直ぐに向きを変え拳を振るう。愛には何が起きたのか分からなかった、今度はバースは倒れ込む。

「痛いなあ、何でリオルは僕を殴れる。ステラスだって僕を捕らえられないのに」

「カスの気配がするんだよ」

バースは身の危険を感じ、観戦席へ紛れ込む。

「僕はもう満足だよ、包刃ちゃん。またねえー」

愛は目の前の光景に驚いていた、リオルは確かにバースの動きを捉えていた。私には捉えきれない動きを捉えていた。愛にとつてのリオルの印象は、キースとの戦いだけだった。目の当たりにした一撃は速く、無駄のない身のこなしは美しかった。愛はある程度の武術の知識を持っている、だからこそリオルの強さがすぐに分かった。

「私と戦ってくれ」

愛は自分の思いを素直に言葉にした。リオルは軽く返事をして構えた。

「いいぜ、ただし手は抜くなよ」

愛は直ぐに先制の一閃を放つ、リオルの一撃は愛を捕らえる。愛はリオルにぐつたりと倒れ込んだ。

「悪くないか」

リオルの腕から血が滴る、リオルは胸の辺りから切り裂かれていた。リオルは自身の傷を眺めて言った。

「いい一撃だ」

愛が目覚めると自分の部屋だった、窓際にはリオルが座って拳を見つめていた。

「起きたのか、大丈夫か」

愛は腹部に少し痛みを感じたが、たいした怪我ではなかった。

「大丈夫だ」

「そうか、お前の名前。包刃つみやでいいのか？」

「そうだよ」

二人の会話はぎこちなく、不思議な間を持っていた。

「リオルでいいのか？」

「ああ」

少しの沈黙が続いた。

「お前もステラスの為に戦っているのか？」

「せっかく名前聞いたんだから、名前で呼べよ」

リオルは少し笑っていた。

「すまない」

「結局、呼ばないのかよ」

リオルは拳をゆっくりと閉じたり開いたりしながら話始めた。

「俺は違うな、戦うのは自分の為だよ。俺は今を失いたくない自分の為に戦ってる。守れる者はすべて守りたい、俺の体がどうなるうとかまわない」

愛は静かに話を聞いていた。

「動きや切った感覚で分かったと思うが、俺の体の半分以上は機械だ。血を流す機械さ」

リオルの言葉はどこか悲しく感じた、私より明らか人間らしい者は、私より遙かに人間から遠い。

「お前は人間だよ、私なんかよりさ」

リオルは愛の言葉に驚いていた、リオルは突然上着を脱いで背中を見せた。傷だらけの背中には金属が見えた、確かに人間の背中ではなかった。でも僅かな肌に残った傷はとても人間らしかった。

「触ってもいいのか？」

「ああ、俺の能力は発熱だ、でもこの力に体が耐えられなかった。だから俺は力を手にするために、体を改造した。後悔はしていない、でも時々思うんだよ。いつか本当に機械になってしまうのかなってさ」

愛はそつと背中中に手を触れた、体はとても温かく不思議と気持ち良かった。

「機械か、私はな戦う理由が見つからないのさ。軍隊に入ったのも頭を使うのが嫌だったくらい。力をいくら求めても、必ず上がいる。私は戦うだけの人形だよ。こないだ初めて友人が出来た、彼女は国のために戦った。私は作戦に従い彼女を討った。私は今になって考えてしまう、私は正しかったのかと」

愛はリオルの大きな背中に額を当てた。リオルの体が僅かに震えた。

「そいつはお前に託したんだろ」

「託す？」

「ああ、託すものは人による。形のある物、形のないモノ、でもそれは託された奴にしか分からない。」

愛はそつとイヤリングに触れた。リオルはその様子を見ていた。

「見てられないってさ」

愛はリオルを見つめていた、リオルは立ち上がり上着を着ていた。

「そいつがさ、心配そうで見られないってさ。俺は多くの仲間を失っている、でもそいつらはきつと俺を見ていると思う。だから俺は迷わない」

その言葉は愛にとって特別だった、震える心が涙となり現れる。リ

オルは愛を見ることなく部屋を出た……
次の日、私はリオルに演習相手を頼んだ。リオルは軽く返事をして私達は作戦に向けて訓練を始めた。

バースは演習をする愛とリオルを退屈そうに眺めていた。

「はーあ、何かここまで仲良しさんだとつまらないな。シールちゃんも何かするかと思ったたらシヨックで寝込んでるし、はーあ」

演習場では複数の攻撃が二人に向かっていった、それを愛の能力がリオルを助け攻撃をかわし続ける。愛の反応速度はリオルに引つ張られ確実に上がっていた。

「包刃ちゃんも俺を切れるようになったら困るなあ、しかも噂によると夜二人でコソコソと出かけているみたいだしさあ」

その時、後から物音した。そこにはシールが倒れていた。

「あちゃ、また倒れちゃったよ。全く見た目は強そうなのに、中身は可愛い限りだよ」

バースはシールを観戦席に寝かせていた。

「全くだよ、シールがいると分かっている言うのだから」

バースはそーっと振り返るとそこにはステラスがいた。

「帰って来ていたのかい、ステラス。僕に気配を悟られずにこんな近くまで来るなんて怖い、怖い」

ステラスは観戦席に座り、愛達を眺めていた。

「私がない間に、二人ともだいぶ強くなったな」

「そうかい、僕は面白くないけど」

「そうかもな、包刃くんは以前に比べて反応速度などが上がっている。彼女はもともとの能力が高い、だから見える、聞こえることに敏感で自身の直感的なモノが生かせてなかった。それが感でお前を殴るような男と一緒にいるんだ、自然と分かってきている。そしてリオルは動き柔らかくなった、彼女の動きの影響だろう」

ステラスは楽しそうに二人の話をしていった。

「わかつてるよ、そんなことはさ。それより、アステリオスとはどうなの？」

「事実上の同盟関係を結んだ、こちら側の依頼で表だった支援は控えるようにしてもらった」

「そうかい、まあ味方は多いにこしたことはないよ。あえて深いことは聞かないからね」

ステラスとバースもまた長い付き合いの関係だ、二人の会話はどこか互いを疑うような雰囲気にもまれていた。

「でも、僕はリオルみたいに君に従わないよ。この命は僕のものだからね」

ステラスは愛達を見たまま話続けていた。

「かまわないよ。でも今の君じゃ、二人に勝てないかもよ」
バースは睨むように愛達を見つめた。

「かまわないさ、僕は力なんかには執着しないからさ。僕はもう戻るよ、君が戻ったってことはそろそろ戦うんでしょ」

「ああ、明後日に仕掛ける」

「了解、じゃーねえ」

ステラスは観客席から演習場に降りた。

「二人とも手伝おうか？」

愛とリオルはステラスに向かった……………

くっくくく

第三章 4 b y s 2 ? (後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

主人公が愛になりつつある・・・、いや彼女は主人公でない!!!

今回、本当はリゼリとロイテルが登場する予定でした。とある事情

から延期へ。

三章にロイテルの出番がまだ・・・

次回もよろしく願います。

第三章 4 bys 2 ? (前書き)

こんばんは。

たぶん？まで続きそうです・・・、もう暫く開戦までお待ちください。

今回もよろしく願います。

第三章 4 bys 2 ?

第三章 4 bys 2 ?

数日前 エグルガルム 中枢

ステラスは二人の年齢より遥かに高い能力に驚いていた。

「これが私の掴んだ情報のすべてよ。」

エスナはステラスに書類を渡した、ステラスはそれに目を通した。

「そちらは包み隠さずと言うことか」

「そうね、連合軍のこと、私達のこと、そして世界の動き。」

エスナははつきりと尋ねた。

「今回の侵略は^{シグナス}の意思」。

「そうだよ」

とはエグルガルムの持つ世界一の演算処理装置。この がエグルガルムのまさに脳だ。

「そして、あなたが求めた解はノーク・シャーレスタを救う方法。」

ステラスは組んでいた腕に頭をつけ、下を向き暫く黙り口を開いた。

「すべて分かっているんだな、だからここに来たのか。君もすべてを知ってここへ？」

「そうね、私はあなた達が医療系の能力者や研究者を秘密裏に集めていたことを知っていたわ。そして、今回の侵略」

リシアは歯切れよく話す、リシアの落ち着いた雰囲気はどこか冷たくも感じられた。

「確かにエグルガルムはいつ侵略を開始してもおかしくなかった、でも決定的な理由がなかった。そして、何よりもあなたがいた」
エスナが割って入る。

「私はあなたを知っていた、だからこそ今回の侵略の原因が分からなかった。でもとある噂を聞いた、あなた達とノーク・シャーレスタの関係。いやあなたとノーク・シャーレスタの関係かしら。」

「ノーク・シャーレスタ。天才的な科学者で の生みの親」

ステラスは二人の話を静かに聴いていた。

「君達は何故ここへ？」

エスナとリシアは声を合わせて言った。

「を使わせて欲しい」

「アステリオスは今回の戦いはエグルガラムに力を貸すわ。そして、ノークの件も出来る限りの力を貸すつもりよ。」

リシアは分厚い書類を渡した。

「これらはMTCわが社の新兵器よ、すでにテストは済ませている。いつでも使えるわ」

「私達エグルガラムは今まで一度も他国に を使わせたことがない。例えばいかなる取引や恩恵があってもだ」

「彼女に会わせて欲しいの」

ステラスはエスナの言ったことにすぐに反応した。

「それは出来ない」

「彼女の状態は十分に知っている、だからこそ会わせて欲しい。私には彼女の病を知っているかもしれない」

「私達がいつたいどれ程の能力者や研究者を集めたと思う？それでも分からないことが君に分かるのか？」

ステラスは感情的に声を出していた、その声が仕草がノークへの思いを表していた。

「彼女は能力者よ」

ステラスは動きを止めた、リシアがステラスに一枚の紙を渡した。

「これはMTCの最高機密よ、そして彼女は私の祖母。世界最大の軍事会社MTCの生みの親、そして万人マスターピースの脳マスターピースの能力者よ」

「万人の脳？」

「彼女は物事を考える時に、自身の脳を活性化させ、思考や演算を人間いや機械よりも早く行えた。そして万人マスターピースの脳は侵食型の能力だった」

「ノークもたぶん万人マスターピースの脳よ」

「私は一人侵食型の能力者を知っている。彼の能力はそんなに危険

な侵食率ではない、でもノークのモノがどうかは見てみないと分からない。」

ステラスは驚きのあまり言葉を失っていた。

「彼女は自身の能力に気付いていな、そして彼女は無意識に万人の脳を^{マス}發動している可能性がある」

「侵食は直せるのか？」

「それはまだ分からない。私の知る者はある程度なら時間と自然治癒で治せる」

ステラスの心は大きく揺れ動き、彼が覚悟していたことが揺れ動く。

「彼女はいくら時間がたつても回復しない」

「私の祖母も若くして亡くなっている、でもノークよりは遙かに年上よ。でも彼女の年齢は若すぎる、必ず何か原因があるはずよ」

ステラスはじつと考え決断を下した。

「彼女に会わせよう……」

大商業国アルファルド

西洋風の大きな屋敷のホールには多くの客人が呼ばれたパーティーが行われていた。

「まったくキースの奴は戦争中というのに」

「あいつのことなど考えることなくてよ、今は楽しみましょう。これが最後の晩餐になるかもしれないし」

アルルはワインを爽やかな笑顔と共に口に運んだ。アルルは水と布で出来た露出の高いドレスを着ていた、それと対照的にティールは真っ黒な上品なドレスに身を包んでいた。

「ティールはせっかく私と同じ位美しいのに、いつも怖い顔ばかりしているから殿方が寄り付かないのよ。もつと笑いなさい」

ティールはガラスに映る自身の顔を眺めた。

「怖い顔か……」

アルルはすでに数人の男達と話し始めていた。

「あちらがガルダスのティール・パールスよ、お噂は皆様のお耳に入っていると思いますわ。実は……」
アルルはティールに目で合図を送っていた。

「アルル……」
ティールはガラスに映る自分にかすかに微笑みアルルのもとへ向かった。

突然、ホールの電気が消えた。二階から一階に繋がる大きな階段の上にキースが現れた。サングラスとタクシードと言うなんともいえない組み合わせだった。

「皆さん、本日はこん戦争の真つ最中にお集まり頂きたいへん感謝しております」

キースは客人達の笑いを誘った。

「本日はエグルガラムとの決戦前に、皆さんに少しでも結束、団結して頂きたいと思い、このようなパーティーを開催させて頂きました」

そして、大きな入り口にライトが集まった。

「今回のスペシャルゲスト、そして最強の助っ人を紹介いたします」
会場は静まり返り、キースの言葉を待つ。

アンティック・イマジネーション
「幻想の道化師です」

会場はざわめき扉が開くと共に静まり返った。扉の向こうからは両手に二人の女を連れた、オールバックに杖を持った男が現れた。

「皆さん始めまして、私は幻想の道化師の団長を務める。ステイグ・フェニシアでございます、よろしくお願いいたします」

ステイグはホールの中央まで来ると深く頭を下げた。

そして、辺りは鮮血に包まれた……
死んだ者、切り裂かれた者、折れ曲がった者……、半分近い者が一瞬で命を終えた。ステイグは顔を上げ、両手を広げ話始めた。

アンティック・イマジネーション
「今のは幻想の道化師流のご挨拶でございます。謎の多い組織な故、

信じて頂く為にこのようなイベントを行いました。それにこの程度のことでお亡くなりなる方は、どの道長くないかと思ひましてね」「誰一人として彼のジョークに笑わなかった。」

「皆さんお楽しみいただけましたか？」

沈黙が続く中、キースの拍手が響き渡る。そして次第に大きな拍手に包まれる。

「ありがとうございます、それではパーティーの続きを始めましょう。」

ステイグが指を鳴らすと共にあつたはずの多くの死体や鮮血は姿を消し、何もなかったかの用にホールはもとに戻る。

「素晴らしいよ」

キースは二階から万遍の笑みでホールを見つめていた……

くつづく

第三章 4 bys 2 ? (後書き)

今回もありがとうございます。

今週は頑張って投稿していろいろと持っております。

よろしければお付き合いください。

あと三章が完結しましたらとあることを行います。

正直な話、読んでくださっている方々にはあまり関係ないのですが、

・

第三章 4 b y s 2 ? (前書き)

こんにちは。

今回もよろしくお願ひします。

第三章 4 b y s 2 ?

第三章 4 b y s 2 ?

真つ白な部屋に横たわるノークは儂く今にでも割れてしまいそうだった。エスナとリシアは彼女を見つめていた。

「間違いないわ、祖母の症状と同じよ」
ステラスは静かに目を閉じた。

初めてノーク・シャーレスタに会った時、彼女はすでに多く発明でこの国を救っていた。

「もし軍の研究に力を貸してくれるのなら、今以上の施設や研究費を約束する。悪い話ではないはずだ」

私が初めて彼女を見た時の印象はまさに花だった。その花は真つ白で弱々しく簡単に折れてしまいそうだった。私は彼女の目に強く魅かれた、とても美しく青く輝く目は希望を真つ直ぐに見つめ、奥には灯りがあるように思えた。

「良いお話だと思います。私もこれ以上の研究を行うには、より良い施設と費用が必要だと思っていました」
優しい声は私に届くと直ぐに消えてしまう。

「貴方の噂は聞いております。我が国の英雄で、部下思いの優しい人だと」

ノークは私を見て笑った、私はその笑顔を今でも憶えている。

「英雄、優しい人。どちらも違うよ」

ステラスは近くの机の上にあつた花を眺めて言った。

「私の力は戦うことでしか、仲間を救うことは出来ない。人を傷つけずに救うことが出来る君こそが英雄と呼ばれるべきだよ」

ノークはステラスに近づき机の上の花に水をあげた。

「私の力はこの花と同じ、誰かが水をくれて、守ってもらえなくは生きていけない。だから今ね、私がこうやって研究出来るのもあな

たがいるからなんだよ」

私は今でもその言葉が支えになっている。あの日の彼女の言葉なくては、私はもう潰れていた。

「あなたがいてくれたから、今の私が、みんながいるんだよ」

彼女の一言は私を救った…

ステラスはそつとノークの手を握りしめていた。微かに感じる暖かさ、彼女の優しさは今も彼を救い続けている。

「ノーク、次に君が目を覚ましたら聞いて欲しいことがあるんだ。だから、少し待っていてくれるか？」

返事のないノークをステラスは見つめ続ける。そつと手を離し、彼は戦いへ向かう。

「待ってるわ、ステラス。行ってらっしゃい」

ステラスは振り返り、横たわったままのノークに言葉を返した。

「行ってくるよ」

アステリオス王族専用機内部

エスナとリシアは隣会って座っていた。二人の間に言葉はなく、二人ともイヤホンをした。

「お互いに盗み聞きとは、お互いにどんな育ち方をしたのかしらね」
リシアが先に口を開いた。

「そうね、きつと考えていることも同じよね」

二人はクスクスと笑い始めた。

「ノークの件はあなたも、もう分かっているのでしょうか？」

リシアはエスナに尋ねた。

「そうね、彼には伝えるの？」

「彼が生きて戻れたら教えるつもりよ」

「生きて戻れたらか」

二人はニヤリと笑い、黙り込んだ。

大商業国アルファルド

ティールはパーティーを抜け出し、一人部屋で寛ぎながらさっきの出来事を思い出していた。ファンティック・イマジネーション 幻想の道化師のこと、スティーグ・フエニシアのこと、自身の戦いへの迷い。

「ティール！！無断でいつの間にか帰るなんて最低よ！！！」

ティールの部屋にアルルが入って来た。少し酔っているようで足元がふら付いていた、アルルはそのままティールの部屋のベッドに倒れ込んだ。

「アルル、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないわよ！！友達に裏切られた……」

アルルは涙を浮かべてティールを見つめた。

「この酔っ払いが」

「酔っ払ってないもん！！ティールが私のことをおいてくから」

ティールはアルルの隣に座った。

「そのことは謝るよ、すまなかった。どうもこの手のことは苦手ですね」

ティールは恥ずかしそうにアルルに謝った。アルルはティールに抱きついた。

「やっぱりティールは可愛いわ」

ティールはアルルの顔を見るとすっかり酔いは覚めていた。

「アルル」

「私をおいてった仕返しですこと」

二人は楽しそうに笑った。

「それよりも……」

「あなたの聞きたいことは分かっていますわ、ファンティック・イマジネーション 幻想の道化師、スティーグ・フエニシアのことですわね」

二人の表情を固くなり、笑顔が消えた。

「そうだ、私も幻想の道化師の噂は知っていた。道楽でしか動かな

い能力者の集まり、そして大半がSクラス以上の能力者。本当に実在していたとは」

「私も最初は驚きましたわ、でもあの殺戮ショー。信じるしかないわ」

「私も全くどの様な能力が分からなかった、何故私が生き残れたかも分からない」

アルルは部屋にあったワインを手に取った。

「でも一つだけ分かったことがありまして、気に入らない奴だということが」

「私もだよ」

アルルはティールにワイングラスを渡し、ワインを注いだ。

「乾杯……」

エグルガルム 大広場演説会場

国民の大半が今、一つの場所に集まっていた。これからステラスによる演説が始まるうとしていた。盛大な拍手と共に真っ白な服に包まれたステラスが現れた。演説は大きな戦車の上に作られた式場で行われていた。ステラスの後にはリオル達が立っていた。ステラスは簡単に挨拶を済ませていた、その姿は神々しく尊敬や憧れの眼差しが彼に集まっていた。

「皆さんに謝らなくてはならないことがあります。今回の侵略の理由には私個人の意思によるものです」
会場は微かにざわめいた。

「この戦いは私が一人の女性を救う為に行ったものです。この戦いで大切な人を失った者もいるでしょう、すべて私の責任です。私を憎み、恨んでもらってかまわない。私はそれだけのことをしてしまつた。如何なる報いは受けるつもりです、私の命も差し出す決意も出来ていま……」

ステラスの演説が続く中、リオルはステラスに向かう。ベガやミラ

は焦り止めに行くが間に合わない。リオルはステラスの肩を掴んだ、そしてステラスの顔を殴り飛ばした。ステラスは倒れ込んだ、会場はざわめきに包まれる。リオルはマイクを掴んだ。

「こいつは馬鹿だ、俺達を信頼していない。お前達、今回の侵略の理由知っていたよな？」

会場から響き渡る様々な声達。

「ステラスは隠し事が苦手だからな」「言っただけだったけど？」「今さら何言っているんだか、俺達はお前の一途な所にも憧れてるだけ」「あんたは誰にも嘘なんてつけないよ」

響き渡る多くの声、どの声もステラスを貶すものはなかった。

「俺達は何故軍に入った？俺は仲間をこの国を守る為に入った。一人だろうと関係ない、俺達が戦う理由には十分じゃねえか！！」

響き渡る歓声。リオルはステラスにマイクを渡した。ステラスがマイクを持つと会場は静まり彼の言葉を待っていた。

「どうやら私は本当に人の上に立つのが向いてないらしい」

最大の歓声が響き渡る。愛はこの映像に感動していた、隣にいるリオルは私を見て言った。

「これが俺のすべてだ。俺には勿体無いくらいだろ」

愛はリオルが、ステラスが、この国が羨ましかった。そして愛はこの人達の為に力を振るうことに誇りを持った。

「今回の作戦において一つだけ守って欲しいことがある。決して死ぬな、私は世界最強名をここに掲げ、この約束を守るう。だから君達もこの約束を守ってくれ」

歓声が響き空気が震える。

「ステラス、遂に世界最強を名乗ったね」

バースは嬉しそうに笑っていた。リオルはステラスの横に並び雄叫びを上げていた。

愛はこの二人を守りたいと心から思い誓った。

「包刃ちゃん、リオルは頼んだよ。彼はステラスと違って無茶苦茶だからさ、自分をきつと簡単に犠牲にしてしまう。でも君なら彼に

違う道を見つけさせることが出来るはずだからさ」

バースはいつの間にも愛の後に現れ、それだけ言って姿を消した。

両軍の開戦は間近に迫っていた。そして戦いは始まり、多くが終わりに向かい始める…

くっくくく

第三章 4 bys 2 ? (後書き)

最後までありがとうございます。

次回からは戦いです、なるべく分かりやすく表現できるように頑張ります。

三章も終盤に向けて動き出しました、私もなるべく時間を見つけて少しでも早く皆さんに読んで頂けるよう頑張ります。
次回もよろしくお願いします。

第三章 Starting On The Line (前書き)

こんにちは。

今回もよろしく願います。

誤字とつはあとで修正が入るかど、すいません。

第三章 Starting On The Line

第三章 Starting On The Line

旧デルガナス 上空 ハウンズ飛行艇

作戦室は以前とは違う空気が流れていた、前回の戦闘での撤退、第一小隊隊長の欠員は部隊に十分な危機感を与えていた。そして、今エスナとツバイが数人の部下と共に作戦室に現れた。

「今回の作戦の説明は私から説明します。標的はキース・アルファルドのみです、エグルガルトとはほぼ同盟状態です。」

エスナの言葉に驚く者はいなかった、しかしフロルはやり切れない思いを感じていた。

「私達はキースの排除、エグルガルトの援護を行いません。援護に關しては各自の判断に任せます。そして希望者には限界突破オーバーリミットの使用を許可します。」

部屋は騒然としていた。

「私の話は以上です。限界突破オーバーリミットの使用を希望する者はこのまま部屋に残ってください。」

多くの者は部屋を出て行った、残ったのはジャス、フロル、桜家の三人だけだった。

「姫様、たぶん限界突破オーバーリミットが何か分からない者もいますので説明をお願いします。」

桜家はエスナに説明を求めた、ツバイが前に出て話を始めた。ジャスは小声で「誰もお前に……」と言って舌打ちをした。

「限界突破オーバーリミットは姫様の能力です。一時的に能力を強化する力、それが限界突破オーバーリミットであり……」

ツバイは長々と説明を始めた。桜家はジャスの顔色とエスナの合図を受け取り話に割って入った。

「フロルくん、要するに能力の強化だよ。でもね、うちの姫様のはそんなレベルの代物じゃないよ。ね、ジャスちゃん」

ジャスは軽く頷いた、ツバイは話を止めエスナを見て後に下がった。
「今回、私は前線に出るつもりはないわ。だから使用時間は長くとも180秒。印術師達に好きな時に発動出来るように封印してもらおうわ。」

ジャスは立ち上がりエスナのもとに行った。

「能力対価は発動時間の倍の能力封印で、どの位の発動時間になる。」

エスナはジャスに触れた、一瞬エスナの手が輝いた。

「160秒くらいになるわ」

「それで頼む」

ジャスを数人が囲む、光と共にジャスの手の甲に印が刻まれる。

「これで今回の件はちゃらだ」

ジャスはそう言って部屋を出て行った。桜家はフロルの背中を押した。

「君も言ってきたな、四季の奴も必ず限界突破オーバー・リミットは使うからね。君も一度は体験した方がいいよ」

フロルはエスナの前まで進んだ。

「だいぶ雰囲気が変わりましたね。」

フロルはジャスと同じ対価を選択し、印を刻まれた。その印は黒と赤で呪いのように見えた。フロルは印を見つめ、拳を握りしめた。

ベルヌ王国 国境付近 ベーテル大平原

ベーテル平原に向かい合う両軍、互いに攻撃することなく長い時間が過ぎていた。

「こちらから進軍はするな、重力操作者グラビティ・ウオーカーが出てくるまでは動く必要はない」

ステラスは陣の中央に位置する移動要塞ジークフリードの司令室から、連合が動くのを待っていた。ジークフリードは列車のような形をしている、前面には障壁があり天使をモチーフにされたエンブレムが刻まれている。周囲を囲む戦車たちの何倍もの大きさをした鉄

の要塞は白銀に輝く。

そして戦いは始まった。連合軍が兵を進行させた、連合軍の大半はキースが雇った傭兵や賞金稼ぎ達だった。傭兵達はステラス達にかけられた賞金目当てに動きだす。一度動き出した彼らは能力の大きな波となり押し寄せる。

「全軍をジークフリードより後へ。ミラ、防衛システムは任せるよ」「了解しました」

ジークフリードに繋がれた三つコンテナの一つが開く。無数の平たい円盤が現れ、シールドを張り巡らせた。

「防衛システム作動率96%、エネルギー供給率も安定、問題ありません」

「ありがとう、では始める」

ステラスは司令室の中央の椅子に深く腰かけた、ステラスを機械達が囲む。司令室の中央に大きな立体映像のマップが現れた。そこには戦場が詳細に写し出される。リアルタイムで動く映像はまさに戦場の縮図だった。

「攻撃システム・バルムンクを で稼働」

ジークフリードのつながる、コンテナから無数の銀の玉が現れる。それらは集まりジークフリードの上に多きな玉を3つ形成した。

連合軍の攻撃はことごとくシールドに阻まれた。

「ベガ、シールドを突破する可能性がある攻撃を確認。迎撃をお願い」

ミラは通信器に呼び掛けた。

「すでに確認している、了解」

ジークフリードの砲門から光が放たれ迎撃する。そして空に浮かぶ銀の玉から無数の光が放たれた、平原は炎と爆発に包まれる。圧倒的な火力が連合軍を焼きつくす。

「敵先行部隊の67%を撃退、第二部隊の進行はありません」
指令室にいたリシアは圧倒されていた。

「さすがはエグルガラム、これほどの兵器を所持していたなんて」

リシアはステラスに頼みこの戦いを司令室の特等席で観戦していた。

キースは特に驚く様子もなく戦場を見ていた。

「やっぱりダメだね、潰していいって彼に伝えてくれる」

キースはそう部下に伝えて自軍の一番後から観戦していた。

愛は目の前に大きな箱を持ってこられた。大男が二人係りでようやく運べるようなものだった。

「アステリオスの王女様からの贈り物だそうです。ステラス様から渡すように頼まれました」

愛は大きな箱を開けると手紙と無数の刀が入っていた。

「すげえ、こんな数の刀初めて見たぜ」

リオルは驚きながら刀達を見つめていた。愛は手紙を読み終え刀を選び身に付け始めた。背中に五本、腰に二本、手に一本の八本の刀を身に付けた。

「準備できたみたいだな」

リオルは壁のボタンを押すと隔壁が開く。

「これは・・・」

「走って行くつもりだったのか？」

「いや」

リオルは自慢げに言った。

「こいつが俺の相棒さ、刀も収納できるから積んでおきな」

愛は白銀の輝きに目を奪われていた・・・

「バルムンクをへ」

ジークフリード上の玉は一つに集まり、大きな玉となった。そして真ん中が空き回転を始めた。

「充填開始、270秒後には発射可能です」

時間は刻々と進む、連合軍のシールドに阻まれジークフリードには届かない。

「充填率75%、残り68秒です」

クールヒルトの発射が迫る、その時アラートが鳴り響く。

「重力場の変化を確認、きますす!!!」

衝撃が響き渡る、地面が歪み、砕けていく。

「防衛システムの限界点まであと6秒です」

ミラの声が響き渡る。

「君の兵器を信じているよ、充填したエネルギーを三番コンテナへステラスはリシアに言った、リシアは落ち着いて前を見ていた。

「CGF起動」

三つ目のコンテナが開き動き始める。

「重力場の相殺を確認。重力値平常時に落ちていきます」

リシアは満足げにステラスに尋ねる。

「CGFの稼働限界は480秒よ、さて次はどうするの?」

ステラスは通信機に話しかける。

「CGFの稼働限界は480秒、それ以上は保障出来ないそうだ。

あとは君達しただ、任せたよ」

「了解!!グラビティ・ウオーカー重力操作者の奴をぶっ潰してくる」

リオルの声が響き渡る。

「包刃つみやくんよろしく頼むよ」

「了解しました」

「しっかりと捕まっているよ」

愛はリオルにしがみ付いた、リオルは驚いたように愛を見ていた。

愛は不思議そうにリオルを見ていた。通信機からステラスの声が聞こえる。

「とにかくグラビティ・ウオーカー重力操作者を目指してくれ、防御、迎撃はこちらが行う。君達は安心して標的を目指してくれ、標的の位置はマップに表示されている」

薄暗かった格納庫の扉が開き、明かりが差し込む。

「いくぜ」

ジークフリードから白銀の輝きが飛び出した……

〜
〜
〜
〜

第三章 Starting On The Line (後書き)

最後までありがとうございます。

更新頻度の最多記録を更新です！！この調子を最後まで続けたいと思っておりますが・・・限界までは踏ん張りたいと思います！！！！

次回の更新はさすがに明日は無理かと思えます、すいません。

余談ですが、一日のアクセス件数の記録を更新しました。前から読んでくれている方、最近読み始めた方、ありがとうございます。

皆さんが少しでも楽しめるような物語を提供できるように頑張りますので、未熟な作品ですがよろしくお願いいたします。

P.S 予定よりすでに三話も間に・・・すいません。次回はMixThersDriveです。金曜日までには何とか投稿いたします！！！！！！

第三章 MixThersDrive (前書き)

こんばんは。

今回もよろしくお願ひします。変更や追記はほとんどありません。期待した方などたいへん申し訳ありませんでした。

第三章 MixThers Drive

第三章 MixThers Drive

ジークフリードから白銀のバイクが飛び出した。豪快に地面に着地し、押し寄せる能力者達の波に向かう。バイクは大型で白銀に統一され、天使の羽を持つ獅子のエンブレムが施されている。運転するリオルの後に愛がしがみつくと、振りそぐ能力や砲弾をかわし駆け抜ける。

「奴はこのまま真っ直ぐだ」

リオルはアクセルを踏み込み速度を増す。二人を多くの能力が襲う、それをステラスの銀の玉が迎撃し、防御する。通信器からステラスの声が響く。

「思った以上に数が多い、ある程度はこちらで対処するがそちらも対応してくれ」

リオルはアクセルを最大まで踏み込み、速度を増す。

「わかっている。包刃、行けるか」

愛はバイクの後に股がりながらバイクに積まれ刀を抜く。

「このまま突っ込む」

能力者達の波に二人が飲み込まれる。

「妖刀 影豹えいひょう」

ステラスの援護を突破した、肉体強化系の大柄の能力者が二人に飛びかかる。

「肩借りるよ」

愛はリオル肩を踏み、前へ飛び出し刀を振るう。刀から大きく黒豹が現れ男を飲み込み、駆け抜け道を作る。黒豹は辺りを食い荒らす。愛は更に力一杯刀を振るう、刀から現れる8匹の黒豹が現れ、刀は砕ける。愛はバイクの前に着地し、すれ違うバイクに宙返りでリオルの後に戻る。黒豹達は二人と共に駆け抜ける。

「奴の位置は？」

「あと少しで見える」

次々と迫り来る能力者達、その時前方に大きな壁が現れる。リオルがバイクの画面を操作する、バイクの前面が開き多数のミサイルが壁に向かう。壁は煙に包まれる、そのまま二人は直進しんする。煙が晴れると壁は傾いたが道を阻む。

「つかまつてる!!」

リオルは無理やり前輪を上げ壁を登る、頂上まであと少しの所で壁から車輪が離れる。愛は刀を抜き、振り払う。

「妖刀 山嵐やまあらし」

突風と共に壁が切り裂かれ、バイクは宙を舞う。壁の向こうにいた能力者達を飛び越え、空を翔る。愛は地面に向かい更に刀を振り刀が碎ける、突風と斬撃が地上の能力者達を襲う。

二人は能力者達をかわし、戦場を駆け抜ける。正面に黒い影が見える、黒い服の男は笑いながら腕を降り下ろす。

「潰れちやいなヨ」

地面が歪みくだけ散る、周囲にいた能力者達は容赦なく潰れる。黒豹達は潰れることなく重力操作者に向かう。

「重量操作系かな? めんどうだなあ」

重力操作者は二人に向かう、襲いかかる黒豹達を退ける。リオルはバイクごと重力操作者に突っ込む、すれ違いざまに愛が刀を振るう。リオルはバイクを掴み、重力操作者に投げつける。

「まったく容赦ないね」

バイクが重力の視界を遮る、その瞬間、大きな爪を持った腕がバイクを突き抜ける。突き抜けた腕は曲がり、重力操作者に襲いかかる。重力操作者は重力を操作しかわそうとする。

「あれ、ダメだ」

重力操作者はリオルの腕に捕まる、リオルの腕には大きな爪を持つアーマーが装備されていた。

「もう逃がさないぜ」

そして、愛の刀がリオルごと重力操作者を貫いた。

「捨て身とは感心しないね…」

愛は刀を引き、刀は碎ける。

グラビティ・ウオーカー重力操作者は地面に落ち、倒れ込んだ。リオルは平然と着地した。

「妖刀 儘猫ただねこ、この子は我が儘でね。自分の斬りたいものしか斬らない」

グラビティ・ウオーカー重力操作者は倒れ込み地面から二人を見つめる。

「どうやって僕の力を封じた…」

愛は光輝く手の甲を見せた。

「何だよ、これは流石に辛いよ。今回は僕の負けだネ」

グラビティ・ウオーカー重力操作者は体を空に向けた。

「まったく終わりは突然だな…」

グラビティ・ウオーカー重力操作者は笑いながら動くことを止めた…

「重力場の反応消滅、やりました」

ステラスは大声を振り絞り命令を下す。

「全軍進行を開始せよ」

トライデントや多くの兵士達が勢いよく飛び出す。

リオルと愛は敵軍の真ん中に取り残された。

「さあこっからが本番だ」

愛は背中の中の二本の刀を抜いた。リオルは全身の熱量を上げる、吹き出す蒸気が長い髪をなびかせる。大きな爪が赤く光始める。

オーバー・リミット「限界突破の使用限界はあと100秒くらい」

「十分だ」

リオルは雄叫びと共に敵の中に飛び込む、愛達の周りの能力者達は自分達の重さで動くことが出来ない。

「妖刀 繫雀ツルク」

愛の刀は相手を切るたびに早く、鋭く研ぎ澄まされる。リオルの爪は敵を引き裂き、焼き尽くす。その姿はまさに獅子、圧倒的な力を振るい戦場を駆け抜ける。愛は刀が碎けると新たなモノを抜く。

「妖刀 割熊わりくま」

刀は鞘から抜かれると大きく形を変える。愛が刀を振ると刀は大きく広がる、刀は切り裂くことなく相手を叩き潰す。

愛とリオルは圧倒的な力を奮った。愛の四本目の刀が砕けた時、手の甲の印は消えた。周囲にいた能力者の大半は地に伏せていた。

愛が新しい刀に手を伸ばした時、愛は吹き飛ばされた。

「包刃！！」

リオルは吹き飛び地面に倒れ込んだ愛を見た、愛がいた場所には二人組がいた。リオルは二人組に向かう。愛は強い痛みをこらえ、リオルに叫ぶ。

「後だ！！」

リオルの後からキースが迫る、キースの手に握られた漆黒の剣が迫る。剣はリオルの首もとをかすめた。

「てめえ！！」

リオルは向きを変え、キースを睨む。

「僕は我慢強い方だけでもうダメ、君たちは死んで」

キースの手に握られた剣は黒い影を纏いゆらゆらと揺れる。

「そつちの子は三人で殺しちゃって、能力も使えないしその傷だ、痛めつけて殺して」

キースの近くいた部下は転移して二人の仲間のもとに現れた。愛は何とか立ち上がり三人を見る。一人は以前見た空間転移者、残りの二人は傷の具合から肉体強化系だと思った。リオルは愛を見て、状況の深刻さを直ぐに理解した。

「こいつらは私やる、お前はキースをやれ」

愛はそれだけ言って刀を抜いた。リオルはキースと向かい合う、キースの両目は薄暗く光っていた……

〜つづく〜

第三章 MixThersDrive (後書き)

最後までありがとうございます。

今回は初の乗り物の登場でした、かなり分かり難くすみませんでした。改めて自身の表現力の未熟さを痛感しました。

予定よりかなり早いペースで投稿しておりますが、話数がそのぶん増えてしましそうです。

では、次回もよろしく願います。

第三章 Overs (前書き)

こんばんは。

ついに彼らの登場です、最後までいきに行ってください！

たぶん……

今回もよろしく願います。

第三章 O v e r s

第三章 O v e r s (H . s i d e s)

リシアは重力場の消滅を確認すると指令室を出た。廊下には二人の影が待っていた。

「二人とも作戦通りお願い」

「了解」「お嬢様のご希望通り」

二人の影は姿を消す、リシアもそのまま姿を消した……

エグルガルの軍勢が進行を開始した、その時ベーター大平原から大量の水が吹き出る。吹き出た水は量を増し大津波となりエグルガルの軍勢に襲いかかる。

「バルムンクを発射」

空に浮かぶ銀の玉から光が放たれる、しかし津波に飲み込まれ消えてゆく。

「駄目です、出力不足です。このままじゃ飲み込まれます」

「防御用の障壁を可能な限り各部隊の前面に、ジークフリードの防御は後に回していい」

ステラスの声が響き渡る、各員は自身の出来る力をすべて出し切る。その時、ジークフリード前に飛行船が現れる。

「こちらはハウنز第二小隊長の桜家、空から様子を窺っていたけどヤバそうなので助太刀させて頂きます」

飛行船の甲板にジャスが立つ。

「オーバーリミット限界突破」

ジャスは楽しそうに言い放つ、光輝く印。その腕は神の腕、すべてを掴み意のままに掃いさる。ジャスの後に暗い影が現れる。

「いくよ」

ジャスの手の動きに合わせて巨大な手がジャスの後に現れる。

「そこをどきな!!!」

ジャスは津波に向けて腕を開く、空間が裂け津波は真っ二つに割れる。そして空間ごと津波を投げ飛ばす。

「まだまだ!!!」

地上にいる連合軍を身見つめ、空間を掴み捲り上げる。空間は波のうち、連合軍を飲み込んだ。

「ジャスちゃん、あいちゃんも地上にいるんだからもっと気をつけて!!!」

「分かってるよ」

ジャスは両手を広げ連合軍の左右に腕を向けた。

「これで終わりだ」

ジャスが手を握ると空間が潰れる、この一撃で連合軍の1/4が壊滅した。

「行きましようか」

「アルル、今夜の一杯も楽しみにしているよ」

「勝利の美酒をね」

二人は前線に向かう、互いにの力と再会を信じ……

ジャスによって弾かれた水は量を減らし、大きな貝となる。アルルはその中に飛び込み、空を飛びジークフリードに向かう。テイルルは魔物と共にジークフリードを目指した。

「桜家、私は時間切れだ。あとは頼んだよ」

ジャスは迫り来るアルル達に背を向け、甲板から姿を消す。

「あんたの力も見せてきな」

ジャスはすれ違うフロルの肩をそっと叩いた。

「ありがとうございます、行ってきます」

フロルは甲板を走り飛び降りる。

「いくよ、白焰の氷狼」

ハナルガルドム

少年は氷狼と共に空を翔る。そして巨大な貝へもう一つ蒼き閃光が向かった。

フロルは氷狼に乗りアルルの攻撃をかわしながら本体へ近づく。その時、蒼い閃光がフロルを追い越し、貝の中へと飛び込んだ。閃光はアルルの攻撃をかわすことなく、切り裂き前へ進んでいた。

「咲雷シキライ」

閃光が飛び込むと、巨大な貝は黄色く輝き、姿を崩した。水は空から地上へ流れ落ちて行く。地上には多くのエグルガルの部隊がいた。

「オバー・リミット
限界突破」

フロルの印が光、水たちは凍りつき氷狼と化す。フロルは地上に蒼い閃光が落ちていくのを見た。

「白焰バナルガラムの氷狼」

氷狼を通してフロルに映像が流れ込む、アルルを抱えた顔を隠した少年姿。

「どういうことだ、白焰バナルガラムの氷狼奴を追ってくれ」

気絶したアルルを抱えたロイテルは戦闘の行われていない所へ降りた。

「目標の確保を終えた、これより戦線を離脱する」

ロイテルがその場を離れようとした時、氷狼達がロイテルを囲む。

「君は何者だ、彼女は渡してもらおう」

フロルが氷狼と共に現れた。ロイテルはアルルを抱えたままブレードを抜いた。

「答えるきはないか、ではこちらも力づくでいかせてもらおう」

ロイテルは真っ直ぐにフロルに向かう、氷狼達がロイテルに襲いかかる。それらを簡単に切り裂きフロルに向かう。

「氷塊と化せ」

一瞬でロイテルのいた所が凍りつく、だがそこにはロイテルはいない。空からブレードがフロルに向かう、それをフロルはかわした。ブレードは細いゲートルと繋がっていた、ゲートルとブレードが放

電する。フロルは感電する中ケーブルを掴んだ。

「凍れ」

ケーブルを通してロイテルの半身が凍る、ロイテルはアルルをかばい地面落ちる。フロルもその場に崩れ落ちた。

「やあやあ、面白い戦いだっただよ。お二人さん」

全身を深い赤色で包んだ男がアルルの横に立っていた。男は赤いスーツに赤いコート、そして赤いハットで身を包んでいた。

「二人には悪いけど、この人は僕が貰うよ」

男はアルルを抱きかかえようと手を伸ばした。突然、男は感電して黒い塊と化し地面に倒れ込んだ。ロイテルは凍りついた足を引きずり、アルルのもとへ向かう。その時、黒い塊は突然立ち上がる。

「いやー、不覚だったよ。今度からは気をつけなくちゃね」

男の体はもとの姿に戻っていく、それは映像を巻き戻すように……。その光景に二人は本能的な恐怖を感じた。

「バナルガルドム白焰の氷狼」

男の近くに倒れ砕けていた氷狼が男に噛み付き、氷塊となる。

「砕ける」

フロルの言葉と共に氷塊は粉々に砕け散った。それと同時にフロルの腕の印は消える。印の消える直前にロイテルの凍った半身がもとに戻る。ロイテルはフロルを見た。

「早くベルヌの女を連れて逃げる!!!」

フロルの声が響く、ロイテルは急いでアルルに近づこうとした。目の前にはバラバラになった男が笑顔で立ちふさがる。

「油断できないなあ、もう二回も死んじゃったよ……」

テイルはアルルのやられる姿を見て蒼い閃光のもとへ行こうとした。そこをエグルガルドの部隊に捕まり戦闘になっていた。

「数が多い、早くアルルのもとに」

「じゃあ、減らしてあげるよ」

その声が聞こえると辺りは血に染まった、無数に現れた銀色の針や

棘が敵味方関係なく貫いた。

「どうだい？ すつきりしたかい？」

テイルは声のする方へ顔を向けた……

「ステラス様、第五、第六部隊の反応が……」

ステラスは拳を握りしめ、そして席を立とうとした。その時、通信機から声が聞こえた。

「ステラス、君はそこを動いちゃダメだよ。もしここで君が動けば他の部隊はどうなる？ 君の護衛システムのおかげでまだ犠牲者は少ない、君が冷静でなくちゃもつと死ぬよ」

バースの声が指令室に響いた、ステラスは席に腰を戻す。

「第五部隊達の所には僕が行く、他の奴らは邪魔だから離れるように言つといて」

「バース、気をつける」

通信機から笑い声が響く。

「笑わせないでよ、誰に言ってるのさ」

テイルの視線の先には真っ白なタクシードを来た男が立っている、その男の姿は戦場に不釣り合いで自身の目を疑うようだった。

「これはお前がやったのか？」

テイルは男に尋ねる、男は気楽そうに手を動かしながら言う。

「そうだよ、君が困っていたからさ。嬉しいだろ、もつと笑いなよ」

貫かれた兵士達は一斉に銀色の棘達が消え、地面へ崩れ落ちる。

「幻想の道化師か」

「正解、幻想の道化師所属マーク・シャウトでございます」

男は深々と頭を下げる、テイルはすかさずシャウトに斬りかかる。

「おつと危ないですよ」

男は頭を下げたままテイルの剣を、指に挟まれた四本のナイフで受け止めた。シャウトはゆっくりと顔を上げてテイルを見る。

「やっぱり綺麗だ」

真っ 白な道化師は笑い始める、壊れた人形劇の人形のように・・・

〜つづく〜

第三章 O v e r s (後書き)

最後までありがとうございます。

また登場人物が増えてしまいました、なるべく均等に出したいのですが・・・

次回もよろしく願います。

第三章 RedAndBlue(S)(前書き)

こんにちは。

今回もよろしくお願ひします、役者達が舞台にそろいました。
最後までお楽しみください。

第三章 Red And Blue (S)

第三章 Red And Blue (S)

愛にとつて最初の一撃は致命的だった、普段は能力により軽減されるはずの衝撃が体を壊す。刀を振るい、攻撃をかわす度に体に激痛が走る。

「ずいぶん辛そうだな」

大柄の男はあえて愛にかわせる攻撃を放ち、愛の苦しむ表情を見て楽しむ。

「もう少し痛めつけるか」

大柄の男は細身の男に命じた。細身の男の周りに黄色く輝く狐が現れる。

「行け」

狐達は愛を取り囲む、そして一斉に飛び掛かった。愛はその一匹を切り裂く。激痛と共に愛は崩れ落ちる。

「さっきらずいぶんと、あの子が気になるみたいだね」

キースは笑いながらリオルに漆黒の剣を降り下ろす、キースの剣はリオルを追いかけ、形を変え切りつける。どの傷も浅く、キースは楽しそうに切りつけ続ける。

「この剣はティールちゃんの特別製でね、一度切った相手は決して放さないよ」

リオルの反撃はキースにかすりもしない、キースの目は完全にリオルをとらえる。そしてまた愛の声が響く、キースはリオルを精神的にも追い込む。僅かに鈍ったりリオルをキースが切り裂く。

「そんなに気になるのかい？」

キースは万勉の笑みで言う。

「しょうがないな」

キースは攻撃をやめる、漆黒の剣は寂しそうに影を放出していた。

愛は地面に膝をつき立ち上がるうとする。その時、一匹の狐が愛を突き抜ける。愛の体を電撃が突き抜ける。

「しぶといな、この子達の電撃をこれだけ受けてるのに」

細みの男は愛に近づき触れた、愛の体にまた電撃が走る。愛は激痛に悲鳴をあげた。

「まだ殺すなよ」

大柄の男は楽しそうに笑っていた、もう一人の空間転移者の女は無表情に観戦していた。愛は地面に倒れ込む、愛は目の前に落ちていた刀に手を伸ばす。細みの男はその腕を踏む、愛はその男を睨みつける。

「何だよその目は」

男は足に力を入れる、愛は表情一つ変えず睨みつける。

「妖刀 夢鶴ゆめづる」

言葉と共に細みの男の胸を刀が貫いた。

「何で・・・」

男は刀が砕けると地面に倒れた、残りの二人も啞然としている。愛が力を振り絞り落ちていく刀へ向かう、刀に触れる寸前に刀は視界から消える。空間転移者の女が刀を蹴り飛ばした。そして愛に大柄の男の拳が迫る、そして愛は吹き飛ぶ。大柄の男は愛を拾い上げた。

「よくもやってくれたな、何をした？」

愛は男を睨みつけ言う、その目は鋭く殺意を込めたまま。

「夢でも見ていたんだろ」

男は愛を地面に投げつける、愛の体は地面に叩きつけられ、思わず痛みで声がでる。

リオルは愛に向かおうとした、目の前にキースが現れる。キースの剣がリオルの肩を貫いた。

「よそ見するからだよ」

キースの声にリオルは表情一つ変えない。

「もう十分だろ」

リオルが小さな声で言った。

「聞こえないな」

キースは剣を動かし傷をえぐる。

「頼む、もうやめてくれ」

キースは笑い愛の方に目を向ける。愛は大柄な男に首を捕まれ、持ち上げられていた。

「わかった、わかった、もう殺しちゃって」

大柄の男は腕に力を入れる、リオルは動こうとするが体が動かない。キースの持つ漆黒の剣が体に巻きついていていた。愛の唇が微かに動いた、その動きがリオルに言葉を伝える。

「何してんだよ・・・」

骨の砕ける音が響き渡った・・・

〈第三章 O v e r S (X . s i d e S) 〉

男は嬉しそうに笑う、ロイテルは迷うことなく隠していたショートブレードで男の首を跳ねた、首は地面に落ちた。ロイテルはアルルを抱え、その場を離れようとした。

「死んじゃうよその子」

地面に落ちた首が話始める。ロイテルは立ち止まり振り替える。

「ゲーム始まり、始まり」

男は落ちた首を拾いもとの位置へ戻す、そして何もなかったように葉巻を取りだし、口にくわえ吸い始める。

「その子は僕の毒に侵されている、あと10分くらいで死んじゃうね」

葉巻から出た煙は姿を蛾に変え飛び回る。男は小さな飴玉を取りだし、袋に包まれたまま飲み込んだ。

「今のが解毒剤だよ、欲しいなら取りに来なよ」

ロイテルは地面に刺さっていたブレードを抜き蒼き閃光と貸し、赤

き道化師に向かう。フロルは二人を見て決断を下した。

テイルはシャウトの攻撃をしのぐのが精一杯だった、シャウト攻撃は不可思議でまったく読めなかった。何より人間とは思えない動きを繰り返す。テイルは何とか落ち着く為に話かけた。

「何故、私を狙う？」

シャウトは攻撃を止めて話始めた。

「狙う？君が切り合いをしたいみたいだから、一緒に遊んでいただけだよ」

「違う、私の所に何故来た？」

シャウトはナイフを投げて遊びながら答える。

「昨日のパーティーで君がとても綺麗でさ、団長に君を仲間に入れてもいいか聞いたんだ」

シャウトの言動と言葉は奇妙で気味が悪かった。

「そしたら、君は見込みがあるからOKだってさ」

楽しそうに手を叩き鳴らす。

「どうだい？幻想こっちの道化師においでよ」

テイルは躊躇なく剣を構える。

「お断りだ」

次の瞬間、テイルの目の前にシャウトがいる。

「じゃあ、お仕舞い」

テイルは全くシャウトの動きを追えなかった、そして自身の最後を感じた。腹部にシャウト腕が伸びていた。

「まったくこんな美人に刃物を向けるなんてね」

テイルの横にバースが現れる、そして彼の腕にはシャウトが握っていたナイフが握られていた。

「これ返すよ」

シャウトは地面に倒され、ナイフが彼の心臓を貫いた。

「疲れた」

テイルには何が起きたか分からなかった、突然シャウトが地面に

倒れ、心臓を自身のナイフで貫かれていた。バースはティールの手を握り口付けをした。

「始めまして、ティール・バールス」

ティールは突然のことで反応すら出来なかった。ティールはバースの後に起き上がるシャウトを見た。バースはすぐに振り返る。

「死んじやえー!!!」

シャウトが叫ぶ。そして地面から無数の棘が現れシャウトは貫かれた。

「君が死になよ」

バース達がいた位置にシャウトが、シャウトがいた位置にバース達がいた・・・

くつづく

第三章 Red And Blue (S) (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

第三章もあと3・4話ほどで完結になると思います。どうにか今月中に完結できるように頑張ります。

もう少しお付き合いをお願いします。

あっ三章で連載が終わったりしませんよ!!!

第三章 Turing ? (前書き)

こんにちは。

残りあと2話ほどになるかと思えます。

今回もよろしく願います。

第三章 Turning ?

第三章 Turning ?

ステイグは不自然に造られた丘から、豪華な椅子に座り観戦していた。

「ステイグ様は参加しないのですか」

隣にいる二人の女の一人が空になったグラスへ飲み物を注いだ。

「そうだね、ステラスが出てきたら挨拶くらいはしようと思っただけどね」

ステイグは飲み物を口に運んだ、もう一人の女が口元に果物を運ぶ。

「ノエルを呼んできてくれ、挨拶にでも行こう」

怪しく微笑む道化師は腰を上げ動き出す。

自身の攻撃で串刺しとなるシャウト、それを冷たい目で見つめるバース。

「これで死んでくれれば嬉しいんだけどね」

シャウトは全身を貫かれながら笑っていた。

「みんな、こんなに気持ちいい思いをしていたんだ」

シャウトは突き刺さった棘を消しバースを見つめる。

「こんなに早い転移者リムスは初めてだよ」

シャウトの言葉に困ったようにバースは答える。

「ばれちゃったか、いつもは一撃で死んでもらうから僕の力は秘密だったのにな」

テイルは二人の次元の違いに反応することも出来なかった、そして自身が持っていた剣がないことにも気付いていなかった。

「本当に不死身なの？」

バースは後からシャウトの心臓をテイルの剣で貫いていた。シャウトの動きが止まる。

「逃がさないよ」

シャウトの体から有刺鉄線が飛び出す、バースは姿を消す。鉄線は何かを追うように動き蛇のようバースを追う。蛇の先にバースが現れては姿を消す、バースの姿が現れるたびにその場所に棘や針が現れる。

「逃げろ、逃げろ」

シャウトは笑いながらバースの動きを捉えていた。

「普通の人間なら僕の動きは追えないんだけどな」

バースはシャウトに近づき隠し持っていたナイフで首を切りつけた、シャウトは何もなかったようにバースに迎撃する。

「最高だよ、もう4回は死んでるよ」

「違うよ、6回だよ」

バースの笑顔と共にシャウトの腕が落ちる、シャウトは何が起きたか理解出来ていない。そしてシャウトの額に弾丸が打ち込まれる、シャウトは一瞬よろめき立て直す。次の瞬間、シャウトは爆発に包まれる。

バースはティールの横に姿を現す。

「逃げるよ！！あんなの相手してたら、命がいくつあっても足りないよ」

バースがティールの腕掴んだ時、二人を無数の棘が現れ襲う。バース達は轉移しかわす。

「まったく困ったよ」

「お前」

ティールはバースの腕から流れる血液を見た。

「痛いのは嫌いなものにな」

「リムス 転移者なら遠くまで轉移すれば」

「それが僕は出来ないんだよ。僕的能力は速度とかは世界で一番だと思っっているけど、総合的に考えたらAの下だよ」

二人は爆煙の中を見つめる。

「僕の最大火力は今の攻撃、どうやら僕の攻撃じゃ殺しきれないみ

たい」

爆煙の中から不気味に笑う道化師が姿を現す。

「ねえ、君は死ぬの？」

バーズはシャウトに語りかける。

「どうだろうね」

シャウトの叫びと共に様々な攻撃が二人を襲う……

ロイテルの攻撃を赤い道化師は嘲笑うようにぎりぎりでかわす、そしてロイテルのことを軽く指で触った。

「一回目だよ、もう一つルールを加えよう。君は僕に三回触れられたら死んじゃうからね」

「咲雷」

ロイテルが黄色く光る、近くにいた道化師は感電し動きを止めた。

ロイテルはすかさずブレードで腹部を切り裂こうとする。道化師はブレードが体の半分くらいの所でロイテルに手を伸ばす。

「さわっっちゃうよ」

「咲雷」

ロイテルの体が光り、道化師の動きが一瞬鈍る。

「駄目だよ、同じ攻撃ばかりじゃ。流石に慣れちゃうよ」

道化師は自身の体が両断されたにも関わらず、ロイテルに手を伸ばす。

手が触れる寸前に道化師の顔へ蹴りがめり込み、上半身が吹き飛ぶ。

「君の電撃で体が重いよ」

フロルはロイテルの横に立つ、ロイテルは一瞬フロルを見ると道化師の体へ手を伸ばし内臓を探った。

「残念、解毒剤はまだそこまで行ってなかったみたい」

地面に転がる道化師の上半身が普通に話す。下半身は無数の蛾に変化し上半身のもとへ集まる。

「残り時間はどんどん減っておりますよ、さあもっと、もっと」
フロルはロイテルに話かけた。

「君一人では勝てない。僕の目的は彼女を守ること、だけど今の僕は能力を使う事は出来ない」

ロイテルは隠し持っていたショートブレードをフロルに渡す。

「使え」

「ありがとう、これであいつをばらせるよ」

二人は道化に向かう……

バースとテイルはすでに十回以上シャウトを殺していた。バースの的確な判断とテイルの攻撃でシャウトを殺す。

「もうこれで13目だよ」

「まったくきりがない」

漆黒の炎に焼きつかされるシャウトを眺めながら二人は話す。

「まだ武器はある？」

「私には72種類の悪魔がついている」

「それは頼もしい!!」

漆黒の炎の中から道化師は姿を現す。

「次はどう殺す？」

「リコール 召喚 魔杖 ロノウエ」

テイルの手に漆黒の杖が現れる。

「あいつの注意をそらしてくれ」

「りょーかい」

バースは転移を繰り返しシャウトに迫る。

「ねーえ、君の名前ってなんだっけ？」

「マーク・シャウトだ」

「えっ聞こえないよ」

バースはわざと遠くと近くに転移を繰り返した。

「もっと大きな声でさっ」

「マーク・シャウト」

「ごめん、ごめん。もっと大きくしないと聞こえないよ」

シャウトは口を大きく開き、攻撃と共に叫ぶ。

「マーク・シャウトだああ！！！！！」

「ありがとう」

バースはシャウトの目前に現れ、大きく開いた口へ手榴弾をねじ込んだ。

「じゃっ！！」

バースが姿を消すと共にシャウトの頭が吹き飛んだ。頭を失くしたシャウトの体がふらふらと動く。漆黒の檻が現れシャウトを捕らえる、シャウトの頭はもとに戻る。

「何だよこの檻？」

シャウトは漆黒の檻にナイフを振るう、ナイフは檻を簡単に通過する。しかしシャウトの体を通すことはない。

「なんだよこれ、出せよ」

テイルとバースはシャウトを見つめる。

「これで逃げる感じ？」

バースはテイルに尋ねる。

「まさか、召喚リコール ダンタリオン」

テイルの前に無数の顔を持つ黒い影現れる。

「我が主よ、我になんなりとご命令を」

黒い影はバースを無数の顔で見た、バースは目を輝かせ黒い影を見渡す。

「主よ、この男との愛を望むのですか！！」

「馬鹿はよせ、違う」

テイルは驚き顔を赤くしていた。

「そうですか、失礼いたしました」

「そつだよ、僕達二人の愛には悪魔の力なんていらさないさ」

テイルはバースを睨みつける。

「そうですか！！たいへん失礼しました。我が主は少し気が強く冷たい所もありますが、実際はとても優しく、可愛いところも多く……」

バースは笑いをこらえながら話を聞く。

「・・・本当に、あつ。ついこんな話を、申し訳ありませんでした」
ティールは頭を抱え、大きなため息をついた。
「あいつに無数の死を」

ダントリオンは漆黒の檻に捕らえられたシャウトを無数の顔で見る。
「あいつがお二人の恋路の邪魔を」

「そうそう、あいつのせいだ」

バースがダントリオンを煽る。

「許せぬ!!!」

黒い影はシャウトを包み込み、シャウトの体の中へ流れ込んだ。シャウトはぐつたりとして意識を失う。

「すごい、こんな殺し方があるなんて!!!」

シャウトは突然、叫び始め体は不自然に動く。

「こんな気持ちいい死に方があるなんて」

二人はシャウトの姿を見つめる。

「彼、すごく嬉しそうだよ？」

「本当はもがき苦しむはずだが・・・」

「とりあえず、逃げようか？」

「ああ、だが私はアルルのもとへ向かわせてもらおう」

バースはにつこりと笑った。

「たぶん、大丈夫だよ」

ティールは不思議そうにバースを見た、バースは姿を消してティールの後に現れる。

「僕達は悪魔公認の中さ、君を危険な目には合わせられないよ」

ティールは一瞬顔を赤らめ振り向こうとして意識を失う。

「ごめんね」

バースはティールを抱え、通信機を手にした。

「目標を確保、戦線を離脱します」

バースはエグルガルの軍服を脱ぎ燃やす、そして通信機を踏み潰した。

「楽しかったよ・・・」

ステイグは堂々と三人の部下と共にジークフリードに正面から近づく。

「ステラス様、正面に人影がしかしレーダーに反応がありません」
司令室の大きな液晶にステイグ達の姿が映される。ステイグは液晶からステラスを見つめる、そして微笑み指をならした。そこで映像は消えた。

大きな揺れがジークフリードを襲う、ジークフリードの下の地面が裂け始める……

くっくくく

第三章 Turing ? (後書き)

最後までありがとうございました。

次回の投稿は休みのうちに何とか出来ると良いのですが!!
では第三章もあとわずか皆さんよろしく願います。

第三章 Turning ? (前書き)

こんにちは。

三章が6月に入ってしまいました、予定も守ることが出来ず本当に
すいません。

では今回もよろしくお願いいたします。

第三章 Turning ?

第三章 Turning ?

暗く機械に満ちた部屋に明かりが灯る、そこには番号の書かれた真っ白い球体が並んでいた。部屋に並ぶ機械達は生き物のような音を立てていた。

「01から09まで稼働可能数値を確認、システムに異常ありません」

眼鏡をかけた女は、目の前に並ぶ真っ白な人形を眺める。人形達の胸には「C・B《Cluster Doll》と刻まれていた。

「投下準備完了、いつでも起動できます」

眼鏡をかけた女は隔離された部屋に戻り指令を下した……

骨の砕ける音が響き渡る、そしてキースの顔から笑顔が消えた。

「これで君は逃げられないよ」

大柄な男の腕の先には転移者の女リムスがいた、女は首の骨を砕かれ絶命していた。桜家が数人の部下と共に姿を現す。

「あいちゃん、よく頑張ったね。後は僕達に任せなよ」

愛は桜家の言葉を聴いて意識を失った、桜家は部下に愛の治療を命じ下がらせた。部下達は桜家を残し愛と共に姿を消した。

「キース君、もう逃がさない。この空間は部下が封鎖したもう君は出られない。ここで僕らと殺し合う」

桜家の雰囲気は冷たく鋭く研ぎ澄まされる、キースの部下の大柄な男が桜家に襲いかかる。

「君にはずいぶんと部下がお世話になったからね」

桜家の手に持っていた銃が、落ちていた愛の刀の入れ替わる、そして男の両腕が地面に落ちる。男は痛みで膝をつき桜家を見上げた。

桜家は何も言わずに両足も切り落とす、男の体は血液を噴出しながら地面に転がる。地面に転がる男とリオルが入れ替わる。

「さあ、始めようか、キース君」

リオルは雄叫びと共にキースに迫る。しかしリオルの拳はキースに当たらない、キースの漆黒の剣がリオルに向かう。リオルと桜家が入れ替わり、桜家の刀が剣を弾く。そして桜家の逆の手に握られた拳銃がキースに向けて放たれる。キースは弾丸をかき消し剣を振るう、桜家は剣をかわすことなくキースに刀を振るった。キースは自身が部下の切り落とされた腕を、握っていることに気付く距離をとろうとする、そこへリオルが迫る。キースの青い右目が桜家をとらえる、リオルの拳がキースに当たる。リオルの攻撃の衝撃はかき消される、桜家の動きは止まる。キースは二人から距離をとった、桜家は突然目の前からキースが消えていることに気付く。

「キース君、君の能力は選択者^{キャンサー}。そして魔眼の能力は動体視力などの強化と対象者の時間操作？いや体感時間かな？」

キースは嫌そう笑う。

「そうだよ、その通りさ。でも君達が僕の能力を分かつと結果は同じさ」

「それは僕らじゃ君を殺せないってことかい？」

キースは二人を馬鹿にするように答えた。

「当然！！」

桜家はリオルを見た、リオルは怒りに満ちていたが冷静さは失っていないかった。

「あなたには勝算があるのか？」

桜家はリオルの質問に答える、リオルは桜家を見つめていた。

「なきや、こないでしょ」

「わかった」

リオルの体が輝き始める、全身の熱量から周囲の空気が歪み始める。
「^{オーバー・ドライブ}暴虐の獅子」

リオルの背中から機械が飛び出す、吹き出る蒸気が髪をなびかせる。

赤く輝き始める獅子は雄叫びを上げた。

一瞬の出来事だった、赤き閃光はキースに触れた。キースの右腕はへし折れ、焼かれた。

「なんて速度だよ」

リオルはあらゆる角度からキースに打撃をくわえる、キースの目は輝きその攻撃を捕らえる。キースにとってリオルの攻撃はかわすのが限界だった、反撃をすることなど許されない圧倒的な連打。そしてリオルの攻撃に混じり桜家が迫る。

その時、リオルの体から蒸気が一斉に吹き出し三人を包み込んだ。上から刀がキースに迫る、それをキースはぎりぎりでかわす。リオルの拳がキースに迫る、赤い右目がリオルを捕らえた。キースは異変に気付き能力を使い、リオルの打撃を向こうかした。そして一発の銃声が響いた。

蒸気が流され、三人の姿が現れる。キースの口から血が流れる。

「どうして……」

桜家は硝煙のあがる拳銃を構えながら言った。

「僕の能力は対象物の交換、だから一瞬だけ君の右目と左目を入れ替えた」

「だからか、でも何で僕は動けないんだ？」

桜家は銃口をキースの影に刺さる刀に向けた。

「妖刀 影牢、対象の影を捕らえる。そして君の能力で選択出来るものは一度に一種類だけ。目を封じ、動きを封じ、能力を使わせれば、君は何も出来ない」

キースは笑うことを止めない、リオルがキースに近づく。

「また欲張りすぎたかな」

リオルの腕がキースの胸を貫いた……

ロイテルとフロルは道化師を何度も切り裂き、殺していた。道化師は遊ぶように二人と殺し合いをしていた。

「さあ、二人ともあと一回触られたら死んじゃうよ。残り時間もあと1分くらいかな」

二人は同時に道化師に向かう、二人の動きは始め会ったとは思えないほど連携が取れていた。

「すごい、すごい！どんどん動きがよくなっているよ」

道化師はフロルに向けて手を伸ばす、フロルはそれをかわして懐へ入り込む。フロルは道化師の顎を蹴り上げる、ロイテルが道化師の両腕を切り落とす。そのままロイテルはブレードを突き刺し、電撃を流し込んだ。

「もう電撃はき・か・な・い・よ」

道化師は空を見上げ、楽しそうに言った。

「見つけた、頭の中だ」

フロルが道化師の頭を切り落とす、喋り続ける頭へショートブレードを突き刺し開く。

「痛い、痛いよーおおおお」

フロルは頭の中に小さな玉を見つけ、それを取り出す。

「見つかったよ」

頭や腕は蛾の群れになり一箇所に集まる。フロルはアルルに近づき口へ飴を入れて飲み込ませた。

「君達の勝ちだよ、ぱちぱちぱち」

二人から離れた岩の上に道化師は現れ、拍手をしていた。

「うーん、楽しかったよ」

二人は道化師を睨みつけていた、フロルは道化師に尋ねた。

「お前は何者だ、連合軍の仲間か？」

「僕はベノン・ポイザス、アンティック・イマジンネーションのせきしやく赤色の道化師さ。今回はその子アルルによろががあったけど、もういいや。僕は十分に満足出来たしね」

ロイテルはブレードをベノンに向ける。

「もしかして、僕を殺すつもり？無理だよ君達程度じゃ。僕がここで引いてあげるって言っているんだよ」

ロイテルは蒼い閃光と化しベノンに向かう。

「自分自身で体験しないと分からないよね」

閃光と化して進むロイテルは簡単に迎撃された、ベノンの蹴りが腹部を捕らえる。吹き飛ぶロイテルをベノンが捕まえる、ベノンが指を鳴らすと蛾達の手が集まり赤い杖となる。ベノンはロイテルを地面に叩きつけ杖で追い討ちをかけた。フロルがベノンに近づくと、ベノンは簡単にフロルの手に握れたショートブレードを払い落とし、杖で足を払い踏みつけた。

「これが力の差だよ、君達はまだ若い。命は大切にしないと」

ロイテルが立ち上がるうたとすると、ベノンは踏みつけ地面に沈める。

「もうやめておきなさい、僕は能力も使っていないよ。僕はね、君達なら僕を楽しませてくれそうだから、殺してないんだよ」

フロルが地面に落ちたショートブレードへ手を伸ばす。

「わかったよ」

ベノンが指を鳴らすと蛾達が杭と姿を変え、二人の手足へ突き刺さる。二人は痛みで顔を歪める。

「僕はもう誰にも負けない」「なめるな」

二人は激痛に耐え無理やり杭を引き抜こうとする。

「わかったよ、終わりにしよう」

無数の蛾達が羽ばたき、燐粉が二人に降り注ぎ二人の意識は暗闇の中へ落ちた……

地面が裂け、裂け目へ飲み込まれるジークフリード。司令室の中はいたって冷静であった。ステラスが状況を理解し指示をだす。

「外部装甲とコンテナをパージ」

裂け目に飲み込まれながら、ジークフリードは姿を変えてゆく。そして真っ白な翼のような両翼を持つ飛行船が姿を現す。

ステイグは拍手をしながら上昇する、ジークフリードを見上げていた。

「まったくエグルガルの科学力には脱帽するよ」

ステラスは司令室の画面に映る、ステীগ達を見ていた。ジークフリードから声が響いた。

「君達は何者だ？」

ステীগは丁寧にお辞儀をして答えた。

「始めまして、アンティック・イマジネーション幻想の道化師の団長を務める。ステীগ・フェニシアでございます、よろしくお願いいたします」

ステラスはその名を聞いて一瞬で状況を理解した。

「今回は挨拶の為に参りました」

怪しく光るステীগ目、それは画面からステラスを見つめていた。「本当はその要塞？飛行艇かな？を落としかつたけど、今回はいいかな」

「そちらが引くのなら、こちらから戦闘の意思はない」ステীগは笑う、そしてジークフリードに背を向けた。

「じゃあ帰らせてもらうよ、この戦闘はもう終わりだよ。さっき空か落ちてきたのは新兵器？あれは危ないよ、忠告はしたからね」

ステラスと一緒に現れた男に何か呟いた、男は地面に手を触れた。地面が膨れジークフリードに迫る、それをジークフリードが迎撃した。

そしてステীগ達は姿を消した……

連合軍は撤退を始めていた。胸を貫かれたキースの亡骸が地面に横たわっていた、桜家はその近くで何かをしていた。リオルは地面に座り込み空を見上げていた。

「僕の名前は桜家、一応ハウন্ズの隊長をやっている。君の名前は？」

リオルは空を見上げたまま答える。

「リオルだ」

「だいぶお疲れみたいだね、最後のあれは人間の壁を越えている動

きだった、命に関わるでしょあれ？」

「ああ」

「君はまだ死ねないよ、これはまだ始まりさ。それに……」
桜家はリオルを見た、地面に座り岩に寄りかかって空を見上げていた。

「戦争は嫌いだね……」

その時、桜家は不思議な気配を感じ、振り返った。

「やっぱり死んだか、所詮は二流品をいじっただけの男」

桜家の視線の先にはスティーグと二人の女がいた。

「君は何をしているの？」

スティーグは手に握っているものを隠した。

「まあいいさ、それよりいつまで寝ている、^{ナイン}9」

スティーグは地面に寝ている重力操作者グラビティ・ウォーカーが起き上がる。

「^{シックス}6、何でバラしちゃうのさ？」

くつつく

第三章 Turning ? (後書き)

最後までありがとうございます。

何かとわかりづらい表現が多くなってしまうにすぎません。

三章は次回で完結となります、今週末にでも投稿できると思います。よろしければ最後までお付き合いください。

六月になったので一つお知らせいたします。

第一章と二章の総集編を投稿いたします。話数が多くなってしまい、読み始めるのが辛いと思い決心いたしました。なるべく追記や表現を変更して読んでくださっている方も、楽しめるもの出来るようにいたします。

次回もよろしくお願いいたします。

第三章 S・S・S（前書き）

こんにちは。

ようやく三章の完結です。

最後までよろしくお願いいたします。

第三章 S・S・S

第三章 S・S・S

世界は揺れた、アルファルドを中心とした連合国の敗戦、エグルガラムとアステリオスの共闘、しかし世界が最も注目したのは幻想の道化師達の介入だった。

彼は幻想の存在から現実の存在へと変化した……

テイルルが目覚めるとそこは洋風な屋敷の一室だった。もう目覚めてから二日ほどたったのだろうか、ドアには鍵がかけられており部屋から出ることは出来なかった。何度か扉や壁を壊そうとしたが、傷一つ付けることが出来なかった。部屋の冷蔵庫、風呂など必要なものはすべてそろっていた。そしてテーブルの上に置かれた資料、これが本当のことなら「私はこれからどうするべきなのか？」その答えを考え続けていた。

そして突然扉が開いた、私は警戒しつつ部屋を出た……

ステラスはエスナとの会談を終え、真っ白な部屋の中自身のこれからするべきことを考えていた。連合軍との戦いは犠牲を払った、確かにエグルガラム側の死者の数は連合の何十分の一の数だった。それでも彼は自身の選択の正しさを問っていた。エスナか告げられた事実とこれから自分がやろうとすること、彼は静かに立ち上がり部屋を出た……

「テイルル!!」

部屋の外にはアルルの姿があった、彼女は私の向かいの部屋に閉じ込められていたようだった。

「アルル、無事でよかった」

アルルはティールの言葉を聞いて優しく笑った、アルルにはティールの目が少し潤んでいるように見えた。

「ティールも無事でよかったですわ」

アルルはそつとティールを抱きしめ再会の喜びに浸っていた。

「取り込み中、ごめんね。ちよつといいかな」

二人は声の方へ振り返る、そこにはバースがいた。

「お前は!!!」

ティールは反射的に声が出た、アルルはバースを睨みつけていた。

「待つて、待つて、僕は敵じゃないよ。むしろこれからは・・・」

「お前が私達をここへ連れてきたのか？」

「ティールちゃんは俺が連れて来ました、一応君を運んだのも僕かな」

アルルは自身の周りに水の玉を召喚した。

「アルル、待つてくれ。一応、私はこいつに命を助けられている」

アルルはティールを見つめ、水の玉を消した。

「敵じゃないってことは分かってくれたかな？それじゃ、行こうか？」

「どこへ？」

「僕等のボスの所にさ」

二人は警戒しつつもバースについて行った、彼女達は何より部屋にあった資料のことが気になっていた。

ステラスは巨大な機械の前に立っていた、目の前にあるのは^{シグナス}であった。ステラスはそつと目を閉じた、銀色の玉が静かに^{シグナス}を囲む。

「おい、待つてよ」

ステラスは振り返った、そこにはリオル達の姿があった。

「お前達・・・」

「また一人で背負い込むつもりかよ、壊すんだろそいつをさ」

ステラスは静かに頷いた。リオルは に。

「こいつがあれば多くの人が助かるかもしれない、でもなその為に誰かが犠牲になっていい理由わけなんてないんだよ!!」

リオルの拳が に突き刺さる、後にいたミラやベガ達も を壊し始める。外壁などがすべて壊されコアがさらけ出された。

「やれよ」

無数の光がコアを貫き は完全に機能を停止した。

「さあ、行つてこいよ」

リオルはステラスの肩を叩きミラ達と部屋を後にする。

「ありがとう」

ステラスはリオル達に言った、その言葉はとても素直で優しく響く。リオルはただ手を上げて返事をした、ミラとベガは嬉しそうに笑った、他の兵達も笑顔を返す。

「私は幸せ者だな・・・」

大きな扉の向こうには一人の少女と少年がいた、二人の雰囲気は年齢より遥かに落ち着いていた。少女は部屋の奥の大きな椅子に座っていた、少年はその近くの壁に寄りかかっていた。

「お嬢様、お連れ致しました」

バースは丁寧に頭を下げて部屋の隅下がった。

「ありがとうございます、アルル・ケールタス様、テイル・バールス様。これまでのご無礼お許しください。私はリシア・メーシュナルです」

リシアは深々と頭を下げた。その名前に二人は驚いていた。

「MTCの・・・」

「噂では聞いていたけど、本当にこんな少女が」

リシアはゆつくりと顔を上げ話し始める。

「お二人に来ていただいたのは力を貸して頂きたいからです。理由はお二方の部屋にあった資料の通りです」

二人は目の色を変えて尋ねる。

「あの資料に書かれたことは本当ですか？」

「本当に存在するの？」

リシアは冷静に答える。

「それを確認する為にもお二人の力を貸して頂きたい」

二人は黙り考え込んだ、そして互いの気持ちを確認し答えを出す・

私はエスナ姫の護衛としてエグルガラムに来ていた、ちょうど辺りを見渡すと白銀色のバイクが目に残った。愛はそっとバイクに近づき手を触れた。

「私はまた助けられなかったな・・・」

私が目覚めた時にはすでに戦いは終わっていた、そしてリオルのことを隊長から聞いた。私は結局何もすることが出来なかった、守りたかった者を守れず、また失った。

「新品どうぜんに治っただろ」

後から聞こえるはずのない声が聞こえる、とっさに振り向く。

「何だよ、そんなに驚いて」

そこにはリオルがいた、私は夢だと思いつさに自身をつねる。確かに痛い。

「包刃つつみや、俺が死んだと思っていたのか？」

私は溢れ出す感情を抑え込みきれず、うつむく私。リオルは私に近づく。

「すまねえ、助けられなくて。心配かけたな」

リオルの体はとても温かった、とても心地よく彼の命を感じる。

「馬鹿・・・」

「お前もな」

物陰から二人を覗く姿があった。

「リオルの奴」「ステラス様もリオルも」「これがバースの言うて

た愛の力かあ」

ミラとベガは少し頬を赤らめながら二人を見ていた、そして近くには倒れ込むシールの姿があった。

ステラスはそつと扉を開けた、真つ白な部屋から小さな声が聞こえた。

「おかえり、ステラス」

「ただいま」

ステラスの頬を静かに何かが流れ落ちた……

この世界は大きな機械

この世界は大きな機械だ

その機械は大きすぎて小さな歯車が壊れても動き続ける

その機械はでかすぎて小さな歯車が壊れても動き続けやがる

それは悲しく 理不尽で 私はそれを許せない

俺はそれを認めねえ

だから私は彼らを拾い 共に回り続けよう

だから俺はこいつ等を守る 俺がその分回ってやる

私は回る 仲間と共に お互いが噛み合い 繋がり 回る

俺は回る 仲間と共に お互いが噛み合い 繋がり 回る

「それでも その中に 特別な歯車がある」「輝き 俺を支えてくれた 歯車ある」

「だから」「俺は」「私は」

「その一つの為に」「どんなモノとも」「神とでも」「戦える」

〈第四章 予告〉

訪れるつかの間の平和と平穩 結ばれゆく思いはどこへ・・・

触れてはいけない領域への到達 行われる^{イレブン}11の稼働試験・・・

遺されし遺産を求めアルファルドに向かい合う者達・・・

動き出す名を持たぬもの達、暗躍する道化師

「何だよこれは？」 「これが遺産ですの？」

「さあ踊ろう！！これが僕の用意した最高の御もてなしさ」
「今度は殺してやるよ、死ぬまでな」

期未定

投稿時

第三章 S・S・S（後書き）

最後まで本当にありがとうございました。

三章では世界規模の戦いをテーマに描きました。戦闘の描写などは未熟な為に分かり難くすいませんでした。今章の主人公はステラス達です、ステラスはもともとどこかの国のボスで出ていただく予定でした。リオルに関してはハウنزの一員の予定でしたがステラスの仲間になっていただきました。

二人とも私自身が好きなので次章も出番があるかと思えます。

六月中に四章は投稿できないと思います、すいません。

今後の予定は総集編の投稿を致します。

あと今までの登場人物の紹介を行う予定ですが・・・かなり未紹介の人がいるのでがんばります。あとはイラストのど紹介をしたいのですが・・・やり方がわかりません・・・

最後に三章の最後までお付き合いくださり、本当にありがとうございました。三章は中々案が浮かばず、苦しい時期もありましたが、読んでくださる方やお気に入り登録してくれた方に本当に元気つけられました。

今後ともこのような未熟な文章しか書けません、よろしければお付き合いください。

ありがとうございました。 鳴谷駿

第四章 プロローグ(前書き)

こんにちは。

かなり期間があいてしまいすいません、ようやく第四章の開始です。
どうぞよろしくお願いいたします。

第四章 プロローグ

第四章 プロローグ

私はこの世界と共に産まれ生きてきた、多くを創造し、導き、見守った。いつからか私は自分について考え始めた・・・、その答えは未だに得られない。

もつどうでもよくなってしまった・・・理由も、原因も、何もかも・・・

大きな大理石で作られた部屋で老人はそつと目を開いた。目の前に広がる美しい彫像達、老人は静に腕を動かした。それは自分の体が動くことを確認するようだった。

「何度目の目覚めだろうか」
老人は立ち上がり辺り見渡す。

「何百年も寝ていた訳ではないようだな」
老人は椅子から立ち上がり歩きだす。老人が出口に進む度にその姿は変化する、服は新しくなり、髪型も年齢も若く変化していく。

「どうせ退屈だろうが見てくるか」

某国 古びた洋館

大きな部屋に道化師達は自由に寛ぎながら団長スティーグの話^{アンティック・イメージネーション}を聞いていた。スティーグは豪華な椅子に座り、いつも通り両手に女^{はな}を抱えていた。

「この通り、私達幻想の道化師も世間に知れ渡ってしまった訳だ。まあ基本的に普段通りの生活をしてくれてかまわない」
スティーグは手に持っていた新聞を投げた。

「今回の件は私の好奇心で招いてしまったことだ、少しだけ反省し

ている。何か言いたいことがある者はいるか？」

部屋の隅で指に止まった蛾を眺める赤色の道化師が口を開いた。

「団長、もう派手に動いてもいいと言うことですよね？」

「ベノン、派手とはどの程度のことだ？例えば一国を潰すとかか？」

ベノンは指を鳴らし、蛾を杖へと変化させる。

「そんなことはしません」

ベノンは怪しく微笑んだ。その時、扉が大きな音を立てて開く。

「せっかく世界に認められたつてのに、まだこんな屋敷の中に籠っているのかよ」

扉の向こうから長身で短髪の男が派手な身なりで現れる。ステイ

グは面白くなさそうに男を見つめ尋ねた。

「五月蠅い男だな、今さら何の用だ」

男は大きく舌打ちをして答える。

「アーニユの奴はどこにいる？」

ステイグは隣の女から注がれたワインを飲みながら答える。

「知らないよ、基本的にこの集団は他人に興味がないからね。みんな各自のやりたい事や、気まぐれで一緒にいるだけさ」

男は大きな音を立て地面を蹴る。

「団長さんが命令すれば誰かしらが見つけられるだろ、優秀な能力者様達のたまり場なんだからよ」

ステイグは特に反応することもなく素っ気無く答えを返す。

「残念ながら今、私はアーニユのことに興味はない。だからそんな命令はしないし、それに基本的に私は命令などしないよ」

男は静かに部屋の天井を見上げる、そして静かに話し始める。

「実はさ、団長の首にはすごい賞金が懸かっているわけよ。そして俺はあんたのことが昔から大嫌い、前から死んで欲しいと思っていた。俺が今から何をしたいか分かるか？」

ステイグは両脇の女の一人の頭を撫でながら、男のことを見向きもせずと言う。

「私も君のことは嫌いだよ、そして君の気持ちなんてまったく分か

らない」

周囲にいる道化師達は静かに？いや興味ない様子で聞いているようだった。男は苛立ちを隠せず辺りを見渡す。

「ここにいる奴らは腑抜けばかりだな」

男は大きく手を広げ盛大に口を開く。

「俺はこれからでかいことを始める、俺と来い！！こんな退屈で地味な日常は俺らには似合わない、派手に表舞台に出る時がきたんだよ！！！！」

男の言葉に部屋の中の道化師達は何も反応しない、男は頭抱え呆れた様子でステイグを見た。

「まったくゴミどもが、少しでも期待した俺が馬鹿だった」

男はステイグに背を向け出口へ向かう。

「インビル、もういい」

男の言葉と共に部屋に突然、大量の兵士が現れ男は指を鳴らす。

「やれ」

そして大量の弾丸が道化師達へ向かう、各自の能力が難なく弾丸を無効化する。ベノンは体を蛾達に変え、男へ向かう。

「灼熱地獄」
ホルケーノ

ベノンが再び姿を現し男にベノンの腕が迫る、その時灼熱の炎が巻き上がる。ベノンは一度距離を取る、炎は激しく広がり部屋を包み込み出口を塞ぐ。男は出口からステイグを見下すように見る、男の周りに数人の道化師達が現れる。

「あんたらは中々死ねないらしな、死ぬまで地獄の業火に焼かれるがいいさ」

男達は楽しそうに微笑み姿を消す……

翌日、山奥の古びた館から多くの焼死体が発見された……

くっくく

第四章 プロローグ（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

今回のプロローグはようやく投稿できたと言っ感じでした。

次回の投稿の予定はまだ決まっておりませんがなるべく早く投稿できるように致します。

第四章もよろしく願います。

第四章 E7・0140523 (前書き)

こんにちは。

今回もよろしくお願いします。

第四章 E7 - 0140523

第四章 E7 - 0140523 - ?

暗闇の中を動く影は小さな家を包囲していた。

「包囲完了しました」

ヴァイオレットの通信機から次々に声が聞こえ始める。

「了解、攻撃を開始して」

小さな家へ大量の弾丸が一齐に向かう、窓は割れ、壁は砕ける。暫くの間、銃声が響き静かに正面の扉が崩れ落ちる。

「こんな夜中に何のようだい？」

家の中から眠そうに一人の女性が現れた、長く垂れた真つ白な髪、華奢な体。服装も薄い下着に布を巻いた程度のもだった。「この女がどのようにして大量の弾丸を防ぎ、無傷でこの場に立っているのか？」この場にいる誰もがこの事を疑問に思わなかった。それはこの女が幻想の道化師アンティック・イマジネーションの一員であることを知っていたからだっ

「あなたがアーニユ・ワーリュヌスで間違えないわね？」

女は真つ白な髪の間隙からヴァイオレットを見つめる。

「そうだけど、いったい何のつもり？あんた達何者？」

「私はアステリオス帝国第四小隊隊長ヴァイオレット・サーズ、任務によりあなたの身柄を確保させてもらうわ」

アーニユは真つ白な髪をかきあげ、真つ直ぐに歩き出す。

「どうせ簡単には死なないわ、撃ちなさい」

ヴァイオレットの部下達が一齐に発砲する。放たれた弾は確実に女を捕らえる、しかし弾は女に傷一つ付けることなく彼女にぶつかり地面へ落ちる。

「潰していいわよ」

部下の少年は女に腕を向け握り握る、女の周囲の空間は歪む。しかしアーニユは平然と歩き続ける。

「家はぐちゃぐちゃだし、イイ夢みていたのに起こされたし、みんな死んでも不満ないよね？」

第四章 E7 - 0140519 - ?

「ステラス様が婚約！！」「ステラス様、ノーク様ついに婚約！！」連合国との戦争が終結して数週間後、エグルガラムでは盛大なパレードが行われていた。

「隊長、本当についてこの前まで戦争していたんですかね」

私服姿のルイは隣にいるリゼリに話しかけていた。リゼリ達はエグルガラムの民間人に混ざり大広場で行われている催し物を見ていた。大広場の証明が一齐に消える、静まり返る観客達、その時上空に多くの炎が灯る。夜空一面に広がる炎はやがて動き出し一点に集まり弾けとんだ！！

「いくよー！！！！！！」

炎の中心から火の鳥達と共に一人の少女が現れる、それと同時に流れ出す音楽。広場に響く観客達の歓声、少女は夜空を舞いながら歌い始める。

「隊長、あの子って？」

リゼは手に持っていたチラシを見た。

人気急上昇の歌姫 ついにエグルガラムに上陸！！ ルー・サー
スレイ

「ある意味、アステリオスの為には働いているようだが・・・」

「ルーちゃん！！」

ユウが観客と共に歌を口ずさみ、掛け声などをあげていた。リゼはその姿を見て今が任務中である事を忘れそうになっていた。大広場の先に見える特設席にはエスナ達の姿が見えていた。

ステラスはいつもの真っ白な部屋から大広場の方を見ていた。

「こんな部屋から見るとらいなら直接行けよ」

部屋の入り口にはリオルがいた、長い金髪を後で結わきサングラスをかけた私服姿だった。

「私は忙しくてね、それにノークに言われたのだよ」

リオルはサングラスを外し、少し驚いたように聞いた。

「ノークの奴にか？喧嘩でもしたのかよ」

「違うよ、アステリオスの姫様と二人で話したいと言われたのさ」

「女二人で秘密話か」

リオルはステラスの隣に立ち大広場へ目を向けた。

「ステラス、俺らはこの国を守らなきゃいけない。そしてお前はその中でも一番大切なものが出来た、お前はノークの為なら簡単に死ぬだろ？」

ステラスは何も答えなかった。

「お前はただの軍人じゃない、この国の中心だ。お前が死ねば今のこの国は死んでしまう、だからお前は今後前線にでるな」

ステラスは目の前にあるガラスに手を触れた、そつと目の前にある風景を優しく触れるようにガラスを撫でる。

「同じようなことをバースに言われたよ、自分でも分かっているつもりだ。でも私はこの国の為に自分の出来る限りのことをするつもりだよ」

「アステリオスとの同盟はどうする？」

ステラスはリオルの顔を見て軽く笑った。

「何だよ？」

「いや、お前がアステリオスのことを口にするとな」

リオルは少し顔を歪める。

「そうかお前がここにいてってことは、あの侍のお嬢さんは今回は来てないのか」

リオルは顔を赤くして少し大きな声で答える。

「何のことかわからねえな、せつかく寂しいだろうと思って来てやったのにさ。俺はもう帰るぜ、せつかくの祭りなのにこんな部屋にお前なんかと二人なんては勿体ねえ」

リオルはそう行つて部屋を不機嫌そうに部屋を出て行つた。
「まったく私はリオルを困らせてばかりだな」
ガラスにエグルガラムとステラスの小さな笑顔が写つた。

第四章 E7-0140523-?}

第四小隊は完璧に狩られる側になっていた。第四小隊にはBクラス以上の能力者が多数いた、そしてそのすべての能力はを傷付けることは出来なかつた。第四小隊は崩れきつた陣形で近くの森林へ体勢を立て直す為に逃げ込んでいた。

「何なのよあいつは、不死身どころか傷一つ付きやしない」

ヴァイオレットは焦りを隠せずにいた、アーニユの能力は数多くの能力者を知るヴァイオレットにとつても未知のものであつた。

「隊長、目標がこちらに接近しています」

第四小隊の腕章を付けた品のいい少女がヴァイオレットに伝えた。ヴァイオレットには何の作戦も無かつた、そして適格な指示を出せるほどの冷静さもなかつた。

「各員に告ぐ、奴をもう一度包囲してちょうだい。ビズルは最大級の攻撃を準備、この森ごと潰してもかまわない」

「わかつたよ」

ビズルはすでに自身の能力がに効かないことを分かつていた。

「こりゃ全滅もあるかな、あの女ももつと賢いと思つていたのに」
ビズルは自分の周りにいる部下達に指示を出し、ヴァイオレット達のもとへ向かつた。

最後の攻撃は失敗に終わった。ヴァイオレットは自身の能力を使い、部下と共に姿を消していく。ヴァイオレットの能力が及ばなかつた数人の部下達が残されていた。隊員の一人の少女にアーニユは近づくと、彼女は怯えながらに発砲した。弾丸はアーニユを傷付けることはない、何もなかつたように足を進めるアーニユ。

「いや、まだ死にたくない。私にはまだ・・・」

少女へアーニユが近づくと、その時に無数の氷柱が襲い掛かる。少女の目の前に第一小隊の腕章を付けた二人が現れる。青い目をした少年が少女に優しく話かけ、ハンカチを渡した。

「もう大丈夫だよ、ここは僕達に任せて」

少女は自分が泣いていることに始めて気がついた。

「フロル、今回の獲物は格上だよ、油断するんじゃないよ」

「分かっていますよ、隊長」

二人は同時に紋章のある腕を見せた。

オーバーリミット
「限界突破」

大きな森に巨大な氷塊がそびえる、消耗しきった二人の前にアーニユは悠々と現れる。

「隊長、限界突破の限界時間まであと僅かです」

四季は両腕に剣を握り、アーニユに向かう。四季の持つ剣はアーニユを切り裂くことはない、そう二人の如何なる攻撃もアーニユには通用することはない。アーニユが四季の剣に触れると剣は朽ちて砕ける、四季は剣を話した。

「気に食わないが、潰れる」

アーニユを中心として空間が潰れる、アーニユに何一つ変化はない。

「これでも駄目か」

四季はアーニユから距離を取る、そしてアーニユは氷塊と化す。

「隊長！！」

四季は大剣を握り締め氷塊へ振り下ろし氷塊は砕け散る、ただしアーニユは砕けることも、傷つくこともなくその場に立ちはだかる。

アーニユの腕が四季に迫る、四季は空間を転移してアーニユの背後に現れる。

「初めて見たよ、こんなに多くの能力を使える者は」

アーニユは四季がさっきまでいた所に手を伸ばす。

「戻れ」

アーニユの手の先の空間が歪み、吸い込まれ巻き戻る。その光景にフロルの動きすら止まっていた、四季はアーニユに首を捕まわっていた。

「捕まえた」

四季は握っていた大剣をアーニユの腕に向けて振るう、大剣はアーニユの腕に当たり砕け散る。

「くそ」

四季は両腕に拳銃を召喚しアーニユの顔面に打ち込む、弾丸はアーニユに当たるが傷一つ付けることなく地面へ落ちていく。

四季は両手の拳銃を捨て戦うことを止めた。

「もう終わりか」

四季はそっけなく答える、アーニユの表情はどこかがっかりしていた。

「ああもう打つ手なしだよ、私の能力もあと一分もつかだしね。むしろこのゲームは始めた時から私はいつでも対価なして棄権出来た。これは元から私達に勝ち目はなかったてことさ、退屈な茶番だよ」
アーニユは四季の話を興味深そうに聞きいていた。アーニユは手を放し四季を自由にした。

「あと一分ならお前はさっきみたいに戦えるんだな」

「そうだよ」

アーニユの目つきが鋭く変化していく、そして嬉しそうに笑った。

「お前達の攻撃を一分間だけ効くようにしてやる、だから私を殺してみろ」

四季は一瞬驚いたがすぐに落ちていた拳銃を握る、フロルが四季の横に現れる。

「一撃で決める」

「了解しました」

四季は口か血を流し膝をつきわき腹を押さえ、フロルは地面に倒れアーニユを見つめる。アーニユは片腕を真っ赤に染め、足を引きず

りながら四季へ近づくと。

「時間切れだ、私達の負けだよ」

アーニユの体は四季達に近づくとつれて傷が治っていく、どちらかと言うと元に戻るようだった。

「私の力がどんなものか分かるか？」

地面に倒れていたフロルがアーニユを睨みながら言った。

「時間の操作、最初は確信がなかったけど一度空間を巻き戻した時に確信した」

「そうだよ、私は自身の時間を止めればどんな攻撃も効かない」

アーニユは倒れているフロルに触れた。

「やめろ、そいつに触るな」

四季は吐血しながら、痛みをこらえアーニユの元へ向かおうとする。アーニユはフロルから手を放し四季を見た。四季は隠していた拳銃をアーニユに向ける。

「そんなのじゃ私に傷付けられないよ」

四季は引き金を引く、弾丸はただ地面に落ちる。四季は拳銃をアーニユに投げつける、そしてアーニユを殴った。四季の拳はアーニユの顔で止まっていた。

「そいつを逃がしてやってくれ、私の命は好きにしろ」

フロルは地面から四季を見つめる、そして大きな声を振り絞る。

「待つてください、隊長！！そんなのイヤです、まだ、まだ終わってない」

フロルは必死に立ち上がろうとする、立ち上がり足を引きずりアーニユへ向かう。アーニユは四季の腕を払い四季を蹴り飛ばした、四季は吹き飛び木に叩きつけられた。

「隊長！！」

アーニユはそのままフロルに近づき殴り飛ばす、フロルはその場に倒れ込む。

「まだ、まだ負けてない」

フロルは再び立ち上がり、アーニユに近づき拳を振るう。拳はアー

ニユを捕らえた、アーニユの体が微かに揺れた。フロルはそのまま崩れ落ちた。

「いい子だな」

アーニユは木に寄りかかる四季を見た。

「自慢の部下だよ」

アーニユは自分達が大きな影に被われているのに気がついた。アーニユは空を見上げた、空には巨大な黒い玉が浮いていた。

「そいつを連れて逃げてくれ」

四季はアーニユに頼む、アーニユはさっとフロルは抱き上げた。ア

ーニユは四季に近づいた。

「名前は？」

「箱美芽 四季だ、あんたはアーニユでいいのか？」

黒い玉がゆっくりと地面へ落下を始めていく。

「アーニユだ、よろしく」

黒い玉は森を飲みこみすべてを無にした……

〜つづく〜

第四章 E7 - 0140523 (後書き)

最後までありがとうございます。

今回は割りと長め？でした、本当は二話に切る予定でしたが、次回いつ投稿できるか分からないので一機に投稿しました。

次回の投稿は下手すると八月になりそうですが、出来れば次回以降もお付き合いくださると嬉しいです。

では、今回も読んで頂きありがとうございます。

第四章 E7・0140519 ? (前書き)

こんにちは。

今回もよろしくお願ひします。

第四章 E7 - 0140519 ?

第四章 E7 - 0140520 - ?

アルフアルド領土内 某所

「思ったより楽勝だったね」

バースはいつも通りの軽い笑顔でロイテルに話かけていた。アルフアルド領内にある極秘施設の制圧はすでに完了していた。

「司令塔の占拠、入り口は見つかったか？」

ロイテルはバースの話に耳を傾けることなく通信機の返答を待っていた。その時、外で大きな音が響く。

「見つけたわ」

ロイテルとバースは司令塔から外を見た。地面に大きくあいた穴、その奥に見える巨大なシエルター。シエルターに描かれた00のナンバー。

「さあ一国の王様がここまでして隠したモノを見に行こうか」

第四章 E7 - 0140519 - ?

大広場はもの凄い熱気に包まれていた、その中特等席の二人は静かにその光景に目をやっていた。先に口を開いたのはエスナだった。

「もう体は大丈夫ですか？」

ノークは少し驚いようだった。エスナはノークはきつところといった場には慣れていないのだろうと思いきや、先口を開いた。

「もう大丈夫です」

上手く続かない会話にエスナは少しイラついていた。エスナにとってはこの場はステラスとの交友を深め、情報を獲るはずの場だった。

「ありがとうございます」

「えっ？」

突然の感謝の言葉に今度はエスナが驚いていた。

「私が今こうしてられるのは、あなたの御陰だとステラスから聞いています」

「そのことね、私はあなたのことを利用しただけよ。だから感謝なんてされても困るわ」

エスナの言葉にノークは優しく笑った。

「優しい人ですね」

ノークの言葉にエスナは少し頬を赤くした。

「実はあなたに見せたいものがあります。このことはステラスもまだ知りません、まずはあなたに見てもらいたかったのです」

ノークはエスナに数枚の書類を見せた。エスナはゆっくりとその書類に目を通した。

「何か気付きましたか？」

エスナは静かに書類を閉じた。

「こんなことつて」
書類にはノークが^{シグマ}を通して得た世界の近年の歴史達が書かれていた。

「そうです、明らかにこの数十年の世界の動きには意思がある。そしてその動きは次第に激しくなっている。そしてこの前のアルファルドを中心とした連合国との戦争、私は 本当はあんな答えを導いていないの……」

エスナは一瞬静かになり口を開いた。

「まるで神の意思ね、きつとアステリオスとエグルガルの同盟もその一つ……」

「間違えないでしょう。この同盟によって世界は三つに割れた、私達を中心とした同盟国、アルカナスを中心とした国々、そして中立国達に」

その時、大きな花火と共に祭りは終わりを告げる。

「この意思はきつと今の世界を壊すつもりでしょう、私はこの国を世界を守りたい。あなたはどう思いますか？」

ノークの言葉にエスナは何も答えずに席を立つ。ノークは引き止める様子もなくエスナを見送る。エスナは護衛と合流し会場を出る為に車に乗り込んだ。

「私も駒の一つだと言うことなの・・・」

ノークは特等席からエスナの車を見つめていた。

「彼女は違う、でも彼女もこの世界を壊そうとしている。私はどうすればいいの、ステラス・・・」

第四章 E7 - 0140520 - ?

シエルターが開くと次々に階段が音をたてて現れる。大きな穴を円状の階段が奥へ続いていく、階段は先の見えない闇へ四人を連れっていく。

「いやーこれが四人でやる最初の任務だね」

階段を下りながらバースは退屈したのか喋り始めた。

「別に私達二人で十分でしたわ」

アルルが水でできた扇子で扇ぎながら答えた。

「ひどいなあ、僕は君との任務を楽しみにしていたのにさ」

バースとアルルの会話にロイテルは見向きもしなかった、ティールも呆れた様子で静かに階段を下っていた。

「そう言えばさ、僕達はこれから一緒に任務に就くわけですよ。だったら誰がリーダーか決めた方がよくない？」

バースの話にアルルはすぐに食いついた。

「どうしても言うなら私がやってもよろしいですよ」

「誰もアルルちゃんには頼まないよ」

アルルはバースを睨みつける、険悪な雰囲気を読み取りティールが割って入る。

「二人とも今は任務中だよ、少しは緊張感を持って・・・」

「ティールちゃんには分からないの、任務だからこそ早く決めなきゃなんだよ」

ティールはバースに丸め込まれ言葉を詰まらせる。

「ロイテルくんでしたかしら？あなたがこの中で一番長くこの部隊にいるのでしょ、あなたが隊長でどうかしら？少し若い気もするけどそこは譲るわ」

ロイテルはアルルの話に答えることなく階段を下り続ける。

「無視するならいいわ、私達で決めるから。ティール、あなたがやっつてくださる」

ティールは驚いて階段を踏み外した、とっさにバースが反応してティールを支えた。

「隊長さんがこんなじゃ、心配で任務にあたれないよ」

ティールはすぐにバースを振りほどいた。

「私が隊長？」

ティールにとつて隊長などの経験は決して少ないものではなかった。しかし、今回は今までとは違いすぎる。明らかにこの部隊で自分が一番弱いことを彼女は知っていたからだ。

「しかし、私はこの中で・・・」

「一番まともだよ、俺もあんたでいいと俺も思っている」

ロイテルの声が静かに響いた。

「引き受けるわ。ただし条件が一つある」

ティールはロイテルに近づいて話かけた。

「私達は仲間よ、だからあんたなんて呼んではダメよ。わかった？

私はティール・バース、よろしくね」

ティールの行動をバースとアルルは目を点にして見ていた。

「ねえ、ティールちゃんってあんなキャラなの？」

「知らないですわ、私も驚いているんですから」

「二人とも任務中よ」

ティールは小声で話す二人の方を見て普段の雰囲気と言った。

「すいません・・・」

四人はそのまま階段をくだり続けた。

「やっつとそこに着きましたわ」

四人が最下層に着くと階段は壁の中へ戻って行く。

「これ僕達ピンチなんじゃない？」

ロイテルが二本のブレードを構える。三人はロイテルが見つめるトンネルへ目をやった。非常灯が照らす薄暗いトンネルから次第に音が近づく。その音はやがて増え、大きくなつてゆく。

「道はこのトンネルだけ一気に突っ切るわ」

テイルは漆黒の散弾銃を構える、バースは特に構える様子もない。「走り向けるつもり？」

アルルが尋ねる、三人はアルルの方を見た。水でできた大きなエイが宙を舞っている。

「乗りなさい」

四人は大きなエイに乗り闇の中へ向かう……

くつづく

第四章 E7 - 0140519 ? (後書き)

最後までありがとうございます。

だんだんと四章の外形が見えてきました、もう一つ大きな事件が次回くらいから起こると思います。

次回の投稿はまだ未定です。すいません。
よろしければ次回もお付き合いください。

第四章 E7・0140522 (前書き)

こんにちは。

久しぶりの投稿になってしまいました、この連休中は毎日投稿できるように頑張りますのでどうぞよろしければお付き合ってください。

第四章 E7 - 0140522

第四章 E7 - 0140522 - ?

エグルガルド地下施設 最下層部

地下にそびえる巨大な研究施設の最下層には多くの研究者達が集まっていた。地下施設は巨大で植物の根ように地中に広がっていた。施設の最下層の演習場の中央には真っ黒な人形が拘束されていた。

「C・D《Cluster Doll》、ナンバー11イレブンの稼働実験を開始します」

厚い眼鏡ネーリンをかけた女は目を輝かせモニターから11を見つめる。

黒い人形の目に赤い光が灯る、拘束が外れぐつたりと地面に立つ。

「可動可能域に数値安定、システムに問題ありません」

ネーリン達とは別室のモニターから稼働実験を見物するステラスとエスナ達。

「これが前回の戦いで、たった九体で連合国軍を半壊させたC・D・
・
・」

エスナと共に第二小隊の面々がモニターを見つめる。

「いいえ、これは今までのC・Dとは違う。C・Dは小隊単位での能力の共有を可能した人型兵器、その小隊を指揮する為に造られたのがこのナンバー11イレブン・・・」

「試験用兵器を稼働、11に対して攻撃を開始」

11の周りを複数の多脚式戦車が囲み攻撃を始める、発射される弾丸が11に向かい爆煙に包み込まれる。爆煙の中から黒い人形が飛び出る、戦車に近づき素手で破壊する。素手で装甲を貫き破壊を繰り返す、弾丸を簡単にかわし、例え当たろうと傷一つ付くことはない。

「基本性能の試験を終了、次に各C・B達とのリンクを開始」

「01から05までを接続」

「システムに以上なしです」

「06から10までを接続」

11は突然動きを止める、ぐったりと肩を落とし赤い光が消える。

「11の機能停止、原因は不明。接続中の01から10までも機能停止したままです」

厚い眼鏡をかけたネーリンは画面を睨みつける。

「ネーリン局長、どうやら失敗のようですが……」

ネーリンは何も答えずモニターから11を見つめる。演習場の中に数人の研究者が入り11に近づく。その時11のシステム状態を表す数値が振り切れていく、響き渡る警報音。11の目に赤い光が再び灯る、そして11は雄叫びを上げる。

「え……」

11に近づこうとしていた研究者の胸を11の腕が貫く。ネーリンがマイクに向かって叫ぶ。

「今すぐ逃げなさい!!!!!!」

11は次々に研究者達を殺す、真っ白な壁が真っ赤に染まる。動く者のいなくなった部屋で11はカメラに向かって笑う、そして映像が途切れる……

「ネーリン、これはどういうことだ？」

通信機から聞こえるステラスの声、ネーリンは冷静に答える。

「実験は失敗です、そして11はご覧の通り制御不可能。原因は不明……」

暫くの沈黙の後にステラスの声が聞こえる。

「11はただ今をもって破棄とする、方法はとわない……」

突然、施設全体の電源が落ちる。両者達の部屋は暗闇に包まれる、すぐに非常灯がつき部屋が怪しく照らされる。ネーリン達のいる部屋にノイズの混じった通信が入る。

「緊急事……事態……、C・Dの01から……が稼働……、10が施設全体のシステムへの侵入を……」

ネーリンは通信機のある机へ両腕をおろし、静かに囁いた。

「逃げられないわ・・・、なんてことを・・・」

ステラスは何度も通信機に呼びかけていた。

「駄目だ、通信機器はすべて使えない。エスナ姫、申し訳ない」
エスナは落ち着いて答える。

「いいえ、私が無理を言つて来たのですから責任はそちらにありますわ。それに私には彼らがついていますから」

エスナの周りには第二小隊の面々がいた、リゼリは両腕を組みモニターに映しだされた地下施設の地図を眺めて口を開いた。

「俺達はどうすればいい？」

ステラスは地図を見つめ説明を始める。

「この地下施設アークは中央の大型エレベータを中心に52の階に分かれています。11の稼働実験は最下層の52Fで行われていた。

私達が今いるのは30Fだ、地上に上がるには中央の大型エレベータを使うか5階ごとに位置するエレベータを使うかなのだが・・・」

「何か問題でもあるのかしら？」

「私達のいる30Fの二つ上の28FはC・Bの格納庫がある」

「俺達は挟まれたと言うことか？」

「そうだ、そして最大の問題は25Fより下の階は、今エレベータは動いていない。非常灯がついているとうことは、緊急時のプログラムが作動中だ。緊急時は事故発生に参与したと思われる区間は封鎖される、本来なら状況に応じて解除されるのだが・・・」

リゼは各員に装備の確認を命じる。

「本当にエレベータは動いていないのか？」

ステラスはそつと目を閉じた、スクラスの空間認知者が施設全体を読み取る。

「間違えない、そして11が上を目指して移動を始めている」

リゼはハンドガンを召喚する。

「ルイ、ユウ準備はいいか？」

ユウは大きな声で返事をした、ルイも返事をした。

「C・B達はどうか？」

「C・Bは今も28Fにいるようだ、11を待っているようだ？」

「ここで11が通りすぎるのは待つか？」

リゼは笑いながステラスに言った、ステラスの周りに銀の玉が浮かぶ。

「いや、私には責任がある。部下のした失敗は上司が責任を取らねばな」

「姫様の我が儘に付き合うのも部下の仕事さ」

リゼとステラスは微かに笑う。

「ルイ、ユウ、エスナ姫の警護は頼んだぞ」

第四章 E7 - 0140520 - ?

「いや」アルルちゃん的能力つて便利だね！！おっと・・・」

ロイテル達はアルルのエイに乗りながら無数の小型防衛兵器を破壊しながら進んでいた。

「もうキリがないでわ、ロイテル！！あれやるわよ」

ロイテルは動きを止め、静かに集中を始める。アルルは水を無数の触手にかえ辺り一面へ広げる。触手達は防衛兵器達へ絡みつく、触手の端にロイテルが触れる。

「咲雷・燦」

触手を伝わり電撃が広がる、無数の兵器達がいっきに地面に伏せていく。

「すごいねー、僕の能力は地味だからいいなー」

バースはいつも通りへらへらとしている。

「防衛レベルをイエローからレッドへ変更」

トンネル全体が赤く光る、近づいて来る巨大な機械音。

「これはちよつと・・・」

ロイテル達は全力で来た道を戻り始める、トンネルを塞ぐ巨大なスクリーンがロイテル達を追いかける。

「こりゃ大変だね」

「召喚^{リコール} 魔弓 レラージュ」

テイルが巨大なスクリユーに漆黒の矢を放つ、漆黒の矢はスクリユーに当たると消えてなくなる。

「対魔コーティングか」

ロイテルがテイルの横に立つ。

「一番良く切れる剣をくれ」

テイルはロイテルの顔を眺める、ロイテルはチラッとテイルの顔を見て視線を逸らす。

「隊長、一番良く切れる剣をくれ・貸してくれるか？」

テイルはクスクスと笑い漆黒の刀を召喚する。

「魔刀 ビューネア」

漆黒の刀には三匹の蛇が絡みついている、ロイテルは刀を受け取りスクリユーへ蒼い閃光と化し飛び込む。刀とスクリユーの羽がぶつかる音が続き、ロイテルは弾かれ吹き飛ばされる。

「あんたも手伝いなさいよ!!!」

「任せないっ」と

バースはロイテルのもとに転移し、二人は姿を消す。バースはスクリユーに手榴弾を投げ込む、爆発が辺りを包む。バースとロイテルはテイル達のもとに戻る。

「駄目だこりゃ」

その時、トンネルの後で巨大なシャッターが下ろされた。

「逃げ道もなしだね、どうしますか??」

バースの質問にロイテルが答える。

「俺がスクリユーを通り抜ける」

三人はロイテルを見つめる。

「馬鹿じゃないの?死ぬつもりですか?」

ロイテルはテイルを見た、テイルはロイテルをじっと見つめた。

「策はあるの?」

「試したい技がある」

「バーズはもしもの時、可能な限りロイテルを助ける準備を、アルは最大量の水で少しでもスクリューの速度を落として」
「分かりましたわ」「了解」
四人はスクリューと向かい合う。
「これが最初で最後のこのチームでの作戦なんてごめんよ」

つづく

}

第四章 E7・0140522 (後書き)

最後まで読んでくださりありがとうございます。
連休中にいつきに投稿する予定です!!!
よろしければお付き合ってください!!!

第四章 E7・0140521 (前書き)

こんにちは。

どうにか二日連続です!!

明日に向けてがんばるぞ!!!!

第四章 E7 - 0140521

第四章 E7 - 0140521

ステラスは部屋のドアが開くと真つ白な机の上に、リボンのついた箱が置いてあるのが目についた。ステラスは能力を使い箱の中身を確認した。

「誰かからのプレゼントかな」

「覗き見とは感心しないな」

箱の中から確かに声が聞こえる、ステラスは微かに驚きなが箱を開く。そこには平凡なピエロの人形が一つ座っていた、ただその人形は言葉を発していた・・・

「やあ、久しぶりだね。ステイグ・フェニシアだよ」

ピエロの人形は立ち上がり箱から出ると体を伸ばす。

「あー疲れた、そうだ今回は頼みごとがあつて来たんだよね。確かアステリオスの姫様も今この国にいるよね？ちよつと呼んできてもらえるかい」

ステラスは机の上を動き回るピエロの人形に尋ねる。

「君達の頼みごとはアルカナスの動きと関係あるのか？」

ピエロはステラスに笑いかける。

「流石だね、悪いけど二回も同じ話をするほど僕は几帳面な人形じゃないんだ」

ステラスは部屋にある通信機を手を取った・・・

某国 某所

派手な服をした男は豪華なソファで寛いでいた、部屋には彼の他にも数人がいるようだった。

「で、俺達はどうすりゃいい？あのカスどもはしばらく動けなと思うが、こっちもアーニユの情報は一切なしだ、これじゃどうしよう

もないぜ」

男の向かいに座る老人が口を開く。

「アーニユの件はこちらに任せたまえ、君にはもっと大きなことを頼みたい」

老人は怪しく微笑む、部屋の隅から女の声が響く。

「そうよ、あなたは大きなことをしたくてこちらに就いたのでしょ？」

派手な服をした男は不満そうに言った。

「アーニヤあんなを甘く見るなよ、あいつは間違えなく幻想の道化師の五本の指に入る能力者だ」

「まったく派手な身なりの割には小さな・・・」

男は目の前にあった机に足を振り下ろし叩き割った。

「二人共やめないか、デリーデリーもそんな言いかたは良くないよ」
品のある声が部屋に流れた・・・

ステラスとエスナはピエロの人形と向きあっていた、ピエロの人形はステラスが用意した茶菓子を食べながら寛いでいた。

「そろつたようだね、一応言っておくけど今はこんな姿だが、私は幻想の道化師の団長だ」

エスナとステラスは特に疑う様子もなく人形の話に耳を向けた。

「実はちよつと仲間割れがあつてね、現状として幻想の道化師は半壊状態なんだよね」

「半壊？あなた達は不死身ではないの？」

エスナの質問に人形は目を丸くして答える。

「不死身？馬鹿言わないでくれよ、この世に終わりが無いモノなんてないよ。僕達は少し死ににくいだけさ、まあ首を落とされても死なない奴もいるけどね。話を戻してもいいかい？」

二人は静かに頷く、二国の主がふざけた人形の話真剣に聞いている姿は不思議な構図だった。

「フォークトと言う男がいる、こいつは曲者でね。うちの本部を丸焼きしてくれてさ、うちの中でも五本くらいの指に入る能力者だよ」
「私達に彼を始末しろと？」

人形はエスナの質問に大笑いをする、足をバタつかせ机の上を転がりまわる。

「無理だよ、無理。フォークトには三人くらい優秀な団員を引き抜かれてね、たぶんハウンス程度じゃどうにもならないよ」

エスナは苦い顔をして人形を睨みつけた。

「では私達への頼みとは何だ？」

「アーニユ・ワーリユヌスという人物を保護してもらいたい、この女をフォークトも狙っている。しかし、フォークトはアーニユの居場所を知らない、だから先回りして彼女を保護してもらいたい」

「その頼みを聞くと私達に何か利益はあるの？」

人形は怪しく笑った。

「フォークトはアルカナスと絡んでいる、これは間違えない。そして、アーニユは特Sクラスの能力者で今はフリーだ。どうだい悪い話じゃないと思うよ、お姫様？」

エスナは一つだけ人形に尋ねた。

「あなたはこの世界をどう思う？」

人形は笑うのをやめて答える、ステীগにとってこの質問は深い意味を持っていた。

「いい問いだよ、でも尋ねるべき相手は僕等じゃない。一つだけヒントをあげるよ」

ピエロの人形が青い炎につつまれる・・・

「ナンバース名も無き者」

炎は人形を焼いていく、体を半分焼かれた人形が地面に横たわり最後の言葉を発した。

「アーニユの居場所は箱の中の手紙に書いてあるよ、じゃまたいつか・・・」

第四章 E7 - 0140522 - ?

エグルガラム地下施設 35F 兵器設計室

リゼとステラスは35Fで11を待ち構えていた。35Fは普通のオフィスと変わらない作りのフロアーだった、作りは単純でメインエレベータを中心にくつかの部屋に分かれている。

「11の基本装備は何だ？」

「実験段階だから装備は特にはないはずだが、ここに来るまでに武器などいくらかでも調達出来るからな」

リゼとステラスはメインエレベータに繋がる通路で待ち構えていた。「11はメインエレベータを使って移動している、やはり、この施設のメインシステムはすでに掌握されているな」

メインエレベータが爆発して扉が吹き飛ぶ。リゼ達はエレベータに爆弾と鉄の壁を張り封鎖していた。二人は通路から飛び出しエレベータに向けて攻撃を始める。リゼは召喚した対戦車ライフルを迷うことなく叩きこむ。

「どうだ、奴は？」

「消えた！！転移している！！」

突然、通路の壁を破り11がステラスに襲いかかる。ステラスは11と共に壁を破り隣の部屋へ吹き飛ばされた。リゼはすぐに壁に空いた穴から覗き込む。

「後だ！！」

ステラスは薄いシールドに守れ、瓦礫埋もれていた。リゼの後に11が表れる、黒く鋭い手が迫る。

「機械風情がなめるな」

リゼは11の腕を掴み腹部に召喚したハンドガンでゼロ距離で打ち込む、そのまま地面に投げ飛ばし、ショットガンを召喚し頭に打ち込む。

「リゼリ君離れる！！」

11は床に触りにやりと笑った。そして二人を爆発が包み込んだ。

.

~^U^U~

第四章 E7・0140521（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ついにリゼリの出番ですね！！

次回以降はずっと戦闘になりそうですが、皆様の貴重な連休ですがよろしければお付き合いください。

第四章 E7・0140520 (前書き)

こんにちは。

第四章も中盤戦です！！実は四章は五章への繋ぎだったり・・・
では今回もよろしくお願いします。

第四章 E7 - 0140520

第四章 E7 - 0140520 - ?

ロイテル達は大きな扉の前に立っていた、その扉は厚く豪華な装飾が施されていた。

「どうやらここが目的地のようだね」

ロイテルが扉を開こうと手を伸ばした時、ロイテルの目の前を一匹の蛾が通りすぎた。ロイテルは反射的にその蛾を目で追った。

「どうした？」

ティールがロイテルの異変に気付き近寄った。

「少し用事が出来た、先に行ってくれないか？」

ティールはロイテルの視線の先に目をやった、しかしそこには何も見えなかった。

「どうということなの？」

ロイテルは何も答えなかった、ティールは扉に手を触れた。

「アルル、バース、中に入るよ。ロイテルは扉の見張りをお願い」

「よろしく頼みますわ」「お留守番、よろしくね」

ティールは扉を開き中へと進む、ティールはすれ違いざまにそっと囁いた。

「無理はするな、もしもの時はすぐに呼べ。私達は仲間だ」

三人はロイテルを残して扉の中へ入っていく、バースが扉の閉まる直前に囁いた。

「今度は勝てるといいね」

扉が閉まると共にロイテルは両手にブレードを構える。

「いつからいた」

ロイテルは誰もいない薄暗いトンネルへ尋ねる。トンネルの奥から無数の蛾達が現れ、ロイテルの前に集まる。

「いつからだろうね？君がスクリーンを通り抜けた時にはもういたかな」

無数の蛾は赤色の道化師へと姿を変える。

「久しぶりだね、少年。今回、僕は傍観しに来ただけだよ」

ロイテルは蒼い閃光と化し道化師に近づく。ロイテルが振るったブレードをベノンは蛾を杖に変え受け止める。

「咲雷・慟」

ブレードを媒介に一機に電流がベノンに向かう、電流は一瞬ベノンの動きを鈍らせる。ロイテルはもう一方のブレードでベノンの胸を貫く。

「咲雷・烈」

電流が一点に集まり炸裂しベノンの胴体を粉々にする。飛び散った肉片が蛾へと姿を変え一点に集まりもとの姿へと戻る。

「期待ほどの成長はないね、残念だな。それにまだそんな機械の力に頼ってさ・・・」

ロイテルは会話を最後まで聞くことなく閃光と化す。

「だからさ、その程度の速さじゃ駄目だよ」

閃光と化したロイテルをベノンの足が捕らえる。

「学習しない子は嫌いだよ」

しかし、ベノンの足はロイテルをすり抜ける。そのままロイテルはベノンの首を切り落とす。ベノンの首が地面へと落ちる、ロイテルは地面に落ちた首にブレードを突き刺さし首を胴体へ投げつける。胴体は首を受け取りもとの位置へ戻す。

「今のでスクリューを通り抜けたんだね、君はやっぱり面白いよ。じゃあゲームをしようじゃないか!!」

ベノンは嬉しそう拍手をした、ロイテルはベノンを睨んだまま動かない。

「残念ながら君の力じゃ、僕を殺しきることは出来ない。だから、あと三回僕を殺せたら君の勝ち。僕は負けを認めて退散するよ。ルールはこれでいいかい？さあ一緒に踊ろうよ!!」

「神鳴かみなり」

ロイテルは金色の閃光と化し、ベノンの懐に入り込んでいた。ベノ

ンの胸にはブレードが突き刺さっていた。ロイテルはブレードを切り上げ、ベノンを両断した。

「今度は殺してやるよ、死ぬまで」

ベノンは二つに分かれた体を自身腕で引き寄せくっ付けた。

「君に出来といいね」

赤色の道化師は怪しく笑う・・・

↓第四章 E7 - 0140522 - ? ↓

エグルガラム地下施設 25F

封鎖された26F以降への救助に向かう為に多くの兵士達が様々な手段をこらしていた。

「ミラ、ベガどうだ？」

リオルは厚い障壁を見つめていた。

「駄目です、防衛システムへの介入は出来ません。壊して進むしか・・・」

リオルは障壁に近づき拳を叩きこむ、障壁は傷一つ付くことなくそびえ立つ。

「ちくしょう」

その時、後方から騒がし声が聞こえてくる。エグルガラムの兵士達が数人の男女ともめているようだった。

「私達はハウンズの第二小隊、うちの姫様が中にいるのですよ」

リオルはジャス達のもとへ向かった、ジャスはリオルの姿を見つけた話かけた。

「あなたは確か、愛の・・・。ねえ、どうにかしてくれる？この人達が私の言うことを信じてくれないの」

リオルは一瞬、ジャスの言葉が気になったが今は無視した。

「通してやれ」

「ありがとう、どうやらあなた達もお困りみたいね」

リオルは障壁の方へ目をやった、ジャスは障壁を見て頷いた。

「その女の人は！！」

ミラがジャスを見つけ駆け寄って来た、ミラはジャスの能力を知っていた。

「ベーターでの小娘じゃないの、大好きなステラス様が心配でたまらない様子だね」

ミラは眉間に皺をよせジャスを睨んだ、ジャスは軽くミラの頭を撫でた。

「可愛い子じゃなか、私は子供が好きなんだよ。こんな顔されちゃね」

ジャスは扉の前へ向かう。

「危ないからどいてな」

ジャスが扉の方へ手を向ける、そして空間ごと掴みこじ開ける。障壁は空間ごと歪み、大きな穴を空ける。

「さあ、行こうか……」

リゼは36Fにいた、11は床を爆破しその隙に姿を消していた。

リゼは爆発で左足に負った傷を物陰で処置していた。

「クソが、俺としたことが奴の能力のことを忘れていた。全部で10種類の能力か、それを同時に発動できるなんて面倒な奴だ」

リゼの方へ無数の瓦礫が飛んでく、瓦礫は一斉に爆発する。リゼは何とか鉄壁で爆発をしのぎ、11を探す。

「どこへ……」

煙の中から11が現れリゼの首を掴み鉄の壁へ叩きつける、リゼの体を衝撃と激痛が襲う。リゼはゼロ距離で11の頭に弾丸を撃ち込み続ける。11は平然と腕に力を入れる、リゼの骨が軋む。その時、一本の光が11の腕切り落とす。

「リゼリ君！！」

リゼはハンドガンを捨て黒い影を纏う、黒い大きな手が11を捕まえ握りつぶす。

「舐めるな」

~U~U~

第四章 E7・0140520（後書き）

最後までありがとうございます。

明日がもしかすると投稿できないかもしれないので、早ければ今日
のうちに投稿出来るように致します。
では連休をお楽しみください。

第四章 赤（前書き）

こんにちは……。

本当にすいませんでした、投稿するとかではなく。執筆すら出来ていない……

暫くは安定して投稿出来るよう頑張りますので……
よろしければお付き合いください。

第四章 赤

第四章 赤^{せき}

ずっと前の話、とある国に一人の少年がいた。少年は上流貴族の一人息子だった。少年の一族は代々強い能力を引き継いでいた「不死身」少年の一族に寿命以外の死はなかった。例え頭を切り離されようとも、心臓を引き抜かれようとも彼らは死ななかった。

しかし、彼らは死なないだけであり、強くはなかった。少年は違った、類稀なる才能に恵まれていた。彼にとって世界は単なる茶番だった、彼に出来ないことはない。欲しいものもすべて手に出来た、誰もが彼を称え、羨む・・・

しかし、彼は自分の力に満足していなかった。「不死身」ただそれだけであることに少年は満足出来ない、彼は更なる力を求める・・・そして、少年は出会った・・・少年の住む国には一つの言い伝えがあった。

黒き魔女は住む・・・深い深い森の奥・・・

妖黒の羽に包まれ・・・一人で・・・

魔女は美しい・・・でも誰も彼女を愛せない・・・

彼女は死・・・彼女と死は一つ・・・

黒き魔女は今も待ち続ける・・・共に歩める者を・・・

「ただ一人・・・孤独と共に・・・」

少年は言い伝えにある森へ向う、少年は思う。

「俺は違う、もし本当に魔女がいるならば」

暗く深い森の奥で少年は美しい女の姿を見た、全身を黒に包み寂しそうに森の奥を見つめている。女の周りには無数の蛾達が飛び回っていた、少年は静かに女性へ近づく。

「近づいては駄目、死んでしまう」

悲しげな声が森の中を響き渡る、少年は足を止めることなく近づいて行く。

「お願い、近づかないで」

少年はさらに足を進め、大きな岩に腰掛けている女の前に来た。少年は目を輝かせ女を見つめ続ける。

「本当にいたのか」

女は悲しそうに少年を見る、少年は自分の口から何かが流れ出ているのに気付く。口だけではない、鼻、耳、目までもから血液が流れ出ている。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

少年は笑い、女を見つめる。

「俺は死なない、絶対に死なない」

女は驚き、目を潤ませながら少年を見る。その顔はやがて涙に変わりゆっくりと流れ落ちていく。その時、少年は揺れ地面へ倒れ込む。女は少年に近寄ろうとするがそっと手を引く、そして悲しそうに少年に背を向け離れて行く。

「まっでくれ・・・、俺は・死なない・あんだといれる」

女は振り返ることもなく少年から離れて行く。

「ありがとう」

少年は大量の血溜りを足元作り立ち上がる、そしてゆっくりと女へ近づいて行く。

「あんたは俺を待っていたんだろ・・・」

少年は口から大量の血液を吹き出す、体は大きく振るえながら進む。女は足を止め立ち止まる。そして、少年は女の手取った・・・

「あんたには俺しかない、俺にもあんたしかない・・・」

女は振るえ、小さく呟き無数の蛾へと姿を変え少年を包み込む。無数の蛾達は少年の体へ吸い込まれる、そして少年は倒れ全身から血液が噴出した・・・

数日後、少年は生れ育った町へ戻った・・・

町は赤く染まった・・・彼は赤く染まった町の中、自身の家族を見つめ笑う・・・

「俺は違う・・・・・・・・・・・・・・・・」

第四章 E7-0140520-?}

「ようやく、一回だね。君のその力、まだ未熟だなあ」

ロイテルは荒く呼吸をする、ベノンに比べ確実に消耗していた。ベノンを追い詰めるために使った能力は12回、ロイテルにとってこの回数はすでに限界すれすれであった。ベノンはロイテルの回復を待つように話を始める。

「君達のような能力者には突き詰めると二種類いる。一つは操作し創る者、もう一方は自身が成る者だよ。ここには大きな壁がある、前者は努力・経験でたどり着けるもの、後者は生まれ持った素質さ。君は後者、僕ですら後者の能力者は殆ど出会ったことがない」

ロイテルは呼吸を整え、ブレードを構える。

「では前者と後者の能力としての最大の違いは何だと思う？」

「かみなり神鳴」

ロイテルは金色の閃光と化す。

「それはね、後者の能力の源は命さ」

ベノンは無数の蛾へと姿を変え、ロイテル包み込む。

「De:Empal」

閃光から姿を戻したロイテルを蛾達は包み込み、無数の針へと姿を変えロイテルへ向かう。

「くわいらい咲雷・蓮」

ロイテルの体が光り、周辺を焼き尽くす。

「蛾なら燃やせる」

ロイテルがふら付く、ブレードを地面に刺し持ちこたえる。ベノン

が姿を現し、片手へ蛾達を集め大きな剣を造る。そして、笑いながらロイテルに向かう。ロイテルは何とかベノンの剣を防ぐ、後に下がろうとした時に右足に痛みを感じる。地面から生えた黒い棘が腿の辺りを貫く。痛み能耐え棘を引き抜き、ブレード支えに持ちこたえる。

「本当ならもう死んでるよ。僕の本来の攻撃は毒、一撃でも相手を捉えれば必ず殺せる」

ベノンの剣がロイテルの左肩を貫く、ロイテルはベノンを睨む。ロイテルは金色の閃光と化し、ベノンの心臓へブレードを突き刺しすり抜ける。ベノンは振り返り、胸に刺さったブレードを引き抜く。

「まだ使えたなんて！！油断した」

ロイテルはぐたりと地面に膝をつきベノンを見上げていた。

ベノンの表情が変わり鋭く目が変わる。

「ニア」

ベノンの横へ蛾が集まり姿を変える、真っ黒なドレスを着た女性が現れる。

「いい子なのに殺してしまうの、ベノン」

ニアはベノンに話かけた、ベノンはニアの手にそっと触れた。

「彼は死なない、彼の目を見てみなよ」

ニアはロイテルを見つめ、やさしく笑う。

「似てるわ、でもちよっと違う」

「これが僕の力の姿、これから君が目にするのが本当の力」

ベノンはニアを抱きしめ、耳元でやさしく呟く。ニアは真っ黒な蛾達へと姿を変えベノンを包み込む、蛾達は羽のように姿を変えゆっくりと開く・・・

「僕の能力の色は黒、でも僕は赤色せきしよくを名乗る。これはなぜだと思っ？」

羽が開き、黒き羽を持ったベノンが姿を現す。全身は黒く染め上がり、静かに真っ赤に染まった目が開く。羽が大きく羽ばたく・・・そしてベノンから霧状に血液が吹き出る・・・周囲は赤く赤く染ま

る・・・

ベノンは指を一本立てロイテルに見せる。

「0.0000001mgこれが君を殺すのに十分な量、さあどうする？もう君に届く頃だよ」

ロイテルはそつと首元へ手を伸ばし何かを握り締めた……………

〜つづく〜

第四章 赤（後書き）

最後までありがとうございます。

よろしければ次回もお付き合いください。

四章の終わりが見えません・・・><。

第四章 E7・0140519 ? (前書き)

こんばんは。

今回もよろしくお願いします。

第四章 E7 - 0140519 ?

第四章 E7 - 0140519 - ?

ツバイは王宮内のカフェテリアの窓際の席から一人、アステリオスを眺めていた。カフェテリアは王宮の高層階に位置し、王宮内で働く者は自由に使うことが許されていた。

「あながぼっ」としていているなんて、珍しいね」

ツバイは振返り声の主を確かめた。

「ジャ、ジャスさん」

ツバイは少し驚いた様子でジャスを見つめていた。

「いいかい？」「ああ」

ジャスはツバイの向かいの席に腰掛け、ゆっくりとコーヒーを口に運んだ。

「お姫様はエグルガルムに行ったらしな、元気がないのはそのせい
か？」

「いや、違う」

ジャスはクスクスと笑いながら、窓の外を見た。

「警備隊じゃなく、第二小隊うちが選ばれた。確かにこの前も警備隊は
お留守番だったしな、まあ気にするなよ。お姫様はリゼリの奴にこ
最ひいき戻きただけだよ」

ツバイは何も反応することもなく窓の外を見続ける。

「憧れの先輩からの励ましの言葉にも反応なしとは、私の魅力も・

・

ツバイは顔を赤く染めながらジャスを見つめる。

「あの頃は可愛い後輩だったのにな、私の後をきらきらとした目で

・
・

「分かりました、元気出ましたからやめてください」

ジャスは周囲からの視線に気付き話をやめ、ツバイの方へ小さく織り込まれた紙を置いて席を立った。ツバイは紙を拾いジャスを見た。

「待つてるよ、じゃ」

ジヤスはそれだけ行つてカフェテリアを出て行つた。ツバイは紙をそつと開いた、暫く紙を見つめ携帯電話を取り出した。

「急用が出来た、後のことは頼んだ……」

ツバイは携帯をしまい席を立つた、その姿はどこか嬉しそうで遠足前の子供の様だった。

ER)

) PM 8:00 AFT

ていた……

紙にはそれだけ書かれ

第四章 E7-0140520-?)

ロイテルは胸から手を放しブレードを真つ直ぐにベノンに向けた。ベノンはただ笑いながらロイテルを見つめる、ベノンを包む赤い霧あかが広がる……

ロイテルが徐々に形を変える、体が歪み光を放つ。ブレードが溶け出し、ロイテルの手に金色の輝きが集まる。

「いかつち來斬光」

一瞬だった、一閃と共にロイテルはベノンを突き抜ける。彼の通つた道は焼け、ベノンは体に大きな穴を空け真つ黒なまま立っていた。ロイテルはそのまま倒れ込んでいた、ベノンは意識を取り戻し焼け焦げた肌が落ち始める。

「見えなかった、いや？気付きもしなかった」

ベノンは振り返りロイテルを見た、ベノンの肉体はすでに回復を始めた。元の姿に戻り始めていた。

「ニア、彼を助けてあげてくれ」

ベノンの体から何匹かの蛾が放たれ、ロイテルに向かう。その時、地面から雷が噴出しロイテルを撃つ。ロイテルの体は激しく跳ね、

打ちつけられる。ロイテルは再び立ち上がる、地面に手をあて金色のブレードを引き抜く。

「放電した自身の電気を再び吸収したのか？」

ロイテルは微かに笑った。ベノンの体が光再び焼き上がる、しかし今度は意識を失うことなく立ち続ける。ロイテルは金色のブレードを槍に変えベノンへと投げる、槍はベノンに迫ると炸裂し、黄色く電気で出来た檻へと姿を変えベノンを囲む。

「この程度の檻で」

ベノンは姿を消す、すると檻の端で閃光が輝く。ベノンは黒く焼かれ姿を現す、檻は徐々に小さくなりベノンを追い込んでいく。

「知りたかったんだよ、電撃でお前が捕らえられるか」

ベノンは無理やり電撃に焼かれながら檻を壊そうとする。

「ライデン 閃雷・烈」

ベノンの両腕が吹き飛ぶ、ベノンはもう一度姿を消す。しかしまた閃光が輝く・・・

「攻撃は焼けた、だからお前が姿を消す時も焼けると確信した。お前は電撃を一度も姿を消してかわしていない、違う、これはかわせないんだろ」

ベノンの顔から余裕が消える。

「その通りだよ、今の僕はどうすることも出来ない。どうするつもりでも君の電撃では僕は死なないよ」

ベノンは檻の中央に椅子を作り腰掛けた。

「殺す？確かに殺せるなら殺してもいいと言われていた。でも俺が受けた任務はなお前を捕まえることだ」

ベノンはロイテルを睨む、檻は小さくなりベノンを包む。周囲の地面から黒い粉が噴出し檻を囲み黒い球体となりベノンを包み込む。

ロイテルは黒い球体に触れ言った。

「これはお返しだ、ライデン 閃雷」

黒い球体は光輝き、中からは悲鳴が響く。

「これが本当の閃雷だ、暫くはそうしている・・・」

ロイテルはすぐに倒れ込む。
「疲れた・・・」

つづく

） 登場人物紹介 第5回 ）
かなり久しぶりになってしまいました・・・しかもこの面子って

名前	ジャス・ハルドル
性別	女
能力	神の手
年齢	25前後
身長	170以上
体格	割といいww
髪型	基本はポニーテイル
服装	軍服、普段も割りときつちとした服装
が好き	

CVイメージ 甲 田 裕子さん

雑談

三章から登場したキャラクター。能力はずっと暖めていたもの、誰の能力にするか迷った結果彼女のものに。第二小隊の増員は開始当時から考えていましたが、案はまるでなし・・・ただ女性を一人足す事は決めていました。

能力が強力なのでこれからも出番が多いかも、特に五章では・・・アステリオス人を父に持つハーフの為色々と苦労をしてくている過去がある。リゼリを嫌うのは過去に一つ事件が、あと自身より年下が上官と言うのが許せないのもあり。

ツバイはジャスが王族警備隊にいたときの部下だったり、けっこう重要なキャラクターかも・・・

名前

ベノン・ポイザス

性別

男

能力

不死身・体内に宿したニアの持つ毒

年齢

30前後の見た目

身長

170前後

体格

優男系

髪型

金髪は確定かな？

服装

西洋の道化師系 長いコートとか想像してくれ

るとOK!!

基本は赤色で全身を包んでる、実は彼の家系が

赤を代々好んで使っている。

CVイメージ

考えてなし

雑談 とある作品の赤色の魔術師さんがイメージで生まれたキャラクター。基本的には生死のやりとりが大好き、これは自身が死ぬない為に他人の死に対しての異常反応がもたらしている。何年も生きることが出来ているのはニアを取り込むことによりほぼ不老不死を手に入れている。道化師達の中では五本の指には入る実力の持ち主、彼自身の強さは圧倒的な経験量によるもの、だからロイテルを鍛えるような戦いかたをしているのは、彼自身が戦いの中で強くなっただけから。

彼自身には野望や目的はあまりない、ただ“楽しむ”ことを追い求めている。ちなみに彼にも死の限界はある、本来の彼の家系では一日に50回以上の致命傷で死ぬらしい。

G・Wと戦わせる予定があるとかないとか・・・

第四章 E7 - 0140519 ? (後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ロイテルの出番は今回はここまでかな??次回からリゼリ達がメインになるかと、前にも書きましたが四章は五章の序章ですので・

あと四話くらいで終るじかな?

次回もよろしくお願いします。

第四章 AFTER (前書き)

こんにちは。

もう47話!!! 四章は50話で終わりにしたいが・・・
今回もよろしくお願いします。

第四章 A f T E R

第四章 A f T E R (n i g h t) @ (B) a n d (H)

ツバイは品のいいスーツを着てバーのカウンターに座っていた。

「あたしから誘ったのに待たせちゃったね」

ツバイは振り向くと同時に動きが止まる、藍色のドレスに身を包んだジャスはツバイの横に座った。ツバイは動きを止めてジャスに見とれていた。

「何かおかしいか？」

「と、とんでもないです」

「そうか」

ジャスは少し不機嫌そうにツバイから視線を逸らした。暫く無言のまま時間が過ぎる。

「感想は？」

ツバイは突然の質問に視線が定まらない。ジャスは普段はポニーテイルにしている髪を下ろしていた、黒く綺麗な髪をそつと耳にかけてツバイを見つめる。

「どう？」

「好きです」

ジャスはツバイの言葉に驚き、笑い始めた。

「その言葉は何度も聴いたよ、私が聞いているのは今日の私のだよ。こんな服着るの何年ぶりか分からないからね」

このA f T E Rという店はジャスが王族警備隊にいた時によく出入りしていた店だった。第五区の外れの地下にある小さな店だった。店の中では小さなコンサートなどが行われていて店の雰囲気を出していた。二人はバーのカウンターに座り、店にはジャズが流れていた。

「綺麗です」

「ありがとう」

ジャスの頬は微かに赤く染まったようだった。店の中の薄い照明が流れる時間を遅く感じさせる。二人の雰囲気はとても心地よいものだった。ジャスの話にツバイは見とれるように聞き入り、時たま見せる大人な笑い顔を見るたびツバイは胸を打たれていた。

思いつ話、ささやかな噂話、どの話も誰でも話すようなたわいも無い話や音楽、酔い、それらが二人の時間を色づける。

「ジャスさん、久しぶりですね」

店のマスターがジャスに話しかけた、ツバイはすでにカウンターに顔を伏せて寝てしまっているようだった。

「そうだね、私も忙しくてな」

マスターは綺麗に飾られたマティーニをジャスに出した。

「どうぞ」「ありがとう」

マスターはツバイを優しく見た。

「ツバイ君はよく来てくれるよ、いつも酔ってあなたの話をされるよ」

ジャスはマティーニをそつと口に運んだ。

「こんなにイイ男はいないと思うよ、彼はもう何年あなたを追いかけているのかやら。でも、お姉さんはちつとも相手にしないようでマスターは笑いながら話していたが、ジャスはマティーニを一気に飲み干していた。

「私は何でこいつを王族警備隊の隊長に推薦したと思う」

マスターは何も答えず、シェイカーを手にしていた。

「私はこいつを前線に出したくなかった。こいつは私が警備隊を抜ける時に一緒に来ると言ったさ」

マスターはジャスのもとへまたマティーニを出した。

ジャスは振返りステージで歌う女性へ目をやった。

「とびつきり甘い曲をお願いできる？」

女性は軽く頷き歌い始めた、その曲はやさしくそつと店を包み込む。店のすべての客は話すことを止め、静かに耳を傾ける。ツバイは目を覚まし、店の雰囲気を感じ静かにジャスを見つめていた。ジャス

の目が微かに潤んでいるように見えた……
曲は終わり店の中に拍手が響き渡る、ジャスはツバイが目覚まし
ているのに気付いた。

「今日は久々に楽しめたよ」

ジャスは財布からお金を取り出し、カウンターに置き席を立った。

「私は先に帰るよ」

ジャスは席を立ち店から出て行く、ツバイは何かを告げようとする
が何も出来ず固まっていた。

「あの人の顔は幸せそうでしたか？」

マスターは呟くように言った、ツバイはマスターを見た。

「また行ってしまいますよ」

ツバイは席を立った……

第四章 E7 - 0140522 - ?

エグルガム地下施設 30F

エスナ達は暗い部屋の中、静かに救助を待っていた。部屋にはエ
スナ達とエグルガム兵の数人が息を潜めていた。C・D達は下層
部での異変に気がついたのか移動を始めていた。ルイはそつと部屋
の扉の隙間からC・Dの姿を見た、それは亡霊のように白く、彷徨
い下を目指す。

「こちらには気付いていないようです。このままやり過ぎしましよ
う」

エスナ達はそつと息を潜めた。

暫くするとゆっくりとした足音が響き始める。足音は扉の前で止ま
り時間が流れる。

「うっ、うっあああああああ……」

部屋に叫び声が響き渡る、ルイはすぐに銃口を声のもとへ向ける。

白い人形がエグルガム兵の頭を握りつぶした。

「ユウ、姫様を」

ユウはエスナと共に姿を消す。ルイは薄暗い部屋の中、C・Dへ閃光弾を投げつける。炸裂すると同時に部屋から飛び出る、部屋のその通路には二体のC・Dがいた。エグルガルド兵がC・Dに向けて発砲する、弾丸は確かにC・Dを傷つける。

「どうだ、よくも!!!」

C・Dの傷はすぐに再生を始める、エグルガルド兵は撃ち続ける。

「効いていない!!!このままじゃ殺される」

ルイはエグルガルド兵を止める、しかし、エグルガルド兵は撃つことを止めない。C・Dの一体が手のひらをエグルガルド兵に向けて。突然、エグルガルド兵が吹き飛び通路の奥の壁にぶつかり潰れた。

ルイは閃光弾へ手を伸ばそうとする、C・Dの一体が転移しルイの真横に現れる。ルイはとっさに弾丸を頭へ撃ち込む、頭を破壊されたC・Dの腕がルイの胸元に迫る。

「ぐっ……」

ルイの体は吹き飛び、壁をつき抜け転がる。壁が壊れたことにより潰れることは避けたがルイは吐血していた。C・Dは壊れた壁を越えルイへ近づき、そしてノイズの混じったような声が響く。

「オウジョ……オウジョハ……ドコダ……」

ルイは驚き、C・Dを見つめた。ルイは腹部を触り自身の怪我が軽傷でないことを理解する。

「わからないね」

ルイは手榴弾を握り締める。

「はーあ、何か色々やり残しちゃったなあ。でも悪い人生ではなかったかな」

ルイはそっと目を閉じる……

その瞬間、天井が崩れC・Dが潰される。

「お譲ちゃん、諦めるのが早すぎだ……」

く

登場人物紹介 第6回

ついにこの人達の番です><。

名前 ステラス・クルネス

性別 男

能力 空間認知・認識

年齢 27いや30か歳

身長 165あるかないか？

体格 小柄です、華奢です

髪型 短髪以外

服装 エグルガルの軍服は白です。形は長

いコート、よく悪い

やつらが着ているよ長めの軍服・・・

うまく説明できない(泣)

CVイメージ 朴 美さん？(ちなみにちっさいか

らではない)

あーでもちよつと違うかなあ・・・

雑談

三章から登場したキャラクター、と言うより三章の中心人物の一人。一番最初に登場した世界最強の能力者の一人、彼自身の本当の力は後衛、支援向けであり前線に本来は前線に出るような能力ではない。ただエグルガルの科学力により開発された遠隔操作型工学兵器“アルファ”によって前線でもあれだけの力を振るうことが出来た。しかし、デルガナスで使ったような大規模な攻撃は による演算が可能したものであり、現在では使うことが出来ない。

たぶんこの作品の男性陣の中では一番まとも、まじめで堅実です。

今後も出番は十分にあると思いますが、前線で戦うことは……

名前	リオル・バルナルム
性別	男
能力	発熱
年齢	25くらいの見た目、
身長	180以上
体格	まあ想像通りで
髪型	金髪の長髪
服装	基本的には軍服、あとはちょっとライダー系のジャケットとか好き
ＣＶイメージ	なくはないが……

雑談 えー三章の主人公かな？（愛と一緒に）このキャラクターのもととはある曲から産まれました。元からバイクに乗ることを前提に、外形が決まりこんな感じに。

実際はリオルとステラスとヴァイパー（五章登場予定）は同期、バースは二つ下。リオルは一度、瀕死の怪我をおい危篤状態へ、そしてノークのおかげで今の姿（体の半分異常が機械）となって復活。その為に見た目がステラス達より若い。

リオルは……一言……「生きる」

名前	バース・テトラール
性別	男
能力	空間転移者
年齢	24～25
身長	175以下
体格	華奢です

髪型

濃い目の青系かな 紺とか！！

服装

基本的には軍服、らふな感じMTCの制服は

グレーが基調

CVイメージ

うっん、迷う

雑談 最速の転移者。転移可能な質量も距離も極限まで押さえ速さのみを追求した。バース自身はもともとから優秀で彼の同期では一番の秀才。ただステラスやヴァイパーというSクラス以上の能力者を知ること、自身の能力を磨き今の形になる。
MTCへ流れた理由は本編で。

第四章 AFTER (後書き)

最後までありがとうございます。

あらすじを変更しました。すみません、特に内容は変わらないので心配なく。

さあ、あと三話がんばるぞー!!

よろしければお付き合いください。

第四章 開扉（前書き）

こんにちは。

では第四章も後半戦へ突入です！！
最後までよろしく願いします。

第四章 開扉

第四章 第四章 E7 - 0140522 - ?

エグルガルム地下施設 30F

「そいつらはそのくらいじゃ、壊れないよ」

天井の崩れた穴から小さな少女達ベガとミリアが現れた、ベガは自分の体と同じ位の大きさの銃を背中に背負っていた。リオルは立ち上がるうとするC・Dの頭を捕まえ、拳で胸を貫く。そのまま通路の方へ投げた。ベガは大きな銃口をC・Dに向け引き金を引く、銃口から光が放たれた。

「これでしばらくは動けないでしょう」

大きな穴の空いた壁の向こうに二体のC・Dが現れる。リオルは拳を握りしめ、C・Dに向かう。

「危ないよ」

リオルはC・Dから距離を置く、空間が歪み二体のC・Dが潰される。

「ルイ、大丈夫かい？」

ルイのもとにユウがエスナ、ジャス達と共に現れる。

「ちよつと、死ぬかと思った」

ルイは痛みをこらえながらも笑いながら答えた。

「ユウ、姫様とルイと一緒に上へ戻りな。入り口でジュラルが障壁を張っているはずだ」

「えー、俺も戦いたいよ」

ユウがジャスに駄々をこねるように言った。ジャスはユウを睨む。

「ユウ、あんたは二人を送ったらフーとテムジと一緒に残された者の救出だ」

一スキンヘットの長身の男フー、一細身の丸い眼鏡をした男テムジは驚いたようにジャスを見た。

「お前達二人を信頼しているから、ユウの子守を任せただよ。私

はやらなくちゃいけないことがあるからね」

ジャスは怪しく笑い歩き出す、ジャスの後をミラが追う。

「私と来るのかい？」

ミラは恥ずかしそうに言う。

「あなたの能力は防御に向かないから、特に少数対複数では」

「よろしく頼むよ、さあお互いにぶん殴ってやりに行こうか」

ミラは驚きながらもジャスの後を追う、ジャスは振り返りリオルに言った。

「あんたはどうするんだい？」

リオルは拳を握り答えた。

「取り合えずは量産機どもを黙らせる」

「フー、テムジ、救出が終わったらその男を手伝ってやりな」

ジャス達は暗闇の中へ吸い込まれていった・・・

エグルガルト地下施設 36F

黒い手が開くと押しつぶされた11が地面に崩れ落ちる。リゼリの黒く染まった左目から黒い根が引いていく。地面に朽ちた11の上に銀の球が集まり、光を放つ。光は大きな穴を床に空ける。

「これで奴も暫くは動けないはずだ」

ステラスは床に空いた穴を覗き込む、穴は深く底を見ることは出来なかった。

「奴の回復能力を消すことは出来ないのか？」

リゼリは崩れた壁に腰掛け、床に空いた穴へ手榴弾を召喚し投げ込んだ。

「11は1から10までのすべての能力を自由に使うことが出来る。だから能力の元であるナンバー03を破壊すれば回復することは出来ないはずだ」

リゼリは天井を見上げ、エスナ達のことを考えた。

「まったく面倒なことになったな・・・」

爆音が突然響き渡る、一斉に床が崩れ始める。ステラスは銀の球を変形させ足場を確保したが、リゼリは床と共に落下する。リゼリは何とか鉄筋を掴み体を支える。リゼリの横へ11が現れる、11は両手をリゼリに向ける。巨大な衝撃波がリゼリを襲う、幾つもの壁を突き破りリゼリが吹き飛ばされる。

「リゼリ君！！」

ステラスはすぐに銀の球で11を迎撃に向ける。11はすぐに転移しステラスに迫る。限られた足場の中で11の一撃をかわす、ステラスは銀の球をワイヤーのように変え天井に貼り付け新たな足場に向かう。

新たな足場に着くと同時にステラスを衝撃波が襲う。ステラスは銀の球を操り、壁を破壊し衝撃を和らげる。ステラスは態勢を立て直し施設全体を読み取る。

ステラスは天井に向けて銀の球から光を放った。

「君には意思があるのだから？」

ステラスの声が薄暗い部屋の中に響く、暗い闇の先に赤い光が見える。暗闇の中から11が現れる。

「そうか、私は君も一人の兵士、仲間として受け入れるつもりだったよ」

暗闇の中からピンク色の光が放たれ、11を包み込む。

「転移は出来ないよ」

エグルガルト地下施設 32F

「ネーリン、C・Dの02、05の機能停止を確認。さすがに三分したら回復出来ないようだ」

リオルはネーリンの指示のもと、C・Dを個別に破壊していた。

「とにかく回復のものを叩く、ナンバー03だな」

リオルは床を砕き、下の階へと下った。

テイルル達は長く続く大理石でできた通路の先の大きな扉の前にいた。

大きな扉は低い音を立てて開く、扉の先に大理石で作られた美しい部屋が広がっていた。部屋の中央にひかれた赤いカーペットの上に一人の男がいるのが目に入った。テイルルはとっさに魔銃を召喚し向ける。

「何だ、ここで何をしている？」

男は全身を黒い服に包んでいた、見た目は青年なのだがどこか違和感がある。男は答えることなくテイルル達に向かう。

「テイルル、警告つてのはこうやるのよ」

アルルが水の矢を作り、男へ飛ばす。矢は男の顔のすれすれを通り過ぎる、男は顔色一つ変えることなくテイルル達へ近づぐ。

「なかなか肝が座っているわね」

アルルが大量の矢を作り放つ、矢は一斉に男に向かう。男に当たる直前に矢は消えてなくなる。

「私は消してない、なんで」

アルルの言葉にテイルルとバースはすぐに反応した。テイルルはすぐに魔銃を放つ、漆黒の弾丸が男に迫る。男は簡単に弾丸を掴み、興味深そうに見つめる。

「この力はなんだ？私は知らないぞ」

男はテイルルの方を見つめ、真っ直ぐに向かう。バースが転移し男の背後に現れ、頭部に銃口を押し付ける。

「どんな能力か知らないけど、流石にこの距離じゃ、どうしようもないでしょ」

男はバースの言葉に反応することなく、テイルルへ向かう。バースは男の足に向けて弾丸を放つ。

「マジかよ・・・」

弾丸は男をすり抜け、床へと打ち込まれた。バースはすぐに転移し

男を拘束しようとする。

「私の知る中では一番早いな」

バースが転移を終えた時、バースは地面に倒れていた。バース自身何をされたかも分からなかった、ただどんなに体に命じても体は動かなかった。

「お嬢さん、君の能力はなんだい？」

ティールはすでにこの男が自分の力を遥かに超えているのを理解していた。

「ティール！！！」

アルルが叫ぶと同時に男の足元から大量の水が吹き出る。アルルは青く光る槍を召喚し男へ向けて放つ。男を囲む水がいつきに炸裂する。辺り一面が水蒸気が包み込む。

「こいつはなんですよ、いや……」

水蒸気により真つ白い霧に包まれた部屋にアルルの声が響く。

「アルル！！どうしたの！！！」

突然、風が吹き視界が晴れる。アルルは床に倒れ込んでいる、ティールはすぐに男を捜す。

「こんな高質な能力者がいるとは」

ティールは背後から聞こえる声に反応し、漆黒の剣を召喚し振るう。

「あなたはいつたい……」

漆黒の剣は男の指一本に止められていた、男は漆黒の剣をティールから奪い見つめる。

「これは私の知らない物質で出来ている……」

男は剣を見つめぶつぶつと何か言っている。

ティールはこの男に殺意がないことを悟った。

「それは私が召喚したものの、魔の道具。この世界のものではないの、男は目を丸くしティールを見つめる。

「魔？この世界のものでない？」

「あなたは何者なの？」

男はあっさりと答える……

だよ・・・

創造主・・・この世界の神

~~~~~



#### 第四章 開扉（後書き）

最後までありがとうございました。

えー誤字が多いかもしれません。ご指摘くだされば修正します。・・・

書ける時にがんがん投稿いたします。いつまで続くか分かりませんがお付き合いください!!!

早く五章を!!!!!!

## 第四章 11 (前書き)

こんにちは。

17日は投稿出来なくてすいません!! 投稿しようと思っていた五章のブログがかなりのネタバレが含まれていて……

本当にすいませんでした><。  
今回もよろしく願います。

## 第四章 11

第四章 11 (eleven)

「Cluster Doll Project」それは戦死した兵士達を使い能力集合体を作り、人工的に重能力兵器を作り出す計画だった。兵士達から集められた情報は各個体に振り分けられ、それぞれの固体が能力の共有を行い、複数の能力を各個体が使用することを可能とした。

そして、それらの固体の統制を行う為に11 (eleven) が造られた……

ピンク色の薄い壁バリアに囲まれた11は動きを止め、声のもとへ視線を向ける。そこにはネーリンとジャス達が出た。

「残念ながら、C・Dの半数はもう動いていないよ。ここに来る間に私も一体ほど鉄屑にしてきたからね」

ネーリンは11に近づき、バリアの手前で立ち止まった。

「あなたは悪くない、私が悪いの、一体の固体に複数の意識を入れることにより、複数の能力の同時発動や能力の強化を可能にした。でも、代わりにこの結果を生んだ」

11は静かにネーリンを見ていた。11は突然バリアを殴り始める、全身を大きく揺らせ、バリアを突き破ろうとする。バリアに小さなひびが入る。

「何て力だ、このままではバリアがもたない」

「そいつから離れな、私が握り潰す」

ジャスが11に手を向ける、ネーリンは11を見つめ11から離れる。

「ごめんなさい……」

ジャスは空間ごと11を握り潰していく、11は潰れる空間を両腕で拒む。

「何て奴よ、こんなの初めてよ」

ジャスは更に力を込めていく、空間は更に歪みを増す。

「続ける」

11のもとへ黒い影が伸びていく、黒い影は棘のように姿を変え11を貫く。ジャスの後からリゼリが現れる。

「酷い有様だね、隊長さん」

ジャスはボロボロなりゼリを馬鹿にするように言った。

「五月蠅い、早く潰せ」

ジャスは面白くなさそうに手を握り締めた、体の中央を貫かれた11は空間ごと潰された・・・

ぐちゃぐちゃに捻り潰された11へネーリンが近づいて行く、ネーリンは11の歪んだ頭部にまだ光が灯っているのに気がついた。そして11から小さな声が響く・・・

「・・・アナタノ・・・セイデナイ・・・」

ネーリンは驚き、11を見つめる。

「・・・ステ・ス・ラ・・・」

11の頭部から明かりが消えていく、ネーリンは必死に11へ呼びかける。しかし、11から何も返ってはこない・・・

「E7 - 0140524 - ?」

エグルガラム内の医療施設

「隊長、わざわざすいません。これが報告書です」

ルイは病室のベッドに横たわっていた。リゼリの手には花束が握られており、リゼリにはユウとジュラルの姿があった。ルイは二人の姿を見て小さくため息をついた。

「こつちこそ悪かった、色々処理などが大変だな」

「いいですよ、この怪我也私の実力のせいですから。それに聞きましたよ、第一小隊のこと」

リゼリはユウ達に花束と花瓶を渡し、ベッドのわきの椅子へ腰を下

るした。

「もう知っていたのか、知っての通り第一小隊との連絡が途絶えた。とある極秘任務中のことらしい、第四小隊も同伴していたようだがかなりの被害を受けていたらしい」

「でも、箱美芽隊長達がやられるなんて・・・」

「まだ箱美芽隊長達が死んだとは限らないさ、あの人は簡単には死なないだろ」

ルイはリゼリを見つめた・・・

「隊長、私・・・」

「リゼリー！！ジユラルが花瓶割ったー！！」

ユウが突然転移し現れる、ジユラルが部屋の扉を開ける。

「ユウ、押し付けるな」

リゼリはユウを睨みつける、ユウは気まずそうに視線を逸らす。

「お前らは・・・」

ルイはクスクスと笑い始めた・・・

ジャスは二人の部下と共にエグルガルの軍営のカフェにいた。

「悪いな、ちよつといいか」

リオルがミラとベガを連れて現れた。

「どうぞ、もう十分に話はしたと思うけど」

ジャス達は11の件で事情やら報告所などを書かされうんざりしていた。

「11のことだが、今までとは少し違う。少しおかしいことが分かってな」

リオルの言葉にジャスが反応した。

「どういうこと？」

「どうやら11の暴走には何か裏があるみたいだ」

「何故、私にそのことを？」

「俺はあんた達をまだ信用してない。そして、あの姫様のことは特に」

ジャスは微かに笑いながら表情を変える。ベガが携帯用のコンピューターの画面をジャスに向けた。

「私のことを調べたみたいね、それで私の所に来たってこと。まあ第二小隊の隊長うちの所に行かなかったってことは賢ういみたいね。11の暴走の件にアステリオスが絡んでいると？」

リオル達はただジャスを見つめていた。

「どうかしらね、私には分からないわ。ただ一つ言えるのは11を壊したのは私達よ」

リオルはジャスの言葉の意味を理解した。

「悪かった」

リオルは席を離れた、ミラは気まずそうにジャスを見ていた。

「そんな顔しない、別に気にしてないよ。あんた達がステラスをどれだけ大切に思っているかは私も分かっている。だからそんな顔しない」

ミラは頭を下げる。

「ありがとうございます」

ジャスは立ち上がりミラに近づく、ミラはゆっくりと頭を上げるとジャスの手が優しくミラの頭を撫でた。

「いい子だね、どういたしまして」

ジャスの笑顔にミラも笑顔を返す。ベガも小さく頭を下げ、ミラと共にリオルの後を追っていった。

「あの子達が羨ましいね」

くっくくく

## 第四章 11（後書き）

最後までありがとうございます。

あと1話で四章が完結です。前からお伝えしている通り四章そのものが五章のプロローグです。

五章は10月開始になってしまうかな？

まずは四章を完結出来るよう頑張ります！！！！

第四章 E7・0140524 (前書き)

こんにちは。

さあ、四章もこれにて完結。ねらって投稿してましたが第50話です!!!

読んでくださっている方達に感謝で一杯です!!!!  
では今回もよろしくお願ひします。



## 第四章 E7 - 0140524

第四章 E7 - 0140520 - ?

「ロイテル、起きて。大丈夫?」

ロイテルはゆっくりと目を覚ました。そこにはリシアの姿が在った。

「何でリシアがここに・・・」

ロイテルは突然周囲を見渡し、黒い大きな球を見て安心した。リシアは優しくロイテルの頬を撫でた。

「あまり無理をしないで」

ロイテルは無理やり立ち上がる、この人の前だけではロイテルは強くありたかった。

「俺は大丈夫だ」

ロイテルは無理やり体を動かし、黒い球の前に立つ。黒い球の中から声が響く。

「起きたかい、良かった、良かった。このまま一生この中じゃ、堪ったものじゃない」

ロイテルの横にリシアが並び黒い球を見つめる。

「どうやら他にお客さんがいるみたいだね」

リシアはロイテルの表情からこの中身が何であるか分かっていた。

「あなたが赤色の道化師、ベノン・ポイザスね」

ベノンは少しの間黙り込み、口を開いた。

「君がこの子の雇い主と言うことが、MTCのお嬢さん。リシア・メーシユナル」

「ご存知のようね」

「それでMTCの頭が私に何の用だい?」

リシアは艶のある声ではつきりと言った、それは命令のようだった。「私達と組む気はない?」

黒い球から笑い声が響き渡る、ロイテルは少し驚いたようだが、リシアを見つめたまま何も言わなかった。

「ベノン卿、あなたがここに来た理由は私達と同じはず。そして、あなたにとって幻想の道化師はただの都合がいいだけの居場所のはず」

黒い球の中からは何も返事は返ってこない。

「名も無き者達、そしてこの先にいるはずの“神”この世界の行く末、私はそれがとても気になる。どう世界の姿を見たくはない？」

「ここから出してくれ」

黒い球からベノンの声が聞こえる、ロイテルはすぐにリシアを見た。「ロイテル」

ロイテルは一瞬、反論しようとしたがすぐに黒い球へ触れる。黒い球は静かに崩れ、ベノンの姿が現れる。ベノンはすぐに蛾達を針のように変化させ、リシアに向ける。針の先はリシアの首元で止まる。「僕がなぜ刺さないと思った」

「いいえ、私はもともとからそんなことは気にしていない。でも、もしあなたが私を刺すつもりなら彼がその針を止めたはずよ」

リシアはロイテルを見た。ロイテルはベノンを睨んでいた。針は蛾へと姿を変えていく。

「負けたよ、ニア。君はこの子達をどう思う？」

ベノンの耳元に一匹の黒い蛾が囁くように舞う。

「そうかい、確かに分からもないな。うん、いい考えだ」

ベノンは大きな声で叫んだ。

「重力操作者、いあナンバー9。いるのは分かっているよ」

暗闇から全身を黒に包んだ男が現れる。

「やあ、ベノン。やつぱりばれていたか」

「このお譲ちゃんが一人でここに来るわけないからね。だから誰かしら護衛がいると思ったら君がそうだとは」

「まあ、色々とあってネ」

ベノンは蛾を全身から放ち自身を包みこんだ、蛾達の群れはリシアの前に集まる。蛾の群れがベノンへと姿を変える。ベノンは膝をつき丁寧に頭をさげ、リシアを見つめる。

「君が本当に何を求めているかは知らないが、僕の長い退屈の中でこれだけこんなにくくわくするのは始めてだよ。どうか僕達の期待を裏切らないでくれよ」

ベノンの言葉にリシアは一言だけ返した。

「それはあなた次第よ」

ベノンは笑う、万遍の笑みをうかべ笑う……

リシアは扉へと目を向ける。

「ベノン卿、ロイテルを治療できるかしら？ 私達はこれから神を殺さなくてはならないかもしれないから」

「お安い御用です」

ベノンはロイテルを見て微笑んだ。

「よろしく頼むよ、ロイテルくん……」

〔E7 - 0140524 - ? s T a r t t O〕

ステラスはいつも通り自分の部屋の中へと入った。そして、すぐにこの部屋に違和感を感じた。真っ白ないつもの部屋、大きな窓の前には真っ白な机と椅子がある。そして真っ白な椅子には人の気配がある。

「中々帰ってこないの待ちくたびれたよ、ステラス君」

真っ白な椅子から擦れた声が聞こえ、椅子が回り老人の姿が現れる。老人は机の上に手を組み真っ直ぐにステラスを見つめる。

「アルカナスの天才軍師、マルクトロス卿が何の用かな？」

「どうやらご存知だったようだね、私も自己紹介を省けて嬉しいよ」ステラスは部屋全体を読み込み、そしてこの男が丸腰であることを確認する。

「知らない訳はない、勝利の為にどんな残酷な手段も使う悪魔。

この世界で知らない人間を探すほうが難しい」

マルクトロスは微かに笑った。

「お褒めの言葉をありがとう。さてと私も君とこうやって話す為に

苦労したよ。いつたいどれだけの下準備をしたか……」

ステラスの表情が曇る、この男の纏う雰囲気は人ではない。何か暗く深く、永遠と続く暗闇、その影は少しづつステラスへ近づく。

「11のことか？」

「もつと前だよ、私はこの計画を考えた。実際に実行したのは別の人物だがね、エグルガルの。少し進み過ぎていた。だから君に壊してもらったのだよ」

ステラスは隠し持っていた拳銃をマルクトロスへ向ける。

「丸腰の老人にそんな物騒なものを向けるなんてね」

当然、拳銃から炎が上がる。ステラスは拳銃を放し、を操作しようとする。その時、一発の弾丸がステラスを貫く。ステラスはわき腹を押さえ、後を振り向く。はステラスがどんなに命じても機能することは無い。そこには派手な服を着た男、銃を握った女が一人と全身を布で覆った者がいた。

「どこに隠れていた……」

派手な服を着た男が言う。

「ずっといたさ、あんたが気付いてなかっただけ」

「そうか、その能力を使ってここまで来たのか」

マルクトロスは立ち上がりステラスに近づく。

「は優秀でな、は自己学習することで彼女の能力でもこの国には入れないほどのものでこちらも頭が痛かった。だから君に壊してもらった」

「狙いは私の命か？」

派手な服を着た男が大声で笑った。

「つけあがるなよ、カス。てめえごときの命なんざいつでも取れる」

「君には暫く戦線を離脱してもらおうよ」

マルクトロスは拳銃を受け取りステラスに向ける。

「次に君が目覚める時にこの国があるといいね」

老人の笑顔と共に銃声が響き渡る……

〔第四章 完〕

u n t i t l e d

第五章 予告

狂宴の幕は開かれる……

世界は動き どこへ向かうのか……

灼熱の炎はすべてを灰に変え 焼き尽くす……

多くの命を 燃やし より激しく 燃え上がる……

フォークト・ガル・カーツ

〔灼熱の炎よ 舞え〕

プロローグ近日投稿予定・本章10月投稿開始予定

#### 第四章 E7 - 0140524 (後書き)

最後までありがとうございます。

四章が完結しました、11の事は一区切りつきました。……ロイテル達のは初の次章に跨ぐという構成へ！今回はだいぶ彼のことを書いたので次回まで少しお持ちください。><。。。

50話というこの記念すべき話数を迎えることが出来て大変うれしく思っております。これからも未熟な文章ですがなるべく皆さんを楽しめられるように頑張りますので、よろしければお付き合いください。

鳴谷 駿

## 第五章 プロローグ（前書き）

こんにちは。

五章の始まりです。

本編の投稿は10月からを予定していますが、その前に二話ほどのプロローグが入るかと思っています。では、よろしくお願いします。

## 第五章 プロローグ

第五章 プロローグ

俺の産まれた国はとても貧しい国だった、治安は最悪で人の死な  
んでどこにでもあった。生き抜く為には強い者に従うか、強くなる  
しかなかった。俺は上を目指した、誰よりも強く、頂点を目指し戦  
い、殺し、すべてを燃やし尽した。

俺が国の中でも指折りの組織の頭になった時だ、とある噂が広まっ  
ていた。「国が治安を回復させる為に幻想の道化師アンティック・イマジネーションを雇った」と・

次々に潰される近隣の組織達、そして俺達の組織のもとへ女は現れ  
た。女にはどんな攻撃も能力も通用することがなかった。次々に殺  
される仲間達、俺の能力を使ってもその女は決して燃えることはな  
い……。がむしゃらに戦い、気付いた時には息をしているのは俺  
だけだった。俺は女に尋ねた？

「政府にどれだけの金を貰った？こんな小国の組織を潰して幻想の  
道化師たろに何の特がある？？」

女は不思議そうな顔をして答えた。

「政府？私はただバックを掏られた犯人を捜しているだけだが」

女はさらりと言った。俺の作り上げた組織だったこれだけのことで  
潰された、所詮は強い者には逆らえない、それが世界の摂理……

力だ・・・力だ・・・すべてを燃やし尽す・・・圧倒的な力・・・

フォークトはソファアの上で目を覚ました。目の前の机の上には  
ウイスキーのボトルが散乱していた。頭が重く目覚めも悪い、机の  
上に水の入ったコップが置かれた。

「インビルか、悪いな・・・」

フォークトはコップに注がれた水を飲み干した、インビルと呼ばれ



た女はモデルのような体系で長い紅色の髪を片側に流していた。

「また飲みすぎよ」

「酒で酔えるだけまだましな証拠だ」

インビルは呆れたようで何も言い返さなかった。

「これからマルクトロスの演説よ」

インビルがテレビの電源をつけた、画面にはマルクトロスの姿が映しだされた。テレビの画面が突然黒くなる。

「寝起きからくだらないものを見せるな……」

フォークトはテレビのコントローラを投げ、インビルへ近づいた。

フォークトの腕がインビルの腰へ回る。

「またあの女の夢を見たの？」

「ああ」

フォークトの唇をインビルの指が止めた。

「弱い男は好きではないの」

フォークトはインビルの腕をどかし無理やり接吻キスをした。

「誰に言っただやがる、俺は最強だ……」

### 第五章 カルベレス戦役

カルベレス大峡谷はエグルガルの北部にある峡谷である。カルベレス大峡谷はちょうど隣国との国境に位置している。カルベレスではすでに戦闘は始まっていた。

「MMAのモードをブラスターへ変更」

薄暗い操縦席で一人の男が無数のレバーとボタンを操作していた。

峡谷は月の明かりと無数の無機物が放つ光に満ちていた。谷の上部で岩が人型の戦車へと姿を変えていく。

「こちらヴァイパー、目標の部隊を発見。これより殲滅を開始する」  
戦車には大型のバックパックが装備されていた。バックパックの上部が開き無数のミサイルが放たれる。峡谷を進むアルカナス軍へ無

数のミサイルが降り注ぐ、アルカナス軍は様々な兵器と能力でミサイルを迎撃する。

「やはり対策はしてきているか、近接で叩く」

兵器はバツクパツクと外装を切り離し姿を変えていく……

「さあ、新型の力見せてもらうか……」

峡谷の上空に大型の人影が現れる。人影は4m前後の機械であった、人型の兵器は次々に戦車を破壊する。人型兵器は大型の銃口のライフルとシールドを装備していた、足についたキヤタピラのようなもので滑るように移動し、次々にアルカナス軍を破壊していく。

「数が多い、いつきに片付ける。危険エリアの友軍は撤退しろ」

人型の兵器はアルカナス軍の中央に動きを止める、無数の攻撃が降り注ぐ。爆煙が晴れると共に赤い光を宿した兵器の姿が現れる。

「フィールド解放」

光の球と共にすべてが破壊される。半径数十メートルのクレーターが峡谷に現れる。クレーターの中央にボロボロに朽ち果てた兵器があった。人型の兵器の胸部のハッチが吹き飛び中から細身の男が現れる。男は頭部につけていたマスクを取り投げ捨てた、長めの茶髪をかき上げあたりを見渡す。

「もう限界か」

男は通信機を取り出した。

「こちらヴァイパー、カルベレスでの足止めはもう限界だ。これより帰還する」

男はクレーターの中央から国境側を見つめた、地平線上に広がる無数の光、空をうめつくす光……

くっくくく

く 登場人物紹介 第7回 く

今回は早めの紹介です。

ヴァイパー・オートム

名前  
性別

男

能力

???????

年齢

27いや30か歳

身長

180あるかないか?

体格

細身で長身

髪型

茶髪（割と濃い目な感じ）で割と長めな感じ

服装

基本は戦闘用のスーツなど見るからに特殊部

隊とか兵士

みたいな感じを想像してこれるといいかも

CVイメージ

ちょっと渋めのかっこいい感じ

雑談

五章で登場の新キャラクター。エグルガラムでの最後の主要人物ですだぶん……、三章で登場させようかと思っていましたが、伸びに伸びて五章で初登場。ステラスが言っていた勝ったことのない男。キャラクターとしては軍人らしいキャラクターです。ただ愛国心などはあまりない、自分の居場所は戦場だけだと考えている為に内政などには全く興味なし。見た目も年齢通りな感じ、もっと見た目に気を使えばいい男なのに……そんな感じを想像してくれるとすごくいいかと。

能力はまだ秘密です。今回はパイロットとして参戦、これは能力が起因しています。五章ではそれなりの出番があると思うのでご期待を!!!!

名前

フォークト・ガル・カーツ

性別

男

能力  
年齢  
身長  
体格  
髪型  
服装  
やつとか巻き  
てるかも

炎を操る者？

30くらいの見た目

180くらい

わりとがっしり！！筋肉質でもok

短髪（赤髪くらいでも）

派手好き！！白のスーツに首にひらひらした

CVイメージ

藤原啓治さんとか最高！！！！

雑談

五章ではたぶん一番活躍！！強いですよ！！！！

あとはお楽しみです。

名前

インビル・ヴァロール

女

インビジュアル  
存在消失

能力

28で！！！！

身長

170はない

体格

モデル系 オネエ系とかでもok！！

髪型

長い紅色の髪を片側へ流している

感じ

服装

あつ考えてなかった。

CVイメージ

誰、だつろ……

雑談 第一章から登場して未だに紹介されていないキャラがたくさんいるのに……。えーステイグなどが突然現れたのはこの人の能力のおかげです。簡単に能力の説明、？消す これは五感、六感的に対象の存在を消すことが可能。よくある気配で分かるのかも無理です。対象そのものを認識できなくすると言うのが一番いい表現かと……。？対象はすべての物体 人や物、弾丸だ

どのみを消すことも可能。？効果は範囲、彼女を中心とした一定距離が効果範囲。よって質量などにはよらない。ただし、効果範囲を出てしまえば効果は消える。？攻撃は受ける。この能力は「認識できなくなる」だけであり当然外界からの攻撃は受ける。例えば、フロルが辺り一面を凍結させれば彼らも凍る。ただし凍ったかどうかは確認できない。

五章では彼女の能力が生かされる場面が増えると思うので書かせて頂きました。

この人は根はいい人です。たぶん常識人……

## 第五章 プロローグ（後書き）

最後までありがとうございます。

五章はほとんどが戦闘になってしまつと思ひますが、unit installer という作品の一区切りの章です。最後までお付き合いお願い致します。

## 第五章 Encounter ? (前書き)

こんにちは。

ブログとしてはちょっとあれなので本編になってしまいました。  
今回もよろしく願います。

## 第五章 Encounter ?

第五章 Encounter ?

11の事故、そしてステラス・クルネスの暗殺未遂……、エグルガラムは大きく揺れた。そして今日、アルカナスから正式な宣戦布告があった。第二小隊はエグルガルに残り姫様からの命令を待っている、すでにハウنزの第二、第三、第四小隊がエグルガラムに集結している。現時点で箱美芽隊長達についての情報は何も入っていない。私はまだ怪我の為、ベッドから出ることは出来ない。ただ傍観することしか出来ない。これから大きな戦いが起きる、私が想う人も戦場へ出る、一番彼の力になりたい時、私は何も出来ない。

真っ白な部屋に静かに横たわるステラスをガラスの向こうからリオルは見つめていた。リオルは少しやつれているようだった、普段の輝きはなくて静かにステラスを見つめ続けていた。

「久しぶりに本部に戻れば大将はこのざまか、いつたいリオル様は何をしていたのやら」

リオルはヴァイパーに近づき胸倉を掴み、顔を引き寄せた。

「なんだよ？殴ってみるか？」

リオルはヴァイパーを突き飛ばすように放した。

「目障りだ、この部屋ですつとそうしている」

ヴァイパーはそれだけ言って部屋を出た……

「守れなかった……」

ノークは部屋から出たヴァイパーに近づいた。ノークが何か言おうとするのを遮るようにヴァイパーが先に口を開いた。

「ノーク、久しぶりだな。結婚式出られなくて悪かった」



「久しぶり、気にしてないわ。それよりリオルは・・・」  
ヴァイパーは呆れたように言った。

「あいつに責任がないのは分かっている、ただあの腑抜けた面が気に入らないだけだ。それより新型のMMAの調整は終わったか？奴らはすでにカルベレス大峡谷を抜けているはずだ、新型の実験試験を行いたい。一号機は一発でおしゃかになっちまったからな」

ノークは困ったように戸惑いながらも答えた。

「・・・あなたが調整中のAフィールドを開放したりするから・・・」

ヴァイパーは軽くノークの肩をたたき、立ち去っていった。

「悪かったよ、ただ切り札の威力はしっかり確かめなくちゃ心配だ。先に格納庫に行つて調整しているよ」

ノークはヴァイパーを見送つて、リオルのいる部屋のドアを見つめた。ノークは静かに部屋の中へ入った。リオルはノークの姿を確認するとそつと部屋を出て行くこととする・・・

「リオル、大丈夫？ヴァイパーはあなたを・・・」

「分かっている、大丈夫だ・・・」

リオルはそれだけ言つて部屋を出る・・・

「リオル・・・」

「へっくん、僕達はどなつちやうのかな」

桜家はエグルガルムから支給された部屋で寛ぎながら部下へ突然質問を投げかけた。へっくんと呼ばれた男は短髪にかつしりとした体をしていた。男は書類などの整理をしているようで、適当に答えを返した。

「隊長が分からないことを、私が分かると思いませんか？」

桜家は椅子を限界まで傾け、髪をかきあげた。

「そつだよね」

桜家は目の前にあつた机の引き出しを開けて何かを見つめていた。

「へっくん、あいちゃんを呼んできてくれる？」

「隊長、私が忙しいの見てわかりませんか？」

桜家はチラッとへっくんと呼ばれる男を見た、男は桜家と目を合わせることなく仕事を続けていた。

「隊長、前から何か隠しているみたいですが、あんまり悪い事しないでくださいよ。後始末は自分でお願いします」

桜家はゆっくりと椅子から立ち上がった。

「そんなこと言わないでよ」

「ほどほどにしてください」

愛は一人でエグルガルの基地内を散歩していた。基地全体は騒がしく、どこもかしこも人が激しく行き来していた。ちょうど大きな格納庫の扉が開いていたので、休憩がてら中へ足を進めた。格納庫の中には人の気配はなく、大きな人型の兵器が立っていた。兵器は4m前後でくすんだ銀色をしていた、体のあちらこちらの外装が外されており、頭部などは丸裸だった。兵器は胴体から片腕が切り離されており、片腕は地面で整備されていた。

「ノーク、ちよつと電源を入れてくれるか」

人型の兵器の胴体の穴から突然声が響いた。愛は少し驚き辺りを見渡した、兵器の下には複数のコンピュータが並べられていた。愛はとりあえず声のした方にあつたコンピュータのボタンを適当に押しした。すると突然、外された腕が動き始めた。

「ノーク！お前いつからそんなボケが出来・・・」

兵器の胴体の穴から男が顔を出した、男は愛を見るなり拳銃を構え発砲した。弾丸は愛の足元にめり込んでいた。

「何者だ？」

愛は驚く様子もなく、男を睨みつけた。

「死んでも構わないようだな」

男が引き金を引こうとした時、愛は素早く男へ向かった。散乱する

機械を飛び越え、人型兵器を跳び上る。

「何て奴だよ」

男の放つ弾丸を愛はかわし、刀を抜いた。男は胴体の穴から飛び出し愛に向かった。刀の一閃が男に向かう、男はその一閃を拳銃で受け止める。愛の刀は拳銃を切り裂く、男は切り裂かれた拳銃を放し愛の腕を掴んだ。

「意外といい女？いや、可愛い子だな」

男は愛を抑え、兵器のしたに張られたシートの上へ落ちた。

「君の力じゃ、どうにもならないよ」

男は愛の上に被さるように乗り、身動き出来ないように抑えつけた。愛は微かに笑い簡単に男の体をどかし投げ飛ばした。男は外された片腕に叩きつけられた。愛はすぐに刀を拾い男に近づいた。

「いてえ・・・、能力者かよ」

男が顔を上げると愛が刀を突きつけていた。

「かあ、油断したな」

男は愛の刀を掴み、無理やり引き寄せた。愛は刀を振るい男の腕が飛んだ。

「はい、動かない」

愛は自分の胸に拳銃が付き付けられているのに気付いた。

「二人とも何をしているの??」

ノークの大きな声が格納庫に響いた。男は驚いた様子でノークを見た。

「ヴァイパー！！何をしているの？え・・・ヴァイパー、腕が・・・」  
ノークは愛を見た、愛は少し申し訳なさそうにノークから目線を逸らした。

「お前達、知り合いか？」

「ヴァイパー、渡された資料に目を通した？それに包刃つみぎやさんも・・・」

「  
ヴァイパーは愛の腕にハウন্ズの腕章が巻かれているのに気付いた。  
「ちよっとハウন্ズの実力を試してみたくてな」

ジャスはミラと共に戦況の分析などの作業を行っていた。

「疲れたね、ちよつと休憩しようか？」

ジャスはコンピュータを操作し続けるミラに近づき椅子を引いた。

ミラは突然の事に驚き目が点になっていた。

「少しは休まなきゃだよ。頑張るのはいいことだ、でも頑張りすぎるのはいいことじゃない」

ミラのもとに視線が集まる。

「ミラちゃん、少し休んできな」「俺達に任せな」「ごゆっくりどうぞ」

ミラは申し訳なさそうに頭を下げた。ジャスも周囲の技術者などに軽く会釈をした。

「悪いね、ちよつと休ませてもらうよ」

ジャスはミラをつれて部屋を出た。

施設内の休憩室は誰もいなく静かだった。休憩室は白で統一されており、飲食物の販売機とソファ、机などが置いてあるだけのものだった。その簡素な休憩室も今のエグルガムでは数少ない休める場所であった。

「何か買って来るから先に座ってな」

ミラは財布から紙幣を一枚取り出し、ジャスに渡すとソファの方へ向かった。

「本当によく出来た子だよ」

ジャスはいくつか飲食物を買ってミラのもとに向かうと、ミラはソファの上で寝てしまっていた。

「ゆっくり休みな」

ジャスはそつとミラをソファに寝かし、自分の上着をかけ向かいのソファへ座った。ジャスは静かに軽食を取り、ミラの分を机の上へ置き部屋を出た。

休憩室の外には思わぬ人物がジャスを待っていた。

「あと二時間後にミーティングがある、フーとテムジにも伝えてくれ」

リゼリはそれだけ告げて立ち去ろうとする。

「第一小隊の隊長が空席になるなら私が立候補する」

リゼリは特に反応することもなく廊下を進む。ジャスは空間ごとリゼリを引き寄せる、引き寄せたりゼリの胸倉を掴む。

「私はあるが嫌いだ、あんたが私を嫌いなのもよく知っている。

当然、あんたが私を嫌いな理由も分かっているつもりだ」

リゼリはジャスの腕を払い、拳銃を召喚しジャスに向ける。

「撃ちなよ」

〜つづく〜

## 第五章 Encounter ? (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

え、開戦まではあと一、二話かかるかもしれないけれど。

しばらくはこんな感じですがよろしくお願いします!!!

## 第五章 Encounter ? (前書き)

こんにちは。

今回は全く戦闘がないだと・・・

今回もよろしく願います。

## 第五章 Encounter ?

第五章 Encounter ?

「母さん……、待って……」

目を覚ますと僕は真つ白なベッドに寝ていた、部屋には窓から日の光が差し込んでいた。部屋は木造で何だか不思議な香りがする、僕はゆっくりとベッドを降りた。

「僕は確か……」

頭の中で記憶を呼び戻す、ぼんやりとした意識の中記憶が戻る。

「隊長!!!!」

僕は部屋の扉を開けた。扉の外は広いリビングが広がっていた。大きな窓から光を受け、部屋は明るく、窓の外には真つ白な浜辺と青い海が広がっていた。

「ここは……、僕は死んだのか?」

リビングにあるカウンターから笑い声が聞こえた。カウンターにはグラスを持った女性がいた。女性は長くふわふわとした黒い髪に少し焼けた肌をしていた。

「ここは残念ながら天国じゃないの」

女性はクスクスと笑っている。僕は自分の置かれている状態を理解しようと必死に頭を働かせていた。

「フロルくん」

カウンターにいた女性が僕の名前を呼んだ。

「ちよつと来てくれる?」

女性は僕に向かって手招きをしている、本能的に彼女が敵でないこととは分かった。

「ほら、はやく」

僕は言われるがまま彼女に近づいた。彼女はカウンターにグラスを5つ並べ。

「氷、作ってくれるかしら」



僕は彼女の名前も何も知らない、でも彼女は僕の名前も能力すらも知っていた……。僕は言われるがまま氷を造りグラスの中へと入れた。

「綺麗な氷、ありがとう」

彼女は優しく笑い、グラスへと飲み物を注ぎ始めた。すると外から人の声が聞こえる、声はだんだんと大きくなり家の中へと響き始めた。

「ただいま、今日はとびきりいい魚とれたよ」

声の主は男だった、不思議な形をした帽子を被り、釣竿を型にかけていた。男は僕を見ると嬉しそうに笑った。

「ようやく起きたかい、調子はどうだい？」

「あつ……。大丈夫です……」

僕は何となく答えを返してしまった。すると男の影から二人の女性が現れた。

「箱美芽隊長！！」

僕は隊長の姿を見てとっさに声が出た。そして隣にはあの女いた。

「隊長、何でその女と！！これはどういうことですか？」

隊長は特に答えることもなく、リビングの木製の椅子へ腰かけた。僕はその姿を目で追った……。突然、頬に冷たいものが触れる。とっさに振り返るとカウンターにいた女性がグラスを持っていた。

「どうぞ、とりあえず座ったら？私達が敵じゃないことは何となく分かるよね」

僕はゆっくりと頷きグラスを受け取った。

ヴァイパーは新しくなった手を動かし感覚を確かめていた。愛は医務室の壁に寄りかかり腕を組んで黙り込んでいた。

「おい、ハウন্ズの、腕はこの通りだ。それに先に仕掛けたのは俺だ、もう戻れ」

「すまなかつた」

愛はヴァイパーのを見て見て呟き医務室を出て行く。ヴァイパーはその姿を見て微かに笑った。ヴァイパーは近くにあったコンピュータの電源を入れ、エグルガルのデータベースを開いた。

「包刃<sup>つっみや</sup> 愛<sup>あい</sup>」

ハウンス第二小隊に所属し、Bクラス以上の質量操作者。自身の能力よりも刀を使った戦闘力に秀でており、能力の応用性も高い。

「包刃ねー、使えるね」

ヴァイパーは通信機を取り出した。

「ノーク、俺だけどMMAの装備全部使えるようにしてくれ、試験段階の物もすべてだ」

「一号機ほどの重装備は出来ないわ、長時間稼働用のバッテリーも積まなくちゃいけないから……」

「大丈夫だ、考えがある。二時間後のアステリオスとのミーティングは俺も出る。あとミラとベガも参加させてくれ、あと捕まったらバースの奴も頼む」

通信機からノークのため息が聞こえる。

「報告書くらい読んで……」

ヴァイパーは医務室にいる看護師を見た、看護師は「バースさんは行方不明です」と書かれた紙をヴァイパーへ見せた。

「ノーク、バースの奴が見当たらないかと思ったら行方不明って。まああいつの能力じゃ大した戦力にならないが、お前の旦那は何やっているんだか。とりあえず二時間後に作戦室で、ミラやベガも呼んでおいてくれ」

「私はシロエ、よろしくね」

僕は隊長の隣の椅子へ腰掛けてカウンター<sup>シロエ</sup>にいた女の話聞き始めていた。

「どこから話したらいいかな？とりあえず、どの程度私達のことを知っているかだけど・・・」

シロエは首をかしげあの女の方を見た。あの女、それはアーニユ・ワリーユヌス。僕達はこの女に負けてここにいる・・・

「私は何も話してないし、説明もしない」

あの女は椅子の上に体育座りで座り、ストローで飲み物を飲んでいる。その姿からは決してあの時の姿は想像できない。

「そうよね、四季さんも話す気なさそうだし、イータに関しては・・・」

シロエが帽子を被った男を見ると男は帽子で顔を隠した。

「私が説明するわ」

シロエは飲み物を軽く飲み話を始めた。

「私達は名も無き者」

「フロルはきよとんとした顔でシロエを見つめていた。

「名も無き者を知らない？」

「ナンバーズ？」

「普通は知らないわよね。名も無き者とはこの世界の管理の為に造られた人？いや人とは言えないかしら、まあその辺りのことはどうでもいいわ」

フロルは突然のことに訳が分からなくなっていた。

「私も最初は信じられなかった、でもこいつらは人を超えた存在だ」  
四季がフロルを助けるように一言だけ言った。

「まあ、すごい能力者程度に思ってくればいいわ。ちなみに私の力は未来を見ることが出来るの」

「待つてください、まずあなた達がSクラス以上の能力者だというのは分かりました。僕もそこにいる人の力は体験しています。でも未来を見るって、本当にそんな力が」

シロエはフロルを一瞬するどい目を見た。

「あなたが知りたいなら、どう死ぬかも私は分かっている」

フロルはシロエの言っていることが事実であるとすぐに理解した。

「フロルくん、僕等は世界の管理、いや維持の為に創られた者達だ。でも今は何もしていない、僕達はもうこの世界に興味がないからね」帽子を被った男が口を開いた。その言葉の言い方自体が軽く、彼の言ったことは言葉通りの意味であることがよく分かった。

「それで僕等二人はこの小さな島でひっそりと暮らしていた訳。そうしたらラム、いや君達はアーニユって呼んでいたね。アーニユが何十年ぶりに顔を出したかと思えば、君達を連れてきたのさ」

フロルはアーニユを見た、アーニユは椅子に座ったまま寝てしまっていた。

「ようするに私達はいつらに助けられたってことだよ」

四季はそう言うのと椅子を立ち、部屋を出で行った。僕は何となく隊長の機嫌が悪い理由を分かった。きっと隊長は自身の死を覚悟していた、自分の死に場所だとの場を受け入れていたのだろう。

「今日の夕食は宴会だ、もう少し食材を採ってくる」

帽子を被った男もグラスを空にし、部屋を出て行く。僕はただ椅子に座り二人を見送る。

「フロルくん、ちょっとおいで」

僕はシロエさんの後を追って二階へと上がった。家は木造でたくさんの窓から不思議な香りと日の光を取り込んでいた。とても優しい家だった、時の流れがゆっくり温かく自分の今までいた世界とは別ものだった。

「きれいだ……」

二階には大きなバルコニーがあった。目の前に広がる真つ白な浜辺、青くどこまでも続く海、僕は今までにこんなに綺麗な世界を見たことがなかった。

「世界はこんなにも綺麗なの、でも多くの人達はそれに気付かず生きていく。それってとても悲しいことじゃないかしら？」

シロエさんが僕の頭を優しく引き寄せた。

「え……」

「いいの」

僕は言われるがままシロエさんに抱きしめられた、とても優しくいい匂いが彼女からはする。

「私の力は未来を見ることが出来る。でもね、その人の今までに歩んできた道も見えてしまうの。今までよく頑張ったね」

「そんなことないです」

「いいの、子供は無理しなくて」

僕はいつのまにか泣いていた、この涙が何故流れたのかは分からなかった。でもこんなに安心出来たのはいつ以来だろうか？

「あなたが望むのならずつとここにいてもいいわ」

四季は浜辺からフロルの姿を見ていた。

「フロルくんが元気になって良かったね」

イータが四季に話しかけた、四季は何も言わずにフロルを見ている。

「彼といるのが怖いのかい？自分なら彼を守れると思っていた、でも実際は守れなかった。彼は自分と共に来ることを君は分かっている、でもそれが彼を殺すかもしれない」

四季はイータを悲しい目を見た………

〜つづく〜

## 第五章 Encounter ? (後書き)

最後までありがとうございました。

今回はゆっくりなお話でした、次回もこんな形になってしまうかもしれません。

開戦までしばらくお待ちください。

だんだんと寒くなって来ました、皆さんも体調に気を付けてください。

## 第五章 久遠（前書き）

こんにちは。

今回は53話との二部構成です。この物語を読んだことがない方も53話を読んで頂けると少しは分かるかと・・・

今回の話は久遠と言う曲をもとに書いております。よろしければこの曲を聴いてくださるとよりイメージがわくかと。

久遠 〳楽団員さんの演奏〵

Noriko Matsueda & Takahito

Eguchi

FINAL FANTASY X-2 Original Sound

track 「Disc 2」

## 第五章 久遠

〔第五章 久遠〕

夜の宴はとても豪華だった、初めて目にするような料理が多く並び、レコードからは優しい音楽が流されていた。食事中もシロエさんとイータさんが色々な話をしてくれた。僕の知らない世界の魅力を二人はとても楽しそうに話す。アーニユさんはずっと料理を食べていた、今は満足したのか椅子の上で寝ている。隊長は何も言わず料理を口に運んでいた、でも二人の話には興味があるようで、カウンタ―で一人盗み聞きをしているようだった。

「フロルくん、ちょっとおいで。シロエ、アーニユを起こしてくれ。あと浜辺にあれを運んでくれるかい」

イータさんは食事が終わると僕を浜辺へと連れて行った。浜辺はとても静かで、月の光を受けた海がきらきらと輝いていた。海の心地好い風が優しく吹き抜けて行く。

「僕的能力を見せてあげよう」

イータさんは海を眺めながらゆっくりと腕を横に振った。

「すごい……」

目の前に突然、ステージが現れる。自然のもので作られたステージが浜辺に現れ、ステージの周りを椰子の木やランプが彩る。

「僕的能力は創造、僕はどんなものも創ることが出来る」

「いい感じに出来たわね」

シロエさんがアーニユさんを連れて現れた。シロエさんは何か大きなケースを持っていた、そのケースをイータさんに渡すと、イータさんはステージに椅子を作りケースを開けた。ケースの中には弦楽器が入っていた。

「アーニユ、腕はさび付いていないだろな？」

アーニユは眠そうに目をこすると、海に近づき海水で顔を洗った。

「目が覚めた、私のピアノは？」



イータは指を軽く鳴らすとステージにピアノが現れる。アーニユは優しくピアノの鍵盤に触れた。

「悪くない音だ、また腕を上げたな」

「そんなことないさ、僕の創る楽器は本当の音は出せない。人が時間を、命を使って造るものにはかなわない」

シロエさんもステージに上がると笛を取り出した。

「このままのじゃ、人が足りないな。フロルクン少し目をつぶってくれるかい」

フロルが目をつぶると突然騒がしくなる。

「目を開けてごらん」

目の前のステージに楽器が並ぶ、三人の服装がスーツやドレスへと変わっていた。

「ではお聞きください」

流れる音色は優しく僕を包む 奏者のいない楽器達も音を奏でる

三人の奏でる音は独特だった

イータさんの音は自由 シロエさんは温かい アーニユさんは不思議な感じ

でもそれぞれの奏でる音は 楽しそうで 綺麗で でも少し悲しく・

「また泣かせちゃったわ」

「こんな音で泣かせてしまって申し訳ないな  
僕の目からは涙がこぼれ落ちていた。

「すいません、何か止まらなくて・・・」

イータはステージを降り、フロルの前に立つ。

「君は僕等と違い、綺麗な音を奏でられる。それは君が人だから、君の歩んできた道は知っている。君がこれから選ぶ道も知っている、

でもその道は君が決めるべきもの」

イータはフロルの手に何かを渡した。

「これは」

フロルの腕には小さなナイフが握られていた。そのナイフは綺麗な白い刃に金色の柄をしたシンプルなものだった。

「これは僕が最後に作る武器、この刃はどんなものでも切り裂く」

「イータさん、僕は……」

イータは優しく笑う、イータの横にシロエが現れる。

「私達はあなたにかけたの」

シロエも優しく笑う。

「君はどうしたい？」

フロルは真っ直ぐに二人を見た。

「ありがとうございます」

フロルはナイフを握り締め走り去る。

「行っちゃたね」

「いい子だ。ラム、最後にとってもいいものを見ることが出来た、僕達はそろそろ終りにするよ」

アーニユは立ち上がり二人へと近づいた。

「ラム、ごめんね。我が儘ばかり言って、最後に一つだけいい？」

アーニユはただ頷いた。

「名も無き者達を助けてあげて」

「最後に一番やっかいな頼みごとを」

「ごめん」

シロエは両手を合わせて笑いながら謝った。

「じゃあ、頼むよ」

アーニユは二人に触れる、二人は手を、繋ぎ目を閉じる。

二人は粉のようになり姿を消して行く……

「またな」

二人の姿と共にステージは消え去る。二組の楽器だけが浜辺に残る、二組の楽器はよりそい月明かりにてらされていた。アーニユは楽器に近づいた、楽器には二人のサインが掘り込まれていた。

「お前らの楽器、綺麗な音を奏でていたよ……」

〜つづく〜

久遠 長く久しいこと。遠い過去または未来。 2 ある事柄がいつまでも続くこと。

## 第五章 久遠（後書き）

最後までありがとうございます。

この話は本来はイータとシロ工のことをもつと書いた後に投稿するべき話だったかもしれませんが。しかし、二人は皆さんが想像するような夫婦です。二人は新しい命を生めない中で、長い間、世界を守り何かを探し続けていました。そして二人は何かを見つけ終わりを向かえます。二人が見つけたものはどんなものなのでしょうか？それをしっかりと伝えられるように頑張ります。

この話は久遠と言う曲から産まれた話です。この曲を好きな方や作曲者などには本当に未熟な話ですいません。

でももしよろしければこの曲を聴いてみてください。とても綺麗な曲です。

長くなってすいませんでした。もしよければ今後もこの物語にお付き合ってください。 鳴谷駿

第五章 Encounter ? (前書き)

今回もよろしくお願いします。

## 第五章 Encounter ?

「第五章 Encounter ?」

「撃ちなよ」

銃口がジャスの胸前で止まる。そして、一発の銃声が響いた・・・リゼリの持っていた拳銃が吹き飛んだ。

「普段なら止めませんよ、でもこの時期に貴重な戦力を失うのはあまりにも痛い。君達の頭がよろしくないことも十分に承知だったが・・・ここまでとはね」

通路の奥には長い髪を結わいた細目の男が数名の部下と共にいた。部下の一人の手には拳銃が握られており、全員の腕にハウンス第五小隊の腕章が巻かれていた。

「ターク隊長」

細目の男はそつとりゼリに近づき耳元で囁いた。

「もし銃口が向けられているのがリゼリ君だったら僕は止めたかな？」

タークは怪しく笑い、リゼリ達から離れた。

「二人ともこのあとのミーティングに遅れないでくれ、私の貴重な時間を無駄にしないでくれ」

離れて行くタークの姿をリゼリとジャスは静かに見つめていた。二人はそのまま目を合わせることもなく、お互いに逆方向へと足を進めた・・・

「あいちゃんはどこへ行ったのやら」

桜家は基地の屋上の柵に寄りかかり、煙草を取り出し火をつけようとした。

「つかないな」

桜家の目の前にライターが差し出された、桜家は軽くお辞儀をして

煙草へと火をつけた。

「君は第四小隊の・・・ごめんね、名前忘れちゃったよ」

桜家の隣にはビズルが居た。ビズルも煙草へ火を点し柵に寄りかかり空へ煙を吐き出した。

「ビズルだ、第三小隊の隊長さん」

桜家はビズルを見てにやけた。

「桜家だ、お互い様のようだね。ビズルくん」

桜家は空を見つめるビズルを見ていた。

「なんだよ、おっさん」

「おっさんとは！僕はこれでも君の上官だよ。まあいいけどね」

ビズルは吸いかけの煙草を消し、新しい煙草へ火をつけた。

「俺の顔に何かついてるか？」

桜家は首を横に振った。

「君は名前も見えた目も悪者見たいだなあ〜と思つてさ」

ビズルは噴出すように笑った。

「悪者か・・・、俺は極悪人だよ。何人も殺してる」

「たくさん殺した者が極悪人なら僕も同類だよ」

ビズルは不思議そうに桜家を見た、桜家はエグルガルの風景を見つめていた。

「例え大義名分があつても、人殺しは人殺し。僕達は悪人さ、ただエグルガルのステラスくんみたいに英雄には成れるけどね」

「英雄か・・・、おっさんは英雄になりたいのか」

ビズルは笑いながら尋ねた。

「英雄なんて肩書きはいらないさ」

突然、大きな音をたてて屋上の扉が開いた、扉からは二人の少年が現れた。少年の一人は怒っているようで、ビズルを見つけるなり睨みつけた。

「ビズルさん！！さぼるのはあなたの勝手ですが、通信機くらい持ち歩いてください。探すのは僕等なんですから！！」

ビズルは二人を蛇のような目で睨みつける。

「そんなに大声で言わなくても聞こえている」

二人は背筋を凍りつかせ、自然と後へ一歩下がっていた。

「冗談だ、悪かった。用件は何だ？」

ビズルは軽く笑った、二人は大きいため息をついた。

「ビズルさんの冗談は、冗談で済みません。ミーティングが一時間後にあるので、それに参加するようにと隊長が」

「分かった、すぐに戻る」

二人は報告を終えると軽く頭を下げて、屋上から姿を消した。

「第四小隊は若い子ばかりで大変だね」

「そうでもないさ、それに俺が一番の新人だ」

桜家は大声を出して笑った。

「あの二人の内の威勢のいいのは、大きな財団の一人息子だね。姉貴が第一小隊らしい」

「あの子がクローアちゃんの弟さんかあ、優秀な姉を持つと大変だね」

桜家はビズルの反応を窺うように横目で見た。ビズルは煙草の火を消し、屋上の出口へと足を進め始めた。

「どうだろうな」

ビズルはドアの扉へと手をかけた……

「ビズルくん、こんど一杯どうだい？」

ビズルは扉を開け、屋上から姿を消していく。

「奢りなら付き合うよ」

桜家は短くなつた煙草を大きく吸い込み、煙を吐き出し火を消した。  
「どだろうかか……」

大きな飛行艇がアルカナスの格納で多くの積荷を積み込まれていた。飛行艇は大きな三角形をしていた、研ぎ澄まされた細い形状をし、薄赤く塗られた外装をしていた。

「これが新型かーあ、かつこいいじゃん」

他の兵士とは違い赤い軍服を着た青年が作業用の通路から飛行艇を



見上げていた。

「戦術型高機動飛行艇トリギオン、我がアルカナスの技術力の結晶だよ」

青年の後から擦れた声と杖の音が聞こえてくる。

「マルクトロスさんも前線に？」

「もちろんだよ、エグルガルムが潰れるのを特等席で見れるのだから」

青年は目を輝かせて飛行艇を見つめた。

「これがジーさんの言っていたやつか、いいセンスだ」

フォークトがインビルを連れて現れる、青年はフォークトを冷たい目で見た。フォークトも青年を見て表情を歪めた。

「赤服つてことはこれが噂の アピリス A p i e s か」

フォークトは青年を見下し、馬鹿にするように言った。青年はフォークトへ近づいた・・・、マルクトルスは静かに二人から離れた。

「何か用か餓鬼」

「やめておけ、フェア」

通路の奥から声が響く、赤い服を着た三人が現れる。一人は長身で赤と金の混じった髪をした男、もう一人は派手なピンク色の髪の女、そして顔半分に刺青をした男。

「ジエネルさん」

「長身で赤と金の混じった髪の男が ジエネル フォークトへと近づく。

「うちの部下が何か？」

「興醒めだ、戻るぞ、イビル」

フォークトは舌打ちをして三人が来た道を引き返そうとした。

「一つ言っておきます、私が助けたのはあなたですよ」

炎が四人を取り囲む・・・青白い光が放たれ炎が消える。

「君を思つての忠告だ、自分の力をあまり過信しないほうがいい」

フォークトは振返ることなく姿を消した・・・

「セルフィアが居なくて良かった・・・」

薄暗い部屋の中、青い目に灰色の長い髪をした女が椅子から立ち上がり、女は数枚の紙をベッドへ投げ捨てた。

「ステイグ・フェニシア、ナンバー6……」

〜つづく〜

## 第五章 Encounter ? (後書き)

最後までありがとうございます。

これで五章の主要メンバーがそろいました!!次回は少し話が進む  
予定です・・・たぶん。

第五章 BW・R（前書き）

今回もよろしくお願いします！！！

## 第五章 B W ・ R

〔第五章 B W ・ R〕

エグルガラム 大会議室

会議室にはアステリオスとエグルガラムの両国の上位兵士や幹部が集まっていた。ノークが簡単に挨拶を済まし、部屋の明かりが消えた。会議室の前方にあるモニターにエグルガラム周辺が映し出された。エグルガラムは過酷な環境下に位置しており、国自体の面積は一つの大都市程度しかない。しかし、科学力による地下都市や高層建造物によりその小さい面積の中に国家として十分な人口を抱えている。

エグルガラムは扇形をしており両側を山に囲まれている、その為に都市としての防衛力は高く、地形には恵まれていた。

「あと68時間以内にはアルカナス軍はこのエグルガラムに到着します」

会議室にいる全員が引き締まった。

「現在、私達エグルガラムはカルベレス大峡谷以降、戦闘を行っておりません」

エグルガラムの軍部の一部から不満の声がこぼれ始める。

「これは戦術シミュレーションの結果、私達が勝利する方法、いや生残る方法は一度の戦いでアルカナスに勝利することだけです。現状としてわが国に長期戦を戦い抜くほどの国力はありません。その為、私は一度の戦闘でこの戦争を終らせるつもりです」

会議室の中がざわつく。

「戦闘を行う場所はここです」

ノークはエグルガラムのすぐ前を指した。ヴァイパーは納得したように頷く、エスナやハウنزの面々も同じように頷いた。

「私達が勝利する方法はマルクトロスを確保または・・・そしてアルカナスの主戦力であるアピースの壊滅です。アピースは7名で構

成された少数部隊、この半数以上を戦闘に出来れば十分でしょう。この両方を成し遂げればいくらアルカナスでも戦闘の続行は不可能撤退を余儀なくするでしょう」

「単純な作戦で助かる。要するにアルカナスの奴等を壊滅させりゃいいんだろ」

ヴァイパーが大声で言った。それに反応する様に会議室の一角から声が響いた。

「一度、退却させることに何の意味がある？」「またアルカナスが攻め込まないと言う確証がどこにある」

会議室の中が大きく割れる。

「そのことには私がお答えしましょう。」

エスナが口を開いた、会議室全体が静まり帰る。

「世界のすべてが私達の敵ではありません。今は他国も状況を見守っている状態です、この戦いの結果が世界にどう影響を与えるかわかりますか？」

エスナは会議室全体を見渡す。

「私達が勝てば多くの国が確実にアルカナスに反旗を翻します。」

エスナの言葉が会議室に響き、すべての者が彼女の言葉を信じた。

これの力こそが彼女の持つ才能……王としての素質……

。そしてエスナは更に杭を打ち込む。

「私達アステリオスはハウズ全小隊、王族警備隊をすでにこの国に集めています。そして可能ならば軍部の将官クラスも召集致します。」

会議場全体が震える、会議場にいたハウズ小隊の面々も驚きを隠せずにいる。

「私達はアステリオスもこの戦いに賭けています。」

会議室に拍手が響き渡る。

「それでは作戦の詳細を説明致します。それではこちらのモニターをご覧ください」

その映像に多くの者が驚き、多くの者が微笑んだ……

アルカナス アピース専用作戦室

マルクトロスは中央の高そうなソファーに深く腰かけ、話しを終え机にあったコップへ手を伸ばした。

「流石はマルクトルス元帥、自身を囲になさるなんて」

ジエネルはマルクトロスの向かいでゆつくりと眼鏡を外していた。

「奴らの狙いは私とアピースだろう、だからこそ君達は前線で戦ってもらおう。そして存分に彼らを苦しめたまえ」

マルクトロスは嬉しそうに笑った。

「分かりました。各員に伝えておきます、好きなだけ暴れると」

「セルフィアはどうした？」

「隊長はデリーヌさんと一緒です。私より元帥の方がご存知かと思えますが？」

マルクトルスは深く目をつぶった。

「あの女には注意しておけ、私自身も信用していない」

「了解しました」

マルクトロスはゆつくりと腰を上げ、部屋の出口へと向かう。

「私自身はあなたの作戦に何の不満もありません。しかし、一つだけ尋ねてよろしいですか？」

「なんだ」

「ステラスを襲撃したのは、彼に私達が勝てないと判断したからですか？」

マルクトロスは足を止めて単調に言った。

「その質問をした時点で、君達の実力は彼に及ばないのではないかね？」

それだけ言ってマルクトロスは部屋を出た……

〜つづく〜

## 第五章 BW・R（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

次回からついに開戦です。私の持てる表現を出し切り、最大限皆様楽しんで頂けるよう頑張ります！！

次話を6：00に投稿いたします。朝早いですがよろしければお読みください。



## 第五章 Opening(前書き)

こんにちは。

では五章の始まりです。

最後までよろしく願います。

この話はASIAN KUNG-FU GENERATIONの脈  
打つ生命がモチーフになっています。よろしければ一緒にどうぞ。

## 第五章 Opening

静かに上り行く太陽の光が部屋を照らす

リゼリは小さな文字の彫られた銀色の拳銃を眺めていた……

朝日を眩しそうに見つめ 腰を上げ部屋を出る

「いくぞ……」

部屋の外には第二小隊の面々が静かに待っていた、リゼリは一言だけ告げ足を進める

〈untitled〉

騒がしく動き続けるエグルガーム兵達、その姿を見つめ拳を握るリオル

後から声が響く、その声にリオルは驚くように振り返る

耳に光る 金色の月…… 朝日を浴び 輝きを放つ……

鋭く光る 刀先がりオルに向けられる

「そんな顔でどうするんだよ……」

桜家は司令室の窓から愛の姿を眺めていた、その顔は険しく、切なく……

「隊長、もう起きてんですか？珍しいですね」

少年は部屋に元気よく現れた、桜家はゆっくりと振り返り、笑顔でリビイと部屋を後にする……

愛の一閃をリオルがかわす 愛は続けて刀を振るう・・・  
リオルは素早く回り込み 愛の腕をとる 愛は睨みつけるように  
リオルを見つめる

真っ白な部屋にステラスは横たわる・・・

ノークは反応のない、ステラスの腕を優しく握り続ける

その姿はかつてステラスがノークにしていたもの、そのものであつた・・・

「今度は私が頑張るからね、ステラスはゆっくり休んでいて・・・」  
ノークが手を放そうとするとステラスの手が微かに握り返す、ノークは優しく握り返しそつと

を放した。部屋の外には二人の少女が心配そうな顔でいた。ノークは二人の視線にあうようにかがみ、二人を見つめ言う。

「ステラスは大丈夫、私に力を貸してくれる？」

二人は大きく頷き、進みだす・・・

エグルガムから見える地平線に無数の影が浮かび上がる、その中で・・・

トリギオンの艦長席でマルクトロスは怪しく笑い、顔を上げた・・・  
地平線に湧き上がる炎 炎は一箇所に集まり フォークトが現れる・・・

フォークトの後にいた部下は一斉に姿を消す 男は大きく腕を広げ  
空を見上げる

空らを舞う無数の戦闘機達・・・ 地を進む 兵士と兵器・・・

「さあ派手にいこう!!!」

ヴァイパーは特殊なパイロットスーツを纏い、厚い装甲と重武装を

纏ったMMAに向かう・・・

ビズルはゆつくりと煙草の煙を吐き出し、屋上から黒く染まっていた地平線を見る・・・

ヅバイは胸に付いた王族警備隊の印を外し、静かに机の上へ置いた・・・

ジャスはリゼリの後姿を見つめ、自身の拳を握り締めた・・・

リゼリが扉を開けると日の光と共に、整列したエグルガラムとアステリオスの兵が目に入る。壇上にはエスナとノークが二人で立っている。その姿を多くの兵が見つめる、どの兵士の目も輝きを放っていた・・・

リゼリはエスナを見上げ 二人の視線が交わる・・・

マルクトロスはトリギオンから全軍へ回線を繋ぐ

「時は来た この戦いの勝利こそ世界を正しき道へ導く

誇りを胸に 存分に力を振るい 世界を導こうではないか!!!」  
アピースがマルクトロスの後に並びその映像が放映される。アルカナス軍全体が震えるように歓声が響き渡る・・・

フェアは嬉しそうにアピースのメンバーを見渡す、中央立つ青い目の女はフェアの頭を軽く叩き下がって行く。

「セルフィア隊長」

「今回はお前に任す、私は別にやることがあるからな。あと美実とクライツは借りる」

「了解しました!!!」

セルフィアは軽く手を上げ姿を消す、フェアは振り返りエグルガラムを見つめた・・・

リゼリは視線を逸らし、エスナへと背中を向けた。エスナは一瞬だけ微笑んだ……

## 第五章 Opening (後書き)

最後までありがとうございます。

今回は普段とは少し違ってすいません。決してこのこの物語が五章

で終わりの訳ではないので!!

では次回もよろしく願います!!

今晚にでも投稿いたします!!

第五章 開戦（前書き）

よろしくお願いします！！

## 第五章 開戦

第五章 開戦

両軍が距離を置き向かい合う、エグルガラムにとっては予想外の展開であった。あのマルクトロスがこんな形での開戦を望むとは思っていなかったからだ。

エグルガラムは都市の前方にジークフリードを中心に防衛ラインを築き、各小隊の配置も完了していた。ジークフリードの司令室にはノークやエスナ達がいた。

「イフシロン Yを起動、戦場の空間認識を開始」

司令室の中央に大きな立体映像のマップが現れ、そこには戦場が詳細に写し出される。リアルタイムで動く戦場の縮図が表示される。

「Yの稼働に問題ありません」

「このYもあなたの能力によるもの？」

エスナはノークに尋ねた、ノークは首を横に振った。

「は私とリンクすることで能力を発揮した、Yは実は私とステラスでリンクして稼働しておるの、彼との約束だね」

「彼も戦っているのね」

「もちろんよ」

ノークの笑顔は強がりであることを誰もが分かっていた。彼女は本来こんな所にいる人間ではない……

「ノーク様、敵陣から単体で出る者が……」

司令室のモニターにその映像が映し出された……

「ちよつと行ってきます!!」

フェアはそれだけ行ってトリギオンから飛び降りた。フェアは青い光に包まれ、地面へ着地した。フェアは紺色の髪をツンツンに上げており、少し筭のようにも見える髪形だった。全身を赤い布に包み、



きらきらとした目でエグルガルムを真っ直ぐに見つめる。

「ジエネルさん、いつもすいません」

フェアはそのまま前線から飛び出し、最先頭に立つ。

「ジユネルさん、いつものお願いします」

フェアは両手を合わせて、トリギオンの方へ頭を下げた。すると小さな青い光が彼の口元へ集まり消えた。フェアはまた頭を下げた。

「では、チェツク、チェツク。エグルガルムの皆さん、聞こえますか？」

両軍に彼の声が響いた……

「彼は？とりあえずアルカナスの兵士みただけど……」

ノークは突然の出来事にどう対処すべきか頭を抱えていた。

「とりあえず何か答えろ、相手さんも困っているぞ」

司令室にヴァイパーの声が響いた。ノークは司令室のマイクを握った。

「聞こえています……」

フェアはノークの返事を聞いて笑った。

「返事ありがとうございます！！これやると突然撃たれたりするから、まともに返事してくれて感謝します」

「どういたしまして……」

二人のやり取りは両軍へ響き渡る、ヴァイパーや桜家などは二人のやり取りを笑いながら聞いていた。

「いきなりすいません、降伏してください」

両軍が静まり返る……

「あの馬鹿、一度も降伏したことないのに、懲りないな」

「いいじゃない、あれが彼のいい所なんだから」

アピースのメンバーは笑いながらフェアの話聞いていた。

「エグルガラムがステラスと言う男に支配されているのは知っています。だから彼は僕が倒します！！そうすれば無駄な血は流れません」

エグルガラムの兵士達のほとんどが噴出した。司令室はあまりの驚きに静まり帰っていた。

「ごめんなさい、降伏は出来ないわ。それに彼は誰も支配してはいわ、私達はそれぞれの大切なものの為に戦うの、だから降伏はできない。でもありがとう・・・」

フェアは驚いたように暫くだまり込んだ・・・

「すいませんでした！！分かりました、なら僕達は手を抜くことなくあなた達と戦います」

フェアはマントを外した。赤い軍服が現れ、フェアの両手には太い輪が握られていた。輪は中心を繋がれており、そこをフェアは掴み前方へ腕を出した。太い輪から三本の長いバレルが飛び出す、そしてその周りに剣の刃が現れる。それはチャクラムから三連型の銃口を持った大剣がついたような武器だった。一方を空高く上げ、トリガーを引いた。静かに3発の銃声が響いた。フェアはチャクラムを下ろし、目の前に構え剣の部分へ額を当てた。

「フェア・クラウル、A p i e s   S e c o n d   我が正義の下に命を奪い   明日へ導く・・・」

フェアは真っ直ぐにジークフリードを見つめた。

「最後に一つ、あなたの名前を覚えてくれると嬉しいです」

「ノーク・クルネスです」

フェアは頭を傾けた。

「ノーク・クルネス？待てよ・・・、ステラスの奥さん！！！」

「そうです」

フェアはがっかりとしたように肩を落とす。

「いきなり失恋だ、そして俺が受けた命令の一つはあなたの殺害で

す

「言つてよろしいのですか？」

フェアは恐る恐るトリギオンを見た。

「大丈夫！！じゃ、始めます」

「はい、お互いの命運を」

フェアはチャクラムを大きく振るい、構える。

「あんた、いい人すぎです」「あなたもね」

フェアは一気にエグルガラムへ向けて走り出す、同時にアルカナス軍も進軍を開始した。

ノークは司令室からアルカナスの進軍を確認すると部下へ合図を送った。

進軍を始めるアルカナス軍は大きな揺れを感じる、地面が裂け次々に建造物が地面から現れる。荒野は荒廃した都市へと姿を変える・

・

「すげー、こんなの初めて見た」

フェアは目を輝かせ、荒廃した都市を駆け抜ける。

「地上部隊に被害が拡大、また現れた建造物は防衛兵器を搭載しており……」

トリギオンの中からマルクトロスはジークフリードを睨みつけた。

「やりおるな、面白いではないか。この私の首はここにあるぞ、取りに来れるものなら来たまえ！！」

「面白い子だな、それにアピースのセカンドってあの国で二番目に強いつてことですよ。エグルガラムも中々の奇襲だよ、彼らは戦争が長期化するの不利だが、この戦闘は長期戦の方が圧倒的に有利。さああのじいさんはどするかな？」

ステイーグは両軍の動きを遠くから見ていた。

「フォークトを探しているのかしら？」

ステイグは振り返った、そこにはドレス着た女が立っていた。

「<sup>フォー</sup>やっぱり君が絡んでいたのか、まあ知っていたけどね。ナンバー  
4」

〜つづく〜

## 第五章 開戦（後書き）

最後までありがとうございました。

次回もなるべく早く投稿出来るように致します。

よろしく願います。

## 第五章 擊奏（前書き）

こんにちは。

今回もよろしくお願ひします。

## 第五章 撃奏

〔第五章 撃奏〕

中央ブロック 第一防衛線付近

「くそー、これじゃ、ちつとも進めやしない」

フェアは廃ビルに身を潜め、弾幕をしのいでいた。戦況はエグルガ  
ルムが有利であった、奇襲によってアルカナスの地上部隊は大きな  
被害を受けた。また空中戦においても、ジークフリードによる防衛  
システムはアルカナスを圧倒していた。フェアは廃ビルの影から顔  
を出し、数発の弾丸を放った。放った弾丸の何倍もの弾丸が返って  
来る。

「どうすりゃ……」

フェアは廃ビルを見上げた……

「制空権はこちらにあります。防衛線も第一で進行を食い止めるこ  
とに成功しています」

ノークはジークフリードから戦場を見つめる。

「そのまま現状を維持して、こちらから攻め込む必要はないわ」

「中央ブロックにて防衛線が突破されました」

司令室に全員がモニターに目を向けた……

中央ブロック 第一防衛線

大きな音と共に地面が揺れる……

「嘘だろ……」

エグルガルの兵の視線の先では廃ビルが切り裂かれ、倒れ始めて  
いた。廃ビルはそのまま隣のビルにぶつかり、斜めに寄りかかり止  
まった。

「おっしや!!!」

フェアは勢いよく傾いたビルを駆け上がる。

「すげー、眺め」

フェアはそのまま隣のビルに移り、屋上へと出た。そしてジークフリードに向けて真っ直ぐに走り始め、反対側のビルへと跳ぶ。決してビルとビルの間は遠くはなかった。しかし、落ちれば間違えなく命を落とす高さだった。それでも彼は笑顔のまま何一つ迷わずに跳んだ。跳んだ先にエグルガルのヘリが現れる、ヘリが放ったミサイルがフェアに迫る。フェアのいたビルの屋上が爆煙に包まれる。ヘリのパイロットは突然、揺れを感じた。ヘリの側面に何か突き刺さっていた。爆煙の中からフェアが姿を現す。フェアはチャクラムをヘリに投げ、チャクラムについたワイヤーをたどりヘリに近づき、そしてヘリを両断した……

「彼はアピースの……」

ノークはビルを飛び移り、屋上を駆け抜けるフェアの姿に言葉を失った。

「このままだと第二防衛線も突破されてしまいます」

ノークはすぐに指示に出せずにいた。明らかにフェアの取った行動は創造を超えていた。

「私達が行く、状況は大体掴んでいる」

中央ブロック 第二防衛線付近

ジャスはビルの屋上から近づいてくるフェアを見つけた。ジャスの隣にはフリーとテムジがいた。

「フリー、テムジ、あいつはアルカナスのナンバー2だ、油断するんじゃないよ」

二人は散開しフェアに向かった。フェアは三人の姿を確認した。

「あの服は確かハウنزの、ようやくお出ましか」

フェアはそのまま真っ直ぐに中央にいるジャスへ向かう、両側から挟みこむようにフリーとテムジがフェアに襲い掛かる。先手はフリーが放った拳だった、フェアはチャクラムで受け止める寸前で、本能的



な危機感から拳をかわした。かわした拳は地面を砕く、フェアにテムジの放った弾丸が迫る。フェアはチャクラムをテムジに投げつけた、投げつけたチャクラムはテムジの体を突き抜ける。

「透過系かよ!!!」

続けてフーがフェアに迫る。フェアはテムジの拳をかわし、回り込みフーの背中へと一閃を放つ。しかし、一閃はフーの背中を切り裂くことなく止まる。フーはフェアを掴み、近くのビルへ投げ飛ばした。フェアはビルへと飛ばされ、壁を突き破る。

「離れな!!!」

ジャスが空間ごと近くのビルの一部を掴み、フェアの飛ばされたビルへと投げつける。ビルは大きな音と共に崩れ始める。

「まず一人」

突然、フーの体から血が吹き出る。左肩から腹部まで大きく切り裂かれ、フーのいたビルの屋上の床が割れ、フェアが現れる。フーはフェアを見つけると怯む様子もなく、フェアに向かう。

「舐めるなよ、小僧」

フーは拳がフェアを捉える。

「いい一撃だ」

フェアはチャクラムでフーの一撃を止める、フーは驚き一瞬動きを止めた。フーは地面に倒れ込む、フーの両手、両足の間接から血が流れ出る。

「このやろう!!!」

テムジがフェアに襲い掛かる。フェアの一閃がテムジをすり抜ける。

「テムジ、下がれ!!!」

ジャスの声が響くと同時に銃声が響く、テムジの片腕が地面へと落ちる。

「二人目、透過系はやりなれてるから」

フェアは軽くテムジの前で謝り、テムジの頭を掴み床へと叩きつけ

た。それと同時にフェアの近くの空間が歪む、フェアは歪みを感じその場から大きく後方へ跳んだ。

「小僧、よくもやってくれたね」

ジャスは地面に倒れ込んだ二人を見た。フェアはジャスを見つめ、通信機を出した。

「ジェネルさん、作戦中すいません。ハウন্ズの第二小隊で怖そうな女の人って確か任務対象ですよね」

フェアはもう一度ジャスを見て頷き、通信機をしまった。

「すいません、あなたジャス・ハルドルさんですか？」

「だったら、どうする？」

フェアは顔の前で手を合わせた。

「死んでもらいます」

フェアは一瞬で距離をつめジャスへ一閃を放つ、ジャスはぎりぎりかわすが右腕から血が流れる。フェアはジャスが次の一手を打つ前に攻撃を放つ、ジャスの能力は強力だが基本的な身体能力の差が力の差となり、ジャスを追い詰める。

「あなたの能力は強力すぎです。しかし、それは一対多数でかつ後方からの支援としてです。近接戦では……」

フェアのチャクラムがジャスの肩へ突き刺さる。

「この通りです」

ジャスは笑った。

「捕まえた」

ジャスは空間ごとチャクラムを掴む、そしてフェアの腹部を空間ごと捻じ曲げる。フェアはチャクラムを捨て、下がる。フェアは腹部を押さえ吐血した。

「危ない、危ない、本当に危険な能力だ」

フェアの目のつきが変わる。ジャスの持っていたチャクラムから突然、棘が飛び出る。その棘がジャスの足に突き刺さる。

「三人目と……」

くっくく

## 第五章 撃奏（後書き）

最後までありがとうございます。

さすがにこのペースは辛くなって・・・

弱音はだめだ！！

次回もよろしくお願いします。

第五章 B・V・S・R ? (前書き)

こんにちは。

少し短めですいません・・・

それでは今回もよろしくお願いします。><。。

## 第五章 B・V S・R ？

〔第五章 B・V S・R ？〕

ジャスは床を捻じ曲げフェアの一撃から逃れた。ジャスは数階分の床と天井を破壊し、ビルの中へと姿を消した。ジャスは上着を脱ぎ、傷口を結わき止血した。足の傷は深くはなかったが、機動力を奪うには十分なものだった。

「これはやばいな」

その時、ジャスは気配を感じ身を潜めた……

フェアは地面に落ちたチャクラムを拾い上げ、屋上から下層へ空いた穴を覗いた。

「少しくらつちやったな、もう少し深く掴まれていたら危なかった」  
フェアは近くにあった瓦礫に腰をかけ、軍服から注射器のようなものを取り出し腹部に打った。

「今は戦争中、治療が終わるまで待たなくてもよかったですよ」

フェアの言葉が終わると一人の騎士が姿を現した。

「君の話は聞いたよ、あの話を聞いて不意打ちが出来るほど私は残忍な人間ではないのでな」

フェアは姿勢良く立つツバイを見た。フェアは少し笑い腰を上げ、軍服についた埃を払った。

「騎士つて戦う前に名乗るのってほんと？」

「どうだろうな？でも私は自分の命を奪った者の名前くらいは知りたいものだ。ツバイ・ハーツ、私の名だ」

ツバイは両手に剣を召喚した。

「名前、一応覚えておくよ。フェア・クラウル」

フェアはチャクラムを構え、一気にツバイに詰め寄る。互いの刃が絶え間なくぶつかり合う、フェアのチャクラムは轟、ツバイの剣は流れるような斬撃を繰り返す。ツバイの剣はフェアの攻撃を流し、

フェアの懐へ入り込む。ツバイは片方の剣を短剣へ変えフェアへ一閃を放つ。一閃はフェアの頬をかすめる。フェアは怯むことなくツバイの頭へ頭突きを叩き込む、ツバイは頭突きをくらい怯む。

「まだ、終わらないよ」

フェアはチャクラムを逆手に持ちツバイを殴る、ツバイは何とか耐え一閃を放ち距離を取る。フェアはチャクラムを投げつける、ツバイはそれをかわす。

「おりゃあ！！！」

フェアはツバイの腹部へ蹴りを叩き込む、更によろめくツバイを掴み、地面へと叩きつける。

「これで終わりだ」

フェアはツバイの頭へ拳を振り下ろす。砕けるような音が響く、フェアはゆっくりと拳を引き上げ、頬の傷口から流れる血を拭き取った。

「名前、聞いたって良かったね」

フェアがチャクラムを手にした時、背後から声が聞こえる。

「悪いな、今の一撃で名前を忘れてしまったよ」

「フェア・クラウルだ！！！」

フェアは笑顔で振り返り、ツバイへと向かう。

「リコール  
召喚」

ツバイは大剣を召喚し、フェアに向けて振るう。フェアは難なくかわし、再びツバイの懐に入り込む。

「今度は決め……」

今度はツバイの拳がフェアの頬へ食い込む、さらに大剣を斧へと変えフェアに振るう。フェアは両手のチャクラムで斧を受け止めさせられる。ツバイは斧をフェアごと振るい屋上の金網へと叩きつける、金網は破れフェアは空へと飛ばされる。

「ぐっ……」

フェアはチャクラムを投げワイヤーを伸ばす、そこへツバイが迫る。ツバイは空中で上からフェアへ大剣を振り下ろす、フェアはチャク

ラムで受け止めるが地上へと叩き落とされる。

「これでどうだ……」

ツバイはそのまま地上へと落ち始める……

「手間のかかる部下だ」

地面へと向かう中、ビルの中から王族警備隊に支えられるジャスの姿が目に入る。ジャスはツバイを空間ごと引き寄せた。ツバイは転がりジャスの足元で止まった。

「ありがとう」

ジャスはツバイに手を差し出し言った……

中央ブロック 第一防衛線

防衛線に並ぶエグルガルム兵へ一人の男が真っ直ぐに進む。無数の弾丸が男へ向けて放たれる、爆煙が男を包む。

「燃える」

爆煙が炎へと変わり男から噴出していく、一瞬で炎は防衛線を包み込み燃やし尽くす。エグルガルムの数人の能力者が男へと近づくと、男は炎を渡り兵士達の間をすり抜ける。

「遅いんだよ」

兵士達は炎に包み込まれ、朽ち果てる。

「ディザスター  
大炎葬」

周囲を燃やし尽くす炎が激しく燃え上がる、男の前方から増援が現れる。炎達は戦車などを包み空へと上げる。男は両腕を広げ前方へ突き出す、炎に包まれた兵器や瓦礫が増援達へ降り注ぐ。

「死ぬ前に覚えときな、俺は双炎の王、フォークト・ガル・カーツ・フォークトと共に炎達が燃え上がる……」

「さあ行くよ、僕達の出番だよ……」

〜つづく〜

第五章 B・V S・R ? (後書き)

最後までありがとうございました。  
次回は明日にでも投稿いたします。  
よろしければお付き合ってください。



第五章 誰が為（前書き）

こんにちは。

今回もよろしくお願ひします。

## 第五章 誰が為

第五章 誰が為<sup>た</sup>

ツバイは階段を駆け上がり地上に出た。辺りは夜を楽しむ多くの人に溢れていた。その中でツバイはジャスの姿を探す。人の間にジャスの背中を見つけた。ツバイは人を掻き分けジャスの背中を目指す。その背中をツバイは長年追いかけて続けた、そして今もその背中を追い続ける。ツバイの体を酔いが襲う、平衡感覚が失われ、膝をつく。

あの人の背中が また 消えてゆく・・・

翌日、ジャスはすでにエグルガラムへ出発していた。

僕はある一族の最後の一人だった。僕等の一族は身体能力が高く、普通の人間より明らかに丈夫だった。「生きること」「戦い」だった彼らは数を減らして行った。僕は本当の父も母もどちらの顔も知らない。孤児として小さな孤児院で育った、優しいシスター達は僕に色々な話をしてくれた。命の大切さ、力の意味、色々なことを僕に教えてくれた。言われた時は分からなかったことが、今では力を振るう為とその意味を何となく理解出来る。ある日、一人の老人が来て僕は孤児院を出た。そして、アピースに入ることになった・・・

とある任務で僕達はとても綺麗な町に行った。僕等が町を出る時に町は廃墟になっていた。僕は崩れた協会の椅子に腰を下ろし、ただ空を見上げていた・・・

「辛いかな」

灰色の綺麗な髪がそっと夜風に揺られ、硝煙の臭いを放った。セル

ファイア隊長が僕の隣に座った、隊長は椅子に寄りかかり、前の椅子へ足をかけた。

「私が迷い無く命を奪うのを見てどう思う」

僕は隊長の顔を見た、隊長は煙草に火をつけ煙を吸い込み夜空へ吐き出した。

「何も感じないのでですか？」

「そんな訳ないだろ。私はただの人間だ」

僕は綺麗な夜空から目を逸らした。横からゆっくりと深く吐き出される音が聞こえる・・・

「あたしらは何故奪う、何故殺す、その理由考えたことがあるか？」

「あります・・・」

「正義だからさ」

迷いのない隊長の言葉が僕を貫く。

「正義だから悪を討つ、それだけのことだ。だが正義と悪の境界線は何だと思う？」

「命を救うことですか？」

隊長は笑った、椅子から足を下ろし煙草を消し立ち上がる。

「じゃあ、誰も殺せないだろ。勝利が正義をつくる、敗北が悪をつくる。だから私達は勝ち続け正義でい続けなくてはならない、これがすべてだよ」

隊長は協会の奥へ進み、焼け焦げた十字架の前で手を合わせた。僕も隣で手を合わせた。

「行くよ、次の任務だ」

「はい！！！」

全身が痛い、腹部が熱く動こうとすると激痛が走る。フェアはビルの下で瓦礫の中に横たわる。腹部へと手を伸ばすと左のわき腹を鉄筋が貫いていた。フェアは鉄筋を引き抜き痛みを堪える。

「負けれない、僕が負ければ・・・、僕の今まで奪ってきた命が・

「……」  
フェアは瓦礫を手すりに立ち上がる。フェアはゆっくりと目を閉じ開く、その両目に深く濃い赤い光が灯る、腹部の傷口が塞がっている……

中央ブロック 第二防衛線

「駄目です、全く止まりません」

中央ブロックは火の海へと化していた。フォークトは炎と共に周囲を燃やし尽くす。

「君がここの司令官さん？」

エグルガルの兵の横に桜家が現れた。

「ここは僕等に任せて、北側のブロックに行ってくれるかい。僕達はハウন্ズ第二小隊、ノークさんからここの防衛、いや彼を止めるように言われてね」

桜家はにっこりとわらい兵士の肩を叩いた。兵士はすぐに状況を理解し、桜家に頭を下げ部下を集め指令を出した。

「みんな、聞こえている。これから僕等は幻想の道化師とやりあわなきゃいけない、すごく強みたいだから無理はしないでよ。でもここを突破されると、大変だ」

朽ち果てた都市の大通りの先に炎が現れる、真っ白なスーツ、首元には派手なストール巻いた男が堂々と通りの中央を歩きながら現れる。

「標的のお出ました……」

ツバイがジャスの腕を取り立ち上がった時、ビルは大きく揺れる。ツバイ達は崩れるビルから脱出し、ツバイは通信機を取り出そうとした。

「まだ終わってないよ」

崩れたビルによる煙の中からフェアが姿を現す。ツバイはすぐにフェアの以前との違いに気付いた、暗く赤い目、彼を包む雰囲気そのものが鋭く研ぎ澄まされている。ツバイはすぐに両腕に剣を召喚し、フェアに向かう。迫るツバイにフェアがチャクラムを振るう、一撃でツバイの剣は砕ける。二撃目のチャクラムがツバイを捉える、ぎりぎりまで剣を召喚するがツバイは瓦礫の中へ吹き飛ばされる。ジャスはすぐにフェアに手を向けるが、フェアはすでにジャスの懐へ入る。フェアの一閃をツバイの部下が自身の体を盾に防ぐ、部下の体は二つに別れた。もう一人の部下が反撃に移ろうとすると、すでにフェアのチャクラムが胸を貫いていた。フェアはチャクラムを引き抜き、ジャスを睨む。ジャスは呼吸することすら出来なかった、一瞬でもこの男から目を離せば終る。そう本能が告げる、この男から逃れる方法を考えるが、すべてが自身の死へ繋がる。これが本当の死……

「あなたじゃ、僕には勝てません」

フェアはジャスへ近づいて行く。その時、白銀の一閃がフェアを襲う。フェアは紙一重でそれをかわす、続けて剣撃がフェアに繰り出される。フェアはチャクラムで無理やりツバイを弾き、距離を取る。「この人は殺らせない」

ツバイはマントを脱ぎ、軍服の上着のボタンを外す。

「召喚 リコール 機怪剣 アテナ」

ツバイの右手には白銀の剣が、左手には金と銀で装飾された剣が握られた。フェアは表情を歪めた。

「逃げてください」

ジャスはここに自分がいても、何の役にも立たないことに気付いていた。しかし、ここから逃げる、ツバイをここに残すことを心が拒絶する。

「あなたを守らせてください、必ずあなたの元へ戻ります」

ジャスはツバイの言葉に固まった。フェアの目の色が戻り、地面へと座り込んだ。

「待っていてやる」

二人はその言葉を聴いて驚いた。しかし、この男がそう言うことを本当にする男だと何となく分かっていった。

「あなたに伝えたいことがたくさんあります。だから待っていてください、僕があなたを守りますから」

ジャスはツバイを抱きしめた、そして優しく口付けした。

「待っている」

ジャスはツバイに背を向ける。ツバイはその背中を見つめる、いつもとは違うその背中を・・・

「悪かったな」

ツバイは剣を握り直す、フェアは立ち上がり目の色が変化して行く。

「あの女を殺そうとしたのに、あんたもだいぶお人好しだね」

「あの状況で攻撃を止める、お前には言われたくないな」

二人はゆっくりと互いの刃を構える。

「あの人があんたの戦う理由？なら二人でこの戦場から離れるならあんたと戦わないけど」

ツバイは軽く笑い、白銀の剣を見つめた。

「本当に甘いな、それは出来ない。私はすでに二人の部下を失った、それに私の誇りがそんなことを許さない」

ツバイの剣が一瞬、光を放つように光った。二人は同時に動き出す、響き渡る剣撃の音、互いの命がぶつかり光を放つ。

「まだ倒れないのかよ」

フェアは息を荒くしながらツバイに尋ねる。

「倒れる訳にはいかない」

ツバイの体はフェアより遥かに多くの打撃を、斬撃を受けていた。ツバイは剣を支えにまた立ち上がる。

「お前だつて分かつてるんだろ！！その力、その剣を使うとお前の命も磨り減るんだろ。それでも俺には勝てないって分かっただろ！！」

フェアがどれだけ叫んでもツバイはフェアに向かう。フェアは容赦なくツバイを叩き潰す、すでに自分が勝利していることに気付きながらも……

「まだ、私は負けていない」

ツバイは剣を支えに立ち上がろうとする、体が悲鳴をあげ立ち上がることを拒絶する。それでも騎士は立ち上がり剣を振るう。フェアはチャクラムを捨て、ツバイを殴り飛ばした。そして、ツバイの腕を掴みへし折った。ツバイは痛みを堪え、もう一方の剣を振るう。フェアは素手でその剣を止める。

「もうやめろ……」

フェアの目の色が元に戻って行く。

「俺はあの女を殺さない、もう俺はお前に勝った」

ツバイが剣を捨て、フェアの胸倉を掴み頭突きを放つ。

「フェア・クラウル、お前は何の為に戦う？」

フェアは辛そうに答える。

「正義の為に……」

ツバイは地面に落ちた白銀の剣を拾い構える。

「その正義、私に示してみろ」

フェアはチャクラムを拾い上げ、ツバイへと向かう……

「私の勝ちだ……」

「最高でも引き分けの間違いだろ」

ツバイの剣はフェアの胸を貫いていた。ツバイは力尽き地面へと倒れてゆく……、フェアはその姿を眺めていた。フェアは剣を胸から引き抜き、その場へ倒れ込んだ。

「これは死ぬかな……、能力使わないと……」

フェアは静かに目を閉じた……

〜つづく〜

## 第五章 誰が為（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

この二人の戦いは私の考える戦いの理由です。お互いに心に誓った誇りの為に戦います。しかし、その先に掴む勝利はどちらが正義なのか？その答えを感じとってくださいると嬉しいのです。

このような文章にお付き合いくださる方、本当にありがとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。感想や批評ありましたら遠慮なくどうぞ。 鳴谷 駿



第五章 頂きに立つ者（前書き）

今回もよろしくお願いします!!

## 第五章 頂きに立つ者

〔第五章 頂きに立つ者〕

「扉を開けるけど、準備はいいかい？」

グラビティ・ウォーカー

重力操作者は大きな扉へと手をかけた。ベノンは何も言わずに笑い、

ロイテルはブレードを握りなおした。

「リシアさんは危ないので扉の向こうでお待ちください」

ベノンはそうリシアに告げると、リシアはロイテルに近づきそっと手を握った。ロイテルは驚き固まった。

「私を一人にしないよね」

ロイテルはリシアの手を握り返した。扉はゆっくりと開く……

「かみなり  
神鳴」

閃光が男を貫く、テイルはすぐに男から距離を取った。

「潰れちゃいな」

男の体は黒く焼け焦げたがすぐに回復を始める、そこへ重力操作者が追撃をかける。男を中心に地面がつぶれ、男は地面へとひれ伏す。

「ロイテルくん」

ロイテルは地面へと伏せる男へブレードを投げつける、ブレードは男を貫く。

「咲雷・落」

ブレードへ雷が落ちる。男の体は黒く焼きあがり激しく痙攣する。

テイルはアルルを抱え、話かけると静かに目を覚ました。バースもベノンによって目を覚ます。

男の体は回復を始め、ゆっくりと立ち上がる。ロイテルは重力操作者を見た。

「僕は力を弱めてないよ」

ロイテルは新たなブレードを抜き、男へとブレードを真っ直ぐに向ける。

「來斬光」  
いかづち

ロイテルは男を突き抜け、男は微かに笑う。ロイテルは膝をつき、振返る。

「これはまた上質な……」

男の頭をベノンの杖が突き刺さす。さらにロイテルのブレードで男の首を切り落とす。

「離れるよ」

ベノンは蛾達へと姿を変えロイテルと共に男から離れる。

「m ; i m ? d i a t e」

男を無数の蛾が取り囲み、真つ黒な球状になる。

「これで死ななきゃ、僕には殺せない」

球体から血液が噴出す。

「効いてはいるみたい……」

球体から閃光が飛び出る。閃光はベノンとロイテルの間をすり抜ける。

「がっ……」 「俺の……」

二人は地面へと倒れ込む。

「この少年は雷、この男は何だ？ 私はこやつのも……」

ベノンの体から棘が突き出し男を貫く、棘はさらに分裂し男を細切れにする。

「これでどうだい……」

ベノンは立ち上がり男へと目をやる。

「面白い」

ベノンは自分の後に男の存在に気付く、男はベノンを掴む。男の手から炎が上がりベノンを包む。

「これで死ぬのか？」

「この程度の炎」

ベノンは蛾達を剣に変え男の腕を切り落とす、男の腕はすぐに再生を始める。男は一瞬でベノンの後に回り込み、人差し指でベノンに触れた。ベノンは石造のように固まる。

「君は後回しだ……」

男はロイテル達を見渡し言った。

「さあ、私を楽しましてみたまえ、我が子達よ……」

「死んだのか……、死後の世界って案外……」

フェアが目を開くとそこには、小柄な少女が心配そうに見つめていた。

「美実……」

フェアは跳ね起きて周囲を見渡す。そこには小柄な少女と茶髪でだらしなく軍服を着崩す男がいた。

「クライツも、二人は隊長と一緒にじゃ？」

茶髪の男は気だるそうに答えた。

「隊長の任務はもう終わったよ。そしたらジェネルからお前がやばいって連絡が入ったから飛んで来たんだよ」

クライツは近くに倒れているツバイを蹴り、仰向けにした。

「こいつ、息があるな。止め刺しとくぞ」

クライツは拳銃をツバイへと向ける。拳銃とツバイの間をチャクラムの刃が遮る。

「何だよ」

「ここでクライツが撃ったら俺、本当に負けてしまう気がする」

フェアは真っ直ぐにクライツを見つめる。クライツは拳銃をしまう。

「本気も出さずに負け？お前は相手と対等に戦って勝つだけ、そう言うことは隊長くらいになってからやれ。お前の尻拭いはごめんだ」

フェアは反省したように下を向く。美実は二人のやり取りを心配そうに見守っていた。

「で、どうする？俺の能力であの要塞まで行く？」

フェアは立ち上がり、ジークフリードを見つめる。

「大丈夫、自分の足で行くから」

「分かったよ、美実。俺達は後退するよ、この様子じゃ負傷者多そうだし」

美実は頷き、フェアを見た。フェアは笑顔を返す。

「美実、サンキュー！。悪い一つだけお願いごと聞いてくれる？」

「なに？」

「その人、死なない程度に治療してくれる？ここで死なれたら、何か後味悪いわ」

フェアはツバイに近づき囁いた。

「今度は手、抜かないよ。今回は引き分けてことで」

フェアは思いついたようにクライツに尋ねた。

「そいやあ、隊長の任務ってなに？」

クライツはつまらなそうに言った。

アンティック・イマジネーション  
「幻想の道化師の団長」

フェアは目を丸くして驚いた。

「本当に！！俺も戦ってみたかった！！結果は……」

フェアは口を開けたまま止まった。

「ここにクライツ達がいるってことは……、隊長はやっぱり化け物だ」

「おいおい、隊長に聞かれたら怒られるぞ」

この日、一つの伝説が終わりを告げた……

## 第五章 頂きに立つ者（後書き）

短くてすみません><。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次回はもっとたくさん投稿出来るようにします!!

心配な方へ、ちゃんと団長対セルフイア戦書きますよ!!

以後、ご期待ください・・誰も期待してないか（・|・）

## 第五章 火炎天劫（前書き）

今回もよろしくお願いします。

予定していたストーリーを修正しました。たぶんこちらの方がいいはず・・・

## 第五章 火炎天劫

第五章 火炎天劫

中央ブロック 第二防衛線

桜家率いる第二小隊がフォークトの迎撃を開始した。第二小隊はこの戦闘に愛以外のすべて戦力を導入した。能力者六人が一人の能力者を迎え撃つ。

「ようやくマシなのが出できたな」

フォークトの前方に桜家が姿を現す。フォークトは迷わず周辺に転がる戦車を炎で包み投げつける。火の玉と化した戦車が桜家に迫る、桜家の目の前に大きな盾が現れ火の玉を止める。桜家は拳銃をフォークトに向けて放つ。弾丸はフォークトに届くことなく、焼かれた。「ハウズか、てめえが隊長か？俺は三下に興味はないぜ」

桜家は普段とは違う雰囲気纏う。

「僕が隊長だよ、第三小隊隊長桜家だ」

突然、周囲から炎が噴出し、周囲へと広がる。無数の火器がフォークトを襲う。爆煙がフォークトを包み込む。

「ディザスター  
大炎葬」

フォークトから炎が噴出し、周囲へと広がる。

「この程度の攻撃で俺を止められると思うな」

フォークトの叫びと共に炎が激しさを増す。

「この程度で終る訳ないだろ」

地面が爆発しフォークトは割れ目へ飲み込まれる。

「バルンくん、よろしく」

周囲の建造物が爆破されフォークトの元へ倒れ込み、割れ目を塞ぐ。「へっくん」

桜家の前に盾が現れ、倒れた建造物が爆発した。爆煙が周囲を包み込む……



「だからこの程度じゃ、俺は満足出来ないんだよ」

桜家の横の地面から炎が噴出しフォークトが現れる。

「爆炎<sup>フレア</sup>」

フォークトの手から炎が噴出し、桜家を包み込む。桜家は微笑んだ。  
・・・

突然、桜家は風船のように割れ爆発した。爆発と同時に周囲に棘が飛び散る。

「リビイ、どうだい標的に損傷はあるかい？」

桜家はビルの上からフォークトを見下ろす。

「駄目です、無傷のようです。やはり炎が邪魔をして・・・」

桜家は眉間に皺をよせフォークトを睨む。

「簡単にはやられないか・・・」

フォークトは血管を浮き出し、怒りをあらわにしていた。

「三下どもが・・・ぶち殺す」

周囲に広がった炎がフォークトへ集まる。

「炎<sup>ランターン</sup>」

炎がフォークトのから噴出し、空高く舞い上がる。舞い上がった炎は拡散し周囲へと広がり降り注ぐ・・・その光景は美しく幻想的であった。戦場に降り注ぐ光、それは死を運ぶ幻灯・・・

フォークトは目を閉じて立ち止まった。

「見つけた・・・」

建造物の屋上で第三小隊の腕章をつけた青年が、フォークトを双眼鏡を通して見つめていた。青年はフォークトが放った炎が降り注ぐのを見上げた。小さな炎がゆっくりと降り注ぎ、青年はその一つをそっと手のひらで受けた。

「なんだよ、これ？」

その瞬間、小さな炎は燃え上がり青年を包む。青年はすぐに軍服を脱ぎ捨てる。

「フレクシヨン  
炎渡」

フォークトの姿が消える。

脱ぎ捨てた軍服が激しく燃え上がる。その炎の中からフォークトが現れる。青年はすぐに迎撃に移るが、フォークトの放つ炎が青年の胸を貫く。青年はフォークトを睨み自分の体に触れた。

「お前も・・・道連れだ・・・」

青年の体が爆発する・・・

「隊長・・・、バルンの反応が消えました・・・」

リビイの震える声が桜家の通信機から流れる。桜家は拳を握り締め、爆発の起こったビルを見つめた。

「へっくん、のんちゃん、一対一じゃこちらに勝ち目はない。僕が仕掛けるから援護頼むよ」

降り注いだ炎は地面に落ちると何かを探すように動き回る。

桜家は大通りへと姿を現し、地面を這う炎へ軍服を投げつけた。軍服は燃え上がりフォークトが現れる。桜家は現れたフォークトへ弾丸を放つ。

「当たるかよ!!!」

フォークトの放った炎が弾丸を飲み込み桜家へと向かう。その炎を盾が現れ防ぐ。

突然、フォークトの後方から桜家が現れ弾丸を放つ。それを炎の壁が遮る。

「転移者か・・・」

フォークトを三人の桜家に取り囲む。三人の桜家が同時に口を開く。  
・

「さて僕が何人いれば君を殺せるかな？」

フォークト囲む炎が感情に反応し激しさを増す。

「何人だあ、てめえらごときゴミが何人いようが俺を倒せる訳ねえ

「だろうが!!」

三人の桜家へ一斉に炎が向かう、そのすべての炎を盾が防ぐ。

「うざつてえんだよ!!」

炎は激しさを増し盾を飲み込む……

その時、ビルから桜家がフォークトへ向けて跳ぶ。桜家が投げたナイフがフォークトの肩をかすめた。

「俺に傷を!!!!」

上空の桜家へと炎が舞い上がり、焼き尽くす。そして、燃え上がる炎の壁を大きな盾が突き抜ける。その盾の後からリオルが現れ、リオルの拳がフォークトを貫く。

周囲に広がった炎が一斉に消える……

ビルの影から桜家とヘルトが姿を現す。

「能力の強さがすべてじゃないんだよ、派手なおにいさん……」

~~~~~

第五章 火炎天劫（後書き）

最後までありがとうございます。

投稿ペースが落ちてしまいました……

次回は割りと早い予定です。

第五章 First (前書き)

こんにちは。

さて今回は割りと気に入った回です!!

さてこの展開を予想できた方はいたかな?しっかりとフラグは立てておいたはず・・・

では、お楽しみください!!!

第五章 F i r s t

第五章 F i r s t

「やっぱり君が絡んでいたのか、まあ知っていたけどね。ナンバー

フォー

4
ステーキは華やかなドレスに身を包んだ女に言った。

「私を番号で呼ぶのは、やめてもらえるかしら？ 団長さん」

「失礼、今は何とお呼びすればいいのかな？」

「デリー又よ、それよりここに何をしにきたのかしら？」

ステーキは軽くにやけて答えた。

「もちろん、フォークトを殺しにさ。いくら何でも彼はやりすぎた、責任は取ってもらわなくちゃね」

デリー又は豊満な胸の前で手を組み、不満そうに言った。

「それは困るわ、彼の力をこの世界は必要としているの」

ステーキは大きく笑った。

「世界が必要？ 笑わせないでくれよ、君が必要としているだけだろ。

悪いけど、彼は殺させてもらう」

「あなたも私達の仲間でしょ、世界を私達のものにするには……」

「

興味ないね。確かに君がこの計画を提案した時、異論はなかった。

しかし、それは計画が僕にとってどうでも良いことだったからさ、

でも君は僕を巻き込んだ。そして、僕達の仲間に出した……」

デリー又は反論した。

「それは彼のやったことでしょ、私の計画には関係ないわ」

フォークトは顔に手をあて頭を抱えた。

「その能力を持ちながら、よくもそんなことを言えるね。フォーク

トは殺す、君の計画なんてどうでもいい」

デリー又は呆れたようにステーキから視線を逸らす。

「もういいわ、こうなるのも分かっていたし。あなたが私の邪魔を

するなら、私も容赦はしない」

「容赦しない？君の能力で僕をどうやって止める？」

「セルフィナ、もういいわ」

デリーヌの一声とともに赤い服を纏った三人が姿を現す。

「アピースか、本気で僕を止めるなら三人じゃ足りないよ」

ステীগは馬鹿にするように言った。灰色の長身の女が一步前に出る。

「笑わせるな、戦うのは私一人だ」

セルフィアの言葉にステীগは大きく拍手した。

「へー、それは僕を幻想の道化師の団長と知っての言葉かな子猫ちゃん？」

セルフィアは長い髪を掻き分け、ステীগを睨みつけた。

「ああ知っているさ、さらにナンバーズとか言う輩ってことも承知している。あんた、死なないって本当なのか？」

「終わりがないモノなんてない、僕等は君達より少し丈夫なだけさ」

「そうか、なら良かった。死なないんじや、流石に私も勝てない」

セルフィアは腰にあった凝ったつくりの拳銃リボルバーを取り出し、一発ずつ弾を込め始める。

「そんな小経口の銃で僕を殺すんだったら、トラック山盛りの弾丸が必要だよ」

「トラック山盛りって、そんなにいらな**い**と思うよ。あとあのフォークトつて男、そんなに強いのか？ただの炎を操る者ファイヤー・スターターだろ」

「ただの炎を操る者が幻想の道化師に入れると思う？彼の实力は本物だよ」

「そうか、アピースの元気なのがちょっと喧嘩を売られてね」

「その喧嘩買わない方がいいよ、大切な部下失いたくないでしょ」

「忠告、ありがとう。でも彼はその内、消えてもらうけどね」

「まあ今日を生き抜いたら、彼を殺せるかもね。一つだけいいことを教えてあげる。フォークト・ガル・カーツ、彼の二つ名は《双色の道化師》覚えておくといいよ」

セルフィアは弾を込め終わるとゆっくりとステイグを見た。

「あんたはさ、戦う理由考えたことある？」

ステイグは大きな声で笑った。

「ないよ、戦いたいから戦う、殺したいから殺す、楽しそうだから奪う、ただそれだけのこと。単純なことだよ」

セルフィアは拳銃を胸に当てた。

「セルフィア・ジェノン Apies First 勝利に正義を
敗北に悪を・・・」

「君も面白い子だね・・・」

セルフィアが拳銃を胸から離れた時に、デリーヌがセルフィアの前に手を出した。

「ちよつと待つてもらえる」

「もう君と話ことはないと思うけど？」

ステイグはすでにデリーヌへの興味を失っていた。

「私はあなたとセルフィアの戦いに一切介入しないわ」

「別に僕は君が介入してもかまわないよ、君の能力で埋められる力の差だといいいけどね」

デリーヌは哀れむように笑った。

「すごい自信ね、でもあまり油断しない方がいいと思うわよ。私は勝てる戦しかしない主義だから」

デリーヌはそう告げると後へと下がった。

「さあアピースの隊長さん、かかってきなよ・・・」

中央ブロック 第二防衛線

フォークトの胸からリオルの腕が引き抜かれる。フォークトはそのまま地面へと倒れる。

「リオル君、ありがとう。中々、本体に物理攻撃が効くか分からなくてね」

リオルはフォークトを見つめた。

「大丈夫だ、それより大切な部下を一人……すまない……」
リオルの表情は辛く悲しそうで痛々しいものだった。

「僕等は兵士だよ、みんな死を覚悟している。だから君が謝る必要はな……」

その時、地面に倒れていたフォークトが立ち上がる。

「そうだよ、どうせ全員……死ぬんだからさ……!!」

立ち上がったフォークトは炎に包まれ炎と化す。

「灼熱地獄」
ホルケーノ

灼熱の炎は生き物のように三人へ迫る、ヘルトは盾を召喚し炎を封じ込めようとする。

「お前が盾使いか」

ヘルトに向かう炎は大蛇のように曲がり盾をかわし、ヘルトへ向かう。ヘルトを炎が包み込む。桜家は通信機をとり叫ぶ。

「のんちゃん、早くダミー達を……!!」

周囲に桜家のダミー達が現れる。桜家はすぐにヘルトとダミーの位置を入れ替える。

「間に合わなかった……」

入れ替わったダミーの位置には全身を焼かれたヘルトがいた。炎はすぐに周囲を包み込む、リオルは建造物の中へと逃げ込む。桜家は周囲のダミー達と入れ替わりながら炎から逃れる。

「このままじゃ、隊長達が……」

遠くのビルからリビイと少女は炎に包まれる、防衛線を眺める。近くにあった武器をリビイは手に取り立ち上がる。その腕を少女が掴む。

「リビイ、落ち着いて!! 私達が前線に出ても何も出来ない、足手まといになるだけ」

少女の頬を涙が流れ落ちる。リビイは炎に包まれる防衛線へ涙に満ちた目を向ける……

桜家は建造物の陰に隠れ、ポケットから小さなケースを取り出した。
「これ使わなきゃ、勝てないか……」

桜家の持つケースの中には青い目が浮いている。桜家はケースから目を取り出し、自身の左目へと近づける。青い目は生き物のように桜家の左目を喰らい、その場所へと収まる。
桜家の左目が青く光を放った……

〜つづく〜

第五章 F i r s t (後書き)

最後までありがとうございました。

さて桜家が魔眼を回収していたの覚えていましたか？

この回をどれだけ待っていたか・・・

そして双色の道化師、軽くヒントを一つ一色は赤、もう一色は・・・

この戦いの結末はいかに！！！！

次の投稿はたぶん4日ごろになるかと。

今後もよろしくお願いします！！！！

第五章 人の力（前書き）

こんにちは。

今回もよろしくお願ひします。

第五章 人の力

第五章 人間の力^{ひと}

私は産まれた時から体が弱かった。本来、今の進んだ科学と能力により多くの病気は治すことが出来た。しかし、私にはどんな治療もどんな能力も効かなかった。私を診た一人の医者がこう言った。

「この子は科学も能力もすべて否定してしまう。だから、この子にはどんな能力も通用しない……」

私は必死に生きた、体を鍛え出来ることをすべてした。能力を制御し抑えることを身につけ、多くの武術を身につけ、多くの武器に触れ、多くの戦術を学んだ。

私は人間だ……平凡な人間だ……それが私の最強の矛……

セルフィアは膝をつき吐血するステীগを見下ろしていた。

「何故、力が……」

ステীগは口の周りの血を拭き取り、立ち上がるうとする。

「生まれ付きなんだよ。私にはどんな力も効かない、そして私の近くでは能力を発動することも出来ない」

「本当にいたんだ……そんな力を持った者……」

ステীগはセルフィアへ殴りかかる。セルフィアは簡単に拳をかまし、ステীগの腕を掴み、拳銃^{リボルバー}の銃口を胸に押し付け四発目の弾丸を撃ち込んだ。

一発目は右肩へ、二発目は左足へ、三発目はわき腹へ、そして四発目は胸を貫く。ステীগは胸を押さえ地面へと両膝をつく。

「私が触れた弾はお前の回復力も奪う、今のお前はただの人間だ……」

ステীগはセルフィアを睨みつける。

「人間ごときが・・・」

ステイグは胸にあいた穴へ指を入れ、弾丸を取り出す。

「調子に乗るな!!!!!!」

セルフィアは拳銃でステイグの頭を殴る、揺れる頭へ五発目の弾丸を撃ち込む。

「あんたはその人間ごときに負けたんだよ」

ステイグはそのまま地面へと倒れ込む。デリーヌが満足そうにセルフィアに拍手を送った。

「さすがはアピースのナンバー1、流石ね」

「能力が強力なほど、力は奪われてしまえば無力なものだ」

その時、額から血を流しながらもステイグが立ち上がる。セルフィアは振り返り、銃口を向ける。

「やはり力を奪われようと、頭を撃たれた程度では死なないか」

ステイグは指で体に残る弾丸を取り出す。体の傷が修復されていく。

「これで振り出した」

ステイグは怪しく微笑む。セルフィアは呆れたようにステイグを見た。

「私の銃に残った弾はあと一発、これであんたを仕留める」

ステイグは顔を歪ませ笑う。

「馬鹿じゃないのか？一発で俺を殺す、さっき五発撃ち込んでもこの通り。殺れるものなら殺ってみろよ、にんげ・・・」

一発目と二発目の弾丸が撃ち込まれた時、ステイグは余裕を見せ防御一つ行わなかった。そして、彼の機動力は奪われ残りの弾丸を受けた。しかし、今回は違った。ステイグはセルフィアの動きに反応出来なかった。一瞬で懐へ入り込み隠し持っていたナイフで両目を切り裂く、次にナイフを心臓へ突き刺し、体重をかけステイグを押し倒す。

「この・・・女おんな・・・」

ステイグが反撃をしようと手を伸ばす。しかし、その腕はすでに

地面へと落ちる。ナイフを額へと突き刺し、セルフィアは拳銃から弾丸を取り出し、弾丸を胸にあいた穴へ押し込む。

「くたばれ」

そして、胸へ拳を叩き込んだ。弾丸は心臓へと突き刺さり、心臓を止めた。ステイグの体は動くことやめた……

セルフィアは血に染まった手袋をステイグの胸にあいた穴の上に置き、煙草を取り出し火をつけた。

「そっぴゃ、あんたの能力って何だったんだい」

セルフィアは爆煙の上がる戦場を眺め、深く吸った煙を吐き出した。

「クライツ、美実、ジェネルの所に戻りな。私はもう大丈夫だ」

「了解です」

「だらしなく軍服を着た男クライツが尋ねた。

「隊長は参加しなくてよろしいのですか？」

セルフィアは近くあった岩へと腰掛け、戦場を見つめる。

「大丈夫だろ、フェアの奴がいるし。あいつに勝てる奴がいるとも思えないしね」

「了解しました」

クライツと美実は一礼をして姿を消す。それとすれ違つようにデリーヌの元へ数人の部下が現れる。デリーヌは部下に何かを命じると、部下達はステイグを担架の様なものへ縛りつける。

「セルファア、ありがとう。感謝しているわ」

セルフィアは振返ることもせず軽く手を振った。

「それじゃ、私達は失礼させてもらっわ」

「あんたもナンバーズなんだろ」

デリーヌは顔を歪めた。

「話、聞いていたのね」

「ああ」

「私も殺す？それとも王子に私は化け物だって伝える？」

「別に何もしないよ」

デリーヌは不思議そうにセルファアの背中を見つめた。

「でもあなたの計画ってのが私の正義を汚すのなら、その時は覚悟しておいた方がいいよ」

デリー又は怪しく笑いセルフアアの背中へ背を向けた。

「肝に銘じておくわ」

デリー又は部下と共に姿を消す。セルフアアは戦場を見つめ、煙草の煙を吐き出す。

「これが私の正義か・・・、本当に勝敗しか正義と悪を決められないな」

ゆっくりと流れる風が、灰色の長い髪を揺らした・・・

「で、あんたらは何者だよ？」

くつづく

登場人物紹介 第8回

名前 フェア・クラウル

性別 男

能力 ????????

身体能力はかなりすごい

年齢 18歳

身長 180くらいあるとかつこいいかな

体格 細身で長身でも筋肉質

髪型 紺色（割と濃い目な感じ）でツンツ

ンした髪型

服装 アピースの軍服は赤でちょっと丈が短め

耳にちよつとしたピアスをつけている

CVイメージ

候補は二人！！しほり辛いWWW

雑談

五章で登場の新キャラクター。五章の主人公の一人とも言えるかな？どの場面で、いつ登場させるかずっと考えてきたキャラクター、まだ分かりませんがこの物語は16歳のロテル、フロル達、18歳のフェア、愛達、20ちよいのリゼリ達と世代が分かれております。それぞれが主役のストーリー構成だったり・・・。
フェアのことを書くとき身体能力はナンバー1、能力に関しても優秀です。そして彼にはもう一つの力が・・・それは皆さんお気づきかな？五章ではまだまだ戦います！！今後も彼の活躍にご期待ください！！あつ彼が活躍すると・・・

名前

セルファイア・ジエノン

性別

女

能力

能力の否定

年齢

25前後（四季とジャスの世代）

身長

172くらい

体格

普通にヒョロイ、モデル系か・・・

髪型

灰色の長髪、綺麗なストレート

服装

赤の軍服、アピースは男女同じ

CVイメージ

豊口めぐみ（冷静キャラの時の方）

雑談

遂にきた能力無効キャラ！！どうせ最強キャラとか考えるとここに行き着いてしまいますよ>>。でもこのキャラの設定が一番困ったのは武器です！！最初は刀・・・愛と被る・・・剣・・・剣キャラ多すぎ・・・じゃあ・・・リボルバーがないじゃないか！！ってことで拳銃に（ちなみにこの拳銃は伯が持っているものと同じです）

この作品、上司がみんな女性。トップが男性はステラスだけだと、びっくりり！！別に私の趣味とかではありません。ステイグとの戦

いのこと考えたら女になった。ジャスに続くまともなキャラクター、自身の体が弱く死を実感していた為に、命の重さを知っている。だから戦う時は必ず自身を正義とし、正義の為に奪われる命、犠牲の命として命を奪う。これは奪った命から逃れるのではなく、それを背負い戦い続ける為のもの。

愛用の煙草は缶ピース、戦いの後は必ず煙草を吸う。これは彼女なりの甲いと生残ったと言う生の実感。

第五章 人の力（後書き）

最後までありがとうございました。

これで五章の3分の1くらいと言っ事実！！

今後ともよろしく願います。

第五章 奇節 ? (前書き)

こんにちは。

今回もよろしくお願ひします。

第五章 奇節？

第五章 奇節きせつ？

「俺達はさ、普通の人が羨むような力を持つてる。その力をさ、俺はみんなの為に使いたい。四季はどう使いたいんだよ、その力を？」
四季はゆっくりと振返った……

リオルは齒を喰いしばり第二防衛線から後退していた。リビイは目一杯に涙を溜め、炎に包まれる防衛線を見つめる。

桜家は半身を焼かれ少し離れてビルの中に姿を隠していた。冷たい壁にそつと背中をつけ煙草に火をつけた。桜家の魔眼を持ってしてもフォークトを止めることは出来なかった。それは桜家には炎そのものに、ダメージを与える手段を持っていなかったからだ。桜家の持つあらゆる武器も炎には通用しなかった。彼の持つ魔眼は相手の体感時間进行操作する。いかに不意をつこうと、彼の攻撃は通用しなかった。

「もう武器はこれだけか」

桜家は小さな拳銃と一本の小さなナイフを見つめた。桜家は短くなる煙草を見つめる……

「咲也たくや、何していたんだよ？」

透き通った声が屋上に響いた、声の主は華奢な体に端正な顔つきをした青年だった。桜家は屋上の物置の上から顔を出した。

「ちよつと眠くてね、あの講師おはさん居眠りすると五月蠅いから」

桜家は眠そうに目をこすり、青年を見つめる。

「あんまりサボると卒業、出来なくなってもしらないぜ」

青年は桜家のいた物置の上へ軽く飛び乗る。屋上にある物置からの

眺めは整備されたグラウンドと並ぶ木々達の緑がよく映えていて美しかった。二人を爽やかな風が突き抜ける・

「確かに教室より全然いいや」

「そうでしょ」

桜家は煙草を取り出し火をつけようとした。すると煙草が二つに切れ、地面へと落ちる。

「俺の前じゃ、吸わない約束だろ。てか未成年!!」

青年は桜家の持っていた煙草を屋上から投げ捨てた。桜家はその煙草を寂しそうに目で追う。

「勘弁してよね」

青年は物置から飛び降りた。

「俺、これからバイトだから。明日はちゃんと授業出るよ」

青年は手を振り屋上から姿を消す。桜家は制服に隠してあった煙草に火をつけた・・・

「本当に退屈だ」私はより強い相手と戦う為に士官学校に入った。

しかし、ここは実戦よりも授業、授業、授業、授業と何も面白くない。四季は気だるそうに士官学校の校舎を出た。すると目の前に小さな箱が落ちてきた。四季はそれを拾い上げ見つめた。

「煙草か・・・」

四季は空を見上げ、屋上の方へ目をやった。

「箱美芽さんよ、先輩を潰して天下を取ったら今度は煙草ですか？」

四季の前に数人の男達が現れる。彼らは四季の二つ上の先輩にあたり、入学してすぐに四季に声をかけひねり潰された。それ以来、四季は士官学校では最も有名は一年生になった。

「上から落ちて来たの」

四季は煙草の箱を投げ捨て、男達の間を通り抜けようとした。すると男の一人が四季の肩を掴んだ。

「待てよ」

四季は男を睨みつめる。

「手加減しませんよ」

四季は男の腕を掴み、投げ飛ばそうとする。そこへ一人の青年が現れ、男へ跳び蹴りを放った。

「先輩方、女の子を複数で囲むなんて男のやることじゃありませんよ」

四季は青年の姿をぼーっと眺めていた。男達の一人が何かの能力を使おうとした時、青年は動いた。一瞬で決着はついた、青年の舞うような動きに四季は目を奪われた。青年は軽く息を吐くと四季を見た。

「危なかったね、礼におよばないよ。じゃね」

青年はそれだけ告げて四季の横を通り過ぎようとする。四季は楽しそうに笑った。

「待てよ」

青年は立ち止まり振返った。すると四季の鞆が青年の顔を目掛けて飛んでくる。青年はそれをかわす、続けて四季は拳を振るう。その拳を青年が受け止める。

「俺、何かしちゃった？」

四季は笑った。

「ああ」

「何をしたか分からないけど、謝るよ……」

四季は青年に向けて蹴りを放つ、青年はその蹴りを受け止める。

「俺、急いでるんだけど」

「じゃあ、私を倒すか倒されるのが一番早いと思うよ」

青年は苦笑いをした。

「倒されちゃうと、バイト行けなくなっちゃからさ」

青年は体を回転させ攻撃を払い、四季へ拳を放った。四季はそれをかわす。

「時間ないから手加減しないよ」

「手加減する余裕があるといいな……」

二人の拳が交わる……

四季は地面から真っ青な空を見上げていた。

「負けたのか……」

四季この時、初めて負けた。人生初の敗北を味わった。

「君は箱美芽さんだね」

四季の視界に制服を着たおっさんが現れた。

「彼の名前は茅離 楓」

くっくく

第五章 奇節 ? (後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

少し編集しつつ、物語を練り直しているので今週はあと一回ほどしか投稿出来ないかもしれませんが・・・
暫しお待ちください。すいません。

第五章 奇節 ? (前書き)

今回もよろしくお願いします。

第五章 奇節 ？

第五章 奇節 ？

潮風に優しく吹かれた四季の髪がなびく、月明かりに照らされたバルコニーで二人は向かい合った。

「隊長、僕はもう大丈夫です」

四季はフロルから目線を逸らし、バルコニーから海を見た。海の波は優しく揺れ、月明かりに照らされ青く輝いていた。

「何が大丈夫なんだい？」

「傷もすっかり治りました、早くアステリオスにもど……」

「戻ってどうする？」

フロルは四季の予想外の反応に言葉を失う。

「また任務に……」

「お前は何の為に任務につく？」

「僕は……」

フロルは自分の中に理由を見つけられなかった。

「私は楽しむ為に軍に入り、ハウنزに入り、戦いを楽しんだ。ただ自分の……」

フロルは四季に近づいて四季の腕を掴んだ。

「違います、隊長はそんな人じゃない。この手が僕を導いてくれた」
四季はフロルを見つめた。

青く輝く綺麗な瞳が真っ直ぐに私を見つめる。

その目を私は知っている、綺麗な目、真っ直ぐで私と違う……

「君も懲りないねえ、これで何連敗だい？」

四季は桜家の言葉に耳を傾けることなく、立ち上がりその場を離れて行く。

「箱美芽さん、僕達は昼いつも屋上にいるからさ。気が向いたらお

いで」

四季は振返ることもなく去っていく。その後姿を桜家は楽しげに見つめていた。

翌日、昼休みに四季は屋上へ向かった。それは決して昼食を桜家達と取る為ではない。

「おっ箱美芽、どうしたんだ？」

楓は屋上に現れた四季へ声をかける。四季は顔を歪め、拳を握り締める。その時、屋上へ桜家が現れる。

「箱美芽さん、来てくれたの、いやあ誘って・・・」

四季の蹴りが桜家へと向かう、その蹴りを受けたのは楓だった。桜家は自分と楓の位置を入れ替えていた。四季の蹴りは楓の頭を捕らえ、楓はそのまま意識を失った。四季は突然の出来事に固まっていた。

「箱美芽さん、初勝利おめでとう」

桜家は四季にクリームぱんを渡した。

「これは僕からのお祝い、あつ僕の名前は桜家。よろしくね」

桜家そのまま屋上の物置の上へと登り昼食を食べ始めた。四季はただ地面にのびている楓を見つめ続けていた。

その日以来、三人は屋上で昼食を取り始めた。三人での会話はあまり無く殆ど楓が、二人に話しかけているものだった。四季の時々見える微かな笑顔は桜家と楓の密かな楽しみだった。三人は毎日のように顔を合わせ、互いを知り、理解していった。

箱美芽四季、彼女は強く、真つ直ぐな人間。だからこそ、他を理解し其れを受け入れられなかった。彼女にとって他はただの他だった。だから力を振るうことに意味はなく、自身の為にしか振るえなかった。

桜家咲也、彼は賢く、優しい人間。他を受け入れ、他を理解し、大切なものをすぐに理解し、彼は人を繋ぎとめる。彼は優しい故に力を振るわなかった、力だけに意味がないことを彼は知っていたのか

もしれない。

茅離楓、彼はすべてを持っていて人間。でも彼もただの人間だった。

「箱美芽は模擬戦どうするんだ？俺は桜家と組むつもりだけど、箱美芽も一緒にどうだ？」

士官学校では毎年開催される大規模な模擬戦がある。模擬戦はすべての学年が参加し、生徒全員が1〜6人の小隊を組んで生き残りをかけて戦う。

四季は物置の上の楓を見上げた。

「私と組むってことは、優勝するんだよな」

楓は物置から飛び降り、四季の前に立つ。四季は驚き目の前に現れた楓に、少し四季の顔は赤くなっていた。楓の目は真っ直ぐに四季を見つめる。

「当たり前だろ」

楓は手を四季の前へ出した、二人は嬉しそうに手を合わせた……

模擬戦の一週間前、四季の携帯に桜家から連絡が入った。

「楓が死んだよ……」

四季は言葉を失い、涙を流すこともなくその場へ崩れた。楓はバイトの帰りに車道へ飛び出した子供をかばって死んだ。それは彼らしい死に方だった、彼は簡単に命を投げ出した……

四季の頭に楓の姿が浮かぶ、それは彼女が最初に失った^{もの}人。

「失いたくないんだ。私は怖いんだ、お前を失うのが。怖いんだ、怖くて、怖くて……」

四季の手が震える、その手をフロルは握り返す。

「僕は死にません」

「違う！！どんなに強くても、人は……」

フロルは四季を抱きしめたかった。しかし、彼の体ではそれは出来

なかった・・・、フロルは四季の手を放した。

「隊長、待っていてください」

フロルはそれだけ告げるとバルコニーから姿を消した。四季はフロルに握られた手を見つめる・・・

桜家は短くなって煙草を床へ押し付け消した。焼かれた半身はすでに痛みを感じなくなっていた。ゆっくりと腰を上げ立ち上がる。そして、軍服の胸元から古臭い煙草の箱を取り出した。その箱はボロボロで少し血で滲んでいるようにも見えた。桜家は箱から煙草を一本取り出し、そつと口に咥え火をつけた。

「俺の番だな」

桜家は炎の海へと姿を消す・・・

「咲也、何でお前は戦わないんだ？本当は強いんだろ」

「痛いのが嫌だし、疲れるのやだし・・・」

楓は大きな声を出して笑った。

「お前らしいよ。大丈夫、お前が戦わなくてすむ様に俺がしてやるよ」

桜家は楓を見つめた。

「何か俺、かつこわるくない？」

「かつこいいよ、戦わないのが一番いいに決まっている。でも俺達は力を持って産まれた。この力はきつと守る為のもの、だから俺はこの力でみんなを守る」

楓は自身の手を空高く上げ太陽に重ねた。

「太陽つてさ、俺達を照らしてくれてはいるけど結局は見ているだけだろ。それって神とかと一緒にじゃん、結局は何もしてくれない。だから俺達がやらなくちゃ、俺達には立派な手があるんだからさ」

桜家は自分の手を見つめた・・・

「俺の手かぁ……」

「なあ咲也、俺達は軍人だ、いつかは死ぬかもしれない。もし俺が死んだら俺の代わりに守ってくれよ」

桜家は楓の言葉に少し驚いた。桜家にとって楓の言葉は想像もしていないものだった。

「ああ、分かったよ」

「何だよ、その返事！！こういう時は俺に任せろだろ！！」

「やっぱり、やーだ」

楓は桜家に飛び乗った、二人は楽しそうにじゃれ合い笑った。

桜家は楓の墓の前に立っていた、そつと煙草を啜え火をつけた。

「俺、ハウズズの隊長になったよ。四季の奴も隊長やってるよ、あいつ強くなりすぎて俺が守ってもらっているくらいだよ。あいつはお前の所に来てるか？」

煙草の煙をそつと吐き出す。

「来る訳ないか……。俺にも部下が出来たんだ、可愛い部下でさ、みんな弱いんだよこれがさ。最近、俺も分かってきたよ、お前の言っていたことの意味がさ」

桜家は煙草を消し、花束を墓の前へ置いた。

「また来るよ……」

「ああ……、俺もお前と一緒にじゃないか……」

くっくくく

第五章 奇節 ? (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

実は昔に短編を投稿したのですが、その内容がやや桜家と四季の模
擬戦に触れていたんですよね・・、第一章を投稿した当時から読ん
でいる方は結果を知っているかと。

もし希望がありましたらまた投稿致します。

今後もよろしくお願い致します。

第五章 炎帝（前書き）

今回もよろしくお願いします。

第五章 炎帝

四季は目の前の光景に驚き言葉を失っていた。四季の前には一人の青年が立っていた。長く伸びた薄青色の髪に、綺麗な青い目をした青年が四季に近づく。

「隊長、これが僕の覚悟です」

四季は青年の顔を見上げた。

「フロルなのか？」

青年は爽やかに笑い答えた。

「そうです、フロル・レイサスです」

フロルの後にアーニユの姿が見えた、四季はすぐに何が起こったのか理解した。

「何でこんなことを・・・」

フロルは綺麗な青い目で四季を見つめる。フロルの目がすべてを四季へと伝えた。四季の中で不思議と一つのこと浮かんた。

「私はハウズを辞める」

「ど、どういことですか？隊長」

「私は決めた、私はこの力をお前の為に使うよ。お前と共に戦う、それが私の決めた理由だ」

フロルは突然のことに事態を把握出来ていなかった。その時、後からアーニユがフロルに近づき四季の横に並んだ。

「私もお前を気に入った、私もお前に力を貸してやる」

フロルはただ二人を見て、状況を必死に整理した。

「僕が二人を率いるってこと・・・」

フロルのあたふたとした態度に四季とアーニユは笑い始めた。アーニユはフロルに近づき方を叩いた。

「見た目は成長したが中身がお子様だな」

「まずは私達を率いることが出来るくらいに、なってもらうよ」
四季は嬉しそうにフロルに告げた。

「隊長……」

四季は自身の人差し指をフロルの唇に当て言葉を止めた。フロルの身長は四季を越しており、四季は見上げるようにフロルを見つめる。「もう隊長じゃない、四季でいいよ。隊長とは呼ぶな」

フロルは四季の今までと違う行動に顔を赤くしていた。四季の纏う雰囲気は上官としての母のようなものから、一人の女性のものへと変化していた。

「どうした？顔を赤くして」

四季はクスクスと笑った。

「たいちよ……」

フロルの唇に四季の唇が重なっていた。フロルは顔を真っ赤にして少し後に下がった。アーニユは二人の姿を嬉しそうに見ている。

「隊長と呼ぶなと言っただろ」

四季はそれだけ言っているとフロルから離れて行く。少し離れた所で振り返りフロルを見た。

「フロル、ありがとう……」

その時 小さな島に雪が降り始めた 月明かりに優しく照らされる雪達……

アーニユは降り注ぐ雪に手で受け止める。

「お前達の見た未来、悪くないよ」

その雪はフロルの感情に反応したものだった。

その雪は不思議と冷たなくなり、優しく温かかった……

桜家の胸をフォークトの手から伸びた炎が貫いていた。その姿をリビイは泣きながら見ていた。リビイは二人の戦場に来てしまった。そして、彼は最悪の結果を引き起こした。消耗した桜家はすでに魔眼を使えず、能力を使い何とか応戦している状態だった。そこに現

れたリビイを守る為に桜家は自身とリビイの位置を入れ替えた。

「つまらねえ、終り方だな。まあ俺に殺されるって言う結論は変わらないけどな」

桜家は胸を貫かれたまま、リビイに何かを伝える。その声は小さくリビイに届くことはない。

「た・・隊長・・・」

リビイは桜家から目を逸らし地面へと顔を伏せた。その時、フォークトの怒鳴り声が響いた。

「小僧！！目を逸らすな、こいつを殺したのはお前だ。お前がこいつを殺した！！その事実から目を背けるんじゃないやねえよ」

桜家を貫く炎が勢いを増し、桜家を包み込んでいく。その光景をリビイは見てしまった。

桜家は跡形もなく燃え尽きる。

「俺が・・・、隊長を・・・殺した・・・」

フォークトは周囲の炎を消し、リビイへと近づく。リビイはただ涙を流しながら近づくフォークト見続けていた。フォークトはリビイの胸倉を掴み持ち上げた。

「俺が憎いか？」

リビイはただ泣き続ける。

「この腑抜けが俺がお前を殺すのは簡単だ、でもそれじゃ詰まらない。お前は一生この罪悪を背負って生きろ」

フォークトはリビイの顔を掴んだ。フォークトの手が燃え上がりリビイの顔を焼く、リビイの悲鳴が響き渡る。フォークトは激痛で気絶したりビイを投げ捨てた。大きな通りからジークフリードが見える、フォークトは怪しく笑う。

「まだ始まったばかりだ、さあ灼熱の炎よ！！舞え！！」

「おい、咲也！！起きろよ」

桜家が目を覚ますと目の前に楓の顔があった。

「か・・楓・・」

桜家は夢を見ていた、悲しい夢を見ていた。

「どうしたんだよ、何か変だぞ」

桜家は拳を握り締め、ここが現実であることをしつかりと確かめた。

「明日はお待ちかねの模擬戦だ！少身体動かそうぜ！！」

桜家は屋上の物置の上から四季の姿を見た。表情は普段通り、ぶすつとしているがどこか機嫌が良さそうだった。

「わかったよ、俺も手伝うよ」

「今日は乗り気だなあ」

桜家は物置の上に立ち上がり二人の姿を確認する。

「ああ俺はお前らと一緒に戦いたい」

桜家の言葉に二人は啞然としていた。

「俺、何か間違えたか？」

屋上に三人の笑い声が響いた・・・

散り逝く花びらは 未来を齎し 四季を繋ぐ・・・

第五章 さくら散り 雪が舞う 終

~~~~~

## 第五章 炎帝（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

まず最初に題名がネタバレになってしまつので変更しております。分かり難くすいません。この話の題名は最後のものです。

この話はいろいろ伝えたいことがあるので、また活動報告で紹介するかと思います。

私事になりますが、暫く投稿を中断するかもしれません。私自身の問題なので大変申し訳ありません。最悪でも12月の二週には次話を投稿出来ると思います。

読者の方には大変申し訳ありません。よろしければ次話までお待ちください。

鳴谷 駿

## 第五章 三色同好（前書き）

こんにちは。

少しお久しぶりです。短めで申し訳ありません・・・

## 第五章 三色同好

〔第五章 三色同好〕

南ブロック 第二防衛線壊滅

戦況はアルカナスが有利であった。南ブロックは中央ブロックの下部に位置し、戦場となった廃都市を三つのブロックに分けて防衛線を形成していた。そして、南ブロックを進むのは三人の能力者、三人の道化師達だった・・・

中央に立つオレンジ色の髪をした男は前方へ大きく手を押し出す。腕から空間の歪みが現れる、その歪みは男の前に現れたレンズを通り巨大に広がり周囲を破壊する。

南ブロック 第三防衛線（最終防衛線）

第四小隊の腕章つけた少年はもう一人の少年の傷口を必死に押さえた。

「ルーロ、大丈夫だ。すぐに医療班が来るからな」

少年は必死に話かける、腹部が真っ赤に染まった少年は薄れていく意識の中笑った。

「トウUIS様、私は大丈夫ですよ・・・」

二人のもとへ医療班が現れ少年へ治療を始める。トウUISはすぐにルーロの傷が重症であること理解する。

「くそ！！！！絶対に殺してやる！！！！」

トウUISは衝撃音が響くその先を睨みつける。

第四小隊は南ブロックの第二防衛線に配備されていた。そして、第四小隊は第二防衛線から撤退した。たった三人の能力者に第四小隊の半数が重症、もしくは殺されていた。

「お前、一人で何が出来る？」

戦場へ向かおうとするトウUISへビズルが問いかけた。ビズルも



怪我を負っているようで右肩辺りから包帯を巻かれていた。

「あいつ等がルーロを、ぶっ殺してやる!!!」

ビズルはトウウイスに近づき、トウウイスを殴り飛ばす。

「じゃあ、ルーロは何で重症を負ったんだ？お前を守ったからだろトウウイスはただビズルを睨みつける。」

「お前の気持ちは分かる、だが俺達じゃ奴らを倒せない。冷静になれ」

その時、ビズルのもとにヴァイオレットが現れる。

「ちよつと来てくれるかしら？」

三人組みは楽しそうに廃墟と化した大通りを歩いていた。

「粗方の防衛兵器は片付けたようだな」

オレンジ色の短髪にミリタリー系のラフな服装をした男は両腕をポケットへとしまった。

「いやー派手なのは楽しい、やっぱりフォークトについて来て正解だったでしょ」

小柄でオリーブ色の髪に小さな帽子を乗つけた女が楽しそうに二人へ尋ねた。オレンジ色の髪アンティック・イメージネーションの男は特に反応する様子はなかったが、もう一人の綺麗な金髪の青年が反論した。

「フォークトに付いて来た訳じゃないぜ。俺、あいつのこと嫌いだしね。ただ今の幻想アンティック・イメージネーションの道化師には満足してなかったから、話に乗っただけだろ」

「そうね。私もあいつは好きじゃないし、何かと自分強いーばっかじゃん。正直、団長とアーニユとベノンは別格だけど、他はそうでもないよね」

「お前、フォークトの奴の能力知っているのか？」

オレンジ色の髪アンティック・イメージネーションの男が小柄な女に尋ねた。

「炎使いでしょ？」

金髪の少年がクスクスと笑った。

「ただの炎使いが幻想の道化師に入れると思う？」

「普通の<sup>アンティック・イメージ・イン・ジョン</sup>に比べたら強いし、問題なくない？」

「あいつの二つ名を言ってみるよ」

小柄な女は頭を傾け、必死に思い出そうとした。

「忘れた!!!」

その時、金髪の青年が斜め上を指差す。

「やな予感」

オレンジ色の髪の男がポケットから手を出し構える。

「<sup>フォートン</sup>拡大」

小柄な女の一声と共に、三人の斜め前に直径数メートルの薄いレンズが現れる。

「来たな」

金髪の青年が指差した方から三人へ攻撃が向かう。オレンジ色の男の手から放たれた衝撃はレンズを通り、拡大されミサイルや砲撃を迎撃した。

「ルークル、まだ来るか？」

金髪の青年は首を横へ振った。

「たぶん来ないんじゃない」

「そうか」

三人の前へ破壊された砲弾の破片が落ちた。砲弾の破片を小柄な女は拾いあげると、レンズへと投げる。

「お返しだよ!!!」

砲弾の破片は何十倍も拡大され砲撃の元へ飛んで行き、大きな爆発を起こした。

「オリ姉、今のはけっこう死んだんじゃない？」

「いいの、いいの、今回はそれがお・仕・事よ」

ビズルはヴァイオレットの胸倉を掴んだ。二人は作戦室として仮設されたテントの中にいた。

「本当にこんな作戦をするつもりか？」

「何をむきになっているの？部下に情でも移ったの？」

ビズルはゆっくりと手を放した。ヴァイオレットは崩れた胸元を直しビズルの顔へ手を当てた。

「あなたは悪人よ、父を殺し、姉も殺した。今さら何を言っているの？部下の命を守れば罪滅ぼしにでもなるとでも？笑わせないでくれる」

ヴァイオレットの提案した作戦は特攻に近い無謀なものだった。ビズルはそれに反論した、自分でも分からない感情に流され……

「待ってくれ……」

「なに？」

「俺が前線に出て奴らを片付ける。だからこの作戦は行つな」

「馬鹿じゃないの？あなたの力は散々試したでしょ、あの訳の分からないレンズに縮小され、転移させても何故か相手に読まれていて当たらない。あなたは何を見ていたの？」

ビズルは何も言わずにテントの出口へと向かう。

「もう少し賢い男だと思っていたわ」

ビズルが外に出るとトウウイスと共に数人がビズルの前に立っていた。第四小隊の大半は士官学校などから引き抜かれた若い者ばかりだった。

「ビズルさん、僕等も一緒に戦います」

ビズルは蛇のような目で睨みつける。

「死ぬぞ」

ビズルの言葉と睨みに誰一人として引くことはなかった。

「俺は極悪人だ、何の罪のない人間をたくさん殺し、父を殺し、最後には実の姉さえ殺した。こんな悪人に付いて来てもいい事なんて一つもありゃない」

トウウイスはビズルに近づき包帯の巻かれた右腕に触れた。

「極悪人さんは何でこんな怪我を？」

ビズルの怪我は部下を庇って負ったものだった。ビズルはトゥウイスの手を払い何かを言おうとした。

「そこまで」

鋭く透き通った声が響いた。

「姉さん……」

そこには眼鏡にスーツを着た女が立っていた。

「ハウズ第一小隊クロア・クロス、増援で参りました」

くっくくく

## 第五章 三色同好（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

今回は12月になると思いますが、宜しければお待ちください。

ボジョレーの美味しさが分からぬく。。。。

赤ワインが飲めないです（泣）

## 第五章 B・V・S・R ? (前書き)

こんにちは。

お待たせしました。ようやく投稿する決心がつかしました。  
よろしくお願いします。

## 第五章 B・V S・R ？

第五章 B・V S・R ？

### 北ブロック 第二防衛線

第二防衛線は廃墟と化しており、多くの兵士達が地に伏せていた。北ブロックの中央を通る大通りに銃声が響き渡る。

「君が噂の隊長さんですね？もう君一人ですよ」

赤い服を纏った二人組みがリゼリを見つめる。その場に立っていたのは三人だけだった。瓦礫に埋もれ意識を失っているユウ、壁に寄りかかり薄れていく意識を繋アビースごうとするジェネル。銃声の止んだ北ブロックは静かだった。二人組みの一人は赤と金の混じった髪の毛の知的な男と、スキンヘッドに顔の半分は模様のような刺青をした男だった。赤と金の髪ジェネルの男は左手を体の真横へ振り上げた。

「さあ、手加減はいらない」

ジェネルの左手へ青い光が集まる。青い光はふわふわと揺れ腕を中心に飛んでいる。ジェネルが左手をリゼリに向けると青い光は小さな玉へ変化し、リゼリへ向かう。リゼリはマシンガンを召喚し、青い光の玉を迎撃する。青い光の玉は弾丸をかわしリゼリに迫る。青い光の玉から光が放たれる。リゼリはその光をかわす、放たれた光は地面を切り裂く。

「俺を忘れるな」

顔に刺青をした男がリゼリに迫る。リゼリはすぐにハンドガンを召喚し、刺青の男へと放つ。弾丸は男の体を簡単にすり抜ける。刺青の男はそのままリゼリへ迫りリアットを叩き込む、リゼリは空中で一回転し地面へと叩きつけられる。すかさず青い光の玉から光が放たれる、リゼリは地面を転がり光をかわす。リゼリは地面を転がりながら鉄の壁を召喚し、姿を隠そうとする。刺青の男が壁をすり抜け、リゼリへと迫る。

「調子に乗るなよ」

リゼリから黒い大きな手が伸びる。黒い手を刺青の男は透過し逃れようとする。刺青の男の片手が黒い手に触れた、男はとつたに透過できないことに気付く。

「もう遅い」

リゼリの左目は黒く染まっていく、リゼリは男へ弾丸を放つ。刺青の男は迷わず黒い手に掴まれた右腕を、隠し持っていたナイフで肩から切り離れた。

「逃がすか」

リゼリは黒い手を更に増やし刺青の男へと向ける。その時、周囲を青白い光が包み込んだ……

ルイはゆっくりと軍服の上着へ腕を通した。病室の窓から見える戦場で上がる煙を見つめた。その目は決意に満ちた鋭いものであった。

「怪我はもう大丈夫ですか？」

病室の入り口にはエスナが立っていた。ルイは特に驚く様子もなく、一礼をして答えた。

「大丈夫です。私は仲間が戦っている時に、安全な場所でじっとしていられますので」

ルイの答えはエスナへの嫌味にしか聞こえなかった。ルイは明らかに意思、敵意を向けてこの言葉を放った。

「あなたが私を好きでないことは何となく知っていたわ。それはやはりリゼリが絡んでいるのかしら？」

ルイはエスナの分かりきっている質問に食いついた。

「その通りです」

エスナはルイの目を真っ直ぐに見つめ言った。

「あなたが思っているほど私達の関係は単純じゃないわ。彼は私を守っているのではないの、彼は自分を守っているだけ」

エスナの口から出た言葉はルイにとって想像もつかないものだった。



「隊長が自分を守っている？」

「そう、それが真実よ。」

エスナは無表情でその言葉を口にした。

「あなたがなりたいたいものに私は一生なれないはず。リゼはそれを自覚していないのかもしれない。でも私は知っているし、気付いている。だから安全な場所ですっきりとしていられるのね。」

エスナの言った言葉の意味をすぐにルイは理解した。

「それがあなたの本心？」

エスナはルイに近づきルイの胸に触れた。光が放たれルイの目に一瞬印が表れた。

「あなたの今の力では力不足よ。私を与えた力を解き放てば、あなたは全く違う世界を見ることが出来るはずよ。でも代償はあなたからどれだけのモノを奪うかは分からない」

ルイはゆっくり目を閉じ、ゆっくりと開いた。

「この力は仲間を守る為の力、私はあなたとは違う。あなたに私の大切な人達はわたさない」

エスナは何も反応することなく受け流した。

「病院の外に車を待たせてあるわ、使いなさい。そして、車の中の物はあなたの物よ」

エスナの横をルイは通り過ぎ病室を出て行った・・・

#### ジークフリード 司令室

ジークフリードは列車型の移動要塞であり。前回のベーター平原の時とは異なりすでに外装をパージしていた。ベーター平原の時は緊急時での外装のパージだった為に大型の飛行船のようであったが、今回は多くの武装に包まれ浮遊要塞のようだった。

「ノーク様、バルムンクの充填が完了しました」

「狙いは相手の航空戦力」

ジークフリードの上空に形成された巨大な銀の玉が輝きを増す。

「クールヒルト発射」

銀色の玉から光が放たれ、光は綺麗な直線を描き空を二つに引き裂いた。一瞬で光は消え静まり帰ると一斉にアルカナス軍の航空部隊は爆発に包まれた。

「アルカナス軍の航空戦力の40%以上の破壊を確認しました」

「すぐに次弾の充填を開始してください」

ノークは指令室から真っ直ぐにクールヒルトの攻撃を逃れた真っ赤な飛行艇を見つめた。

「航空戦力46%減少、被害は今も拡大しています！！このまま・

・

「大きな声を出すな」

マルクトロスはトリギオンの司令室の中央の席からただ観戦していた。

「あれが奴らの最強の兵器だ。しかし、このトリギオンには傷一つ付いておらん、この船が落ちない限り私達は負けん。だがな、やられてばかりも面白くはないな」

マルクトロスは怪しく微笑んだ……

中央ブロック 最端付近

フェアはビルの屋上を飛び移り、すでに戦場となっていた廃都市を抜けジークフリードに迫っていた。廃都市の最後のビルの屋上で一人の男がフェアを待ち構えていた。

「やっぱり簡単には行かないか、君の腕章は……」

フェアに向けて一発の弾丸が放たれた。フェアはその弾丸を簡単にチャクラムで受け流した。

「容赦ないな、別にいいけどな」

フェアはチャクラムを構えリゼリへと向かう……

アステリオス 軍部会議室

「12対5で、エグルガルトムへの軍部の進軍が可決されました」  
会議室では大きな拍手が鳴り響いた。拍手が止むと上座に座る老人が口を開いた。

「作戦の指揮はギレーヌ中将を推薦したいと思う」

一人の男が立ち上がり一礼をした。男の細い薄紫の目が鋭く光る。  
会議室が再び大きな拍手に包まれた。

ギレーヌは一人誰もいなくなった会議室にいた。

「ギレーヌよ、そこは元帥が座る席のはずだが？」

「いずれ私の座る席だよ」

会議室の中へ一人の男が現れる。

「君の計画通り、指揮を任されたようだね」

会議室に現れた男は癖のある長い金髪を大きく後に流しており、貴族か音楽家のような風貌だった。

「当然のことだよ、さあ我が儘なお姫様にはそろそろご退場して頂  
ごうか」

くつづく

## 第五章 B・V S・R ? (後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

今後ともよろしけれ応援よろしく願います!!!

投稿ペースが遅くなってしまい大変申し訳ありませんでした。

## 第五章 絶対領域（前書き）

こんにちは。

かなり久しぶりの投稿ですいません。

今回もよろしくお願いします。

## 第五章 絶対領域

〔第五章 絶対領域〕

北ブロック 第二防衛線

青い光に二人が包まれると大きな爆発が起きた。青い光は爆発と共にゆっくりと消えていった。顔に刺青をした男はジェネルの横へ戻った。ジェネルの息は荒く、彼の放った青い爆発は彼の体に負担をかけているようだった。

「腕は大丈夫か？」

荒い息の中、ジェネルは横にいる刺青の男へ尋ねた。

「ああ・・・それより攻撃対象識別式魔法をこの威力で、詠唱なしはお前の体が持たないぞ」

刺青の男がジェネルを見ると赤色の髪の毛の割合が増えているように見えた。ジェネルは答えることもなく爆発の中央となったりゼリの方を見つめていた。リゼリのいた場所は地面が抉られ、破壊された地面が粉ようになり地面から空へ上がっていた。その中央には黒い球体があった。

「奴は生きているのか？」

「わからない、だがこの等級の魔法で無傷で済む・・・」

黒い球体にひびがはいり砕けた。

「お前は誰だ？」

アピースの二人はただ球体から現れた男を見つめた。現れた男は長い髪を結わいた細い目の男だった。彼の腕には第五小隊の腕章が巻かれていた。

「本当にすごい能力だ。Aクラスの透過能力者に、絶滅種の魔術士かな？」

タークはゆっくりと二人へと近づいて行く。ジェネルは迎撃しようと青い光を片手に集めた。

「こうかな？」

タークはジェネルの動きを真似した。するとタークの手には青い光が現れる。

「貴様が何故その力を使える!!」

ジェネルから放たれた光はタークを捉える。その光はタークをすり抜ける。

「便利な能力だね」

アピースの二人はただ啞然とタークを見つめていた。

「そちらの赤と金の髪がジェネル・ジユガムズかな？」

「そうだ、その腕章は第五小隊のもの・・・」

タークは地面に落ちていた刺青の男の腕を拾いジユラルへと投げつけた。

「私は第五小隊隊長ターク・フルフィールドだ、これは返すよ」

ジユラルは刺青の男の腕を受け止め刺青の男へ渡した。タークは足を止めクスクスと笑い始めた。

「さあ、君達には聞きたいことが沢山ある。潔く負けを認めてくれると嬉しいのだが？」

タークの言葉を見無視するようにジェネルは青い光をタークへと放った。光はタークを包み爆発した。

「君は賢い男だと思っていたのだが・・・」

タークの横にいた刺青の男が全身から血液を噴出し倒れる。タークは舞い上がる血しぶきに包まれる。タークは何もなかったようにジェネルへと近づいて行く。

「何をした!!」

タークは怪しく笑う。細い目を開き暗く深い瞳がジェネルへと向けられる。ジェネルは攻撃を放とうと手を振り上げようとする。

「話すのに手はいらないか」

ジェネルの両腕が地面へと落ちる。ジェネルは何も分からないまま、地面へと両膝をついた。タークはジェネルの目の前に立ち、見下ろした。

「もう気は済んだかな？」

ジエネルは下を向きぶつぶつと言葉を発していた。タークはすぐにそれが魔法の詠唱であることに気付く。

「やめてくれないか」

ジエネルの口が止まる。ジュラルの口はいくら命じても開くことはない。

「もう君の体は君の言う事を聞かない」

タークはジエネルの頭を掴み、顔を上げさせた。

「支配者は、私だ・・・」

はジエネルただ考えた、この男の能力を・・・この男が現れる前までは私達は第二小隊と戦っていた。この北ブロックに第二小隊が配備されていることは間違えなかったはずだ。

「君には聞きたいことがあるからね、まずは何故エグルガラムに？」  
ジエネルの口は彼の意味に関わらず開く。

「エグルガラムが世界の秩序を・・・」

「そんなことを聞きたいのではない。理由だよ、理由。アルカナスはこの世界の中で間違いなく一番の国力を持つ。その国がわざわざ科学力くらいしかないこの国を潰す必要がある？引き金がアステリオスとの同盟であつても不自然すぎる」

「私達は詳しいことを聞かされていない。ただ私達は下された指令を・・・」

タークは深くため息をついた。

「そうか、君は何も知らずにこの戦場に来て命を落とすのか。実に虚しい死に方だ」

タークは両腕をポケットにしまった。

「やはり私が出る必要はなかったか」

ジエネルは目を疑った。突然、周囲の風景が変化し始める。切り落とされた腕が戻り、横には片腕を失った刺青ラザールの男が倒れている。

「では謎解きの時間だ」

ジエネルはようやくターク的能力を理解した。

「支配者か」



「そうだよ。ただ私の力は強力な分だけ制約が多くてね」  
ジェネルは腕の感覚を確かめようとしたが腕は動かない。

「まず一つ目は効果領域。私の能力はある領域内の者の支配だ。これは領域の大きさにより効果や条件が変わる。今回は第一防衛線からここまで、それが能力の効果範囲」

タークは軽く手を叩いた。するとタークの横に人型の人形が現れる。「君達が戦っていたのはこれさ」

タークの横にあった人形はエグルガルの兵士や第二小隊の面々へと姿を変えていく。

「相手を完全に支配するにはいくつかの条件を満たす必要がある。

一つは時間、これは比較的に楽だった。君達はゆつくりとここまで来てくれたからね。二つ目は私、もしくは私が触れたモノに触れること。これはその刺青の男は私の用意した人形に、君は私が触れたモノに。あとは君達を疲弊させればより深く支配出来る」

ジェネルはタークが自分にレーザーの腕を投げつけたことを思い出す。

「本来はすぐに視覚支配だけだと気付かれてしまうのだが、君達は私達の攻撃を一度も受けなかった。だから異変に気付かなかった。そして深く深く落ちて行った」

タークはジェネルの額へと向ける。細い目が開きジェネルを哀れむように笑う。

「強すぎると大変だ、でも化け物は人間には勝てないよ」

一発の弾丸がジェネルの額を貫いた……。一人の部下がタークに近づいて来た。

「隊長、アステリオスから増援がこちらに向かっているそうです」

「驚いたな、軍部の上層部がよく動いた。これは勝ち戦になりそうです」

部下は少し間を置いて言った。

「それがその部隊の指揮を執っているのがギレーヌ中将です」

タークの目が大きく開く。

「どちらにつくのが一番かな……」

アステリオス軍 艦体内

「ギレーヌ、私は先に行つておくよ。ハウンズにもアピースにも戦つてみたい能力者が沢山いるからね」

「好きにしてくれてかまわないよ」

ギレーヌの目線の先にいる男は真っ黒地に金色の刺繍や飾りのされた特製の軍服を着た男が立っていた。長い金髪を紐で結わいた。

「ありがとう、ギレーヌ」

男は艦内の一人乗りの飛行機へ乗り込んだ。

「大佐、お一人で前線へ？」

男が扉を閉めようとした時に一人の青年が呼び止めた。

「ラルか、心配しなくていい。ただ下見に行くだけだよ」

「しかし、大佐……」

「君は本当に心配症だな、少しはギレーヌに見習わせるべきかな」

男は笑いながら扉を閉めた。飛行機は勢い良く艦隊から飛び出しエグルガルトムへと向かった……。

づく〜

〜つ

## 第五章 絶対領域（後書き）

最後までありがとうございます。

「投稿が遅い！！」本当にすいません。忙しいは言い訳になりません（笑）

これが年内最後の投稿にだけはなりたくないが・・・

次話は白紙です（泣）

前回の投稿で自分の考えた登場人物の名前を間違えると言う大惨事・

・

本当に成長しないなあ

次話もよろしくお願い致します。

## 第五章 反撃（前書き）

こんにちは。

第五章の再スタートです。よろしくお願いします。

## 第五章 反撃

第五章 反撃

「ようやく俺達の出番のようだ」

暗闇の中、赤いランプが点灯しスピーカーからヴァイパーの音が響いた。

「すまないな、こんな重役を他の国の兵士に任せてしまっなんて暗闇の中から返事はない。

「大丈夫か？生きてるよな？」

「ああ、でもそろそろ我慢の限界だ・・・」

トリギオンは三角形をした飛行艇であった。全長は150m弱でありイージス艦よりやや小さい位の大きさである。司令室は上部の三角形の頂点を前方に3分の1位に位置しており、マルクトロスはそこからジークフリードを見つめていた。

「こちらの番と行こうではないか。トリギオン、主砲発射準備」

マルクトロスの言葉と共に司令室が慌しくなる。

「光学レンズの展開を開始」

三角形をしたトリギオンの頂点が四つに分かれて展開される。それがちょうど正方形の頂点の位置くらいで止まり、四つの頂点から光が放たれ丸いレンズが中央に形成された。

「標的はジークフリード」

トリギオンの開かれた前方部の奥に光が集まり始める。エグルガラム軍からの攻撃がトリギオンへ集中する。エグルガラムから放たれた砲撃やミサイルをアルカナス軍は捨て身で止めた。

「撃て」

一本の細い光がトリギオンから放たれた・・・。

ジークフリードの司令室ではトリギオンの変化に対して迅速な対応

が行われていた。

「ミラ、防御システムを前面へ集中。相手の攻撃が分からない以上、何が起こるか分からないわ。ベガ、各戦力へ相手の母艦への攻撃の集中を命じて」

ノークの声が司令室に響き渡る。その時、一本の光がジークフリードへ近づいた。光はジークフリードの前方に展開されたシールドを突き破る。

「防御シールド、レベル1突破」

「あれは貫かれたんじゃない、中和されている。光学系の防御壁じや防げない」

ノークの言葉に司令室がざわめく。その間に光は三枚目のシールドを通過していた。

「残るシールドは後二枚です。このまま直撃すれば、動力部に被害が出る可能性が・・・」

ノークは通信機を手に取った。

「ジャスさん、こちらはノークです。今、ジークフリードに攻撃が迫っています。このままではジークフリードが沈みます。あなたの力を・・・」

「見えてるよ、もう手は打った・・・」

ジャスは中央ブロックの廃ビルから王族警備隊に治療を受けながらジークフリードを見つめていた。

「間に合えよ」

光は最後のシールドを貫きジークフリードに迫る。

「オーバーリミット  
限界突破」

光はジークフリードからほんの数メートルの所で止まっていた。光の先端は何か壁のようなものに阻まれていた。

「これが俺の本当の力だ!!!どうだもつと撃つて来いよ!!!」

光の先端にはユウとジュラルの姿があった。

「ジャス、間に合ったよ」

ユウは通信機へ語りかけた。

「見えてる、よく対応してくれた」

「このくらい楽勝、楽勝。それよりジャス、第三小隊がやられたよ」  
ジャスはユウの言葉に止まった。

「桜家がやられたのか・・・」

「うん」

普段のユウのテンションとは異なる、暗い返事が返って来た。ジャスは治療を振り払い廃ビルから燃え上がる第二防衛線を見た。

「ユウ、そっちの仕事が終ったらこっちに来てくれ」

「ジャス、行くの？」

「ああ・・・」

マルクトロスは特に驚いた様子もなくジークフリードを見つめていた。

「対象に損傷なしです」

「うるたえるな、あの攻撃は光学系のシールドを中和して進む。それを止めたとなれば能力によるものだ。だがあの規模の攻撃を止めるとなれば、アステリオスのお姫様の力が必要なはずだ。そう何度も防げまい、すぐに次弾の充填を開始しろ」

ノークはトリギオンからの攻撃を凌いだことに安心し、ため息をもらしていた。

「ノーク、安心している場合じゃな」

司令室にヴァイパーの声が響いた。

「そろそろ俺達の出番だろ」

ノークは通信機へ願うように言った。

「この戦いを終わらせてください」

「そのつもりだ」

ノークはヴァイパーの返事を聞いて自身の手をそっと胸へ当てた。

「戻って来て」

「何てこと言うの、そんなこと言われたら逆に死にたくなるよ。じや行って来るわ」

そして通信は切れた。ノークはただ戦場を見つめ祈った。

「お前もあの女の<sup>ノーク</sup>ことが好きなのか？」

愛はヴァイパーへ尋ねた。

「好きだったさ、たぶんノークと一緒に居て好きにならない男はいないよ。ノークは本当に優しいからな」

「そうなのか」

通信機からヴァイパーの笑い声が聞こえた。

「お前の噂もちらほら聞いているぜ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

愛から反応はない。

「まあいい、さあ時間だ。始めるぜ・・・」

ヴァイパーは操縦席にいた。無数にあるスイッチをつけ機械的な音が響き始める。

「MMA・002HW、起動」

廃都市の入り口に位置するアルカナス軍の陣営の前に突然、エグルガルの地上部隊が姿を現す。戦車や多脚型の戦車などの兵器が地面から現れる。エグルガルは地下に大量の兵器を温存していた。現れた無数の戦車などが一斉に攻撃を始める。

「マルクトロス様、前方に敵兵力出現。敵地上戦力の本体かと！！」

マルクトルスは腕を顔の前に組み眉間に皺をよらせていた。

「やはり来たか、廃都市による近接戦への誘導。ジークフリードによる対空戦力の弱体化、そしてとどめの地上部隊。さすがは世界屈指の脳を持つだけはあるか・・・。しかし、甘いぞ！！」

トリギオンの下部が大きく展開を始める。

「このトリギオンは本来、対地迎撃戦用の飛行艇。その破壊力味わ



うがいい」

トリギオンの下部に無数のレンズが現れ、光が放たれる。光はエグルガラムの地上戦力を焼き尽くしていく。

「どうだ!!」

「敵地上戦力の34%の破壊を確認・・・、一機戦車が高速でこちらに向かっています!!」

燃え上がる戦場を一機の戦車が駆け抜ける。

「終わらせてやるよ」

〜つづく〜

## 第五章 反撃（後書き）

最後までありがとうございました。

今回は表現が難しく皆さんの想像力にお任せすることが多くて大変申し訳ありません。ここから後半戦です。

よろしければ最後までお付き合ってください。

次話は早ければ明日にでも！！

## 第五章 突破（前書き）

こんにちは。

今回もよろしくお願ひします。

## 第五章 突破

第五章 突破

普通の戦車の三倍はあるであろう戦車が、普通の戦車の三倍以上の速度で戦場を駆け抜けていた。廃都市の先は荒野になっており、そこにアルカナス軍は陣取っていた。それは戦車と言うよりは装甲車に近いものであった。長細い台形のような形状に両面に8個ずつの車輪をつけた戦車は戦場を駆け抜ける。ヴァイパーは激しく揺られる操縦席からトリギオンを捉えていた。

「雑魚どもは消えろ」

厚い装甲が一枚外れ無数のミサイルが放たれる。発射されたミサイルをアルカナス軍は迎撃を始める。

「甘い」

ミサイルは迎撃される前に爆発し、大きな黒い玉を形成し周囲のアルカナス軍を吸い込み消滅する。ミサイルを放った戦車は装甲を切り離し普通の戦車の二倍ほどの大きさになった。すると戦車の速度はさらに上がり、まっすぐにトリギオンへ向かう。それをアルカナスの地上部隊が戦車で壁を作り阻む。

「リミッターを解除、エネルギーの充填を開始」

戦車は速度を落とすことなく、アルカナス軍へ向かう。振る注ぐ砲撃が確実に装甲を破壊していく。

「もう少した」

赤い光を宿した戦車はアルカナス軍の中へと突っ込み動きを止めた。「フィールド解放」

光の球と共にすべてが破壊される。半径数十メートルの光の玉がアルカナス軍の真ん中、トリギオンの目の前に出来上がる。光の球が消えると同時に爆煙が周囲を包み込む。その様子をマルクトロスはトリギオンから眺めていた。

「破壊力が足りなかったようだな」

マルクトロスの口元が笑う。

大きな爆煙の中から真っ直ぐにトリギオンに向かう物があつた。それは人型の兵器で4 m前後の大きさであつた。人型の兵器は大型の銃口のライフルとシールド、背中にはバックパックを装備していた。人型の兵器の握るライフルから弾丸が放たれる。弾丸はトリギオンに張られたシールドに阻まれた。

「その程度、威力でこのトリギオンのシールドを貫けると思うな」  
人型の兵器はトリギオンより上まで上がり上空から迫つた。トリギオンは上部にもシールドが張られており、弾丸を阻む。

「さて、どうする」

トリギオンから放たれる砲撃やミサイルが人型の兵器を迎撃する。シールドは破壊され、ライフルも破壊された。人型の兵器は落下するようにトリギオンのシールドにぶつかった。

「やつとたどり着いた」

人型の兵器はトリギオンのシールドへ手を伸ばす。操縦席のいくつかのモニター爆発し、破片がヴァイパーを傷付けた。

「シールドを中和出来るのはお前らだけじゃない」

人型の兵器の手がシールドを突き抜ける。そして、シールド掴みこじ開ける。マルクトロスは立ち上がり指示を出した。

「全艦、トリギオンへ攻撃しろ！！何としても上の奴を破壊しろ！！」

すぐにトリギオンへの攻撃が始まる。人型の兵器へ無数の砲撃が降り注ぐ、ヴァイパーは決して防御することなくシールドの破壊をやめない。シールドがちょうど数メートル開いた時、人型の兵器の腕が爆発する。閉じていくシールドの中へヴァイパーは胴体をねじ込んだ。背中に背負われたバックパックが開く。

「確かに届けたぜ」

人型の兵器は限界を超え爆発した、トリギオンの上で爆発が起き人型の兵器の破片が地面へと降り注ぐ。トリギオンの装甲は爆発のあつた部分だけ凹む程度の損傷だつた。

「どうやら私の勝ちのようだな」

マルクトルスの顔は笑っていた。

「浮力が低下しています。動力には異常ありません」  
トリギオンの司令室が大きく揺れる。

「駄目です、浮力維持出来ません」

マルクトロスの顔から笑顔が消える。「いった奴は何をした、この船に何が起こっている？」マルクトロス<sup>MM A</sup>は状況を整理する。その間にもトリギオンは地面に向けて落下を始めていた。

「出力を上げる、何としてもこの船を落とすわけにはいかない！」

「すでに出力は最大です。駄目です、墜落します」

マルクトロスは落下するトリギオンからジークフリードを睨みつけた。

人型<sup>MM A</sup>の兵器がシールドを破り、胴体をねじ込んだ時にバックパックから愛は飛び出した。愛は背中に忒本の刀と腰に忒本の刀をつけ、手に持った愛刀を抜きトリギオンへ突き刺し中心付近に着地した。

愛は爆発する人型<sup>MM A</sup>の兵器を見た。

「馬鹿野郎・・・」

すると愛のすぐ横に何かが張り付いた。それは吸盤のような物でそこからワイヤーが伸びていた。愛がワイヤーを目で追うとそこにはヴァイパーがいた。

「死ぬかと思った」

ヴァイパーはヘルメットを脱ぎ捨て、長めの茶髪を後へと流し愛を見た。

「心配した？」

愛はすぐにヴァイパーから視線をそらし、能力を使いトリギオンの重量を変化させた。

ノークはジークフリードの司令室から地面へと落下するトリギオンを見つめていた。司令室全体が熱気に包まれていた。

「まだ安心しては駄目よ、相手の戦力はまだ残っているわ」

「でも一安心ね」

ノークの横にエスナが現れる。ノークは申し訳なさそうにエスナに言った。

「あなたの大切な仲間の命が・・・、すいません。何と謝れば・・・」

「今はいいわ、勝つことだけに集中して」

エスナはノークを見ることなくただ戦場を見つめていた・・・。

中央ブロック 最端付近 廃ビル屋上

フェアのチャクラムはリゼリの拳銃を切り裂いた。チャクラムの先端がリゼリの首元をかすめる。リゼリはすぐにショットガンを召喚し至近距離でフェアに撃ち込んだ。リゼリの放ったショットガンの弾丸をフェアはチャクラムで受け止め後方へ吹き飛ばす、フェアは何とか持ちこたえ屋上のギリギリで止まる。

「あぶねえー」

「リコール  
召喚」

リゼリの手には対戦車ライフルが握られていた。リゼリは躊躇なくフェアに向けて撃つ。フェアは冷静に弾道を読み弾丸をかわし、リゼリへと向かう。リゼリはすぐに対戦車ライフルを捨て、小経口の拳銃を召喚しフェアを向かえ討つ。

「やっぱり隊長クラスは違うな」

「戦闘中に五月蠅いんだよ」

リゼリは上手くチャクラムをかわし、フェアの額に密着する距離で引き金を引いた。

「その銃でどうやって殺すの？」

リゼリは自分の持っている拳銃が切られていることに気付く。フェアの目に濃い赤い光が灯っていた。

「おら!!!!」

フェアの拳がリゼリの腹部にめり込み、リゼリは多く体勢を崩した。

フェアはすかさず追撃をした。リゼリは大きく吹き飛び、屋上にあつた大きなタンクへと叩きつけられた。

「悪いけど終わりにするよ」

フェアはチャクラムを握り締めリゼリへと向かおうとした。しかし、フェアは本能的に近づくことをやめた。

「それが本気って訳か」

リゼリはゆっくりりと立ち上がり、黒く染まる左目でフェアを睨みつけた。

「いけ」

リゼリから黒い無数の手が現れフェアに向かった。

「遅いよ」

フェアの目が赤く輝き黒い手を切り裂き、かわし、リゼリの胸を斜めに切り裂いた。

「その程度の能力じゃ、勝てないよ」

切り裂かれたリゼリの胸から血液が噴出す。リゼリは何とか踏ん張ろうとするがフェアのチャクラムが胸の中央へ目掛けて迫る・・・

〜つづく〜



## 第五章 突破（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

ようやく愛の登場です！！そしてリゼリ対フェアの開戦！！

さあがんばるぞお！！！！

次話は今日の深夜にでも投稿します！！彼女達が久しぶりの登場です。この戦いの行く末、そして彼も戦場へ・・・よろしければお読みください。

第五章 三女一様（前書き）

今回もよろしくお願いします。  
ようやくここまで来ました！！

## 第五章 三女一様

〔第五章 三女一様〕

アステリオス軍のエンプレムのついた小型の飛行機から、すでにエグルガラムでの戦闘による煙や廃都市、ジークフリードの姿は捉えられていた。

「さて私はどう動くべきかな」

飛行機の操縦席で男の顔はどこか嬉しそうだった。

「あんたらは何者だよ？」

セルフィアの視線の先には二人の女性と一人の青年がいた。

「いや、知ってる顔だな。そっちの黒髪はハウنزズの箱美芽四季か、もう一人は幻想の道化師のアーニユ・ワーリユヌスか、青髪の若いのは知らないが、その二人といるってことは強いんだろ」

セルフィアは腰を上げ、拳銃へ弾を込め始める。

「私は三人相手でもかまわないよ」

最初に口を開いたのはアーニユだった。

「何で強い女ってこんなのはつかなの？」

アーニユはチラツと四季を見た。四季は特に反応することもなく、両腕を胸の前で組みセルフィアを眺めていた。

「あなたと戦うつもりはありません」

フロルはセルフィアに戦意がないことを伝えた。

「じゃあ、何をしに来た訳」

セルフィアは少し落胆した様子だった。その様子を見た四季がフロルに言った。

「あの女、一発殴つて来なよ」

「私も賛成、あいつ絶対に自分が最強とか思ってる」

フロルは二人の言葉に少し突っ込みたいと思いつつも、申し訳なさそうにセルフィアに視線を戻した。

「思っているけど、最低でもその二人よりは強いとは……」  
次の瞬間、セルフィアは右手でアーニユの拳を、左足で四季の蹴りを止めていた。

「どう？少しは実力の差が分かった」

二人はすぐにセルフィアから離れた。セルフィアは灰色の髪を書き上げて三人を見下した。

「その二人はどのみち消すことになるからさ、かかってきな」

四季とアーニユはその挑発に乗らなかつた。するとアーニユはフロルに近づき肩を叩いた。

「だとさ」

二人はフロルの後へと下がった。

「アーニユさん達が挑発に乗るからこんなことに……」

フロルは迷惑そうに顔を歪め、セルフィアに尋ねる。

「本当に戦う気はないんです。少しでいいので話を聞いて貰えませんか？」

セルフィアはフロルを睨む、そして銃口をフロルへ向ける。

「戦場に来て、戦う気がないなんて言葉が通用するだけでも？」

フロルは説得を続けるがセルフィアは全く相手にしなかつた。するとアーニユが痺れを切らし割って入った。

「あんたさ、この中で一番強いのはこの子だよ。試しに攻撃してみなよ、あんたに勇気があつたらな」

アーニユの言葉にすぐにセルフィアは動いた。一瞬で間合いう詰め、フロルを突き倒し上にまたがり胸へ拳銃を突きつけた。

「さっき何か言った？」

セルフィアは挑発するようにアーニユに言った。アーニユは笑っていた。

「何が可笑しい？」

四季はセルフィアの胸を指差した。セルフィアはそつと自分の胸を触った。

「あんたこそ何か言った？」

アーニユの挑発に対してセルフィアに反応する余裕はなかった。セルフィアの胸の軍服は切り裂かれ、豊満な胸がチラリと見えていた。「いつの間に……」

セルフィアはフロルを見た。フロルはセルフィアから視線を逸らしていた。セルフィアはすぐにその理由を読み取り、フロルの上からどき軍服の片腕を破り胸元を覆った。フロルは申し訳なさそうに立ち上がった。

「すみません、思ったよりも早くて……。本当はお腹の辺りを……」

セルフィアはフロルを睨みつけ、拳銃をしまった。その姿を見た四季とアーニユは満足げに笑っていた。

「話を聞いてやる」

「ありがとうございます」

セルフィアはさっきの攻撃をいつ受けたのかを必死に考えた。私は全力を出した訳ではない、だが手を抜いていた訳でもない。しかし、現実には私の服は切り裂かれている。

「この戦いあなた達、アルカナスは敗北します」

フロルの言葉にセルフィアは驚くと言うより、啞然とするような顔していた。

「なんだよいきなり、張ったりはやめてくれよ」

「張ったりではありません、これは確実な未来です」

フロルは小さな古びた手帳を取り出した。

「この手帳にはこの世界の歴史が書かれています。過去のこと、未来のこと」

セルフィアは呆れたように言った。

「あまり私を馬鹿にするな。こつちにはやる事がまだあるし、今は戦争中だ」

今度は四季が割って入った。

「その日記の持ち主、いや著者は名も無き者の一人だ」

四季の言葉にセルフィアの表情が変化する。

「それは本当なのか？」

「そうだよ、名も無き者の一人の私が言うんだからね」  
アーニユの一言がセルフィアへ杭をさす。

「これは未来を見る能力者が書いた物です。そして、これにはこの戦いのことも書かれている」

「見せてくれ」

「一応この手帳は能力で書かれたものなので、気を付けてください」  
フロルはセルフィアに近づき手渡した。手帳はすでにこの戦いのページが開かれており、セルフィアはそのページを見た。

「なんだこれは？」

セルフィアが覗いたページには、記号のようなものが羅列されているだけだった。

「左側のページの五行目辺りから文字を指でなぞってください」

セルフィアは疑いながらも言われるがまま指を動かす。そして、セルフィアの頭の中へ情報が流れ込む。

「これが・・・」

セルフィアはすぐに手帳を閉じ、激しく息をしながらフロル達を見た。

「これがこの戦いの本来の結末です」

「本来の？」

セルフィアはフロルの言葉に疑問を持った。そして彼女が得た情報と現状には大きな差があった。

「幻想の道化師はこの戦闘に介入していない・・・」

フロルは静かに頷いた。

「未来が変化しています。その変化がどう今後に影響するかはわかりませんが、この変化は少しずつ大きくなっています」

セルフィアの見た未来ではアルカナスは敗北し、アピースは自分を含め全員が死んでいた。

「私にどうしろと？」

セルフィアは素直に見た未来を信じ、自分の頭に浮かんだ問いを尋

ねた。

「アピースを、アルカナス軍を引かせてください」

返ってきた言葉はセルフィアにとって最悪の回答だった。それは彼女の貫いて来たことを曲げること、彼女にとっての本当の敗北……

「私に兵を引けと……」

その時、戦場の空気が一変した。その変化はフロル達のもとにも瞬時に伝わった。セルフィアは振り返り戦場を見た。そこには地面へと向かうトリギオンの姿があった。

「さつき見た映像通りか……」

「間に合わなかった……」

セルフィアは驚く様子もなくその光景を見ていた。フロルは拳を握り締めた。

「このままじゃ死ぬぞ、お前を残して全員」

四季の言葉がセルフィアに突き刺さる。セルフィアにとって仲間の死は良くあることでもあった。しかし、彼女にとって死なせたくない者の顔が浮かんだ。

「死なせたくない奴がいる」

セルフィアの表情が変化した。それは意思を持った顔、目の輝きが研ぎ澄まされ光を増す。

「力を貸してくれるか？」

「もうこの戦いは止まらない、でも救える命があるのなら僕達はあなたに力を貸します」

セルフィアはフロルに近づき手帳を渡し、後の二人を見た。

「なんでお前等と一緒にいるか分かったよ」

その時、一発の銃声が響いた……

〜つづく〜

## 第五章 三女一様（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

少しづつですがこの章の姿が見えてきました。あと1話か2話投稿するとしばらく投稿出来ないさそうです。

本当は一月中に五章を完結させたかったのですが・・・  
次回もよろしくお願い致します。



## 第五章 二つ名（前書き）

今回もよろしくお願いします。

前回に続きこの二組の話です。

ようやく使えるこの表現、第一章から待ちに待った回です。  
お楽しみいただけたら嬉しいかぎりです。

## 第五章 二つ名

第五章 二つ名

フェアのチャクラムはリゼリの胸を貫くことなく、リオルの手を貫いていた。

「お前の相手は俺だ!!」

リオルはチャクラムから手を無理やり引き抜き、フェアに向けて拳をふるう。フェアは難なく拳をかわし、リオルへチャクラムを突き刺した。リオルは脇へと突き刺さったチャクラムを掴み、フェアの頭へと頭突きを叩き込む。フェアは意識が一瞬飛ぶ、その隙にリオルはチャクラムを抜きフェアを殴り飛ばした。

「あんたが第二小隊の隊長だな」

リゼリは痛む傷口を押さえ、リオルを見た。

「そうだ」

「ここは俺に任せろ、お前へは第三小隊のもとへ向かえ」

「どう言うことだ？」

「つべこべ言わず言ってくれ、あんたの力が必要なんだ!!」

リオルの目は真っ直ぐにリゼリを見つめる。リゼリは何も言わずにリオルに背を向け、燃え上がる中央ブロックを見た。

「ここは任せた」

リゼリの背中から黒い翼が生える。それは悪魔のような真っ黒な影でできた翼、その翼を大きく羽ばたかせリゼリは飛び立つ……

セルフィアは胸を弾丸で貫かれ倒れ込む。

「くそ……」

フロルはすぐにセルフィアに駆け寄り氷で傷口を止血しようとする。

「駄目だ、能力が発動しない……」

セルフィアの胸から血液が流れ出す。すぐにアーニユも駆け寄るが能力が発動しない。

「駄目だ、無意識に防衛本能で能力が発動してる」

フロルは必死にセルフィアの胸へと手あて止血する。

「止まらない、このままじゃ……」

「フロル、何としても意識を取り戻させろ!!!」

四季の声が響いた。それと同時に四季はセルフィアの拳銃を借り、放たれた二発目を弾丸で撃ち落とした。

「箱美芽隊長、いや元隊長と言うべきかな」

三人の前に真つ黒の軍服にアステリオスのエンブレムをつけた男が現れた。四季はその男の顔を見るとすぐに表情が変わる。その時、セルフィアの意識が微かに戻る。

「能力を解いてください、このままじゃ死んでしまいます」

フロルが必死にセルフィアへ呼びかける。

「フロル、待て」

フロルは四季の顔を見た。

「能力を使われたら私達は殺させる」

フロルは現れた男の方へ視線を向けた。その男は金色の長い髪を後へと流し、気品のある顔立ちに白い肌、エメラルド色の綺麗な瞳、真つ黒な地に金の刺繍のされたアステリオスの軍服を着ていた。

「でも、このままじゃ……」

四季はありとあらゆる手を考える。どの策もこの男に殺される結論へ繋がる……

「アーニユ、あんたにかける。フロル!!!」

フロルの呼びかけにセルフィアは能力を抑える。それと同時にアーニユは周囲の時間を止めた。そして、アーニユは自身の見た光景に背筋を凍らせた。

「この男何者だよ」

四季の片腕は宙を舞い、男はセルフィアへ小さなナイフを向けている。そのナイフはフロルのナイフによってセルフィアの目の前で止められていた。アーニユはすぐにセルフィアの傷の時間を戻す、そして四季の腕の時間を戻し、時間を止めるのをやめた。男はすぐに

状況を理解し、三人から距離を取ろうとした。そこへフロル、四季、セルフィアが攻撃を加える。男は自分の能力が発動できないことに気づき、とっさに最小限の被害でその場を逃れ距離を取った。

「あいつは何者だ」

セルフィアが尋ねる。男は片腕に受けた切り傷へ布を巻いていた。

「二つ名と言えば分かるか」

アーニユとフロルは分かっていたようだったが、セルフィアの表情は微かに笑っているようだった。

「英雄と死神か」

セルフィアが口を開いた。

「その通り、味方からは英雄、敵からは死神。アステリオス軍の大英雄だよ」

セルフィアは嬉しそうに言う。

「ここでこんな大物に出会えるとはね」

セルフィアの嬉しそうな表情と逆に四季の顔は焦っていた。

「エングレープ、なんでお前がここにいる」

エングレープは呆れたように答えた。

「年上にその言葉遣いは良くないな、君も少しは大人になるといい。私が来た理由か、ギレーヌが大艦隊を率いてこちらに向かっている」  
四季の顔は焦りから絶望へ変わる。その変化を三人もすぐに読み取った。

「大艦隊……」

フロルは未来が大きく変化を始めたことに気付かされる。

「そろそろハウンスやお姫様には退場してもらおうとギレーヌは言うていたよ」

「そんなこと国民が黙っていないぞ」

エングレープは淡々と話続ける。

「君は政治を知らなさすぎる、所詮兵士は政治の下にいる。国の外に出た姫様に何か起こっても不自然ではあるまい、そしてハウンスにも」

しばらくの静寂が場を包み込む。

「さて君達はどうするつもりだ」

エングレープがフロル達に尋ねた。セルフィアが一步前へと出る。  
「こいつを私が殺ればいいだけだろ」

四季の横へ行き拳銃を受け取るうとする。四季はエングレープから視線を逸らさずセルフィアの前へ手を出した。

「駄目だ、お前が殺されたら誰もこいつを止められない」

「あたしがこいつに負けるとでも？」

セルフィアは四季に腕へ手を伸ばし、その手から拳銃を奪った。

「ここにいる四人で勝てる確信があるなら、すでに動いている」

四季の言葉が重く響き渡る。

「こいつの能力は常識を逸脱している。能力を使われたら誰も勝てない」

その時、アーニユはさっきの出来事に気付いた。

「四季、そいつの能力は何だ？」

「速度支配、自身、他者、物質まで奴はすべての速度を支配出来る。それがどれだけ強力なのかは分かるはずだ」

アーニユはさっきの一瞬を思い出す。アーニユはこの中にはエングレープの動きに一人だけ反応出来た者がいたことに気付く。

「四季、さっきフロルはそいつの攻撃を止めている」

四季はあまりの驚きにフロルの方を見た。エングレープは静かに頷いていた。

「確かに彼は私の攻撃を止めたよ、そして私は能力を使っていた」  
フロルは四季とセルフィアの元へ近づく。

「彼は僕が食い止めます。三人は早く行ってください」

「待て！！私が・・・私・・・」

「冷静になってください」

フロルの一言にセルフィアは拳銃を下ろす。

「死ぬなよ、お前に合わせたい奴がいる」

「死ぬつもりはありませんよ」

四季もセルフィアと共に下がる。

「無理はするな、危険を感じたらすぐに逃げていい」

アーニユは四季の元に近づきここに残ると言ったが、四季は首を横へ振った。アーニユは反論なく四季の指示に従った。

「四季さん、アーニユさん、お願いします」

するとセルフィアが弾丸を一発りボルバーから取りフロルへ投げた。

「セルフィア・ジェノンだ」

フロルはそれを受け取るとお辞儀をした。

「セルフィアさん、楽しみしていますよ」

そして、四季達は戦場へと向かった。

「フロルくんと言ったかな？君はすごい、あれだけの人間をまとめるなんて。確か君はハウنزズの一員だったかな」

フロルは真っ直ぐにエングレープを見つめる。

「ありがとうございます」

「そんなに緊張しなくていい、私は何か命令を受けてここへ来た訳ではないかね。私は自身の好奇心でここへ来ただけだよ」

その言葉にフロルは反応した。

「なら何故、セルフィアさんを殺そうと」

「それは当然ことさ、彼女は私達、そして君の敵でもあるはずだよ」  
エングレープの話し方は淡々としていて全く感情がない。その話し方がフロルには不気味でしかなかった。

「君が望むのなら私から君をギレーヌに推薦したい、君ほど人材はそうはいないからね」

フロルは小さなナイフを取り出し、エングレープへ向ける。

「どうやら断られてしまったようだな」

次の瞬間、無数の氷柱が地面を凍らせながらエングレープへ向かった。

「君の力がどれほどのものか見せてもらおう」

〜つづく〜

登場人物紹介 第9回

名 エングレープ

性別 男

能力 速度の操作

年齢 30前後?

身 180以上

体 長身で気品を失わない程度に筋肉室

髪 金髪で長髪、くせもあり、貴族系

服装 真っ黒な地に金の刺繍のされたアステリオス

の軍服。

形は一般のものと大差ないが刺繍などが専用のものになっている。

CVイメージ 池田 一さんしかない。

雑談

今後確実に重要となる登場人物の一人、正直な話、池田さんの声に合う人物が欲しくて産まれました(笑)能力は迷いましたが応用がきき長く使えるものとこれに決まり。先に言っておきますが彼はただの人間です。彼についても今後書く機会がありましたら詳しく書かせていただきます。

## 第五章 二つ名（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

しばらく休載致します。下手すると次回は来月かもしれません。

余裕がありましたらすぐに投稿しますのでよろしく願いします。



## 第五章 untitled (前書き)

お久しぶりです。

中々自分の思い描く通りの文章は出来ないですね。

うまく表現することが出来ない自分の実力が本当に悔やまれる話です。

この章の untitled の一つ目の終わりです。

どうぞ最後までお願いします。

(注) 後書きで補足を行いますので、よろしければどうぞ。

## 第五章    u n t i t l e d

第五章    u n t i t l e d

「忘れもの！」

俺は玄関へ腰掛軍服のブーツの紐を結んでいた。家の奥から声が響く、軽快な足音と共に一人の女が俺の元へ駆け足で近づく。俺は振り返りそつと見上げた。綺麗な白い肌に綺麗な黒髪、俺はその女に見とれ動きを止めた。

「何ばーつとしてるの？」

女は不思議そうに俺の顔を見る。『誰』俺は良く知っているはずなのに名前が出てこない。この人は俺にとって大切な人だ。でも何故か名前が……

「はい」

女は俺にIDカードを渡した。

「これがないと入れないでしょ」

「ありがとう……」

俺はIDカードを見つめた。【ハウズズ第二小隊……】

「早く行かないと……さんが待ってるよ」

『良く聞こえない、何故か名前だけがぼやけている』俺は言われるがまま家を出た。どうやら俺はマンションに住んでいるようだった。玄関を出てすぐに町の風景が広がっている。『いつも通りの風景だ……』俺はそのまま前へと進み、マンションの通路から外を見渡した。

「おーい、遅刻するぞ。早くしてくれよ」

マンションの下から声が聞こえた。声の主はマンションの前に停められた車の運転席から顔を出し、俺を見つめている。

「今日は遅刻したらやばいって、聞こえてるのかよ……!!」  
男の声はしっかりと俺にと届いていた。俺がいたのはマンションの三階くらいだった。俺は感覚を確かめるように通路の壁を越え跳ん

だ。俺は軽く身を翻し地面へと着地した。

「毎朝のことだが、いつも驚くよ」

男は嬉しそうに俺を見て笑い、運転席の窓から出していた顔を引っ込めた。俺は助手席へ乗り込み、シートベルトを締める。車が出ようとした時、マンションの入り口から出てきた子供達が俺を見て嬉しそうに手を振る。

「ハウズのお兄ちゃん、今日も頑張つてね」

俺は子供達へ軽く手を振った。子供達は嬉しそうに手を振り返し、数人は敬礼をしているようだった。

「お前さんの人気には嫉妬するよ。まあアステリオスの閃光と言えば知らない者はこの国にはいないか」

俺は車から町の風景を眺める。いつもと変わらないこの風景を守る為に俺は戦っている。さっきの子供達やこの町に住む人の為に……

『戦っている……、この町を、人を……守る為に……』

「聞いたかよ、ずっと空席だった第一小隊へリゼリ隊長が移るらしいぜ」

俺は横で話す男の話を軽い返事をしながら聞き流していた。男は俺を見て軽くため息をついた。

「お前さんは本当にこの手のことに興味がないな。分かっているのか？ 確実に第二小隊の隊長の後任はお前だぞ」

「俺が隊長……」

「そうだよ。お前はハウズズの隊長に憧れて入ったんだろ」

俺の頭の中へ一人の女性の顔が浮かんだ。『箱美芽 四季』彼女との出会いは俺の世界を変えた、今まで定まらなかった目標が始めて出来たのかもしれない。他者への興味だったのだろうか？ 強さへの興味だったのだろうか？ 自分に初めて芽生えた不思議な感情、でも俺はそれを確かめることは出来なかった……

「大丈夫か？ 今日のお前、何かおかしいぞ？」

『おかしい？』

俺が振り返り運転席の方を向くと、運転席側の窓の奥に一人の少女の後姿が見えた。その少女は小さな路地の奥へと姿を消して行く。その少女の後を数人の男達が追う。

「おい!!!.....待てよ。どうしたんだよ!!!」

気付いた時には俺は走行中の車から飛び出し、少女が逃げ込んだ路地へと向かっていた.....

「やめて、放してよ」

「お嬢様、お願いですから.....」

少女は腕を掴まれ、男達と言い争っているのが見えた。

「おじさん達さあ、こんな日に何やってるのさ?」

男達と少女の視線が俺に集まる。

「お願い、助けて」

少女の言葉に自然に体が動いた.....

『俺は知っている、この子を知っている.....』

目の前の景色が早送りのように動き出す。俺は自分の姿が子供の頃に戻っているのに気付く.....

「私を抱きしめて」

俺は躊躇うことなく少女を抱きしめた、少女は震える声で呟いた。

「私は最低よ、たくさん嘘をつくかもしれない、あなたを利用して捨てるかもしれない.....」

「俺には何も解らない、でも君は俺の世界を変えてくれた、真っ白な世界を鮮やかに」

「ありがとう」

『そつだ、俺はこの子を.....』

「……、君は確かに強い。でも動きが単調すぎだ」

俺は地に伏せ、喉元には剣先が突きつけられていた。

「何て言うか、攻撃が正直すぎだ」

金髪の女は剣を砂に戻して俺の頭を撫でていった。

「明日も待っているよこの場所で」

『この人は……』

俺が目を覚ますとベッドの上だった。どこかの部屋に俺は寝かされていた、記憶は途切れ途切れで思い出せない。ただ負けたということだけ重く押し掛かる。ベッドのよこのテレビが五月蠅く鳴り響いていた。テレビは金髪の女性の死を告げている。

俺はただ天井を見上げていた、何も分からず、何も信じず、ただ・

『俺は守れなかった……』

俺は車の中で封筒を開けた。中には手紙と月をモチーフにした金のチャームのついたネックレスが入っていた。

あなたの信じる道を貫きなさい

私とともに歩むから

その先の光を目指して……

私の最初で最

後の大切なあなたへ

俺はネックレスをつけ握り締め、月を眺め続けた……

『俺の信じる道……』

突然、世界が歪み巻きも出される。多くの情報が頭の中を駆け抜ける。感じた事のない感情が次々に流れ込む。

「式典の会場まで私を連れて行ってくれませんか？」

「わかった」

そのとき、空に大きな花火が上がった。彼女も周りの人々も花火に見惚れていた、でも俺は花火を見上げる彼女の姿に見惚れていた。

「リシアよ、あなたの名前は？」

リシアは花火を見たまま、尋ねた。

「ロイテル」

リシアは微笑みながら言った。

「ロイテル、よろしくね」

『リシア』

男は満足そうに倒れていく。

「私は今、死を感じた。私は死は存在しないのに、時すらも殺せない私に……」

男は胸に大きな穴を開けて倒れた。普通の人間なら即死であろう傷を受けながらも男は笑っていた。

周囲に立っているのは俺だけだった。テイルもアルルも地面へと倒れ込み何とか意識を保っていた。バーズは深く壁にめり込みぐったりとしている。ベノンは石造のように固まっている。重力操作者<sup>グラビティ・ウオーカー</sup>は地面に膝をつき引き千切られた腕の回復を待ちながら倒れ込んだ男を見つめていた。

「俺は勝ったのか……」

その時、体に異変を感じた。体から感覚が消えていくのだ……  
「そうか……」

俺はもう限界なのか。体が細かい粒子のようになり大気へと消えて行く。

「ロイテル!!!!!!」

ティールが俺に何かを言っているようだった。でも、もう聞こえないんだ。その時、大きな扉が開きリシアの姿が扉の奥から現れる。リシアは俺の姿を見るとすぐに俺に向かって走り出した・・・

俺の世界を君は変えてくれた・・・  
単調で退屈な未来を君は変えてくれた・・・

聖痕祭の日のうち上がる花火を見上げるリシアの顔が浮かび上がる。  
・  
・

ロイテルの顔が優しく笑う、その顔には表情が感情が心があった。  
そして近づくリシアを見て微かに口が動いた・・・

『しゅめん』

リシアがロイテルのもとにたどり着いた時、そこには金のネックレスだけが残されていた・・・

〜つづく〜

## 第五章 untitled (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

今回は決してこの章の終わりと言う意味ではないですよ。四章から続いていたロイテル達の話の最後になります。ここで「この終り方はないだろ」と言う方の為に、先に一つ今後の情報を。このuntitledは第五章で終わりに致します。この章で一区切りとなります。そう言うつと更に「この終り方はないだろ」と言われてしまいますね(笑)完全な続編を新しい物語として書きます。題名はたぶん似ているので、すぐに分かるかと。物語として分ける理由などは、この章の最後にも書かせていただきます。最後に、続編では必ずこの話の直後の内容を書くので心配なく。今後ともよろしくお願い致します。



第五章 Start to (E·N·D) ? (前書き)

こんばんは。

今回もよろしくお願いします。

## 第五章 Start to (E・N・D)？

第五章 Start to (E・N・D)？

フロルが受けた攻撃は二回、エングレイプの蹴りと拳。それ以外の攻撃はすべてかわす、もしくは防ぐことが出来ていた。フロルは蹴りを受けたわき腹を押さえながら、エンブレイクから一定の距離を置いていた。

「あなたの能力は二種類ある」

フロルはエングレイプへと話かけた。エングレイプは特に表情一つ変えることなく、フロルへ返答した。

「流石だ、その通りだよ。自身の能力の種を明かすのは少し甘やかしすぎな気もするが、ばれてしまったことだ。白状しよう」

エングレイプは左手に握っていた拳銃から一発の弾丸を取り出した。「一つ目はこれだ」

エングレイプは弾丸を自身の真横へと投げた。そして、エングレイプはそれが地面へと落ちる前に弾丸へと追いつき受け止めた。

「今の能力の種はなんだい？フロルくん」

「あなたの一つ目の能力は絶対速度の操作。これはあなた自身の速度を操作している」

エングレイプは少し満足そうに笑った。フロルは更に話を続けた。

「この能力が私が反応出来る方のもの、この能力は自身の速度を早くする。でもあなた自身の反応速度が上がる訳ではない。だから僕にも反応出来る」

「正解だよ。その通りさ、いくら私の動く速度早くしても、私自身がその速度について行けなくては意味がない。では二つ目の能力はどんなものか説明してもらえるかな？」

「説明するよりもこの方が手っ取り早い」

フロルが言い切ると同時に周囲の温度が一気に低下し、全方向からエングレイプに向かって氷結が迫る。周囲が真っ白に凍りついて行

く。ちょうどエングレイプから1メートル位の距離の所から氷結していく速度が遅くなる。

「これがあなたの二つ目の能力、相対速度の操作。あなたを中心に周囲の速度を操作する。これならどんな攻撃もかわせる、そしてどんな相手も捉えられる」

フロルの表情が険しく変化する。

「ご名答、さて私の能力の種を暴くことは出来た。あとは攻略するだけのようだ、フロルくん」

エングレイプの目が鋭く光る。その目はフロルへ告げている。「さあ出来るものなら、私に見せてくれ」フロルにとって二つの目の能力は最悪の相性だった。近接戦になれば勝ち目はない、遠距離戦であっても決め手がない。フロルはすでに自身の能力は奇襲や近接戦での補助としてしか、この男相手では意味がないことに気付いていた。フロルはあらゆる手を思考する。突然、フロルは大きく後方へと下がる。

「いい勘をしている。いや勘ではなく、しっかりと警戒していたのか」

フロルはエングレイプが速度操作の領域を広げたことを周囲へ展開させた氷から読み取った。

「君は本当に優秀だ。ここで殺されるのも、捕まって殺されるのも実に勿体無い」

フロルにとって一番厄介なのは能力ではなく、エングレイプ自身だった。この人は私よりも、四季さんよりも多くの死線を乗り越えている。圧倒的な経験量の差、そして精神の強さ。フロル自身もすでにいくつかの奇策を使い、エングレイプへと迫っていた。だがどんな策に対してもこの男は冷静に対処する。

「君の最大の武器は能力じゃない、その観察力だ。私から決して目を離すことなく、策を練り続け私を追い詰めようとしている。そして、君が優秀だと分かる最大の理由は君が今も動かないことだ」

エングレイプのその言葉がフロルの胸を貫く。「すべてばれている」

フロルはどんなに策を練っても彼を詰み切ることが出来ないはずでに分かっていた。

「君では私に勝てないよ。君は私の初撃に反応出来た。そして、この男が初撃、目標を確実に仕留められるであろう状況で能力を出し惜しみするのか？」と考えた。そして出た答えが「あれは全力だ」

「  
」  
エングレープは話を続けたままフロルへと近づいて行く。

「君の出した答えは正解だった。でもそれはあの状況で出せる私の全力だった」

その時、フロルの頭の中に一人の男の顔が浮かんだ。『赤色の道化師』

「氷狼よ」

フロルの掛け声と共に無数の氷狼が現れ、エングレープへ向かう。

エングレープは氷狼達の速度を落とし、簡単にかわし砕いた。氷狼は絶え間なくエングレープへ襲い掛かり、やがては山のようになりエングレープを包み込んだ。

「氷塊とか・・・」

「これが奥の手とは、少し買いかぶりすぎたようだ」

フロルの真後から放たれた弾丸はフロルの胸を貫いた。しかし、エングレープの前にいたフロルは氷のように砕け、エングレープへと襲い掛かる。エングレープはすぐに能力を使い砕けた無数の氷の速度を落しかわす。

「こんなことも出来るとは」

エングレープは声の方を見た。フロルはエングレープから数十メートル離れた所にいた。突然、大きな地響きともに巨大な氷の壁が空へと伸びていく。氷の壁は巨大なドームを形成しエングレープを中へと閉じ込める。

「いい策だ」

エングレープは氷の壁が現れた瞬間にその場から逃れようとした。しかし、エングレープへ砕けた無数の氷が向かっていた。

「僕はあなたは二つの能力を同時に使えないと賭けに出た。だから、あなたに自衛の為に能力を使わせたかった。そして、あなたは能力を使った」

イングレープは透き通った分厚い氷の壁の中からフロルを見続けていた。

「フロルくん、君は確かに優秀だ。でも君は同じ間違えを二度したようだ」

フロルは背筋が凍るような不思議な気に当てられた。

「君のこの策は私を殺す為に行うべきだった。でも君は私を閉じ込めるという選択をしてしまった。そう、君は『彼には氷の壁を壊す手段はない』と考えた。違うかな？」

フロルは唇を噛み締め、新たな策を考える。

「10分間、それが君に与える時間だ。好きにするがいいよ」  
イングレープはそれだけ言って目を閉じた……

「君の勝ちのようだ……」

10分後、イングレープの視界にフロルの姿はなかった。

「残念ながら今の私にはこの壁を壊す武器はない。私の言葉を受け逃げることを選んだのか、それともはったりだと分かっていたのか？どちらにしても君の勝ちだよ」

く

くつづ

## 第五章 Start to (E・N・D)？ (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

書きあがりしだい投稿致しますので、よろしければお読みください。

第五章 Divergence (aTone) (前書き)

こんにちは。

今回もよろしくお願いいたします。

前回の話の最後の一行を消しました (><)

編集しましたすいません・・・、話のつじつまが・・・

未熟者で本当にすいません。

## 第五章 Divergence (aTone)

第五章 Divergence (aTone)

四季達は戦場となつてゐる廃都市の北ブロックを通り中央ブロックへ向かつてゐた。北ブロックへ入つてすぐに四季は違和感に気づいた。

「二人とも先に行つてくれ、私は少し寄る所がある」

二人はただ頷くだけで四季と別れ、中央ブロックへと向かう。四季は二人から離れ、破壊された防衛線を見つめ北ブロックの奥へと向かった。

中央ブロック最端 廃ビル屋上

リオルはすでに片腕を失つてゐた。それに比べてフェアには殆ど新たな傷はなかつた。フェアはジークフリードを目の前にしながら、リオルに足止めをされていた。

「本当に倒れないな」

オーバードライブ

すでにリオルは暴虐の獅子を使い、出せる力をすべて使つてゐた。それでもフェアとの力の差は全く埋まらなかつた。リオルが立ち上がるうとした時、フェアの目は墜落して行くトリギオンを捉えていた。

「そんな・・・」

フェアを包む空気が冷たく変化して行つた・・・

「箱美芽隊長、お久しぶりですね」

四季は戦場の真ん中で紅茶をたしなむタークへ目を向けていた。

「お前が前線に出るとは珍しいな」

タークはゆつくりと口に含んだ紅茶を飲み込み言った。

「どこかの隊の隊長が失踪したせいで、私がこんな不粋な真似をすることに」



タークの視線の先にはアピースの二人の死体が転がっていた。四季はその死体を見てこの男の実力は第五小隊のレベルではないと改めて実感した。

「ターク、お前は どうする？ 今、ギレーヌが大艦隊を率いてここに向かっている。このままじゃハウন্ズは壊滅させられる」

タークは素っ気なく答える。

「どうもしないさ、私はもともと軍部側よりの人間。ハウন্ズへの入隊も軍部からの監視任務の一環でしかない」

「姫様の監視役と言うことか」

タークは防衛線に不自然につくられたテーブル上の洋菓子へ手を伸ばした。

「姫様も薄々は気付いていたみたいだよ。だから私を第五小隊へ縛りつけ、決して国外へ連れ出さなかつた」

タークは洋菓子をゆっくりと噛み砕き飲みこみ、紅茶へ手を伸ばす。

「お前は どうするつもりだ」

「どうするもないさ、成り行きに任せるよ」

四季は呆れたように笑った。

「やっぱりお前は私が思っていた通りの男だったよ。私はハウন্ズをアステリオスを抜ける。この戦場であんた等と戦う気はない、だから私達に手を出さないように各隊へ伝えてくれ。互いに無駄な犠牲は出したくあるまい」

タークは四季の言葉に驚いたようだった。感情をあらわにしないタークの顔がやや歪む。

「変わりましたね、箱美芽隊長。以前のあなたなら今頃私達は殺されていたかもしれぬ」

タークは軽く合図をして部下を呼び寄せ、通信機を持ってこさせた。「こちらはハウন্ズ第五小隊、ターク・フルフィールド。アステリオス、エグルガラム各員へ、ハウন্ズ第一小隊隊長箱美芽四季を含む数名が援軍として合流した。彼女達は味方だ……」

タークが通信機を通し四季達のことを伝える。

「これでいいかな箱美芽隊長」

「協力を感謝する」

四季はそれだけ言ってタークの元から立ち去ろうとした。

「箱美芽隊長、一つ言い忘れたことがあります。桜家隊長が戦死しましたよ」

四季は一度立ち止まった。

「そうか・・・」

「たしか桜家隊長は中央ブロックの防衛の任務を受けていましたよ。四季はタークの言葉を背中で受け姿を消した。」

「ターク隊長、箱美芽隊長の仲間と思われる二人を発見したと連絡が」

タークは最後の一口の紅茶を飲み干した。

「たった二人か、十分に注意しろ。あの女と行動を共にするなら実力はかなりのものはずだ」

四季に聞こえていた通信と、全軍へ伝えられた通信は全く別のものであった。

「人間、甘くなるといいことなんて何にもないよ・・・」

アーニユとセルフイアは中央ブロックをジークフリードに向かって進んでいた。

「なんであの二人が一緒にいやがる」

中央ブロックの廃ビルの中から二人の様子を窺う影が二ついた。

「どうやら仲間のようね」

インビルとフォークトは二人が通り過ぎるのを見送った。

「流石のあなたでもあの二人は同時に相手には出来ないわ」

フォークトは第三小隊を壊滅させた後、周囲を焼き尽くしながらゆつくりとジークフリードへ向かっていった。すると上空を一線の光が通り、暫くしてトリギオンが墜落して行くのをビルの上から見た。

フォークトは状況を確認する為にトリギオンと連絡を取ろうとしたが、連絡をとることはかなわなかった。そして中央ブロックに進入

する二人を感知した時、インビルが姿を現した。

「また増えて来やがった」

フォークトは中央ブロックのほぼ全域へ火の粉を撒き、様々な情報を感知出来るようにしていた。

「今、こつちに向かっているのが二組。一つは二人組みで一人は空間転移者、もう一つは空を飛んでやがる」

フォークトは怪しく微笑んだ。

「こりゃいい！！一つは第二小隊の女、もう一人は第二小隊の隊長。さらに今、このブロックにハウنزの女王様まで入って来やがった」  
フォークトは嬉しそうに笑い全身を燃え上がらせる。

「アーニユ達には別の奴らが近づいてやがる。まずはハウنزの奴らからだ、ここで誰が一番か全員に分からせてやるよ！！！！」

フォークトの体は巨大な炎の柱へと姿を変え、ビルを突き破り巨大な炎の鳥が空を舞い上がる。

「炎王」

その鳥は翼を広げると数十メートルにも及んだ。その鳥は激しく燃えており、羽ばたく度に周囲を焼き尽くす。まさにその姿は鳳凰そのものだった……

セルフィアは中央ブロックを進みながら通信機へ呼びかけ続けた。  
いた。

「駄目だ、フェアの奴のは繋がらない」

セルフィアは通信機をしまおうとした時、通信機から少女の声が響いた。

「美実か！！」

「セルフィア隊長！！クライツさん、やっと繋がりましたよ」

「美実、クライツも一緒なのか！！」

「はい、私達は各部隊の治療などしていたら突然、トリギオンが墜落して……」

セルフィアは美実の声が震えているのをすぐに分かった。

「ジェネルさんも隊長とも連絡が取れなくて、私心配で、心配でもう……」

通信機の向こうで美実の泣き声が響く。

「ちよつ俺に代われ、隊長ですか？」

「クライツ、お前も無事なのか？」

「俺は大丈夫です。美実も無事です。ただジェネル達はたぶん……」

セルフィアは唇を噛み締めた。ジェネル達の死は私の責任だった。明らかに侮っていた、これが自身の采配の犯した犠牲だ。

「トリギオンとの連絡はどうだ？」

「無理ですね。さつきから色々試していますが、反応ありません」

「お前達は今どこに??」

「南ブロックの入り口で負傷者の治療とかを……」

その時、セルフィア達のもとへ一発の閃光弾が打ち込まれた……

#### 中央ブロック最端 廃ビル屋上

一瞬で戦いは終わりを告げた。再び立ち上がるリオルの残る腕が宙を舞う。リオルは痛みを感じる間もなく、頭を掴まれ地面へと叩きつけられた。そして、リオルの胸をフェアのチャクラムが貫いた……

フェアはすぐに目の前にあるジークフォードを睨みつけた。

「俺がやらなくちゃ」

「待てよ……」

かすれるような声がフェアを引き止める。フェアは背中に一瞬、寒気のようなものを感じ返る。だがそこにいるのは両手を失い地面へと伏せる死にかけの男だった。フェアはすぐに返る。

「俺はまだ戦えるって、言ってるんだよ!!」

リオルの声が響く。フェアは顔を歪ませリオルの元に向かい、リオルの喉元へチャクラムを突きつける。

「何であんた等はそんなに、そんなに……」

フェアにとって今回の戦いは特別なものになっていた。ノークの言葉が、ツバイとの戦いが、リオルとの戦いが彼の心を大きく揺さぶる。この戦いの勝利は今まで彼の奪ってきた命に意味をもたらさず、そう信じ彼は力を振るう。

「あんたは何の為に戦っているんだよ？」

「俺の為だ、俺が守りたい大切な奴らの為だ」

リオルの迷いのない言葉がフェアを大きく揺さぶる。

「俺だって……」

その時、戦場に無数の砲撃やミサイルが降り注いだ……

光学迷彩を解いた無数の艦隊がエグルガラム上空に姿を現した……

「流石はMTC社の新兵器、さあ始めようか」

くっくくく

第五章 Divergence (aTone) (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。  
次話もよろしくお願いいたします。

第五章 Start to (Farewell) ? (前書き)

こんにちは・・

かなり久しぶりの投稿になってしまい申し訳ありません。

本当は一周年に日に投稿したかったのですが><。。

今後ともよろしくお願い致します。

## 第五章 Start to (Farewell) ?

第五章 Start to (Farewell) ?

南ブロック 第三防衛線周辺

戦況はエグルガラム、ハウンス側が有利であった。たった一人の援軍が両軍の力関係を大きく変えた。ハウンス第一小隊所属クロア・クロス……

「何なの!!!」

アンティック・イマジネーション

幻想の道化師の三人組は倒れた廃ビルを盾にエグルガラムからの攻撃を凌いでいた。第三防衛線を目の前に、三人組はエグルガラム軍の最後の抵抗を受けた。突然の砲撃は三人を爆煙で包み込み、視界を奪う。全方向から降り注ぐ攻撃。今までとは違う、彼らはすぐにその事に気付き、大通りを囲む廃ビルを破壊し身を隠した。彼らの使う能力は強力な分だけ、攻撃そのものを止められるクロアの障壁は、彼らの力を根こそぎ奪い取っていた。小柄でオリブ色の髪に小さな帽子を乗つけた女はイラつきを隠せず、近くに落ちていた石を拾い上げエグルガラム軍へと投げつけた。

フォートン  
「拡大」

エグルガラム軍へと向かう小さな石は、エグルガラム軍への軌道の途中に現れたレンズを通り抜け、直径100メートル近い巨大な石へと拡大された。拡大された石は放物線を描き、エグルガラム軍へと向かった。その時、拡大された石の上に人が現れる。ヴァイオレットは拡大された石の上に現れ、石の上から三人組の姿を確認した。

「お返しするわ、これ」

ヴァイオレットは三人組みに向けて笑った。

「やばいよ!!!」

ルークル

金髪の青年は大声を張り上げ、上空を見上げる。三人組みの上空に拡大された石が転移され、三人組みの下へ落下を始める。



「あたし達を舐めるなよ！！縮小」  
リダクション

石の前に巨大なレンズが現れる。レンズの真横にヴァイオレットが現れる。

「駄目よ」

巨大なレンズはヴァイオレットと共に姿を消す。オレンジ色の短髪にミリタリー系のラフな服装をした男はすぐに落下する石へ両手を向ける。オレンジ色の髪の男の両手から放たれた衝撃石を粉々に砕いた。粉々に砕けた石の後からビズルが姿を現す。ビズルが無数の黒い球を放つ。黒い球は周囲のものに触れ、触れたものと共に消滅していく。三人組みは降り注ぐ黒い球を避ける為に、その場から逃げようとする。逃げようとする三人組みの行く手を見えない壁が阻んだ。

「何よ、この壁は！！」

オリーブ色の髪の女が見えない壁へと蹴りいれる。オレンジ色の髪の男も壁へと衝撃を放つが見えない壁に変化はない。

「追い詰められた」

三人組みのヘコツコツとハイヒールの出す足音が迫る。ルークルはすぐに振り返り、近づいてくる眼鏡にスーツを着た女を見つめた。

「思った以上に呆気なかったわね」

三人組みの視線がクロアへと集まる。

「あなた達は頭悪すぎよ、いくら二度も簡単に勝てたからって、三人仲良く通りの真ん中を進むなんて」

オレンジ色の髪の男がクロアに手を向けた。

「その手を下げなさい」

オレンジ色の髪の男はクロアの言葉を無視し、衝撃を放つ。衝撃はクロアにと届くことなく壁に阻まれた。

「この壁、お姉さんの力だね」

「そうよ、私の張った障壁は簡単には壊れないわよ。ちなみにあなた達を追い詰めたのも私の作戦によるものよ。何でこう強力な能力を持つ人って決まって傲慢で、自信家ばかりなのかしらね」

クロアの言葉にルークルは笑った。

「今、僕等三人の前にたつた一人で現れた、あなたの方が自信家だよ」

「その通りね。でも気付いてないみたいだから教えてあげる。あなた達はここに来るように誘導されていたのよ」

クロアの言葉と同時に、障壁の向こう側に無数のエグルガルス兵やビズル達が姿を現す。三人組みは完全に逃げ道を失い、包囲されていた。

「ねえ、金髪の坊や。あなたの能力はこの事態を打開できるようなものなのかしら？」

ルークルは大きく首を横へ振った。

「残念ながら僕の能力にそんな力はないさ」

「そう、残念ね」

一斉にすべて銃口が三人組みへと向けられる。

「最後に何か言うことはある??」

オリーブ色の髪の女は唇を噛み締め、周囲を見渡す。オレンジ色の髪の男は諦めたようで、両腕をポケットの中へ仕舞い込んだ。

「確かに僕自身にはこの事態を打開する力はない。でも僕の選ぶ選択は必ず最良の道へ僕を導く」

「これが最良の道?」

その時、戦場に無数の砲撃やミサイルが降り注いだ……

クロア達のいる南ブロックへも無数の砲撃やミサイルが降り注いだ。クロアはとっさに周囲へと障壁を張り、砲撃からエグルガルス兵達を守る。

「これはどうということなの……」

クロアが空を見上げると、戦場を無数のアステリオス軍の艦隊が包囲し、無差別に攻撃を始めている。その時、クロアの目の前にルークルの拳が迫る。ルークルの拳をクロアはかわし、その腕を掴み捻

り上げた。

「マナーがなっていないわね」

ルークルは不自然な方向へ捻り上げられた腕の痛みに顔を歪める。

「てつきり肉弾戦はで・・・痛い、痛い・・・」

ルークルの言葉を聞く間もなく、クロアは腕を捻り地面へと跪かせた。オリーブ色の髪の女とオレンジ色の髪の男が動こうとした。

「動かないで、少しでも動けばこの子の腕をへし折って、ねじ切る」

クロアの言葉に二人は素直に従った。

「どういふことが説明してくれるかしら、四季」

クロアの言葉と同時に四季が姿を現す。

「見ての通りさ、軍部のお偉いさん達がエグルガルムも、アルカナスも、ハウنزも全部一斉に始末すって決めただけ」

四季はただ単調にありのままの事実を伝えた。クロアは四季の言葉が真実であり、現状を理解する為の最良の表現であることをすぐに理解した。

「私達は用済み。いや、もともと邪魔な存在か」

四季はクロアの言葉に苦笑した。

「私はハウنزをアステリオスを抜ける」

「動かないでくれるかしら、箱美芽旧隊長」

ヴァイオレットの声が響いた。ハウنزとエグルガルム軍の銃口は四季にも向けられていた。四季はすぐに自分の状況を理解し、これがタークの仕業だということもすぐに分かった。

「どうやら私はお尋ね者のようだ」

クロアは四季の様子を見て笑っていた。

「ついさっきタークの奴から通信があつてさ、最初は驚いたけど。久々にあんたの顔見たら納得したよ。ずいぶん楽しそうね」

「今までで一番楽しいかもね」

クロアはルークルの腕を放した。ヴァイオレットはすぐに発砲の指示を出した。しかし、本来は消されているはずだった見えない壁に弾丸は阻まれた。クロアは三人組みを追い詰め、包囲させる為に張

ついていた障壁を再び張っていた。

「四季、私はあんたに惹かれてハウন্ズに入った。だから、あんたが抜けるなら私がハウন্ズに残る理由はない。そして、こいつ等と戦う理由もない」

ルークルは捻り上げられた腕をさすりながらクロアから離れた。ヴァイオレットは顔歪めながら障壁の向こう側からクロア達を睨み続ける。

「あんたらって幻想の道化師なんですよ？」

クロアはルークル達へと尋ねた。

「もとかな・・・」

クロアは残念そうに深くため息をついた。

「まあいいわ、私の部下になりなさい。そうしたらここから逃がしてあげるから」

四季はクロアの言葉に笑った。

「なんであんたなんかの部下にあた・・・」

オリーブ色の髪の女の口をオレンジ色の髪の男が塞いだ。ルークルは四季と同様に笑い始めていた。

「俺はOK」

ルークルはそれだけ言ってオリーブ色の髪の女とオレンジ色の髪の男の方を見た。オレンジ色の髪の男がオリーブ色の髪の女の口を塞いだまま言った。

「俺は常にお前の選択を信じているからな」

オリーブ色の髪の女がオレンジ色の髪の男の手を振り払った。

「仲間になりたいなら、特別に私の・・・」

再びオリーブ色の髪の女の口をオレンジ色の髪の男が塞いだ。

「どう四季、面白そうでしょ？」

四季は真っ直ぐにクロアを見つめた。

「あなたを誘いに来たけど、どうやら意味がなかったみたいね」

クロアは自分の左耳へ手を伸ばした。

「持っっていくな」

クロアは左耳に付けていた紫色の宝石の付いたピアスを四季へ投げた。

「それは始めてあんた一緒に買い物に行った時に買ったピアス、記念に貰ったときな」

四季はピアスを眺め、大事そうに自身の左耳へピアスを付けた。

「友人からの初めての贈り物だよ」

クロアの表情が微かに歪んだ。四季の顔が優しく笑った。クロアは四季の顔を見ると同時に四季へ背中を向けた。

「早く行きな、ここは私がなんとかするからさ」

「ありがとう」

四季はクロアの背中へお礼を告げ、ジークフリードへ向かう。クロアは三人組みと一緒に障壁の内側からエグルガルド軍やハウন্ズの面々を見渡す。クロアとトウウイスの目が合った。

「三人組み、最初の命令よ。今、私達が逃げたらあたしの大切な友人が危ない、ここでこいつ等を半壊させるわよ」

障壁の一部が消され、クロア達の下へハウন্ズとエグルガルド軍が流れ込んだ……

づく〜

〜つ

第五章 Start to (Farewell) ? (後書き)

最後までありがとうございました。

さて時間があるうちに次話を書きますので！！

次回もよろしければお願い致します。

## 第五章 Divergence (aTwO) (前書き)

投稿ペースがゆっくりですいません。

とあることがあり、この作品ともう一度向き合うことが出来ました。  
自分の書いた最初の作品としてしっかりと形にします。

今回もよろしくお願い致します。

## 第五章 Divergence (aTwO)

第五章 Divergence (aTwO)

中央ブロックを進むセルファイア達はハウズ第五小隊の襲撃を受けた。セルファイアとアーニユを襲撃したのは、Bクラスの能力者を中心とした9名の能力者達だった。

「もう少しその能力調整できない？」

ハウズの最後の一人の胸へセルファイアが弾丸を撃ち込んだ。二人は簡単にハウズを退け、全員の命を奪った。

「能力が使いたいなら、私から離れて戦えばいいだろ」

セルファイアは空になった弾倉へ弾丸を詰め始めた。アーニユは能力を使い傷ついた自身の体をもとに戻していた。

「お前も名も無き者の一人なんだから、死なないんじゃないのか？」  
アーニユの傷が修復され傷一つないもとの姿に戻る。

「死にはするし、私に関しては能力が強力な分だけ、基本的な体の治癒力は人並み程度さ」

「それが人並みか」

その時、周囲が明るくなり、二人は空を見上げた。二人の後方の空に現れる巨大な炎の鳥、翼を広げた時の大きさは数十メートルにも及び、周囲へと火の粉を降らせる。

「フォークトの奴か」

アーニユの目つきがするどく変化し、炎の鳥を見つめる。セルファイアもすぐに炎の鳥がフォークトの能力のものだと気付いた。

「アンティック・イマジネーション幻想の道化師の奴か」

「まだ赤い炎なら何とかなるか・・・」

アーニユが小声で呟いた。

「赤い？ どういうこと・・・」

その時、戦場に無数の砲撃やミサイルが降り注いだ・・・



戦場を包囲するように現れるアステリオスの艦隊、無差別に降り注ぐ攻撃。

「くそ、思ったよりも早い、あの鳥の相手をしている時間はない」セルフィアの顔に焦りが見える。セルフィア達はすでに中央ブロックの第三防衛線を越えており、フェアは目と鼻の先にいた。アーニユは空を舞う、炎の鳥を見つめていた。

「私は先に進む、お前は どうする？」

「そこを動くな！！」

セルフィアが反射的に声のもとへ弾丸を放った。弾丸は目標に当たることなく、廃ビル壁へめり込んだ。

「二人とも動かないで」

セルフィアとアーニユの間にユウが現れ、二人へと銃口を向ける。それと同時にジャスが廃ビルの影から姿を現す。

「あなたはアピースのセルフィア・ジェノン……、もう一人は確アンティック・イマジネーションか幻想の道化師の……」

ユウの転移した位置はちょうどセルフィアの真後ろだった。セルフィアは完璧に油断していた。いや、焦りから普段ならすぐに使っていた能力を使わず、迎撃をしまい相手に隙を与えた。今、自分が死んではフェアを助けることは出来ない。セルフィアは必死に打開策を考える。セルフィア達の真横の廃ビルへと砲撃が当たり崩れ始める。

「こんなことしている場合？」

アーニユがジャスへ尋ねた。アーニユもセルフィア同様にユウに背を向け、こちらへと近づく炎の鳥を見つめていた。

「それはどういう意味？」

アーニユの問いへジャスが問いを返した。

「ハウন্ズはアステリオスから捨てられた、だから上空の艦隊は無

差別に攻撃しているのだろ」

ジャス自身も現状を把握しきれていなかった。突然現れたアステリオス艦隊、そして戦場への無差別攻撃、これは確実に軍部のクーデターだ。軍部との繋がりあったジャスは、エスナとハウンズが存在が、軍部にとつて邪魔者であったことはよく分かっていた。

「そのことが事実でもあなた達を、見過ごす理由にはならない」

「はあ」

アーニユが深くため息をついた。アーニユの視線の先には炎の鳥がいた。アーニユは炎の鳥と目があつたように感じた。

その時、炎の鳥がアステリオス艦隊から集中砲火を浴びた。炎の鳥は爆煙に包み込まれる。

激しい爆音が響き、ユウとジャスの注意が二人から逸れた。その隙を二人は見逃さなかった。アーニユがユウの腕を掴み地面へと投げ飛ばし、セルフィアが閃光弾を投げた。周囲一体が光に包まれる。

「クソ……」

ジャスのぼやけた視界の先に二人の姿はなかった。ジャスはぼやけた視界のまま、爆煙に包まれた炎の鳥へと向けた……

『ほぐ、まだ寝続けるのかい？』

『そろそろ起きたらどうだい？』

『起きたくても、起きれないと……』

『私なら君を助けられるよ』

『でも、ただでは助けられない』

『望みは何かって？』

『僕には色がない、僕の色は無色。だから君の色を僕にくれなかい？』

『さあ、行くがいい』

〜  
〜  
〜

第五章 Divergence (aTw) (後書き)

最後まで読んでくださりありがとうございます。  
次回から彼も復帰致します。

これからもよろしくお願い致します。

## 第五章 Rendezvous (前書き)

大変待たせてしまい本当に申し訳ありません。  
こんな時期ですが、よろしければお楽しみください。

## 第五章 Rendezvous

第五章 Rendezvous

咄嗟の行動だった。ジークフリードに向けて放たれた砲撃が、フェア達のいたビルを直撃した。フェアはリオル抱え、ビルを飛び降りた。本来は隣のビルへ着地するはずだった。しかし、隣のビルはフェアの着地を待たず倒壊を始める。フェア達は倒壊するビルに飲み込まれた。

「本当に終わりなのかよ……」

フェアは体の半分を倒壊したビルの柱の下敷きにされていた。普段なら押し退けることが出来たかもしれない。しかし、全身走る痛みと右手の激痛が拒む、柱の下敷きになった右手は確実に折れていた。

「呆気ないな」 今日によく死にそうになるな

フェアは瓦礫の隙間から見える、ジークフリードを見つめる。無数の砲撃を受けるジークフリード、何発かの砲撃が防御シールドを突き抜け外壁を壊していく。外壁が剥がれ落ち周囲のビルを押し潰す。「もう目の前だぜ……、あと少しだったのに」 我慢すんなよ  
フェアは目の前に落ちているチャクラムへ手を伸ばす。その手はチャクラムへと届かない。

「う……」 あーダルイなあ、俺が手伝ってやろうか？

フェアは必死に前へ手を伸ばす。その度に全身に痛みが走り、意識が飛びそうなる。ちょうどフェアの真上で爆音が響く、砲撃がジークフリードの外壁を破壊した。崩れ落ちる外壁の破片が、フェアが埋もれる瓦礫の山へ向かう。

「終わりかよ……」 待てよ！！まだ諦めるなよ、俺がいるだろ

「五月蠅いよ、俺はお前のことが死ぬほど嫌いなんだよ」

フェアは独り言を呟いた。崩れ落ちる外壁がフェアのもとへぶつか

る直前に光の網が外壁を粉々に切り裂いた。フェアが埋もれる瓦礫の山の上に数個の銀色の玉が浮かぶ。

「ここか」

銀の玉から放たれる光が瓦礫を切り裂き、器用にフェアの押しつぶしていた柱を切断した。フェアは切断された瓦礫をなんとか退かず。フェアの視線の先にリオルを片腕に抱えた小柄な男がいた。

「ステラ・ス、クルネス・・・」

フェアの目の前にはステラスがいた。フェアはすぐにチャクラムを拾い上げ、立ち上がるうとする。しかし、フェアは立ち上がると同時に地面へと膝をつく。

「お前さえ・・・」

フェアは鋭い眼光でステラスを睨みつける。フェアにとってこの戦いの根源が今、目の前に立っていた。彼が倒すべき本当の敵が目の前にいる。

「お前のせいではない！」

フェアは無理やり左手でチャクラムを振り、その反動でステラスへと突進した。フェアはステラスの目の前に張られたバリアに阻まれる。フェアは頭からバリアにぶつかり地面へと崩れ落ちた。

「せつかく救われた命だ、無駄にする必要はなかるう」

フェアは地面に倒れたまま、顔を上げステラスの背中を見つめた。

ステラスはフェアに見向きもせず前を見つめていた。

「あんたが・・・」

フェアはチャクラムを支えにして立ち上がろうとする。

「あんたがこの戦いの原因だろ」

「その通りだよ。この戦争は私が起こしたものだ、憎みたいなら憎んでくれてかまわない」

フェアはチャクラムを支えに何とか立ち上がり、チャクラムをステラスへと向けた。フェアは自分へと全く興味を示さないステラスへイラつきを感じていた。

「そんな言葉で誤魔化すなよ、俺はあんたを殺してこの戦いを止め

る」

チャクラムを向けるフェアに対してステラスは振り返りもしなかった。

「そんなに仲間が心配かよ、俺を見やがれ!!」

ステラスの顔がゆっくりと動き、暗く濁った目がフェアを見つめた。

「すまなかった、もうこの目は見えていないものでね」

「見えてないって」

ステラスは自身の手を顔の前へと上げた。

「これは罰さ、私の能力は空間認知、この能力のおかげで戦いや生活には不自由はない。しかし、もう自身の目で大切な人達を見ることは出来ない」

フェアはステラスへ向けていたチャクラムを下ろし、呟いた。

「また大切な人を守る為にかよ」

「私はただ一人の為に戦争を起こした。今も多くの命が失われ、仲間を失い、私自身も視力を失った。それでも私に後悔はないよ、今も彼女が生きていてくれるのなら」

フェアは空を見上げ笑った。見上げた空は煙で汚れ、砲弾が飛び交い、爆音が響いていた。

「そっか、もういいや。俺はずっと勝利が正義で、勝つことが奪ってきた命への償いだと思ってきた。今まで俺が背負ってきた命が重く、重く、俺を押しつぶそうとする。だから俺は勝ち続け、勝利だけにこだわってきた」

フェアは真っ直ぐにステラスを睨む。フェアの両目は深紅に染まっていた。

「魔を宿す目か・・・」

「これ以上この目を使ったら俺は俺じゃなくなる。だからこれが俺の最後の力だ」

ステラスは抱えていたリオルをそっと下ろした。

「その目で睨まれるのは二度目だよ。君が引けないのなら、私は君を討つ」



ステラスの周囲に浮かぶ無数の銀色の玉が形を変え剣となる。ステラスはその一振りへ手を伸ばした。

「死ぬよ、元凶!!!!」

フェアは真つ直ぐにステラスへ向かう。ステラスは容赦なくフェアへ姿を変えた無数の銀の剣を向かわせる。フェアはぎりぎりで銀の剣をかわし、ステラスへ向かう。剣の何本かはフェアを切り裂く、それでもフェアは止まらない。フェアは力を振り絞りステラスへチャクラムを突く。チャクラムはステラスを貫いた。

「何だよ、哀れみのつもりかよ」

フェアのチャクラムはステラスの左腕を掌から肩まで突き抜けていた。そして、フェアの四足は銀色の剣によつて貫かれていた。

「私にはまだやらなくては、ならないことがある」

ステラスは強引にフェアのチャクラムを使い自身の左腕を切り落とした。

「この腕は君の背負ってきたものへの償いだ。君が背負ってきたものは今、私が背負った。リオルが認めた男だ。君には先に進んでもらう」

ステラスは自身の血で染まった右手でフェアの顔を触れた。

「君の顔を見てみたかったよ」

フェアの目は普段の色に戻り、大きく開いたままステラスを見つめていた。

「待てよ、わけ分かんないよ。勝手に決めるなよ、俺はお前の敵だぞ。お前を殺しに来たんだぞ!!!」

ステラスはフェアの顔から右手を離し、拳を握り締めフェアの腹部へ叩き込んだ。フェアは突然の攻撃と、体の限界から意識が遠のく。

「フェア・クラウル、ノークを守ってくれ・・・」

フェアの意識を失い、ステラスへ倒れ込んだ。ステラスはすぐに戦場全体を読み取る。

「これはもう戦争じゃない、終らせなくては・・・」  
ステラスは見えない目で戦場を見つめた・・・

~^UJ~

## 第五章 Rendezvous（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ようやく辿り着くことが出来ました。この二人の接点や、演出、絡みをずっと迷っていましたが、ようやく形にすることが出来ました。次回からは久々にあの人が登場するかと思えます。

それにしても第五章は長い、最後までよしければお付き合いください。

第五章 Start to Course? (前書き)

今回もよろしくお願い致します。  
久々に投稿ペースが速い><。

## 第五章 Start to (Curse)?

第五章 Start to (Curse)?

トリギオン内部

愛は最後の刀へと手を伸ばした。

「もう最後みたいね」

「五月蠅いんだよ、オバさん」

愛は愛用の長刀を勢いよく引き抜き、鞘を投げた…

トリギオンへ侵入したヴァイパーと愛は二手に別れ、船首を目指した。愛の意思で愛が正面から船首を目指し、ヴァイパーは隠密に船首を目指した。愛が船首を目指し、敵兵を切り裂き通路進んでいると、巨大な鎌が通路の壁を切り裂き愛を襲った。壁は斜めに切り裂かれ、崩れ落ちた。

「なんだいこの小娘は、これじゃ暇潰しにもならな…」

壁の奥から現れたアピースの軍服を着たピンク色の髪の女へ愛は一目散に斬りかかる。愛は自身の重量を最大まで増やし、女へ刀を振り落とす。

「重い一撃ね」

愛の一撃を女は両手で鎌を支え受け止めた。愛はすぐに重量を減らし体勢を変え、刀を振るう。予想外の一撃を女はギリギリでかわした。長くの伸びたピンク色の髪の一束が地面へと落ちた。

「今の動き、能力者か。ならこっちも容赦しないよ」

女は鎌の柄の先から伸びた鎖を自身へ引き寄せた。鎖の先には棺桶が繋がっていた。女は棺桶の蓋を蹴り飛ばして開けた。棺桶の中には様々な刃物が乱雑しまわっていた。

「自分の命の奪われた相手の名前くらい知りたいでしょ、私の名はテルミナ。そしてこれからあなたが相手するのは刃物そのものよ」  
棺桶にしまわれていた刃物達が空へ浮かび上がる。包丁、ナイフ、

刀、槍、斧・・・様々な武器がテルミナを囲む。

「悪いけどこの子達は人を傷つけるのが大好きなの、だから楽に死なせられないわ」

テルミナを囲む刃物達が一斉に愛へ向かう。愛は愛用の長刀を腰の鞘へ収め、背中の2本の刀へ手を伸ばした。

「妖刀 双蝶華そうちょうか」

愛は両手に刀を握り、テルミナのもとへ切り込んだ・・・

「動くなよ、じいさん」

トリギオンの司令室で部下へ指示を出していたマルクトロスは後頭部に冷たい感触を感じた。司令室にいる部下は誰一人、侵入者に気付くことなく自身の仕事をこなし続ける。

「貴様、どうやってここに」

ヴァイパーはマルクトロスへ拳銃を突きつけたまま答えた。

「それは教えられないな。いつもの俺ならすぐにお前の頭を吹き飛ばしていた、でも今回はそうもいかない。降伏して軍を退かせろ、そして二度とエグルガラムに手を出すな」

マルクトロスは笑っていた。

「断る」

ヴァイパーは銃口をマルクトロスの右足に向け発砲した。マルクトロスは右足を撃ち抜かれ倒れ込む。

「皆さん、注目ください」

司令室に銃声と共にヴァイパーの声が響いた。周囲にいた兵士や操縦者などの視線がヴァイパーのもとに集まる。

「全員武器を置け、でないと大将の頭が吹き飛ぶ」

ヴァイパーはマルクトロスの額へと銃口をつけた。周囲の兵士達は言われるがまま武器を地面へと投げ捨てる。

「このじいさんと違って聞き分けが良くていい。オペレーター、今すぐ全軍に撤退の指令をだせ」

オペレーターは躊躇しながらもヴァイパーが引き金にかかる指に力を入れようとすると、通信機のマイクを口元へ近づけた。

「撤退の指令など出さな!!!」

司令室内にマルクトロスの怒鳴り声が響いた。

「若造が撃ちたければ撃つがよい。撃てぬのなら、その銃を引け」  
マルクトロスはヴァイパーを真つ直ぐに睨みつけながら言った。圧倒的な威圧感と、説得力がこの男が大国の軍師であることをヴァイパーへ改めて実感させた。

「撃つてみる、若造。引き金が重いのなら力を貸すぞ」

ヴァイパーは周囲を見渡す。動揺していた部下達は落ち着いた様子で、ヴァイパーを見つめている。

「俺はすぐに引き金を引くべきだったみたいだな」

「そのことに気付けただけ、貴様は賢い」

その時、トリギオンを激しい揺れが襲った。ヴァイパーはマルクトロスへ銃口を向けたまま、トリギオンの司令室に映し出される戦場の様子を見た。

「どうということだよ・・・」

そこには戦場を包囲するアステリオス軍の艦隊の姿があった。

愛とテルミナの周辺には砕けた無数の刃物が転がっていた。愛は今までに四本の妖刀を犠牲にテルミナの操る刃物達の半数以上を破壊していた。しかし、現状は圧倒的に愛が不利であった。テルミナにとって周囲の刃物達は補助でしかなく、彼女の本当の強さは鎌を使った攻撃だった。長いリーチの鎌と棺桶を切り離し先端に剣のついた鎖のコンビネーション。さらにテルミナ自身の戦闘センスの良さ、愛が致命傷を与えられる間合いのギリギリで必ず踏みとどまる判断力。

「あなたは十分強いよ、変則的な攻撃に、周囲も良く見えている。特に攻撃の変則性は私に次の一手を読ませない。それが私の能力を

徹底的に封じている」

テルミナの能力は一度触れたものを遠隔的に操作すること。刃物しか使わないのは彼女自身の美学によるものであり、本来は拳銃なども操作できる。彼女の能力は遠隔操作、操作するのは彼女自身であり当然、変則的な愛の攻撃に対して彼女自身で判断し操作するしかない。常に間合いを詰めようとする愛の先方はテルミナの能力に対しては最良の策であった。

「追い詰めた」

愛は飛んでくる斧をかわし、鎌を弾き、鎖の間をすり抜けテルミナの懐へ入り込んだ。愛は迷わずテルミナへ一閃を放つ。

「捕まえた」

愛は後方に悪寒を感じた。しかし、愛の反応は間に合わなかった。テルミナは鎖を操作し、愛の片足に巻きつかせた。愛はバランスを崩した。

「一発でのびるなよ」

テルミナの拳が愛の頬を直撃した。テルミナは続けて鎌の柄で愛を殴り飛ばす。愛の体は浮かび上がる。愛は体重を減らし、自身の体を浮かせた。テルミナが鎖を引くより早く、愛の刀がテルミナの左肩を貫いた。

「痛いんだよ」

テルミナは鎖を掴み愛を地面へと叩きつけ、さらに思いっきり壁へと叩きつける。愛はとっさに鎖を切り裂き、壁へと足から着地した。そこへ棺桶が飛んでくる。愛は棺桶に潰され壁を突き破った。

「まだ死んでいないんですよ、早く出できなよ」

愛は突き破った壁に寄りかかり、身を隠していた。愛の体はテルミナが思っている以上に重症だった。砕けた棺桶の破片が腹部を貫通していた。愛は破片を引き抜いた。傷口は小さいが、出血が激しい。着物を切り裂き止血するが、出血は収まることはない。

「はぁ・・・はぁ・・・」

テルミナの足音が愛に迫る。愛は自身の軍服の膨らみを見て、桜家



に渡されたもののことを思い出す。愛は軍服から小さな円柱状の容器を取り出した。

「何が危なくなったら使えだ」

テルミナが崩れた壁に迫った時、愛が姿を現した。

「さあ後半戦を始めようか」

テルミナの言葉にゆっくりと愛が閉じていた目を開く。

「何でお前がその目を!!」

愛の右目には赤い光が灯っていた………

〜っく〜

## 第五章 Start to(Curse)?(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。  
愛の久々の登場でした。遂に愛にも新しい力が、今後この力がどう影響するかは……。どんどん書くぞ!!

連休中に作者のプロフィールなどを一身します。たぶん・・・  
私自身もそろそろはつきりせねば!!!!  
興味のある方は見てみてください。

次回もよろしくお願い致します。

第五章 Mad Impulse and Firsted (前書き)

今回もよろしくお願い致します。

## 第五章 Mad Impulse and First End

第五章 Mad Impulse and First End

愛の右目に魔眼が宿ると同時に、愛の拍動が激しくなった。全身を何かが駆け抜ける、全身の細胞が震え、血液が熱い。酷く喉が渇く、全身が痙攣を始め、腹部の傷口が激しく出血を始めた。全身が激しい痛みを感じ、意識を失いかけた時、心臓が大きく拍動した。愛は静かに立ち上がり刀を握り締めた。

「さあ後半戦を始めようか」

崩れた壁の向こうから声が聞こえた、愛はゆっくりと目を開く。

「何でお前がその目を！！」

愛の右目には赤い光が灯っていた。今までにないほどに軽い体、腹部の傷口は閉じ、意識もはつきりとしている。愛はテルミナから視線を外し、斜め上を見上げた。左右での視界がずれる、右目で見る世界はまるでスローモーションのようだった。

「いい気分だ」

愛は左目を閉じ、赤い光を灯す右目でテルミナを捕らえた。テルミナは愛の右目に睨まれた時、全身に悪寒を感じた。それは今まで戦っていた者とは、全く別の殺気がテルミナを襲う。テルミナはすぐに周囲の刃物を愛へ飛ばした。愛は体の力を抜き、最小限の動きでテルミナの攻撃をかわした。

「終わりか？」

愛の言葉にテルミナはすかさず能力を使おうとした。その時、愛は刀を投げた。愛の投げた刀は刃物達をすり抜け、テルミナの右胸に刺さった。テルミナが痛みを感じた瞬間、すでに投げつけられた刀の柄を愛は握っていた。愛はテルミナに刺さった刀を振り上げる。テルミナの血液が傷口から吹き出る。テルミナは何とか鎌を握り締め、振るおうとする。しかし、すでにテルミナの左腕は体と繋がっていないかった。

「化け物が・・・」

テルミナの鮮血が降り注ぐ中、愛はテルミナの両足を切り落とし、腹部を突き刺し、高く持ち上げた。かろうじて意識を保つテルミナが真っ赤に染まった愛を見下ろしていた。

「あんたはもう戻れない」

愛は怪しく笑い、テルミナから刀を抜き首を切り落とした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

愛は肩の力を抜き、血だまりの中央に立ち尽くしていた。その時、愛のいた部屋へアルカナスの兵士達が入ってきた。

「侵入者をはつけ・・・」

愛はすぐさまに敵兵に向かい、真っ二つに切り裂いた。

「なんだこいつは・・・」

ノークは突然現れたアステリス艦隊による攻撃で動揺していた。隣にいるエスナも何も言わずただ戦場を見つめていた。

「ジークフリードへの損傷拡大、地上の各部隊との通信も・・・」

ジークフリードの司令室は混乱状態だった。誰もが勝利を確信した時、増援からの強襲を受けたのだ。

「アステリオス艦隊は対光学兵器用のシールドを展開、ジークフリードの主力兵器の殆ど通用しません」

ノークは対応に追われ、ついにエスナへと目を向けた。

「ごめんなさい、私にも全く分からないの・・・」

ノークはエスナの啞然とした姿を見て、彼女が本当に何も知らないことをすぐに理解した。その時、司令室へ緊急の通信が入った。

「こちらはステラス・クルネス、負傷した兵士の回収をお願いしたい」

通信機から流れる言葉に全員が驚き、静まり返った。通信機から流れる声は間違えなくステラス本人のものであるのは、その場にいた全員が気付いていた。ノークはすぐに通信機を手を取った。

「ステラスなの!!」

「ノークか、無事でいて良かった。通信の通り負傷兵の回収を頼む」  
ノークは突然のことに涙がこぼれ落ちそうになった。それでもノークは堪え答えた。

「分かったわ。すぐに兵を向かわせる。あなたは大丈夫なの？」

「大丈夫だ。場所はジークフリードのすぐ下だ、目印として を飛ばしておく。一人はリオルで、もう一人はアルカナス兵だ」

ステラスの言葉に司令室全体が耳を疑った。

「どうということなの？ステラス」

「私達は今を生き抜くだけでは駄目だ、この先の未来へ繋げなくては」

ノークはただ頷き答えを返した。

「わかったわ」

「ノーク、私はこんな真つ直ぐな子供が欲しかった」

ノークは体が弱く、子供を産むことが出来ないことは多くの者が知っていた。またステラス自身の体も多くの傷と改造で十分な生殖能力を維持できていなかった。

「そうね、実は私もさつき同じことを思ったの」

「そうか、それは良かった。行って来るよ」

ノークの通信機を持つ腕は震えていた。

「行ってらっしゃい、待っているから」

二人の通信を聞いていたベガとミラは堪えきれなくなった涙を流し、鼻水をすすっていた。

「ありがとう」

ステラスは通信機の電源を切った。

「行くのか？」

「もちろんだ、私には守るべき者がいるからな。君達は誰だ？」

「アルカナス軍アピース隊長、セルフィア・ジュノン」

「アンティック・イマジネーション 幻想の道化師、アーニユ・ワーリユヌス」

セルフィア達はステラスとフェアの姿を見つけ、様子を窺っていた。二人が到着した時、ちょうどステラスがフェアのチャクラムを自身の腕を犠牲に止めた所だった。すぐに助けに行こうとするセルフィアをアーニユは落ち着いて止めた。アーニユはステラスという男がどんな男か知っていた。そして、ステラスから放たれる殺気は悪意を帯びていなかった。

「すごい組み合わせだ。流石にこの二人を相手にする余裕は、今の私にはないな」

「あたし達に敵意がないのは分かっているのだろ」  
ステラスは微かに笑った。

「この子を迎えに来たのか？」  
セルフィアは自身の拳銃に込められた弾丸を一発抜き、ステラスへ投げた。

「そいつに渡してくれ」  
ステラスは弾丸を受け取った。その時、ステラスは暗闇に包まれた。  
「この弾丸は能力を消すのか」

ステラスは手探りで弾丸をフェアの軍服のポケットの中へ入れた。  
「察しが早いな、私は今からこの戦いを止め行く。あんたは軍を引かせてくれ」

セルフィアの言葉にステラスは首を横へ振った。  
「それは私の仕事だ」

「あんたはこんな所で死ぬべき人間じゃない、この戦いはあんたを守る為に起きた戦いだ。犠牲になった命を無駄にするのか」

「私は死ぬ為に戦場に行くのではない」  
セルフィアはステラスのもとへ近づき胸倉を掴んだ。

「絶対死ぬな、あんたはそいつの命を救った責任がある。しっかりその責任を果たせ」

ステラスは見えない目でセルフィアを見続けた。  
「何故、見えなくなっただけから見たい者が増えるのだらう」

ステラスの言葉に僅かにセルフィアの手の力が緩んだ、ステラスはセルフィアの腕を掴んだ。するとセルフィアの体に電流が流れ、セルフィアは意識を失った。

「アーニユだったかな、この二人を頼む。君達はすぐに戦場を離れてくれ、小型の飛行艇を用意させる。それともしよければ、ノークも一緒に連れて行つてくれないか？」

アーニユは何も言わずにセルフィアに近づき抱き上げた。

「どいつもこいつも私に頼む、それも最悪のタイミングでだ。断れる訳ないだろ」

「すまない」

アーニユはステラスの左腕に触れ、傷口の時間を止めた。

「ステラス・クルネス、名前覚えておくよ」

「光荣だよ、時の女神」

ステラスは銀色の玉に囲まれ、空へと浮かび上がった……

〜つづく〜



第五章 Mad Impulse and First End (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

終わりに向けて少しずつ進み始めました。第五章、長い物語ですがお気に召さばお付き合いください。

連休中にもう少し話を進めておきたいと思っております。

次回もよろしくお願い致します。

第五章 Start to (前書き)

今回もよろしくお願いします。

## 第五章 Start to

第五章 Start to

リゼリは侵食による痛みを、黒い翼を休ませていた。

「強力な能力の対価か」

リゼリは声のする方へ見た。聞き覚えのある声、決して聞きたいとは思わない声の主。

「箱美芽隊長」

リゼリは侵食に痛む体に鞭を打ち、立ち上がった。四季は両腕を胸の前で組み、廃ビルの壁に寄りかかっていた。

「いや、元隊長」

リゼリは両腕に拳銃を召喚し、四季に向けて撃った。四季は軽く弾丸をかわし、近くの建物の中へ逃げ込んだ。

「悪いがお前の相手をする気はないよ。私は忠告に來ただけさ、今すぐお姫様の所に戻りな。ギレーヌの奴が何かたくらんでいる、エンブレークが前線に出ている」

リゼリの顔つきが変わる。エンブレーク、アステリオス軍の英雄。英雄と死神、アステリオス軍に身を置く者で彼の實力を知らない者はいない。

「それが真実であっても、裏切り者を見す見逃す気はない」

リゼリはグレネードランチャーを召喚し、声のもとへ放った。四季がいたと思われる廃ビルの一階が爆煙に包まれる。

「戦うつもりはないと私は言った」

爆煙の中から無傷の四季が姿を現す。リゼリはその姿を見ると同時に黒い翼を開かせた。

「箱美芽四季、俺はあんたが嫌いだ。あんたがアステリオス、エスナを裏切るならここで殺す」

四季は廃ビルのガラスに映る自身の顔が笑っていることに気付いた。「もう自身の道楽の為には戦わないつもりだったのにな・・・」

「あんたは他人の為に力をふるえる人間じゃない、だから俺に声をかけたんだろ」

四季は真っ直ぐにリゼリを睨むつけ、前髪を後へとかき上げた。

「『楽しみのために行なわれること、時間と場所が区切られていること、勝敗が不確定であること、何かを生産するものではないこと、ルールに支配されること、現実の活動から意識的に切り離されていることをゲームの参加者が知っていることである』これがゲームの定義だよ。私は自身の楽しみのために戦った、だから自身の能力をTHE GAMEと名付けた。だからこれがLast Gameだ」

四季の周囲に無数の重火器が現れる。

「Target practice、よりによってこのゲームとはね」

四季は現れた火器を握り締めリゼリへ向かう、リゼリは黒い影を左手に集め鎧のように変化させた。

「箱美芽！！！！！」

「ダリいなあ」

炎の鳥が羽ばたき、爆煙を吹き飛ばした。炎の鳥の上に乗るフォークトはアステリオス艦隊を睨みつけた。

「雑魚共は俺が全員ぶち殺すのを静かに見てりゃいいんだよ！！」  
巨大な炎の鳥は無数の小さな炎の鳥に別れ、四方八方へ飛んでいく。小さな炎の鳥は砲撃やミサイルを喰らい、アステリス艦隊へ向かう。炎の鳥はアステリオスの軍艦へぶつかり、炎で包み込む。

「オーバー・リミット  
限界突破」

廃ビルの屋上からフォークトを睨む、ジャスの後に巨大な腕が現れる。

「桜家、あんたの仇は私がとってやるよ」

ジャスはフォークトに向けて手を開き、閉じた。

「ハッハハハ！黙って見てりゃ痛い目にあわ・・・」  
「ファークとは自身の周囲の空間の歪みに気付いた。」

「なんだこりゃ！！」

周囲の空間が押しつぶされ迫って来る。ファークはすぐに炎に変化し、空間から逃れようとする。しかし、炎が進むより早く空間が潰されていく。

「どこの、どいつだ！！」

ファークは上空から戦場を見下ろす。廃ビルの屋上で巨大な手が動いているのが見える。

「ハウズの女があ！！」

ファークは激しく炎を燃やし空間の圧縮に逆らう。

「例え炎だろが関係ない、私の手に掴めないものはない」

ジャスは更に力を入れる。ファークを空間ごと潰していく。

「このアマが！！！！」

ファークはジャスに向けて炎を放った。炎は槍のように形を変えジャスへ向かう。

「終わりだよ」

炎の槍はジャスの目の前で止まった。ファークのいた空間は押し潰され、炎の槍は消えていく。ジャスの手の甲の印はゆっくりと輝きを失う、ジャスの後に現れた巨大な手が消えて行く。

「ユウ、一度ジークフリードに戻ろう。私はしばらく能力は使えない」

「ユウってこの火達磨のことかな？」

ジャスはすぐに振り返った。そこには炎に胸を貫かれたユウの姿とファークの姿あった。ジャスが振り向くと同時にユウを炎が包み込んだ。

「これでハウন্ズは何人目だ、まったく弱い奴ばっかりだぜ」  
フォークトは火達磨になったユウを屋上から投げ捨てた。

「お前!!!!」

ジャスはとっさに拳銃を抜き、フォークトを撃つ。ジャスは弾倉ある弾をすべて撃ちつくした。ジャスの放った弾丸を

「そんなので俺が死ぬんだったら、もう死んでるよ」

フォークトは馬鹿にするようにジャスに向かって言った。

「能力、もう使えないんだろ」

ジャスは軍服の中からナイフを取り出し、フォークトへ向けた。

「諦めないのかよ、泣いて命乞いの一つでもしたら楽に殺してやる  
うと思つたのにさあ!!!」

炎がジャスへ向かう、ジャスは横へ転がり炎をかわす。炎はジャスの動きに合わせて、方向を変えた。炎がジャスへ迫る。

その時、ジャスの目の前に氷の壁が現れる。

「お久しぶりです」

ジャスの前にフロルが現れる。ジャスはすぐにフロルだと気付いた。

「フロル!!!!」

「ジャスさんは逃げてください、こいつは僕が引き受けます」

「小僧、死にてえらしいな」

フォークトは全身から激しく炎を吹き出し、周囲の温度を上げ氷の壁を溶かす。フロルは一步も引くことなく、周囲を凍らせ温度を下げる。

「俺は今までに49人の氷結系の能力者を灰にしてきた、てめえが  
50人目だあ!!!!」

〜最終章へ〜

## 第五章 Start to (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

五章があまりにも長いので次回からを最終章として投稿します。区切りとしてなので特に意味はありません。このペースだとuntitledはちょうど100部で終わりになるかと思っています。

次回の投稿は今週末になってしまうかと。。

残り11話、続編のことは以前から言っておりますが、それなりのはじめは付けたいと思っておりますね、彼の物語にもう少しだけお付き合いください。

**最終章 PRELUDE (前書き)**

今回もよろしく申し上げます。  
序章になります。



## 最終章 PRELUDE

〈最終章 PRELUDE〉

戦場に満ちる多くの死、その死一つ一つに意味はあるのだろうか？目の前で散り行く命を前に少女は必死に傷口を押さえた。鳴り止むことのない銃声と爆音、少女はただ祈った。「死にたくない」「死なないで」その祈りをかき消すように、戦場に死が溢れて逝く……

青年は己の正義を信じ、剣を振るった。その先で交わった剣は青年の正義に問いた。

騎士は朦朧とした意識の中、自分が信じた正義を問われた。己が今までに振るった剣の意味を……

青年は夢を見ていた。それは小さい頃の夢、真っ白な女性が僕に言った言葉。「命」「力」そして「」、青年は女性の言った最後の言葉を聞き取れなかった。それは大切な言葉、彼が背負いきれなかった言葉。青年は必死に女性を追う……

彼女は多くの命を救った。そして今、多くの命を奪っている。物心ついた時から知っていた、自身の貧弱な体では誰も助けられない。だから彼女はペンを握った。彼女のペンは剣よりも、銃よりも、能力よりも強かった。彼女は戦えない分、多くの命を救おうとした。今、彼女の見る景色には死が溢れていた。私のしてきたことは正しいの？

空に浮かぶ浮遊要塞を一人の兵士が見つめていた。兵士の腹部は赤く染まり、周囲に倒れる仲間息があるものはいなかった。兵士は要塞を見つめ呟いた。

「あんだ等の下で戦えて良かった……」  
届くことのない多くの言葉、もしこの一つでも届いていれば……

男は欲深く生きて来た。他人を裏切り、蹴り落とし、あらゆる手段を使い今の地位を手にした。目の前に迫る勝利へ向かおう。

二つの名を持つ者は戦場をただ眺めていた。空に舞う炎、高く伸びる氷柱。戦場を包み込む、無数の殺意。私が敵を討てば味方からは英雄と呼ばれる。私が敵を討てば敵からは死神と呼ばれる。う。呼び方などどうでもいい、私はその先が見たい。未来とは結果だ。奪われた命が築く結果、だから私は多くの命を殺生、大きな命を殺生。

友と別れ新たな道を目指す者いる。他者の死に左右されず自身の未来を選ぶ。

幸運を持つ青年は一つを選択をした。その選択が彼らに何をもたらすかは分からない、だが青年の胸は高鳴っていた。彼には選んだ道が輝いて見えていた。

友を追い、男は散った。若き命を繋ぐ為、己の身を焼いた。

己の愚かな行為が自身の心を焼き、仇の戒めの炎がその身を焼いた。少年は己の顔を失い、己を失った。少年の心に刻まれた火傷は少年を蝕む……

魔に捕り憑かれた刀は血を啜り、狂気を振りまき狂わせる。

力に潜んだ魔は囁いた。「力が欲しいのか？」純粋な刀は力を望んだ。それが魔との契約とも知らずに、対価なくして得られるモノはない。それが大きければ大きいほど、対価は大きくなる。彼女の差し出した対価はあまりにも大きかった……

その炎は未来をも焼く、己の欲望の為世界を焼く。誰の為でもない、俺の為だ。

少年の青き瞳は未来を見つめ、明日へ繋ぐ為に力を振るう。未来を焼く炎、明日へ繋ぐ氷。二つの力は互いの身を削り、先へと向かう。

・・・

この戦いには大義も名分も何もない。これはただの喧嘩だ。俺はあんたが嫌いだ。私はお前が嫌いだ。初めて見た時からお前を殺したかった。気に入らない、何もかも、お前のすべてが気に食わない。

責任、罪、私は罪を犯した。人が行おうすべてコトには責任が伴う。その責任はやがて罪へと代わり、償うべきモノへと変わる。今の私に後悔はない。私は守りたい者の為に大罪をお貸し、今その責任を求められている。覚悟は出来ている、私が差し出せるモノはすべて差し出そう。だが誰に差し出すかは私に選ばせてもらう。

それぞれの戦いはそれぞれの結果生む。例えその結果が最悪の未来であっても神は傍観を続ける。世界に溢れる多くの問いの答え。

それは・・・

〜つづく〜

**最終章 PRELUDE (後書き)**

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次話から本編になります。なんとしても10話で完結させます!!!!

最後までお付き合いよろしくお願い致します。

## 最終章 ? A v e r s i o n (前書き)

四月になりましたね。

四月中に完結を目指して頑張っております。

最終章のテーマは『未来』『犠牲』『絶望』

この物語の終着点は今まで読んでくれている方なら予想がつくかと思えます。

今回もよろしくお願い致します。

## 最終章 ? A v e r s i o n

↳最終章 ? A v e r s i o n

四季の周囲には無数の銃火器が浮かんでいた。彼女を中心に円を描き銃火器が回転していた。リゼリの繰り出す規格外の攻撃に対して、四季は適切な火器を選び放つ。四季の周囲を浮ぶ火器達はどこにでもある一般的な物から、特殊なものまで幅広く用意されていた。能力によって用意された彼女の武器は、本来は能力を殺すリゼリの黒い影を傷つけた。

リゼリは現状に焦りを感じていた。リゼリ能力である黒い影は本来、敵の能力を喰らい封じる。しかし、四季の放つ弾丸は影に消されることなく、リゼリへ向かって来る。『どういことだ？』リゼリの能力は彼自身の体に、命を蝕むものである。命を削って放つ攻撃をあの女は簡単に撃ち抜く。箱美芽 四季、俺は今までに何度もこの女との戦いをイメージしていた。リゼリのイメージはまさに圧勝であった。本来は相手を自身のゲームへ取り込むのが四季の能力である。だからこそ、リゼリは自身の能力は四季にとって天敵であると思っていた。

リゼリは両腕に纏った黒い影を鎧のように変化させ、勢いよく四季へ振った。黒い影は長く伸び、地面を抉り四季へ向かう。四季は周囲を回る火器の中から、グレネードガンを選び、迫る影へ撃つ。二つがぶつかり大きな爆発を起こす。爆発の中から四季が両腕に拳銃を構え、リゼリへ向かって来る。四季は走りながら弾丸を放つ。リゼリは黒い翼を自身の前へ出し、弾丸を防ぐ。四季はかまうことなく弾丸を撃ち続ける。黒い翼は少しずつ削られていく。

四季はリゼリが翼を使って防いだ瞬間、一機に距離を詰めた。翼の目の前まで一機に近づき、拳銃を捨て両手にショットガンを握った。銃口を翼につけ、ゼロ距離で放つ。弾丸は翼を砕く。砕かれた翼の奥からリゼリの姿が現れる。

そこには真つ黒な槍を握ったりリゼリがいた。リゼリは翼が砕けると同時に四季へ槍を突いた。リゼリの突いた槍は四季の左肩を貫いていた。心臓を狙って突いた槍を四季はギリギリでかわした。槍はそれ、致命傷を避けた。肩を貫かれた四季の顔に焦りはない、リゼリは腹部に痛みを感じた。全身に纏った黒い鎧が砕けていた。そこから赤い液体が流れ出していた。リゼリは四季を睨むつけ、残されたもう一方の翼を無数の槍へ変化させ四季へ向かわせる。四季は右手に握ったリボルバーで自身を貫く槍に向けて撃つ。弾丸は槍を砕き、四季は槍を突き刺したまま、後へと大きく下がった。

「ぐはっ……」

リゼリは吐血した。命を脅かす痛みが、侵食された体と心を苦しめる。『おかしい……現実がより一層リゼリを苦しめる。リゼリは黒い影を使って今まで一度も、苦戦したことがなかった。いや、苦戦はあったかもしれない。命の危険、敗北という危機に立たされたことがなかったのだ。侵食する黒い影は根のようにリゼリの体へ広がり、ほぼ全身へ広がっていた。リゼリは痛みあまりふらついた。』  
「思っていた以上に力の差があったな」

四季の言葉がリゼリへ追い討ちをかける。実際の所、四季は何故自身の放つ弾丸がリゼリの能力に通用するのか分かっていなかった。それはセルフフィアとの出会いによるものだった。四季はセルフフィアの拳銃を使っていた。そのことが彼女に対能力用の力を与えた。

リゼリは限界を感じていた。これ以上この力を使えば、確実に死ぬ。そして、四季には勝てない。リゼリは黒い影を自身の体の中へ戻していく。黒い根が引くのと同時に全身へ激痛が走る。痛みで思わず声が出る。その姿を四季は槍を抜きながら平然と見つめていた。全身から根がひくと同時に、リゼリの視野が狭くなるのを感じた。

「それが人工的に造られた力の対価か」

リゼリは自身の左目から流れるモノに気付いた。真つ黒な涙。そして、視力を失った左目。

「知っていたのか……」

リゼリは四季の言葉に答えた。四季の目はすでに哀れみのものへ変化していた。

「ああ、人工的な能力の開発と二重能力者の製造」  
デュアル・クラスター

リゼリは四季の言った製造と言う言葉の意味をよく知っていた。そうまさに製造、欠陥品は処分され、使えるものだけが生残る。

四季は右手のリボルバーの銃口をリゼリへ向けた。リゼリも反撃しようとし、武器を召喚しようとした。その時、体の奥から衝撃が走る。リゼリの体は大きく揺れ、地面へと崩れ、膝をつく。リゼリは大きく咽、真っ黒な血液を吐血した。四季は哀れむように引き金へと力を入れた……

トリギオンの司令室いた全員が目を丸くしていた。ヴァイパーは銃口をマルクトロスに向けたまま映し出される戦場の映像を見ていた。その時だ、司令室の扉が開く。開いた扉の奥から半身を失った全身を布で覆った死体が投げ込まれた。死体はちょうどマルクトロスの真横に落ちた。扉の奥から全身を返り血で染めた愛が表れる。ヴァイパーは思わず、扉から向けられる殺気に反応してしまった。その隙を狙い、マルクトロスは隠し持っていた拳銃をヴァイパーへ向ける。ヴァイパーはすぐに気づき、引き金を引こうとした。

「……………」

司令室に重いボールが転がるように音が響いた。体から切り離されたマルクトロスの頭が司令室の床を転がる。

ヴァイパーは真横に立ち、マルクトロスの首から噴出す鮮血を気持ち良さそうに浴びる愛に恐怖を感じた。赤く光る愛の右目がヴァイパーへ向く。返り血で化粧された愛の顔が真っ直ぐにヴァイパーを見た。その時、司令室にいた兵士達が一齐に銃口を二人へ向けた。ヴァイパーが動く前に、一人の兵士は真っ二つされていた。次々に上がる血飛沫、ほんの数秒で司令室は二人きりになった。最後の一人を殺した愛はヴァイパーを見た。愛は笑いながら泣きながら言



った。

「私を・・・殺して・・・お願い・・・殺して・・・」

ヴァイパーはすぐに理解した。愛の真意に、今振るっている刀は彼女の意思に反している。その刀は敵を傷つけるだけでなく、彼女自身も傷つけているのだらう。赤く光る右目は活き活きと輝き、左目は悲しく泣いている。ヴァイパーはゆっくりと自身の持っていた拳銃を愛へ向けた。一段下がった場所に立つ愛へヴァイパーは見下ろすように銃口を向ける。ヴァイパーはすぐに引き金を引くべきだった。愛の体は反射的に動き、自身へ銃口を向けたヴァイパーを敵と見なした。愛は一瞬で距離を詰め、刀を振るった。その刀はヴァイパーの持っていた銃を切り裂き、ヴァイパーの首元を微かに切り裂いた。ヴァイパーはすぐに手に残った銃を愛へ投げ。司令室の出口へ逃げ、扉を閉じた。ヴァイパーは直感的に感じた。『殺される』最初の一撃が彼の命を奪わなかったのは愛の意思によるものだった。彼女の最後の抵抗がヴァイパーの命を救った。そのことにヴァイパーは気付いていた。ヴァイパーはトリギオン内部を走っていた。自身に迫る殺気を背後の感じながら。

私の父は強い人だった。真っ直ぐに世界を見つめ、己の刀で世界を変え、戦いに散った。残された母は私に言った。

「あなたは好きな道を選びなさい。刀の道でも、普通の道でもあなたの望む道を進んで」

私は刀を振るう道を選んだ。小さい頃から私は一族の中でも神童として扱われていた。本来は宿るはずのない能力を産まれもって持ち、常人を超える身体能力。そして、何よりも強さを求める貪欲さ、私は負けることが嫌だった。どんなことよりも嫌だった。世界には自分より強い人間がいることは良く知っていた。それでも負けることは嫌だった。ハウンスに入り第三小隊のエースとして戦場駆け抜け、多くの者を切り伏せた。

そして、私は大きな力と対峙した。明らかかな敗北、二度に渡った敗

北。それは私を焦らせた。恐怖させた。私は友を失った。自身の力のなさが、友の命を奪ったのだ。あの時、私が彼女を止めることが出来ていれば……

「そして、私は力を欲し、飲み込まれた」

血に染まった自身の姿が愛刀に映る度、私の心は切り裂かれた……

〜つづく〜

## 最終章 ? Aversion (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

最終章ということで文字が多めですね。

この物語は完結すると同時に、『』になります。残すところあと9話です。

最後まで彼らの物語にお付き合いしてくださると嬉しい限りです。

**最終章 ? EPILOGUE (前書き)**

今回もよろしくお願いします。

## 最終章 ? E n p l o s i o n

「最終章 ? E n p l o s i o n」

『ニユトラ』これが僕等の名前。森の奥深くに住む、たった数百の小さな種族。自然と共に暮らす者達。僕達は必ず能力を持つて産まれる。ただし、その能力は自然界にあるものに限られる。僕の父は火、母は水、祖母は風を操ることが出来た。僕の家系は代々村を治めてきた。それは僕等に流れる血が特別なものだったからだ。能力のクラスでいうならば、僕等の家系は必ずAクラス以上の能力を得る。僕の父は偉大な人だった。村の人達に信頼され、僕等には厳しくも優しくもあつた。父はきつと今までに罪を犯したことなどなかったのだらう・・・

僕等の村には一つの決まりがあつた。

『青と赤の目を持つ双子は村に、災いをもたらす』

僕等の村には数百年に一度、双子が産まれる。そして、その双子の目が赤と青なら必ず殺されてきた。そして、僕等は双子だ。僕の目は青く、妹の目は赤かつた。

「灼熱地獄」  
ホルケイノ

フォークトの体が激しく燃え上がりフォークト自身が炎と化す。フォークトの体から噴出した炎は廃ビルの屋上全体へと広がる。フロルはとつさに氷で造られた狼に跨り、隣のビルへと飛び移つた。屋上全体を飲み込んだ炎は波のように十メートル近く吹き上がり、フロルのいるビルへと向かつた。

フロルの手には氷で造られた槍が握られていた。凝つた造型をした美しい槍を押し寄せる炎の波へと投げる。槍は炎の波にぶつかると同時に炎の波を一瞬で氷つかせた。氷ついた炎の波は巨大な氷の壁となり、砕け始めた。フロルは砕け散る氷の壁を睨みつけていた。

「爆炎」  
フレア

砕けた氷が一機に燃え上がる。半分ほど残っていた氷の壁が炎に包まれフォークトが現れる。フォークトは近くあった炎を掴み、鞭のように撓らせフロルへと振りつけた。迫る炎の鞭を氷狼に乗ったフロルは難なくかわす。かわした炎の鞭を渡りフォークトがフロルの真横に現れる。フォークトは炎に包まれた拳をフロルへ向ける。フロルを氷の盾をつくりフォークト氷を防ごうとする。

「舐めるなよ、小僧」

フォークトの拳を包む炎が鋭く槍のように変形する。炎の槍は簡単に盾を溶かし貫く、フロルはとっさに身を引いてかわすが、炎の槍を伝いフォークトがフロルの懐に現れる。

「灰になれや!!!」

フォークトの体から炎が噴出す。灼熱の炎がフロルを包む、フロルはとっさにナイフを出し、フォークトの胸へと突き刺した。その瞬間、周囲へ広がっていた炎の勢いが弱まる。実体化したフォークトの口から血が流れ出る。

「痛え」

フォークトは自身の胸にナイフが突き刺さっていることに気付く。

「何で俺を切れる」

フロルは答えることなく、フォークトの胸の中央へと突き刺したナイフを振り上げた。フォークトの胸が中央から左肩へかけて切り裂かれる。傷口からは鮮血が吹き出る。フロルはフォークトから離れ、ナイフについた血を振り払った。

「この刃はいかなるものを切り裂く、例えそれが炎であつても」

フォークトは傷口を押さえ込み、ふら付きながらフロルを睨む。

「これがてめえの切り札か・・・」

フォークトの周りに無数の氷狼が現れる。フロルがフォークトに背を向けると同時に、氷狼は一斉にフォークトに飛び掛った。

「燃えろ」

フロルはすぐに振り返った。そして、本能的な恐怖を感じ自身が見た光景から目を逸らすことが出来なかった。

それは見たこともない光景だった。真っ青な炎が氷狼を焼いていたのだ。フォークトの胸の傷はゆっくりと塞がっていく。フロルはナイフの柄を握り締めた。そして、自身が震えていることに気付いた。本能が告げている『この男は違う』、フロルが感じる感覚はエングレープの時のものとは明らかに異なっていた。フロルにとってフォークトは戦い易い相手だった。それは能力の相性ではなく、フォークトという人間との相性だった。フロルの最大の武器は観察力、相手の僅かな感情の変化を読み取り、最良の策で相手を追い詰めていく。フロルはすぐにフォークトの性格を読み取り、確実にフォークトを仕留める手を打った。確実にフロルのナイフはフォークトの心臓を貫いたはずだった。あの男は今も平然と立っている。青い炎がすべての氷狼を焼き尽くした。

「小僧、今からお前の希望はすべて燃え尽きる。圧倒的な力の差、本当の能力を味遭わせてやる」

フォークトの言葉は決して這ったりではない。そのことをフロル自身は今感じている。この男は危険だ。明らかに何かが違う。

フォークトは両手を胸位の高さまで上げた。その両手にはそれぞれ赤と青の炎が灯る。

「レイヴァーティン  
宝炎具」

フォークトの左手の赤い炎が一本の剣へと姿を変える。その剣は細く鋭い刀身に、真っ赤な文字が刻まれていた。

「この武器は俺が持つ唯一の武器だ。本来、俺達みたいな能力者の終点は能力その物に意思を持たせ、共に戦うことだ。だが、俺の能力は違った形へ辿り着いた。それは炎そのモノの具現化、世界で俺だけが使える力」

フォークトは軽く剣を振った。フロルはとっさに氷の壁を造った。しかし、氷の壁は剣の放った剣圧のみで溶かされ、切り裂かれ、フロルの左肩をかすめた。切り口は一瞬で焼かれ、二つの痛みがフロルを襲う。

「痛いだろ、簡単には殺さねえ。てめえの顔が恐怖と絶望に染まり、

命乞いさせてやるよ」

フロルは痛みには堪え、真っ直ぐにフォークトを見つめる。フロルの体は細かく震えていた。フロルはナイフの柄を握り締め、振るえを止めようとする。

「何だあ、その目は？まだ勝てるつもりなのかよ？」

フォークトはフロルに向けて大きく剣を振った。剣から放たれた剣圧がフロルに向かう。フロルは迷わず前へ進んだ、そしてナイフを大きく振るった。ナイフはフォークトが放った剣圧を切り裂いた。フロルはナイフをフォークトに向けた。

「あなたは無敵でも、最強でもない。僕は本当に強い人を知っているから、だからあなたには負けない」

フォークトの形相が激しく変化して行く。それはまさに鬼のような怒りのみに支配された顔だった。

「殺す！！！！！」

フォークトは炎に包まれ、レヴァティン宝炎具を構えフロルに向かった。そして正面からぶつかるようにフロルも飛び出した……

エングレープは氷で造られたドームの中から戦場を見ていた。廃都市の上空に現れたギレーヌの率いるアステリオス艦隊、無差別に行われる空襲。目を閉じていてもわかる、今も多くの者の命が朽ちていく。その時、氷のドームの中に激しい爆発音が響いた。

「大佐、お怪我はありませんか？」

「大丈夫だ、手間をかけたな。ラル」

アステリオス軍の軍服を着た青年がエングレープへ駆け寄った。

「大佐が閉じ込められるなんて、いったいどれ程の能力者が」

エングレープは笑いながら答えた。

「ただの青年だよ。君と変わらない歳の子さ、久しぶりにいい者に出会えた」

それを聞いたラルは面白くなさそうに歯を喰いしばった。



「ラル、ギレー又は何か言っていたか？」

ラルはエングレイプの言葉で我に返り答えた。

「いいえ、特に何も」

「そうか」

「大佐は今から戦場へ？」

エングレイプは無表情に戦場を見つめた……

~~~~~

最終章 ? E n p i o s i o n (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

出来れば今週中にもう1話投稿したいです。来週末は忙しそうなので・・・

残り8話です!!!

最終章 ? Hyazinthe (前書き)

今回もよろしくお願いします。

今回はこの物語当初から考えていた話です。

書けば書くほどこの物語はバッド・エンドへ向かっているように感じ
か思えない・・・

最終章 ? Hyazinthe

最終章 ? Hyazinthe

『試験体047』これが俺の最初の名前だった。『多重能力開発計画』これが俺の受けた実験の名前だった。人為的な多重能力者の開発。それがこの研究の目標であった。この世界に一人で複数の能力を使う者は確認されていなかった。その為、幾つかの国がこの研究に着手していた。俺はその研究機関の中に一つで産まれた？いや、造られたのかもしれない。

俺達は番号という名を与えられ、十にも及ばない年齢から能力の強化、戦闘訓練を受けてきた。そして、十分な戦闘力、知識、Bクラス以上の能力を得た時、俺達は必ず一つの実験を受ける。『ヒアシノシス』それは濃い紫色をした球状の物体を体に埋め込まれるのだ。ヒアシノシスとは人工的に造られた能力の核であり、直径数センチの小さな球であった。俺にヒアシノシスが埋め込まれるまでに、24人がこの実験を受けていた。俺達には感情らしい感情がなかった。理由は分らない、自ら感情を捨てたのかも知れない、実験の後遺症なのかもしれない、でもヒアシノシスを埋め込まれることが死であることは気付いていた。俺の前に埋め込まれた24人、全員が破棄された。ヒアシノシス、人工的に造られたナノマシンの集合体であり、ヒアシノシスの持つ能力は相手の能力を殺すこと。ヒアシノシスがもたらす能力は常に一つでありながら、形は様々であった。ある者は物理的な武器へ、ある者は自身を化け物へ変え、ある者はただの球へと化した。ヒアシノシスの能力は使用者を蝕んだ、早い者は一度の発動で命を落とし、遅い者でも二桁以上の発動には至らなかった。

俺はついに25人目の被験者となった。研究者達に囲まれ、真っ白な部屋のベッドの上に横たわりその時を待つ。勿論、恐怖などなかった。ただ一つ死というものを間近に感じた。

四季の放った弾丸はリゼリの目の前で弾丸によって止められた。

「箱美芽隊長、やめてください」

四季はすぐに声の主がルイであることに気付いた。四季がリゼリから目を逸らし、ルイの方を見ると案の定、ルイの銃口は四季へ向けられていた。

「確かルイ・シュータスだったかな」

ルイは四季へ銃口を向けたまま答えた。

「名前、憶えてくれていたのですね」

四季はルイの言葉を聞いて鼻で笑い、再びリゼリの方へ視線を戻す。すると四季の目の前を一発の弾丸が通りすぎた。

「もう一度言います。箱美芽隊長、やめてください」

「こいつはどの道もう長くない、ここで殺してやるのが元上司としての優しさだよ」

四季は引き金へと力を入れた。それと同時に四季の握っていた拳銃が宙を舞い、地面へと落ち転がった。

「リゼリ隊長、ここは私に任せてジークフリードへ戻ってください」
リゼリは激痛に耐え立ち上がるようにする。四季は周囲に浮ぶ火器から新たな拳銃を選び、リゼリへ向かう。

「ちっ！！！！」

四季の目の前へルイが割り込む。ルイは四季の目の前へ銃口を向け、引き金を引く。四季は難なく弾丸をかわし、ルイへ蹴りを放とうとした。しかし、四季の蹴りが当たる前にルイの拳が四季の頬当たった。四季は頬を殴られ、ルイから距離をとった。四季は血液の混じった唾を吐き出した。

「箱美芽隊長、今の私ならあなたを殺せます」

ルイの言葉に四季は苦笑し、ルイと初めて目を合わせた。

「限界突破か、だが素の能力が……」

ルイは四季が話し終わる前に弾丸を放った。四季はとっさに弾丸をかわす。ルイは腰に付けていた小さな袋の中へ手を入れた。ルイが

手を引き抜くと、そこにはマシンガンが握られていた。明らかに箱の容積より大きな物が袋の中から現れたのだ。

ルイがエスナと別れ、病院の前に停まっていた車の助手席には銀色のケースが置かれていた。銀色のケースを開けると中には小さな袋と一組の手袋が入れられていた。ルイは中にあつた説明書に目を通した。それは任意の武器を取り出すことの出来るエグルガルの新兵器の試作品であることが分つた。ルイは自身の手へ手袋をつけ、袋の中へと手を入れた。するとルイがイメージした通り拳銃が袋の中から現れた。ルイは力を手にしたことより、リゼリと同じ力を得たことへ喜びを感じていた。

ルイは四季に向けてマシンガンを放つた。四季は迫り来る無数の弾丸をルイと同様にマシンガンを使い迎え撃つた。互いの弾丸がぶつかり合い地面へと落ちていく。最後の弾丸は互いにぶつかり、軌道を変え二人の首元をかすめた。

「私の射撃能力は私自身の能力によって底上げされている。だから弾丸を弾丸で迎撃する程度のことでも難なく出来る。だが・・・」
四季が再び言葉を放つ前にルイは両手に拳銃を握り、弾丸を放つていた。四季は弾丸をかわそうとした。しかし、放たれた四発の弾丸はまるで四季がどう動くか知っていたように四季に向かつて来た。二発の弾丸を受け四季は吹き飛び地面へと倒れ込んだ。

ルイは拳銃を捨てリゼリへ向かう。
「隊長、大丈夫ですか？」

ルイの声に反応してリゼリは顔を上げた。ルイはリゼリの顔を見て言葉を失った。左目から流れる真つ黒な涙、黒く染まった左目。血の気なく蒼白した顔に浮かび上がる真つ黒な血管達。

「そんな・・・」

「ルイか・・・、がはっ」

リゼリは再び大きく咽、口を押さえて手から黒い血液が流れ落ちる。

「隊長……」

「少し力を使い過ぎただけだ、心配いらない」

ルイはすぐにリゼリの状況が今まで最悪であることに気付いた。侵食系能力による対価、規格外の能力がもたらす対価も、また規格外であるのは間違えない。

「すまない、肩を貸してもらっていいか」

リゼリはルイの肩を借り何とか立ち上がった。その姿に力がなく本当に立つことだけが限界であることはすぐに分った。

「ありがとう、ルイ……」

その時、上空を巨大な炎が通り過ぎた。炎は槍のような形をしており、ジークフリードへ真っ直ぐに向かった。炎の槍はジークフリードのシールドを突き破り、ジークフリードに突き刺さった。炎は大きく広がり始める。

「何て攻撃、本当に一人の能力者によるものなの……」

ルイはただ啞然とその光景を見ていた。

「あいつが……」

すでにルイとリゼリには桜家達の死は知らされていた。そして、ユウの死も……。

「あいつを殺さなくては……ぐあ!!!!!!」

リゼリはルイを突き飛ばした。そして、リゼリの体から真っ黒な血液が噴出す。

「隊長……」

「どけ!!!!!!」

ルイの目の前を弾丸が通り過ぎ、リゼリの体を弾丸が撃ち抜く。どの弾丸も確実に急所を撃ち抜いていた。リゼリは頭を撃ち抜かれても、倒れることもなく立ち続ける。リゼリから噴出した黒い血液が大きな血だまりを作り、ゆっくりとリゼリの体へと上っていく。その様子を四季は睨むように見ていた。四季は一発だけルイの弾丸を受けていた。本来ならば確実に三発は受けていた弾丸を四季は一発で済ませていた。弾丸は四季のわき腹を貫通していた。四季は何と

か応急手当を済ませ、痛み止めを打っていた。ルイは憮然と立ち尽くしていた。黒い血液はリゼリを包み込み、真つ黒な球体へと化した。四季は対戦車ライフルを構え、黒い球体へ向ける。

「やめて!!!」

ルイは無意識のうちに対戦車ライフルを構える四季へ銃口を向けていた。

「そいつはもう死んでる、まだ苦しめたいのか!!!」

四季の言葉にルイの手が震える。ルイにも今のリゼリの状態がどのようなものか分っていた。それでもルイには四季の行動を見過ごせなかった。四季はルイの動揺を感じとり引き金を引いた。大口径の弾丸が黒い球へ迫る。

その時、黒い球から真つ黒な液体が噴出し四季へ向かう。液体は弾丸を飲みこみ四季へ向かう、四季は液体をかわそうとするが、液体は曲がり四季を飲み込み押し飛ばした。四季の体は液体に押され液体と共に廃ビルの中へと吹き飛ばされる。そして、吹き飛ばされた廃ビルから無数の黒い棘が飛び出した。廃ビル全体が黒い棘に突き抜かれ海栗のようになった。廃ビルを貫いた棘が黒い液体へと変わり、廃ビルが崩壊を始める。

「ルイ、もう心配はいらない」

ルイは黒い球体の中からリゼリの声聞いた。ルイはすぐに黒い球へ目を向ける。

「隊長.....」

く

くつづ

最終章 ? Hyazinthe (後書き)

最後まで読んでくださりありがとうございます。

一言だけ

一度、転がり始めた石は、ただしたへと向かう……

そんな物語になってしましそうです。

今後ともよろしく願います。

最終章 ? D i e s e s S p i e l e i n R i t t e r (前書き)

今回もよろしくお願ひします。

物語りも投稿もラストスパートで頑張りますのでお付き合ひください。

最終章 ? Dieses Spiel ein Ritter

「最終章 ? Dieses Spiel ein Ritter」
ヴァイパーはトリギオン中の格納庫の中央で立ち止まった。広く長方形の格納庫には二十を超える飛行機が並んでいた。

「これで何となるな」

ヴァイパーの視線の先が僅かに歪んだように見えた。ヴァイパーは格納庫の中に流れ込む殺気を感じ、真っ直ぐに格納庫の扉を睨んだ。厚い装甲で出来た扉に一閃が走る。扉が斜めに切り裂かれ倒れ、切り裂かれた扉の奥に光る赤い目。

「もう逃げるのは終わりだ。俺は今からお前を殺してやるよ」

愛はゆっくりと格納庫へと入った。愛の着ていた着物は返り血で真っ赤に染まっており、刀からは血液が滴っていた。

「俺はお前のこと嫌いじゃなかったぜ」

ヴァイパーは戦闘服のポケットから小さな棒を取り出した。それは銀色の棒だった。ヴァイパーはそれを真っ直ぐに愛へ向ける。

Achilles
「不治の槍」

ヴァイパーの握っていた銀色の棒は細長く形を変えていく。それは銀色でシンプルな槍だった。銀色の長く真っ直ぐな柄の先に、銀色の槍頭があった。

「俺の能力は金属練成、俗に言う錬金術師ってやつだよ。でも俺の練成は普通の奴とは違う。この槍は俺が作った全く新しい金属で作られている。この金属は無数のナノマシンの集合体だ。このナノマシン達はウイルスだ。体内に侵入したウイルス達は細胞を殺し、決して自己の治癒させない」

ヴァイパーは左腕に槍を、右腕に銃身の極端に短いショットガンを握っていた。愛はヴァイパーを睨みつけたままゆっくりと動き出した。床と刀の先が擦れ、火花を出しながら少しずつ速度を上げていく。ヴァイパーは愛に向けてショットガンを放った。このショット

ガンは散弾性に特化した改造が施されていた。弾丸は細かく散乱し愛へと向かう。愛は一瞬で近づく速度を上げた。弾が散乱し完全に愛の行く手を阻む前に懐へと入り込もうとする。近づく愛へ向けてヴァイパーは真っ直ぐに槍を突く。濃く光る愛の右目、愛の体が不自然に動き槍をかわす。二人が一瞬すれ違う。

ヴァイパーの持つ槍の先から血液が流れ落ちていく……。

「いてえ……」

切り裂かれたのは愛でなくヴァイパーの腕だった。傷は決して深くはなかった。しかし、間合いという最大の優位を持ったヴァイパーの初撃は愛に防がれ、更に反撃までも許すという最悪の結果で終えていた。

「本当に強いな、間違えなく俺より早い」

愛はふらふらと揺れるように立ちながら、ヴァイパーを睨み続けていた。

「なあそんな力って必要なのかよ。自分を犠牲にして、痛めつけて心殺してまで……。世の中にはいくらでも強い奴がいる。俺が勝てない奴なんて山ほどさ……」

愛はヴァイパーの話が終るのを待つことなく切りかかる。ヴァイパーはショットガンと槍を使い愛の攻撃をいなす。

「俺にも自分の命より大切なモノが沢山ある、だから俺は今も戦っている。じゃあ今のお前は何で戦っている？」

ヴァイパーの言葉に愛の動きが微かに鈍った。ヴァイパーはショットガンを投げ捨て愛の頬を殴り飛ばした。愛は能力を使い重量を増やし、ヴァイパーの拳を堪えた。頬で止まったままの拳、愛の口から流れる血液。

「聞こえてるじゃねえか」

ヴァイパーはゆっくりと拳を引いた。愛はそのまま立ち尽くしていた。

「俺が今から戦うのはお前じゃない、包刃、お前も一緒に戦うんだぜ」

ヴァイパーは一步大きく後へと跳んだ。一本の長い槍を両手で掴む、一本の槍は二本へと分かれる。二本の槍を両手に握り締めヴァイパーは、左右の槍を前後に分けて構えた。

「ウオオオオオ!!!」

ヴァイパーは雄叫びと共に愛へと向かった……

アステリオス軍の艦隊の20%近くがフォークトの攻撃に沈められていた。それでもギレー又は顔色一つ変えることなくただ母艦から戦場を観戦していた。ギレー又は母艦の中央に位置する豪華な部屋で優雅に液晶に映し出される戦場の映像を見ている。戦況は圧倒的な有利であった。アルカナス軍は指揮官を失い混乱状態、エグルガルの母船ジークフリードも確実に消耗していた。その時、ギレー又は液晶に映った銀色の光に注目した。

「来たか……」

ステラスは によって造った銀色の円盤の上に乗り、廃都市の上空まで浮び上がった。目の前に並ぶアステリオス軍の艦隊、彼はこれから一人でこの艦隊と戦うのである。

「私も軍人だな、体が熱い。この戦場の空気を心地好く感じてしまっている」

ステラスはゆっくりと目を閉じる。彼の頭の中へ流れ込む戦場のすべての情報達、放たれる砲撃の軌道、艦隊の正確な位置、すべての情報を彼が支配する。

「ステラス、聞こえる。ノークよ、ジークフリードのメインシステムYをすべてあなたの補助に回します。そして、私も共に戦います」
イブシロン

「それではジークフリードの防御システムはどうなる」

ノークの声に割り込むように元気な声が響いた。それはベガとミラのものだった。

「ステラス様、私達に任せてください。必ずノーク様はお守りしま

すから！！」

ステラスは微かに笑った。

「頼んだよ、ベガ、ミラ。僕の大切な人達を守ってくれ。ノーク、バルムンクを」

ジークフリード上空に輝く銀色の球体が小さな球体へと変化し、ステラスのもとへと向かう。

「ノーク、アステリオスの艦隊へ向けて回線を開いてくれ」

ステラスの周囲に無数の銀色の球が浮ぶ。それはまるで小さな銀河ようだった。

「アステリオス艦隊に告ぐ、今すぐにこの空域から離脱しないのなら君達を排除する」

アステリオスからの応答はシンプルだった。全艦隊からステラスへ砲撃が集中した。砲撃が放たれると同時にステラスを囲む銀色の球から光が放たれ砲撃を迎撃する。

「いけ」

ステラスの周囲に浮ぶ銀色の球から艦隊へ光が向かう。しかし、光は艦隊に当たることなく湾曲し、艦隊から逸れて行った。

「それなりの準備はしているようだな、だがそれがどうした」

ステラスを周囲に浮ぶ銀色の球が鋭い棘のように形を変えていく。

「行け」

銀色の棘が一齐に艦隊へと向かう、艦隊は砲撃で銀色の棘達を迎撃する。しかし、ステラスによって操作された棘達は砲撃をかわし、艦隊へ近づく。銀色の棘達は群れのようになりアステリオスの軍艦へ降り注ぐ、軍艦は一瞬で飲み込まれ破壊される。銀色の巨大な棘の群れが次々にアステリオスの軍艦を沈めていく。たった一人の男は一人で艦隊に立ち向かい圧倒する。これが世界最強の能力者の一人の力だった。

銀色の銀河の中心に輝く白き英雄は言った。

「俺は必ず守ってみせる・・・」

〜く〜

最終章 ? D i e s e s S p i e l e i n R i t t e r (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

次話は上手く行けば今夜にでも投稿出来るはず!!!

最後までよろしく願いします><。

最終章 ? Future Thoughts (前書き)

今回もよろしくお願いします。

久しぶりにこんなに早いペースで投稿しました。

まだまだ行くぞー！！！！

最終章 ? Future Thoughts

（最終章 ? Future Thoughts）

俺は始めての多重能力者へとなった。俺は生き抜いたのだ、今まで誰も出来なかったことをやり遂げた。俺は生きている。俺はあの時、始めて自分が生きていることを認識した。そう『命』を感じた。だがそれが俺をより深く深く苦しめることへとなった。

俺は毎日のように戦った。それも仲間と、命をかけた殺し合いを……。終ることのない殺し合い、かつての仲間、いや仲間と言えるほどの仲ではなかった。でも俺は確かに命を奪い続けた。自身の命を感じ、生きることを知ってから俺は『命』を奪い始めた。俺は自分が生きる為に、多くの命を奪った。日に日に深くなる足元の血だまり、それはもう深い穴のようになっていた……

「隊長……」

真っ黒な球の中から現れたのは間違えなくリゼリだった。だがその姿はすでに人のものとは異なっていた。真っ黒な目、背中から生えた枝のような細い翼、両腕は真っ黒に染まり、指は鋭く尖っていた。まるで悪魔のような姿だった。

「ルイ、君はもう退避してくれ。心配はいらない、こんな姿だがとても気分がいい」

ルイは頷くことしか出来なかった。

「行って来るよ……」

リゼリの枝のような翼が不気味な音をたて広がり羽ばたいた。リゼリの体が地面から浮びあがる。ルイは静かにその姿を見つめ続けた。

「リゼリ隊長！……！」

リゼリは真っ黒な目でルイを見つめた。

「どうした？」

真つ黒なりゼリの目がルイの言葉を詰まらせる。伝えたいことはもう決まっているのに、ここで伝えなければもう……

「戻ってきますか？」

リゼリは優しく笑った。きつとその姿は他の者が見たら間違えなく、違った意味にとられたであろう。ルイの口から出た言葉は本当に彼女が伝えたかったものとは違っていた。

「もちろんだよ」

リゼリは空へと上がり、翼を羽ばたかせ飛んでいく。リゼリがちよとど四季が埋もれたビルの上を通過した時、崩れたビルの中から無数の砲撃がリゼリへと向かった。リゼリは真つ黒な腕を振るい、黒い波動のようなモノを放った。波動はすべてを飲み込み崩れたビルにぶつかると同時に周囲を飲み込み廃都市に直径数メートルのクレーターを作った。リゼリは一撃だけ反撃すると、四季の生死を確認することもなく飛び去る。

「もう私には興味がないと……」

四季はクレーターから少し離れたビルの屋上からリゼリが飛び去るのを眺めていた。

「あれはもう人間じゃないな……、まだ私にようがあるのか？」

四季の後には拳銃を構えたルイがいた。

「動かないでください」

「もう私と戦う理由はないだろ、私もお前には興味がな……」

ルイは迷わず発砲した。弾丸は四季の胸元の服をかすめた。四季は隠し持っていた拳銃を抜きルイへ向けた。

「舐めるなよ」

四季は驚いた。ルイはすでに四季の懐に入り込み拳銃を胸元へ突き付けていた。

「お前、死ぬつもりか」

「あなたは私の大切な人を傷つけた。決して許さない」

ルイが引き金を引こうとした時、ルイは激痛のあまり拳銃を落とす。

ルイは頭を押さえたまま地面へと倒れ込んだ。

「いだ……い、いたあ……」

四季は確実に運に助けられた。すでに能力を解除していた四季に、ゼロ距離からの弾丸をかわす術はなかった。

「オーバーリミット限界突破の対価か、能力だけではなく身体能力の制限も外したのか」

ルイは歪む視界の中で四季を見つめた。ルイの両目から血の涙が流れ始めていた。

「今すぐオーバーリミット限界突破をやめる。そうしなければ死ぬよ」

ルイは痛みを堪え立ち上がる。

「嫌です、それじゃ私はあなたに負けたことになりませんから」

「勝てるつもりなのか？もうさつきみたないチャンスはないよ」

二人の視線が真っ直ぐに交わる。

「相手してやるよ、ルイ・シュータス」

ノークとエスナは戦場を見つめ続けていた。特にノークはステラスの姿を見つめ続けていた。エスナはすでに現状を理解し始めていた。軍部の裏切り、反逆が行われているのだ。アステリオスという大国を一人の小娘によって治められていることをよく思わない者が沢山いるのは知っていた。だから力を集め、反乱を抑制していた。考えが甘かった。第一小隊、いや箱美芽四季の損失がこんな結果を産むとは……。エスナはただ唇を噛み締め、戦場を見つめ続けることしか出来なかった。

その時、司令室のドアが開いた。特に不自然でない出来事に誰も入り口へ注意を向けることはなかった。

「ノーク・クルネスはいるか？」

司令室全員の視線がアーニユへと集まった。兵士の何人かはすでに銃口をアーニユへ向けていた。アーニユは両腕を上げ敵意がないことを現す。

「私がノークです」

ノークはエスナの隣から一步前へ出た。アーニユはノークの姿を見て、軽く頷いていた。

「私に何の用ですか？アーニユ・ワーリユヌス、いや名も無き者ナンバーズN
0・3、時の魔女」

アーニユの顔が険しく変化した。

「名も無きの者あたしの番号まで知っているとはね。ちなみにステラスは私を時の女神と呼んだよ」

「あなたを魔女と呼んだのは謝らせてもらいます。いったい貴女ほどの方が何故こんな所に？」

「別に謝る程のことじゃないよ。頼まれたからだよ、ステラスに。あいつがあんたを連れて戦場を離れるって言ったのさ」

ノークはすぐにアーニユの言った言葉が真実であることを理解した。ステラスが私をここから避難させることは容易に考えられた。むしろもつと早く彼自身から言われるとノークは考えていたからだ。

「嫌だと言ったら、あなたはどうしますか？」

ノークの問いにアーニユは瞬時に答えた。

「力づくで連れて行く、あの男と交わした約束を破る気はない」

ノークは周囲を見つめ決断を下した。

「ここに私がいればステラスの足手まといになるかもしれませんが、

Yを彼に託した今、私に出来ることはない。ただし条件があります、この人も一緒に連れて行ってください」

ノークはエスナの手を握り締め引いた。

「アステリオスのお姫様か、私はあんたさえ連れて行ければいい。

一人くらい増えようと気にしないよ」

エスナはノークの腕を振り払った。

「私は逃げる訳にはいかない。ここで見届けな・・・」

ノークはエスナの顔を平手打ちした。エスナは突然の事に動揺し、横へ顔を向けたまま固まっていた。

「あなたがここで見届けることに意味はあるの？」

ノークがエスナに向けて言ったのは一言だった。それはきつとノーク自身への問いでもあったのかも知れなかった。

「無い、何も無いの……」

エスナの目から涙が溢れ出す。ノークはもう一度、エスナの手を握り締めた。

「こんな所で死んでは駄目、今は信じて。そして、生き抜くの」

エスナは涙を拭き取りノークの手を握り返した。

「私も連れて行ってください」

ツバイは廃ビルの壁に寄りかかりながらステラスの戦いを見ていた。

「かつこいいいな……」

「お前もかつこよかつたよ」

ツバイはゆっくりと声のもとへ顔を向けた。そこにはジャスの姿があった。ジャスの横には氷で造られた狼がいた。ジャスはこの狼に跨り戦場の中からツバイを探し出した。

「そうですか？負けてしまいましたよ」

ツバイは皮肉を言うように笑った。ジャスはツバイに近づき抱きしめた。

「ちゃんと私は生きているよ、お前があたしを守ったんだよ」

ツバイの目からは涙が流れ落ち始めた。その時、ツバイは空に真っ黒な翼を見た。

「リゼリ……、死ぬなよ」

ギレーヌは依然と観戦を続けていた。ステラスによって艦隊は3分の2まで減らされていた。それでもギレーヌは表情一つ変えず観戦を続けていた。

「やはり能力者を殺せるのは能力者か」

ギレー又は通信機を手にとった。

「ジーリアス第二世代を使え、もう飽きたよ。終わらせよう」

く

く

最終章 ? Future Thoughts (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

次話も今日中には投稿できる! !はず > < 。 。

次回もよろしくお願い致します。

最終章 INTERLUDE (前書き)

今回は間章になります。

話は進みませんが・・・

よろしくお願いします。

最終章 INTERLUDE

（最終章 INTERLUDE）

これは名の無い物語、誰も知らない話。

始まりは何だったのだろうか？

『一人の少女の願い？』 『一人の男の愛？』

いいえ、どれも違う。答えはまだ分らない、この物語の結末がどうなるかなんて誰も分からないのだから。

今、世界は大きな分岐点にいる。この二人の決断が世界の未来を決めることになる。

男は傷ついた体に鞭を打ち再び立ち上がる。男の体へ再び激痛が走る。男は吹き飛ばされ壁へと叩きつけられた。それでも男は立ち上がり戦うことを止めようとしない。

「そこをどいてくれ・・・」

男は足を引きずりながら前へと進む、その先へ彼は行かなくてはならなかった。彼が今まで背負って来たすべてがこのままでは消えてしまう。これから起こることは本来なら正しいことなのかも知れない。でも彼はそれ認めなかった。

「君はいいのか本当に？」

男の胸へ一本の刃が向けられた。男は迷い無くその刃を握り締めた。男の手から血液が流れだし、床へと落ちていく。

「答えてくれ、君の意思を」

「俺は・・・」

この二人の決断は最悪のものだったのかも知れない。この後、二人は多くの死を、多くの絶望を目にすることとなる

まずはこの物語がどう終るかを見届けよう。

く

くつづ

最終章 INTERLUDE (後書き)

短い文章ですいませんでした。

残り五話になりましたが、最後までよろしければお付き合いくださ
い。

最終章 ? S e c o n d I y (前書き)

久しぶりの投稿になってしまい申し訳ありません。
今回もよろしくお願い致します。

最終章 ? Secondly

「最終章 ? Secondly」

「ギレーヌ様、最高の舞台を用意していただきありがとうございます」と

ステラスの操作する の群れが新たなアステリオスの軍艦へ向かった。 の群れは軍艦の目の前で見えない壁にぶつかった。 達は見えない壁に阻まれ、大きな銀色の塊となっていた。突然、 の群れが光った。そして 達は地面へと落下し始めた。ステラスはすぐに電気系能力者による攻撃だと分かっていた。

「始めまして、ステラスさん」

ステラスの前に7人組みの男女が現れる。全員とも真っ黒のアステリオス軍服に身を包んでおり、年齢は16前後ようだった。7人の先頭に立った黒髪の青年が一步前へと出た。その青年は真っ黒な髪に青白い肌、輝きを失った真っ黒な瞳。まるで人形のような、人よりも機械に近いような印象をステラスは受けていた。

「僕達の名は第二世代^{ジェリアス}、この世界の未来へ繋ぐ者。あなた達にはもうこの舞台から退場してもらいます。僕達の築く未来の礎となれることを光栄に思っていたきたい」

ステラスの前に現れた七人は空中に立っていた。ステラスは自分の乗っている の円盤から降り、空中に作られた見えない床へ一步進んだ。

「心配しなくても、足場を消すようなまねはしません。戦いの場はこちらで準備致しました。さて手負いではありませんが、世界最強の力を見せていただきますよ」

先頭に立っていた青年が自身の手を前へと出す。

「ヒアシノシス」

青年の手が真っ黒な影に包まれ、影は青年の手が真っ黒な剣へと変化した。

「あなたはこの力をご存知のはずですよ？人間が創りし、ただ一つ能力。能力を喰らう能力、ヒアシノシス」

先頭の青年がヒアシノシスを解放すると同時に後の六人もヒアシノシスを発動する。ある者は斧、ある弓、ある者は腕そのものへ、各自が個々のヒアシノシスを発動させていた。ステラスは残ったを剣へ変化させた。

「君達ごときにはこの世界の未来は託せないな」

ステラスは銀色の剣一本を握り締め、走り出した……

ヴァイパーは自分自身の拍動の音をこれまでにないほど五月蠅く感じていた。深く切り裂かれた胸部、普通の人間なら間違えなく致命傷となっていた傷だった。ヴァイパーの体もリオルと同様に機械化が進んでいた。二人の機械化には全く別の背景があった。リオルは戦闘で傷ついた為、ヴァイパーはより強くなる為……、二人には共通することが一つあった。それは理由だった。

「こんなにも死を間近に感じたのは始めてだ。一撃、一撃が常に死と隣合わせのこの感覚、

感覚が研ぎ澄まされ、世界全体がスローモーションのように感じる」
ヴァイパー額から眉間を切り裂かれ傷から流れる血液が顔を流れていた。力関係は一目両全だった。愛の動きはすでに人間の限界を超えていた。ヴァイパーにとって普段なら必ず当たる攻撃も、今の愛に届くことは無かった。ヴァイパーは長い前髪をかき上げ、顔を流れる血を手で拭き取った。

「おい、包刃。お前はもう限界か？俺はまだまだやれるぜ」

ヴァイパーは両手の槍をしっかりと握り直し、愛へ向かう。ヴァイパーの一突きを愛は紙のようにヒラリとかわし、間合いを詰める。ヴァイパーはもう一方の槍を短く握り直し、愛の一閃を受け止める。愛の一閃は重く、ヴァイパーの体は後方へ吹き飛んだ。愛は追い討ちをかける為に、ヴァイパーへ向かう。

愛はヴァイパーに向けて真っ直ぐに刀を突いた。ヴァイパーは片方の槍を地面へ刺し、それを軸にするように回転し、愛を迎撃した。刀の先と槍の先がぶつかり合う。愛は大きく体勢を崩した、ヴァイパーは反対側の槍を支えに体勢を保っていた。

ヴァイパーは愛へ槍を突く。愛は何か刀の刃でヴァイパーの槍を受け止めた。ヴァイパーの槍が愛の刀へと触れると同時に、槍は形を変え刀へと巻き付いた。

「捕まえた」

愛は咄嗟に刀を放し、ヴァイパーの懐へ入り込みヴァイパーの胸部の傷へ手刀を差し込んだ。愛の手は手首近くまでヴァイパーの胸元へ入り込んでいた。

「本当に大胆な女だな」

ヴァイパーの口元から血液が流れ出す。ヴァイパーはしっかりと愛の腕を掴み、愛の着物の襟元を掴み真横へと投げ飛ばす。吹き飛ばされる愛へヴァイパーは槍を如意棒のように変化させ、壁際へと突き飛ばした。吹き飛ばす愛の姿が突然消える。

ヴァイパーは隠し持っていたスイッチを押した。格納庫の中に突然、コンテナが姿を現す。コンテナの入り口が閉まり愛はコンテナの中へ閉じ込められた。

「そこで頭を冷やせよ」

ヴァイパーはもとから愛に勝つ気はなかった。光学迷彩によって隠したコンテナへ愛を閉じ込めることそれがヴァイパーの狙いだった。ヴァイパーは口元から流れる血液を拭き取り、床に転がる愛の刀を拾い上げた。

「こいつを取り上げるのには苦労したぜ」

コンテナの中から激しい衝撃音が響いていた。

「ちったー静かに出来ないのかよ」

ヴァイパーはコンテナに繋がれた鎖の先を格納庫内の飛行機へと繋いだ。ヴァイパーは鎖の繋いだ飛行機の操縦席へ乗り込む。ヴァイパーは操縦席から出ると、飛行機は無人のまま動き始める。

「そのコンテナの中なら飛行機が撃墜されても死なないだろ」

ヴァイパーは衝撃音の響くコンテナへ近づいた。ヴァイパーが近づくと同時に衝撃音が止む。格納庫の扉が開き、飛行機がゆっくりとコンテナを引きずり始める。

「お互いこれが最後の別れにならないことを祈るうぜ」

コンテナの中から掠れた声が聞こえた。

「待てよ、これお前の心臓だろ……」

ヴァイパーは自分の胸元に空いた穴へ手を当てた。血液の溢れでる胸の中央に空いた穴、そこには本来心臓がなくてはならなかった。

「俺の体はもう100%近くが機械なんだよ。その心臓も形だけさ、記念品にでもしてくれよ」

ヴァイパーは立ち止まり、引きずられて行くコンテナを見送る。コンテナの中からは愛の声が響いていたが、引きずられるコンテナの騒音にかき消されヴァイパーへは聞こえていなかった。

「またな……」

コンテナはゆっくりと格納庫の床を離れ、格納庫から姿を消していく。ヴァイパーはコンテナを見送ると同時に床へと倒れ込む。

「もう少しだけ動けよ……」

ヴァイパーは床を這い、格納庫内の飛行機へと向かう。ヴァイパーは飛行機の手輪へと寄り掛かり握り締めたままだった愛の刀を見つめた。

「悪いな少し付き合ってくれよ」

ヴァイパーは飛行機へ触れ、ゆっくりと目を閉じた……

愛はコンテナの壁へ額を押し付け倒れ込んだ。このコンテナがトリギオンから飛び立っていることを、すでに愛自身も気付いていた。愛の手の中で熱を失っていくヴァイパーの心臓。

「私はまた……」

愛は通信機を取り出し電源を入れた。トリギオンへ潜入為、愛は通信機の電源を切っていた。通信機に表示される戦況。

『ハウズ第三小隊・・・包刃 愛を除き全滅・・・』
愛の手から落ち転がる通信機、外から聞こえる戦場の音。しかし、
愛にとつて今は無音の世界だった。時が止まったように啞然とする
愛。

「そんな・・・」

その時、コンテナは大きく揺れた。愛はすぐにコンテナを運んでい
る飛行機が撃墜されたことに気付いた。愛は傾いたコンテナの中を
転がり、壁へと全身を打ち付けられた。傾いたコンテナへ体を任せ、
愛は真つ暗なコンテナの中へと入り込む光の隙間へと目を向けた。

「酷い最後だ・・・、何も守れず、何も出来なかった」

愛は耳についているイヤリングを外し、光の方へ向けた。月の形を
したイヤリングが光を浴びて輝く。

「ひどい姿を見せたな、どうやら私は同じ所には行けそうにないよ」
愛はイヤリングをしっかりと握り締め胸元へ手を置いた。

「もういいや・・・」

コンテナは大きな音をたて地面へとぶつかった・・・

n s u r p a s s e d }

） T O ？ U

最終章 ? Secondly (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ここから1話で一つずつ戦いが終わっていくかと思えます。

残りは四話、最後までお付き合いくださいれば何よりかと。

最終章 ? Unsurpassable (前書き)

今回もよろしくお願いいたします。

最終章 ? Unsurpassable

最終章 ? Unsurpassable

リゼリは自分に近づきいくつかの気配に気付き、廃ビルの屋上に降りた。廃ビルは大型の円形のビルであり、リゼリはその中心に立っていた。リゼリが屋上に降りてすぐにリゼリを囲むように、四つの影が屋上に姿を現した。真っ黒な軍服に身を包んだ第二世代の青年が機械のように話し出す。

「リゼリ様、私達はギレーヌ様の命で参りました。この戦場はすでに我が軍が制圧しつづつあります、我らと共に帰投ください」

リゼリは周囲を囲む第二世代を睨むように見渡した。

「ギレーヌの命？俺はあいつの部下になった覚えはない」

「今回の作戦の指揮官はギレーヌ様です。アステリオス軍の兵はすべてギレーヌ様に従う義務があります」

リゼリは苦笑した。

「そんなことは知っている。だがハウズは王族専属の部隊、王女から独自に判断を下す権利をもらっている。それに俺はギレーヌの奴が嫌いだ」

第二世代の青年は表情一つ変えることなくリゼリの返答を聞いた。

「そうですか、あまり手荒なまねはしたくなかったのですが」

第二世代達は一斉にヒアシノシスを解放する。

「それは・・・」

リゼリは目を見開き第二世代を見つめた。リゼリはすぐに彼らが持つ力を理解した。そして彼らがどのような存在かもすぐに解っていた。

「あなたは私達の兄ということになります」

リゼリは怪しく笑った。

「量産型風情が刃向かうつもりか？」

「僕等は出来損ないのあなたとは違います。私達は第二世代です」

リゼリは威嚇するように背中に生えた細い枝のような翼を大きく広げた。

「出来損ないか、面白い。その出来損ないの力見せてやるよ!!!」
悪魔の翼が大きく羽ばたいた……。

『レイヴァテイン宝炎具』、フォークト自ら辿り着いた最強の武器。フォークトの炎を操る者としての絶大な火力を一つの武器として凝縮することにより圧倒的な火力と破壊力を持つ武器。

フロルは焼け野原と化した戦場でフォークトと向き合っていた。廃ビル達は次々と破壊され、今ここに立っているのは二人だけだった。

「まだ諦めないのか、小僧」

フォークトは扇の形をした宝炎具レイヴァテインを振った。宝炎具から放たれる炎の波、フロルはとつさに氷の壁を造るが一瞬で壁は蒸発し炎の波はフロルに迫る。フロルはしっかりと握り締めたナイフで炎の波を切り裂いた。

「やっかいな武器だな!!!」

炎の波の中からフォークトが現れ、双剣へと姿を変えた宝炎具レイヴァテインがフロルに迫る。フロルは短いナイフでは双剣を受け切れない為、フォークトの懐へ飛び込んだ。

『ホルケーン灼熱地獄』

フォークトの握っていた宝炎具レイヴァテインが炎を噴出す。噴き出た炎は一瞬で周囲へ広がり爆発した。フロルは全身へ氷の膜を張り巡らす、フォークトの放つ炎はすべてを燃やし尽くす。広がった炎は一気にフォークトへ集まり巨大な火柱となり、炎はフロルを飲み込み爆発した。
「お前のしぶとさは評価してやるよ」

フロルは顔を真っ白にして地面へ両腕を着き何とか息を整えていた。フォークトの炎から身を守る為に、フロルは限界まで自身の能力を発動させた。その代償としてフロルの体温は30度を切りそうになっていた。すでにフロルの体温は人間が生きることの出来る体温の

限界を遙かに下回っていた。

フォークトは宝炎具を剣へと変化させ、フロルへ近づく。

「だいぶ辛そうだなあ、小僧。さっきまでの目で俺を睨んでみるよ」
フォークトはフロルに近づきフロルの腹部を思いつき蹴り上げた。
フロルはかわすことも出来ず、蹴り飛ばされた。

「こりやいい、ゆつくり弄り殺してやるよ」

フォークトがフロルへ近づこうとした時、フォークトの頭部を弾丸が貫いた。

「あああ!!!」

額に空いた穴から炎を出しながらフォークトは弾丸が来た方を見た。

「何だ、てめらは？」

「本当に物理攻撃は効かないのか」

力の差は歴然としていた。ルイはビルの屋上の壁へ叩き付けられ、吐血していた。四季の繰り出した打撃がルイの内臓を傷つけていた。

オーバーリミット

限界突破を限界まで使用したルイを四季は何一つ能力を使うことなく圧倒していた。それには大きく二つの理由があった。一つはルイの肉体的な限界。ルイの体はすでに限界を迎えており、すでにピーク時の半分程度の力しか出せていなかった。二つ目は圧倒的な経験量の差、本来は後方支援を得意とするルイに対して、四季は一对一での戦闘の経験量が圧倒的に多かった。それも四季の今までに相手した者は今のルイより確実に強かった。ルイは強力になりすぎた自身の能力に振り回され、限界を超えた体に鞭を打ち続ける。

「リゼリといい、あんたといい何でそんなに馬鹿なのかね？」

四季は屋上の壁にもたれ、吐血するルイへゆつくりと近づく。ルイは突然大きく咽せ体を大きく跳ね上がらせた。そして、銃声が響く。
「この程度、奇襲にもならないよ」

ルイの奇襲は簡単に四季に見破られ、拳銃を握ったルイの腕は壁へ

踏みつけられていた。ルイはすぐにもう一方の手に握られた拳銃を四季へ向けようとしますが、四季は容赦なくルイの腹部を蹴った。ルイの体が壁へ叩きつけられる。ルイは再び吐血する。四季は踏みつけた足へ力いれた。ルイの腕から鈍い音が響き、地面へ拳銃が落ちる。

「あんたが本当に死にたいならここで殺してあげるよ？」

四季は拳銃を拾い上げルイの顎へ銃口をつき付け、顔を上げさせた。ルイの真つ赤に染まった目と四季の目が合う。ルイの表情は悔しさで歪み、両目から赤い涙がこぼれ落ちていた。

「私は弱い……」

ルイはそれだけ言うとも目を閉じた。ルイは限界突破オーバーリミットの発動を解いた。それと同時にルイの体全体から力が抜けて行くのを四季は感じた。

「弱いか……」

四季は拳銃を屋上から投げ捨て、一言だけ呟いた。

「こんな所で死ぬな」

四季はそれだけ言うともルイに背を向け歩き出した。四季はルイに受けた腹部の傷へ手をやった。巻かれた包帯から血液が染み出しており、真つ白だった包帯は赤く染まっていた。

「私も少し無理をしすぎたか」

四季は軽くふらつき屋上の柵へ寄り掛かった。

「ずいぶんと消耗しているようですね？箱美芽元隊長」

屋上に姿を現したのはタークだった。タークは片手に拳銃を握り締め嬉しそうに四季を見下していた。

「お前、私を填めたな」

四季はタークを睨みつけた。四季の眼光は鋭かった。しかし、四季の顔に疲労と消耗がはつきりと表れていた。

「何の話かさっぱり分からないね」

「この下種が……」

四季が立ち上がるうとした時、一発の弾丸が四季の右足の太ももを貫通した。四季は体勢を崩しながらも柵を支えに何とか堪えた。夕

「クは柵を掴む四季の腕を撃ち抜く。四季は柵に寄り掛かるように倒れた。」

「おっと暴発してしまった」

「タークは細い目を大きく開き笑い始めた。」

「私がこの時をどれほど待っていたかお分かりですか？私の本来の任務は箱美芽 四季、あなたの監視だよ。あなたの能力は本来もつと強力なモノだ。本来は軍師として後方から戦うことに強みを持つ力だ。特に大規模な戦闘でのあなたの能力の力は絶大だ。だから軍部はあなたの力が欲しかった。でもあなたは軍部からの勧誘を断り続け、最後にはこの国すらも裏切った」

「タークは四季の頭へと銃口を向ける。すると四季は笑い、柵を超え廃ビルから飛び降りた。廃ビルの高さは十階建てを超えており、間違えなく助からない。タークはすぐに柵へ近づこうとした。」

「クソ女が・・・」

次の瞬間、四季がいた廃ビルを含む建造物達が炎の波に飲み込まれた・・・

「ノークが最後に下した指令は全軍の撤退と、ジークフリードによる撤退までの時間稼ぎだった。すでにジークフリードは自動プログラムによって動いていた。ミラやベガ達もすでにジークフリードから回避しており、今最後の飛行艇がジークフリードを出発した。リアルは最後の飛行艇を見送り、小型戦闘機へ向かっていった。フェアに切り落とされた腕はしっかりと元の場所に繋がられていた。」

「絶対に死なせない・・・」

リアルを乗せた戦闘機がジークフリードから飛び立った。

くつづく

最終章 ? Unsurpassable (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

残り三話です・・・

たぶん最後にエンドロール的な短文がつくかもしれませんが。

残り三話全力を出し切れるよう頑張ります!!!

最終章 ? New World Order (前書き)

今回もよろしくお願いします。

そして読者の皆さん、ごめんなさい。

このタイピングで新キャラって><

活動報告の通り、続編はあるけどこれは・・・

本当にすいません。

最終章 ? New World Order

最終章 ? New World Order

ステラスと第二世代ジーリアスの戦いは思わぬ戦況であった。いや寧ろ当然の結果なのかもしれない。いくら最新の技術によつて強化された小隊であつても、手負いであつても世界最強の称号を持つ男の前では霞んでしまう。

戦闘経験の圧倒的な差と、ステラスの判断力、そして第二世代側ジーリアスの指揮官の未熟さが今の戦況の要因となつた。先手を打つたのはステラスであつた。ステラスは正面から向かうふりをしながら、破壊を免れた による奇襲を行つた。それに対して第二世代ジーリアスは電気系能力者で対処した。この選択はステラスに最も有意義な情報を与えた。それは誰が電気系能力者かだ。ステラスは銀色の剣を握り締め、真っ直ぐに電気系能力者へ向かう。ステラスにとつて残りの能力者の攻撃など何ら脅威ではなかつた。ステラスはいとも簡単に第二世代ジーリアス達の中を突破した。電気系能力者の第二世代はステラスへ電気を放つた。ステラスは放たれた電気をマントのように変化させた へ伝導させ受け流す。そして残された右腕に握られた拳銃から放たれた弾丸が電気系能力者の額を撃ち抜いた。

第二世代ジーリアス達はただ啞然としてその姿を見ていた。彼らはどう自分達が動くべきか分らなかつた。いや分つていたがすべてがステラスの判断の後手であつた。第二世代ジーリアス達は七人が塊、ステラスを迎え討つた。それが各自の行動を制限し、誰が何をするか判断を下せない状況を作り彼らを追い込んだ。

「お前達、早くこの・・・」

ステラスと話した指揮官らしい青年が声を張り上げた。ステラスは電気系能力者を仕留めすでに次の目標へ狙いを定めていた。それは指揮官。ステラス、黒髪の青年へ向かう。黒髪の青年はステラスの銀の剣をヒアシノシスの剣で受けた。動きの止まつたステラスへ他

の第二世代達から攻撃が迫る。ステラスは危機を感じ取り、第二世代から距離を取る。

「逃げられると思うなよ」

ステラスが距離を取り体勢を立て直すと、自分自身が見えない壁に閉じ込められていることに気付く。第二世代の青年が笑いながらステラスを近づく。

「手間を取らせてくれたね。これであなたは逃げられない」

ステラスは見えない壁の中で笑った。

「また助けられてしまったな・・・」

ステラスと第二世代達の戦場へ一機の飛行機が墜落した・・・

フロルはフォークトと共に声のもとへ目を向けた。そこに居たのは二人組みの男女だった。二人ともアステリオスの真つ黒な軍服を着ており、女の方が拳銃を握っていた。二人の内、女の方はフロルと同じ位の年齢のようだった。首元で切り揃えられた濃い栗色の髪に、華奢な体系、身長も150cm弱くらいしかなく、身に纏う雰囲気はどこか遠足に来た子供ようだった。それとは対照的なのは隣いた男だった。赤く長い髪、眼鏡の奥で鋭く光る目に特徴的な両目の下の黒子、モデルのような長い手足、そして腰の両側には一本ずつ刀が差されていた。

フォークトは二人の姿を確認すると同時に二人へ向けて宝炎具を振った。宝炎具から放たれた炎が二人へと向かう。

「刃砥」

女の言葉に反応し、刃砥は腰の刀を抜き炎を切り裂いた。いや炎は切り裂かれたと言うより、刀に吸い込まれたようだった。刃砥は無表情にフォークトを睨みつけていた。それに対して栗色の髪の女は嬉しそうに目を輝かせフォークトを観察している。

「もう炎を操る者としてのクラスを完全に超えているね。記録では自分自身を炎化できる能力者を見たことはあつたけど、本当にこの目で見られるとは。そして能力の具現化、本来は圧倒的な凡庸性と

攻撃力を武器とする操作系能力者が、自身の能力の凝縮により辿り着く新たな終着点ねえ」

「お前達は何者だ？」

先ほどとは異なりフォークトは二人を注意深く睨みつけていた。

「私を知らないなんて、もっと勉強するべきでないか？」

フォークトの眉間へと皺が寄る。

「でも私の名前は知っていても、私の姿を見たことがある人は少ないものね。私の名はライトヒル、ベンジル・ライトヒル」

フォークトの表情が一遍した。フロルはその名をどこかで聞いたことがあるような気がしていた。

「マジかよ、あのライトヒルがこんな小娘だったとわな。そして、まさかアステリオスに身を隠していたなんて」

ライトヒルはニヤニヤと嬉しそうに笑っている。

「ライトヒル様が俺様にいつたいなんのようだ？」

「特にお前によろがある訳ではない。私はただ観察しに来ただけよ。まあニュトラの生き残りを見つけたから保護しに来たくらいかな」

フロルはライトヒルの目が自分に向けられていることに気付く。キラキラとした目がフロルを捕らえ続けている。

「ニュトラ？この小僧のことか？」

フォークトはフロルを見下ろし、鼻で笑った。

「こんな小僧に大した価値はないと思うが」

フォークトはフロルに向けて宝炎具レイヴァーティンを振り下ろそうとした。一瞬の出来事だった。フォークトは小柄のライトヒルのストレートを腹部に受け大きく吹き飛ばされた。

「私の話が難しかったのか？」

ライトヒルの手が真っ黒なグローブのようなものに被われていた。

「うん、ヒアシノシスでの打撃は通用すると。それにスーツの調子もいい感じ、でも量産にはコストがかかり過ぎるのが課題だなあ」

ライトヒルの手から黒い影が引いていく。ライトヒルはフロルに近づき髪の毛を掴み頭を上げ、フロルの顔を覗き込むように顔を近づ

けた。

「この青い髪に青い目、間違えなくニユトラの希少種。本当にまだ生きている個体がいたなんて」

ライトヒルはフロルの髪を放した。

「僕をどうするつもりだ・・・」

フロルは荒い息の中、ライトヒルに尋ねる。

「どうするも、軽く話を聞いて、体を見せて欲しいくらいかな？私は研究者だけど、被験者をどうこうするのは好きじゃないんだよね。だって勿体無いじゃん」

ライトヒルは無邪気な笑顔をフロルに向けた。その時、二人の足元から炎の柱が噴出した。

「おっと」

ライトヒルはフロルを抱え、炎の柱から退避した。地面から噴出した炎の中からフォークトが姿を現す。

「小娘のくせに舐めたまねしやがってえ！！」

フォークトを中心に八方向へ炎の柱が地面から噴出し、周囲へと広がる。ライトヒルへ炎の柱が向かう。

「刃砥、さんきゅ」

ライトヒルに向かった炎の柱は同様に刃砥の刀に吸い込まれた。その刀は真っ黒な刀身をした直刃の刀であった。刃には全くもって輝きがなく、深い穴のような印象をフロルは受けた。

「ライトヒル、あまり私に迷惑をかけないでくれないか？」

ライトヒルは刃砥の顔を見上げニツコリと笑った。

「それが恩人へ・・・」

三人に向けて炎の剣圧が放たれる。ライトヒルと刃砥は二手に別れ剣圧をかわした。

「俺様のことを馬鹿にしてんのかあ？」

ライトヒルは真顔で言う。

「馬鹿だとは思っているよ」

フォークトは怒りを爆発させた。全身を炎に変えライトヒルへ向か

う。

「何だてめえは？さつきから俺様の邪魔しやがって」

フォークトの行く手を刃砥やじぎが阻んだ。フォークトの宝炎具レイヴァテインと刃砥やじぎの刀がぶつかりあった。

「本当に五月蠅い人だ。弱い奴ほど良く吼えると言うがあなたにはピッタリだ」

フォークトは宝炎具レイヴァテインを炎へ変え、刃砥やじぎを炎で包み込んだ。

「誰が弱いだと？燃えてなくなれ・・・」

刃砥やじぎを包み込んだ炎が一瞬で真つ黒な刀へ吸い込まれた。

「弱点は頭で決まりだな」

刃砥やじぎは挑発的にフォークトへ刀を向ける。その時、ライトヒルの通信機が陽気な音をたて鳴り響いた。ライトヒルは通信機について画面を見た。

「刃砥やじぎ、10分くらい時間を稼いでくれ。私はこの子を連れて先に帰るわ」

刃砥やじぎは大きいため息をついた。

「この任務が終わったら、約束は守ってもらおうよ」

刃砥やじぎは2本目の刀へと手を伸ばす。フロルはライトヒルに抱えられたまま、刃砥やじぎを一心に見つめていた。

「ここからは企業秘密さ！！」

フロルは首、針に刺される痛みを感じ意識を失った。

「刃砥やじぎ、10分でいいから。別に無理して戦わなくてもいい、とにかく10分たつたら帰ってこい」

ライトヒルの声はすでに刃砥やじぎへ届いてはいなかった。刃砥やじぎの表情が無表情から笑顔へと変わる。

「4年ぶりの戦場の空気、ここが一番落ち着く」

刃砥やじぎは眼鏡を外し投げ捨てる。刃砥やじぎの投げた眼鏡が地面に落ちた時、フォークトと刃砥やじぎは刃を交え、ライトヒルの姿は消えていた・・・

ジーリアズ

第二世代の青年は廃ビルの屋上から空を舞う悪魔の姿を見つめていた。屋上にあつたのは青年の姿だけであつた。青年は上半身だけの体を引きずり、目の前に転がる紫色の球へ手を伸ばす。青年の伸ばした手の先が煙のようになり消えて行く。青年は消えいくなか紫色の小さな球を見つめ続けた。

「僕等はいつたい・・・」

青年が消えると同時に小さな紫色の球が屋上を転がった・・・

つづく

）

最終章 ? New World Order (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

刃砥に関しては続編で登場するはずだったキャラクターです。本当は登場させる気はなかったのですが・・・話の展開的に登場することになってしまいました。

残り2話ですがよろしくお願い致します。

最終章 ? Hypothese (前書き)

今回もよろしくお願いします。
最終話はすぐに投稿致します。

最終章 ? Hypothesis

〔最終章 ? Hypothesis〕

ステラスと第二世代達^{ジーリアス}の戦場に一機の飛行機が墜落した後、戦場の上空を一機の戦闘機が通り過ぎていた。

「こつやつて俺達が三人で同じ戦場にいるのは始めてだな」

リオルは拳を鳴らしながら、嬉しそうに言った。

「別にお前は来なくても良かったんだよ」

ヴァイパーは愛の刀を肩にあて、リオルへ悪態を吐く。ヴァイパーの体の半分近くが機械化されていた。ヴァイパーは命を繋ぐ為に、飛行機の部品を取り込み体の足りないパーツを機械で補っていた。ヴァイパーの外見は殆ど人間ではなかった。背中から飛び出すダクトなどのパーツ、肌と機械の割合は4対6ほどであった。

「そんな形で言われても説得力がねえんだよ」

二人の間に立つステラスは嬉しそうに笑っていた。

「二人とも今は戦闘中だ」

ステラスの言葉に三人の視線が第二世代達^{ジーリアス}へ向けられた。

「二人とも私に力を貸してくれるか？」

リオルとヴァイパーは同時に返事をした。

「当たり前だ」

ライトヒルは母艦へ帰投する為に小型の飛行艇へ向かっていた。

ライトヒルはその途中に一人の男と出会うこととなった。

「お前さんも出撃しているのか、本当に大物揃いの戦場だ」

ライトヒルはエングレープへ語りかけた。エングレープは特に答えることもなくライトヒルに抱えられたフロルへ目を向けていた。

「こいつに興味があるのか？これはあたしのモノだよ」

「そいつを連れて行くのか？」

「貴重な研究対象だからね。こんな希少種に会えるなんて奇跡だよ」

エングレープはライトヒルの性格を良く知っていた。この女が決してフロルをどうこうする気がないこともエングレープは分っていた。しかし、エングレープにとって問題はフロルがアステリオスへ連れで行かれることだった。エングレープにとってフロルは可能性の塊であり、エングレープ自身の楽しみの一つであった。エングレープがフロルを追わなかった理由はフロルにこの戦いを体験させ成長させる為だった。

「エングレープ、珍しく気持ちが悪に出ていようよ。あんたには珍しいね、この子がそんなに気になるの？」

もしこの場に第三者がいたとしても、エングレープの心境に変化があったように思えた者は誰もいなかったであろう。エングレープはあまりライトヒルのことが好きではなかった。ライトヒルは微かなからエングレープの心情を読み取ることが出来ていた。それはエングレープにとっては奇妙なことであった。

「あんた的にはこの子が私に捕まるのが面白くないんだ」

ライトヒルはウキウキと体を左右に振りながらエングレープへ近づき、背伸びしエングレープの顔へ自身の顔を近づけた。

「残念ながらその願いは聞けま……」

エングレープは突然、拳銃を引き抜き引き金を引いた。放たれた弾丸は廃ビルの置くへ向かった。

「誰だ？」

廃ビルの奥から人影が現れる。

「あなたはアーニユ・ワーリユヌス。今日は本当にツイてるーう！

！！」
四季を肩に担いだアーニユが姿を現す。ライトヒルはエングレープ隣でガッツポーズをしていた。エングレープはアーニユから視線と銃口を逸らさない。するとライトヒルはエングレープの拳銃を掴み、無理やり下ろさせた。

「エングレープ！！時の女神様に銃口を向けるなんて、どんだけノーマナーなの？」

流石のエングレープもライトヒルの顔を睨んだ。ライトヒルはそんなことも全く気にすることなく、アーニユへ視線を戻す。

「さてさて時の女神様、私達へどのようなご用件で？」

ライトヒルはじーっとアーニユを見つめる。アーニユはエングレープの存在に警戒しながらも口を開いた。

「その子を返してもらいたい」

ライトヒルは目を丸くし、フロルの顔を見つめた。

「この子ってそんなに凄い子なんだ……」

ライトヒルは眉間へ人差し指を当て考えた。

「わかった、返してもいいよ。でも一つだけ条件がある」

エングレープはすでにライトヒルに呆れていた。しかし、ライトヒルの意見はエングレープにとって最も都合がいいものであった。

「今から私の話す仮説を聞いてもらいたい。そして、その後の一つだけ質問に答えてもらいたいのか？」

エスナの父は偉大な人だった。俺がそのことに気付いたのは、ほんの数年前のことだろう。俺が施設で多くの仲間を殺すすべてを見失い暗い闇に飲み込まれそうな時、あの人は俺を救ってくれた。

「大丈夫か？」

俺は実験時以外は暗い部屋に閉じ込められていた。そこへある日、光が差し込んだ。部屋の外で響く銃声、俺はまた実験体の暴走か何かだと暗い闇の中で再び目を閉じた。銃声が鳴り止むと同時に扉が開く。暗い部屋へ明かりが差し込む。背中に光を受け、あの人はまるで神様のようだった。凜々しい顔立ちに、湧き出る生命力、王たる者の風格。それは見るものに『安堵』を与える。

「こんな子供になんてことを、さあおいでここから出よう」

光輝く大きな手が俺の目の前へ差し出される。俺はその手を握り締めた。

「温かい……」

リゼリはフォークトを目指し廃都市の上空を飛んでいた。リゼリの背中から生えた翼の先がゆっくりと煙のように消え始めていた。

「まだ俺は死ねない」

アーニユはエングレープを睨み続けていた。しかし、この状況からフロルを助け出すにはライトヒルの出す条件に乗るしかアーニユには手が残されていないかった。

「わかった、聞くわ」

ライトヒルの表情が真剣なものへと変わる。

「少し長い話になるからあなたの力を使って私達三人の時間を早めて貰える？」

「わかった」

アーニユは三人の時間を周囲の10倍近くまで上げた。三人の見渡す風景はまるでスローモーションのようになった。

「これから私が話すことは私がこの世界を旅して得た情報を基にたてた仮説。この世界には神がいる。それもかなり気まぐれの神様が、そしてその神様が造った世界の管理者があなた達『ナンバーズ名も無き者』、あなた達はこの世界をずっと見守ってきた」

ライトヒルの仮説は今の所すべてが正しかった。アーニユはライトヒルのことを知っていた。この世界の大天才ベンジル・ライトヒル、近年の多くの発明のほとんどは彼女がしたもの言われている。

「ここまでの話はきつと大抵の天才なら辿り着く仮説。ここから先は私が新たに得た情報によって考えた仮設よ。半年くらい前のこと私はある海底の調査した、そこで私は古代文化の遺跡を見つけた。その遺跡は海の底にありながら空気があり、町があった。でも一人も人間はいなかった……。そう無人の都市。そこに一冊の本があった。その本は数年間の日記だった」

ライトヒルは不思議なリズムで言った。

「私達は多くの過ちを犯し、今、神は私達を罰している。きつと私

達の世界は終る』

アーニユはライトヒルの言葉を目を閉じて聞いていた。

「この世界はきつと何度も創り直されている。その度に神は人間に新たな力を与えている。でも人間は同じ過ちを繰り返している。そして、この世界の終わりも迫っている。でもそれを回避しようとしている者がいる。そう、あなた達名も無き者の中に」

アーニユは目を閉じたままであった。ライトヒルはこの後も世界について、能力について、名も無き者について色々な仮説を話した。エングレープは近くの瓦礫に座り静かにライトヒルの話を聞いていた。

「これが私の仮説のすべてよ」

アーニユはゆっくりと目を開いた。

「あなたは私が出会ったすべての人間の中で一番賢い人間よ」

ライトヒルは嬉しそうに自身の頭をさすっていた。

「質問は何かしら？」

ライトヒルは迷わず尋ねた。

「この世界は何度目の世界なの？」

アーニユは静かに笑った。

「8度目の世界よ」

ライトヒルは頷いた。

「話を聞いてくれてありがとうございます」

ライトヒルはアーニユへ近づきフロルを手渡す。

「あなたはこの世界が好き？」

アーニユはライトヒルに尋ねた。

「生きていてワクワクします」

アーニユは優しく笑った。

「私達は管理者、だからいつ終わりが来るかは分らない。そして、その時に私達があなた達の味方であるかも分らない」
ライトヒルの答えは単純なものであった。

「命あるモノは必ず何かしら役割を持って生きています。私その役

割がどんなことであろうと否定する気はありません。でもあなたはその時に、備える為のこの子を連れて行くのですよね？」

アーニユは静かに頷いた。それを見たライトヒルは笑って言った。

「私はこの世界を終らせない。それが私の役割だから」

アーニユは三人の時間をもとへ戻す。

「エングレープ、ここであつた話は決して誰にも話さないこと、特にギレーヌには絶対に話さないで」

エングレープはゆっくりと立ち上がった。

「私がベラベラと話すような男に見えるのかな？」

「まあ、あなただからこの場に同席させたんだけどね」

アーニユはエングレープから視線を外さなかつた。エングレープとフロルのやり取りを知らないアーニユにとってフロルを捕獲したのは、エングレープだと勘違いしていた。

「私も一つ尋ねたいことがあるのだがいいかな？」

エングレープへ二人の視線が集まる。

「この世界を終らす者とは殺せるものなのか？」

ライトヒルはエングレープの質問にこの男の本質を感じた。この男は殺すつもりだ。今までに七度世界を終らせてきた何かを殺すつもりだ。

「それはわからない。でも今までに殺せた者はいない」

「そうか」

エングレープの顔が微かに笑い、姿を消した。

「私も帰らせてもらうよ」

アーニユはフロルを抱えたままライトヒルの前から姿を消した。

三人が共に過ごした時間はほんの5分程度の出来事だった……

私は知っていた。彼が私が私の大好きな人を奪つたことを、だつて彼は私の父が死んだ日に私の前に現れたのだから

エスナは戦場から離脱する飛行機の窓から、小さくなって行く戦場

を見つめていた。

彼が父を殺したことに気付いたのは、彼と出会ってから二年後くらいのことだった。最初は彼が憎くてしょうがなかった。でも……

・
エスナは目を閉じ頭を抱え込んだ。

父が死んで幼くして国を治める者となった私を支えてくれたのは彼だった。どんなに憎くても私は彼が好きだった。父の死を知って一週間近く泣き続けた時も、辛く厳しい世界を知って絶望した時も、とにかく何かに当たりたい時も、彼はずっと私の隣にいた。私がどんなに我が儘を言っても彼は、私に付き合ってくれた。

『彼の優しさが償いであることは知っていた』

それでも私は彼の優しさが嬉しくて、彼の話を聞くのが大好きだった。彼はきつと今も戦っている。

「ねえ、リゼリ……あなたは結局、誰の為に戦っているの？」

〜つづく〜

最終章 ? Hypotheses (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

本編は残り一話、よろしくお願いします。

最終章 ? Ende (前書き)

長い間お付き合いいただきありがとうございました。

未熟な作品ですが、一つの節目として楽しんでいただければ嬉しい
限りです。

最終章 ? Ende

「最終章 ? Ende」

三人の姿は正に戦士だった。第二世代達は援軍を呼び、アステリオスの30近い能力者達を相手に三人は怯むことなく彼らは打ち倒した。戦場は空中から地上へと場所を移していた。残る敵は僅か6人、第二世代の黒髪の青年と五人の能力者達。三人は慢心相違でありながらも、戦意は全くもって衰えていなかった。誰一人として自分達の勝利を疑っていなかった。勝利へ向かうその姿は美しく輝きを放つ。

「何故だ、何で倒れない・・・」
第二世代の青年は顔を歪め叫んだ。

「どんなに君達が増援を呼ぼうと、どんなに強力な能力を連れて来ても私達は決して諦めない。私達は頑固だからね、決して仲間の前で倒れたりしない」

ステラスは光を失った両目を真っ直ぐに第二世代の青年へ向けた。青年は本能的に敗北を悟った。「この人には勝てない」青年は無意識の内に一歩後へ下がった。

「今すぐ撤退し、指揮官に伝える。僕達では勝てませんとな!!」
ヴァイパーは笑いながら言った。残されたアステリオス兵達がお互いの顔を見合わせる。

「10秒以内に俺達の目の前から消えなきゃ、殺す」
リオルが鋭い瞳で睨みつける・・・

絶望とは希望がもつとも色濃く描かれた時に訪れる

ヴァイパーの刀を握っていた腕が切り落とされた。ヴァイパーが自身の腕がないことに気付いた時、ヴァイパーの体は二つに別れていた。左肩から右脇まで一直線に切り裂かれた体が地面へと落下を始

める。ヴァイパーは自分の体の中に手榴弾が埋め込まれていることに気付く。ヴァイパーの胸部が爆発した。

リオルがヴァイパーの方を向いた時、すでにリオルの胸を一本の刀が貫いていた。リオルは愛の刀へと手を伸ばす、その手は届くことなくリオルの額に穴が空いた。

「リオル・・・、ヴァイパー」

ステラスは地に斃れた二人を、両手を失った体で地面に膝をつき見ている。

「ステラス・クルネスだな」

エングレープはステラスへ近寄った。ステラスは何も答えることなく目を閉じた。

「二人はどんな顔をしているか教えてくらないか・・・」

エングレープは地面へと倒れたリオルとヴァイパーへ目を向けた。

「戦士の顔をしている」

ステラスは顔を大きく歪め、涙を流し始めた。エングレープはステラスの額へと銃口を当て、尋ねた。

「何か言い残すことはあるか？」

ステラスは両目を大きく開きエングレープを見つめた。

「彼らと共に眠れることに感謝するよ。私は幸せ者だ・・・」

一発の銃声が響き、一つの物語が終わり告げた。

三人は荒野の丘から沈んでいく夕日を眺めていた

『ステラス、お前はこの国のトップになれ』

ヴァイパーの言葉にステラスは笑って聞き流していた。

『俺達の中で人の上に立てるのはお前だけだ。だからお前はこの国のトップになれ、そしてこの世界を変えてくれ』

リオルは風に髪をなびかせながら、二人の話を聞いていた。

『リオル、私がこの国を治められると思うか？』

リオルは不機嫌そうにステラスを睨み言った。

『俺にそんなことを聞く奴がこの国のトップになれるかよ』

ヴァイパーはステラスとリオルの肩を掴み、二人を引き寄せた。

『俺らでこの国を、世界を変えよう』

三人は輝く瞳で赤く染まる夕日を見つめ続けた……

『約束だ、俺達は誰一人死なない。死ぬ時は三人一緒だぜ』

ノークは戦場から離れる飛行機の中、自然と流れ出す涙にすべてを悟った。

「本当に仲がいいのね、今まで本当にありがとう……」

「ちっ、どこへ行きやがった」

フォークトは閃光弾を投げ消えた刃砥やじぎを探し周囲を見渡していた。

その時、空中からフォークトを黒い波動が襲った。フォークトは周囲を焼いていた炎を渡り、波動を回避した。

「また新手かあ？」

フォークトの前にリゼリが降り立った。

「心配するな、お前はここで死ぬ」

リゼリは両手に真っ黒な槍を握り締め、フォークトへ向かった。

異変は突然起きた。リゼリ達が施設から出た途端にリゼリの体の中のヒアシノシスが暴走を始めた。ヒアシノシスは瞬く間にリゼリの体全体へ広がり、リゼリの姿を悪魔のように変化させた。研究者達は研究所情報の保持の為、ヒアシノシスに仕掛けを施していた。暴走したりゼリは周囲の兵士達へ襲いかかった。暴走したヒアシノシスの力は圧倒的で20近くいたアステリオスの兵士達はすでに、八人程へと減っていた。

「王、ここは撤退しましょう。奴の体を見てください、すでに崩壊を始めています。奴が死んだ後に、死骸を回収すればいいだけのこ

とです」

エスナの父は大声で部下を怒鳴りつけた。

「彼を見捨てると言うのか？お前は暗い部屋から出た時の彼の顔を見ていなかったのか、子供が目の前で苦しんでいるのを見捨てて逃げると私に言うのか！！」

エスナの父は剣を握り締め、リゼリへと向かう。リゼリを傷つけることなく攻撃をいなし、リゼリへ語りかけ続ける。

「少年よ、生きたいか？この広い世界を見たいか？」

リゼリは容赦なくエスナの父へと襲い掛かる。

「この世界は実に美しい、多くの人が暮らし、多くの文化がある。それは常に私達を楽しませてくれる。そんな世界で生きたいか？」

リゼリの攻撃が弱まる。

「生き……たい……」

エスナの父はリゼリの攻撃をいなし、懐へ潜り込みリゼリの胸に触れた。エスナの父の手から光が放たれる。その時、リゼリの体から黒い棘が飛び出た。

「少し大人しくして貰えるかな……」

エスナの父の腹部を黒い棘が貫いていた。エスナの父の手の輝きが増し、二人は光に包まれる。光が消えると共にエスナの父は元の姿へ戻ったりゼリを抱えていた。エスナの父の能力は『能力の抑制』、彼は能力を使いヒアシノシスを抑制したのだ。リゼリはゆっくりと目を開けた。エスナの父はリゼリを地面へと下ろすと、自身も膝をつきリゼリと向き合った。

「君の名前は？」

リゼリは首を横へ振った。

「そうだな、ゼリ、リゼリでどうだ？ゼリは私の父の名なんだが、そのままでは味気ない。だから二人目のゼリだから、リゼリだ。かつこよくないか？」

リゼリはぎこちない笑顔で笑った。リゼリの笑顔を見るとエスナの父は大きく咽、口から血液が流れ出ていた。

「リゼリ、すまないが一つだけ頼みごとをしてもいいか？」
リゼリは大きく頷いた。

「ありがとう。実は私には我が儘な娘がいてね。手間の掛かる娘だが実に可愛い、だが私はもう娘と一緒にいられそうにない。だから君に娘を守ってもらいた。性格は捻くれてるが見た目は妻に似て絶品だ。悪い話ではないはずさ、どうだこの頼みごと聞いてもらえるか？」

リゼリは更に大きく頷いた。

「そうか、これで安心して眠れる。でも娘は君にはあげんぞ」
エスナの父は最期にリゼリに万遍の笑みを見せた。

戦場に二つの柱が上がった。一つは真っ黒な柱、もう一方は青い炎の柱。二色の柱は天まで伸び、ぶつかり合い消えた……

「アーサーさん、約束守れませんでした……」

リゼリは消え逝く体を仰向けに返した。リゼリの両目はすでに視力を失い、何も見えていなかった。

「また真っ暗だ……、暗闇は好きになれないな」

すでにリゼリの体の半分は消えていた。その時、リゼリは暗闇の中で一筋の光を見た。

「そうか、俺はとっくの昔にあなたとの約束を破っていたんですね」
リゼリは優しく笑った。すでにリゼリに残されたのは顔の一部だけであった……

「エスナ、俺はずっと君の……」

ギレーヌは液晶の電源を切り、満足そうに笑った。

「この時をどれほど待ちわびていたか」

ステラスの死と共にこの戦いは終わりを告げた。翌日、ギレーヌ

はエグルガラムへ大艦隊を連れ訪れた。ギレー又はノークにある話を持ちかけた。今回の戦闘でのアステリオス軍の介入について一切公表しないことと引き換えに、ギレー又はエグルガラムの不可侵を約束した。ノークは国を守る為に、アステリオスへ感謝と友好の演説を行った。そして演説後、ノークは姿を消した。戦場から脱出したセルフィアとフェアは翌日にはエグルガラムから姿を消していた。エスナの話は不明となり、ハウズは解体され生残った隊員達は軍部に吸収された。この戦いに負けたアルカナスは隣国と同盟を結び、アステリオスへ公式に戦線布告した。この二国間の戦火は世界へ広がり、世界は巨大な戦火に包まれることとなった。

多くの者が戦い、多くの命が失われそれぞれの結果がもたらされる。ではその結果は何によってもたらされるのか？その解は簡単だ

『己の選択』

それぞれの者が常に選択を迫られその積み重ねが結果を産む。どんな結果もすべてが『己が選択』した末の結果なのだ

『彼らは己の道を選び、今一つの結末へ至った。ならば世界の結末とは誰の選択によるものだろうか？』

T H E E N D

最終章 ? Ende (後書き)

最後まで読んでいただき本当にありがとうございます。

この untitled を一度終わりとするに至った経緯は、リゼリ、ロイテル、ステラスの死です。この物語は複数の主人公を持つ作品として書いてきました。その中でも最も重要な三人を失うことから、一度この作品を終わりにすることに決めました。

作品としてはまだ多くの謎を残して終わりとなってしまうことは深くお詫び致します。活動報告で書いたとおり続編があります。それもすでに投稿しております。まだこの物語に付き合ってくれる方がいましたら、これからよろしくお願い致します。

後日、もう一話 unbeinged へ繋がる予告的なものを投稿致します。

興味がある方は読んでくださると嬉しいです。

ちなみにその話は、今後の物語の方向性を大きく現す話です。

一年以上という長い間、本当にありがとうございます。

辛いときもありましたが、読者の方、何よりもお気に入り登録されてくれた方、この物語はすべてあなた方の支えがあつて書けた作品です。

長くなりましたが、本当にありがとうございます。

顔も知らない方々ですが読者の方と出会えたことを本当に嬉しく思います。

また感想や批評などよろしければお願い致します。

今後の作品への参考に致します。

この物語に付き合ってくれた読者、登場人物、すべての方へありがとうございました。

鳴谷 駿

最終章 FINALE (前書き)

最後までお付き合いいただきありがとうございます。

最終章 FINALE

（最終章 FINALE）

「俺は……」

少年は少女の膝の上で目を覚ました。少女は少年の綺麗な青い目を見つめ、両手で少年の頭を抱え込み、自身の胸へ押し付けた。少女の目からこぼれ落ちる涙が、少年の頬を静かに流れた。

「よかった、本当に良かった……」

少年は少女の手をそっと払い、少女の胸から顔を話し少女と向かいあつた。

「ロイテル、私は気付いたの……私が……」

少年は涙を流しながら話す少女の話を強引に遮った。

「君は誰？」

少女は唇を噛み締め、ただ少年を抱きしめ泣き続けた……

神は再び眠りへとついた。神は眠りにつく前に一つだけ言い残した

『我はこの世界に大変興味を持った。この世界が今までの世界と同様に終わりを迎えるのもよからう。しかし、私は今までと異なつた結末を見てみたい。貴様らに三年の猶予を与えよう、三年後私が再び目覚めた時、貴様らが私の前にいることを楽しみにしているぞ』

神は再び眠りへつく、三年後の目覚めの時へ向け……

エスナは洗面所の鏡に映つた自分の顔を見つめた。エスナは洗面所に置かれていたハサミへと手を伸ばした。真っ黒に染めた自身の髪へとハサミを入れる。長く美しかった髪の毛が音をたて切られて

いく。エスナの目に鏡に映った銀色の拳銃が留まった。エスナはハサミを置き、拳銃へ手を伸ばした。

共に夢を追う あなたに幸あれ

この一文はエスナが銀色の拳銃に彫り込んだものだった。ハウンスへの入隊が決まったりリゼリへエスナが送った、最初で最後のプレゼント。そして、リゼリはこの拳銃を一度も戦場で使わなかった。

「エスナ、これは？」

エスナは嬉しそうに笑い、リゼリへ渡したプレゼントを開けるように急かした。リゼリは恥ずかしそうにプレゼントを開けた。中には高級感を程よく感じさせる装飾のされたリボルバータイプの拳銃が入っていた。

「これは私からのプレゼント」

リゼリは少し頬を赤くして囁いた。

「ありがとう・・・」

エスナはただニツコリと笑顔をだけを返した。リゼリは拳銃に彫られた文章へ目を向けた。

「共に夢を追う あなたに幸あれ・・・」

エスナはリゼリの握っていた拳銃へ手を伸ばし、ゆっくりと彫り込まれた文字を読み返しながら指でなぞった。

「私は父の夢を継ぐ、この世界を必ず一つにするの」

エスナは真っ直ぐな目でリゼリを見つめた。リゼリは何も答えずにエスナから視線を逸らした。するとエスナは寂しそうに顔を下げた。「俺には夢なんてものはない、だから付き合おうよ。エスナの夢に、最後まで」

エスナは嬉しさのあまりリゼリへと抱きついた・・・

「別人みたいだな」

洗面所から出てきたエスナの髪は真っ黒に染められ、ショートヘア

へと変化していた。

「そうね、きつと別人よ」

エスナはリゼリの拳銃をしっかりと握り締めていた……

過去から現在へ名の無い物語は動き始める

u n t i t l e d E N D

n e x t t o u n b e i n g e d

最終章 FINALE（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

これでuntitledは完結になります。

この続きはすでに投稿されており、unbeingedという作品で投稿させていただいております。よろしければまたお付き合いください。

この物語に最後まで付き合ってくれた方、本当にありがとうございます。

鳴谷 駿

第閉章 Daily Daily ? (前書き)

お久しぶりです。

一度完結した作品ですが、再び書かせていただき大変嬉しい限りです。

この話は三章と四章の間のハウنزの日常を描いた話になります。今の所、戦闘パートなどは考えておりませんが、普段とは違う彼らのやり取りに楽しんでいただけると嬉しい限りです。

第閉章 Daily Daily ?

「第閉章 Daily Daily ?」

「とつ言う訳だ、後は頼んだよ」

フロルは肩を落とし、大きくため息をついた。その様子をニヤニヤとクロアは眺めていた。部屋全体が白に統一された第一小隊の住処は以前の冷たい感じから変化していた。クロアは椅子の背凭れへ寄り掛かり、机の前に立つフロルへ再び目を向けた。

「いやー私も本業が忙しくて、すっかり忘れていたよ。今年の士官学校への模擬授業が第一小隊^{うち}だったなんて」

「クロアさん、あなたの本業がハウন্ズです」

クロアはフロルの指摘をさらりと流し話を続けた。

「悪く言えばハウন্ズは基本的に問題児のお預かり所だからね。あんまり問題児ばかり集めると問題だ。そこで士官学校へ出向いて優秀な子に早めから唾をつけておくのさ、その為の視察の一環として私達が直に士官学校に出向き品定めをする訳。それを毎年、各小隊で順番に行っている。うちは今までは二人しか居なかったから、外されていたんだけど君達が入ったからねえ……」

「それで僕に士官学校に行つて授業を行えと？」

クロアは軍服の胸ポケットのささっていたペンを抜き、書類の裏へ何かを書き始めた。

「これが士官学校のデータベースへのアクセスIDとパスワード。いい子が居たらしつかり唾つけて来てよ」

クロアは紙を渡すと再び、ルーのマネージャーとしての副業へ専念し始めた。フロルは深くため息をつき部屋を後にした……。部屋を出たフロルは日付と場所以外の情報を、何一つ与えられていないことに気付いた。

「きつとクロアさんに聞きに戻つても、『私もやったことないんだから、分かる訳ないでしょ』とか言われるだけだよなあ。どうしょ

うかなあ」

フロルは頭を抱え考えた。するとフロルのお腹から鈍い音が響いた。「そう言えば今日はまだ何も食べてないや」

フロルは携帯の時計を見ると（PM）1時過ぎを時計針は指していた。

「昼食にしよあ」

フロルは王宮の高層階に位置するカフェテリアへと向かった。フロルはよくこのカフェテリアを利用する。いや、どちらかと言うと四季がこのカフェテリアを好んでいたのだった。王宮の高層階に位置するこのカフェはこのアステルの中で最も高い位置に位置する飲食店だ。四季曰く『この店で食べられるのは優れた人間の特権』と言っており、特に町を見下せる窓際の席は四季のお気に入りであった。フロル自身も窓際の席は好きであった。ただ四季のように見下すのが好きなのではなく、そこから見える風景が好きなのであった。

「いらっしやいませ」

フロルはいつも通りの店員の少女に出迎えられた。ミディアムの丈に明るめの茶髪、一日毎に左右で束ねる髪を変えるこの少女とは軽い顔見知りであった。

「今日は一人ですか？」

フロルは軽く笑い頷いた。すると少女は嬉しそうに笑い、普段通りの窓際の席へと案内した。店全体はピークを過ぎたようで客はフロルを含めて4組ほどであった。

「決まりましたら私をお呼び下さい!!!」

店員の少女の気迫にややフロルは驚いていた。大抵フロルがこの店に来るといつもあの子が接客してくれていた。しかし、今日の態度は明らかに普段よりも浮かれている？

「何かいいことでもあったのかなあ？」

フロルはメニューを開き、ランチタイムが終っていることに気付いた。フロルがいつも食べるのがパスタか、ベーグルのセットだった。

「たまには違うのも食べてみようかな」

「こちらはいかがでしょうか？」

フロルの眺めるメニュー突然、腕が割り込みパエリアを指していた。フロルは驚き、分っていないながらも腕の持ち主へ顔を向けた。

「どうしてここに？」

フロルは少女の方を向いた。少女は嬉しそうに笑って答えた。

「私の仕事はフロルくんをおもてなすことですから！！」

「え……」

「あつ……」

少女は一瞬間を赤め真つ直ぐにフロルを見つめて言った。

「第三小隊日比形望ひびがたのぞみです」

フロルは望の突然の自己紹介に驚き一言だけ返した。

「パエリアをお願いします」

二人は凍りついたように暫くの間固まっていた……

「いやー、何か若いねえ」

ジャスはフロル達のやり取りを少し離れた席から眺めていた。

「本当ですね、何か士官学校時代を思い出しますね」

ちょうど昼食を取り終え、お茶をしていたジャスとルイは二人の姿を眺めていた。第二小隊は外から見るとリゼリとジャスの勢力に二分されているように思われがちだが、実際はジャスとルイは仲が好く二人でよく昼食を取っていた。

「それにしてもあの第三小隊の子、望ちゃんだっけ？何でここで働いているのかしら？」

「第三小隊は他に比べて人数が多いうえに、隊長の桜家があれだから追加の予算とか下りなくて辛いらしいよ。でも確かあの子、もとはハウنز志望じゃなかった気がするんだけど」

ルイは「へーえ」と頷きながら二人のやり取りを眺め続けていた。

「でも第一小隊のあの子、第一小隊には勿体無いよね。顔もけつこう可愛いし、能力も優秀、人柄も良さそうだし、第二小隊うちにくれば

良かったのになあ。うちの小隊って派手な能力者いないから」
ジヤスはルイの言葉を聞いて笑っていた。

「この前の任務で一緒に戦ったけどいい子だったよ。でもあの子は四季のお気に入りだから手を出したら殺されるかもよ」

「だよねえ、箱美芽隊長、時々でいいから貸してくれないかなあ」
ルイは眉間に皺を寄せフロルへ厚い視線を送っていた。

フロルは自分の何故このような状況になってしまったのか全く訳が分らないでいた。フロルが座っている席の正面には望の姿があった。フロルから注文を聞いた望はなんと軍服へ着替え、フロルへパエリアを持って来た。それも二人分のパエリアをテーブルへ並べ、フロルの正面に座り『いただきます』と言って食べ始めたのであった。

「早く食べないと冷めちゃいますよ」

フロルは言われるがままパエリアを口へと運んだ。フロルは猫舌だった。しかし、フロルが中々食事へと手を付けられなかったのは別の理由だった。

「何故、君はそこに座っているの？」

望はパエリアを食べきり、スプーンを置きナプキンで口を拭き答えた。

「詳しく話すと私の貴重な休憩時間が終わってしまうので、要点だけ言わせていただきます。士官学校への模擬授業の件でお困りだと聞いて」

望はニツコリと笑い首を傾けた。

クロアは電話を肩と頭で挟みながら器用に通話しながら、パソコンで仕事をこなしていた。

「そう、ありがとう。ヘルト」

クロアはフロルが部屋を出てすぐに第三小隊のヘルトへ電話していた。

「流石に士官学校出ですらないあの子一人に模擬授業を任せるのは可愛そうだね。前回の愛ちゃんとのゴタゴタの件もあるし、そつちで都合つけてくれないかなーと思って。でも本当に仕事早いわね、事務の能力なら間違えなくうちに来れるわよ」

クロアは通話をしたまま笑った。

「ただはやだ？」

クロアは大声で復唱した。

「自給を払えつてこと？あんたこつちが下手に出れば調子に乗りやがって、別に他の小隊に頼んだって」

ヘルトがクロアに何かを言った。

「そうね。第二小隊に、いやリゼリに借りを作るくらいなら安いモノよ。一人当たり日給1でどう？」

クロアは眉間に皺を寄せた。

「わかった、1・2出すわよ。でも第一小隊に恥をかかせるようなことになったら、第三小隊がどうなっても知らないわよ」

クロアは勢いよく電話を受話器へと置いた。

「ねえ、四季。あなたが行けばこんな無駄な手間はかからないのだから」

クロアはソファーで寛ぐ四季を睨みつけた。

「フロルの奴にも息抜きは必要だろ、私達と一緒にじゃあいつは気を使えばなしだ」

クロアは呆れながらも四季の意見に賛成でもあった。

「でも四季、知ってる？フロルってけっこう人気あるんだよ」

四季は『そうか』とだけ言ってソファーの前のテーブルに置かれた雑誌へ手を伸ばした。

「確か二人でよく行くカフェの店員の子、フロルのことが気になるとか……。いやー若い子達はいいいえ」

「あれ四季？どこへ行くの？」

クロアは一人になった部屋の中でクスクスと笑っていた。

〜つづく〜

第閉章 Daily Daily ? (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

久々に会話を多く書いたように思いました。たぶん四話構成くらいになるかと思いますが、何となくでいいので読んでくだされば嬉しい限りです。

また暫くの間、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6834j/>

Acht;untitled

2011年7月17日14時16分発行